

ベルの兄がチートで何
が悪い！！

シグナルイエロー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なぜかHUNTER×HUNTERのカイトに転生した、しかも全然世界が違うんだが……。

夢はオラリオでミアさんみたいなお店を嫁と一緒に出すこと！

そのために冒険者になって稼ぎまくるぜ！！

荒唐無稽で夢へ向かって超遠回り！！

何でもありよりはべりなはちやめちやストリー開幕！！

※主人公はカイトの皮を被っただけの別人です。CVは津田さんとかがいいなあ……

目次

オラリオ到来前

01：物心×祖父

02：天才×愛弟

オラリオ到来！

03：幼女×劍姫

04：劍姫×殺芋

入団試験！

05：期待×疑惑

06：面接×物理

07：面接×物理

08：面接×正常

09：面接×異常

冒険者開始！

10：歓迎×一步

11：登録×冒険

12：思惑×日々

襲撃編！

13：倍増×倍増

14：倍増×倍増

15：後悔×前進

16：誤解×前進

17：幸運？×不運？

18：羞恥×会合

様々な出会い編

19：昇格×降格

141

158

173

191

207

223

236

248

269

291

129

113

94

76

61

46

27

15

1

前編

後編

前編

後編

前編

3 1 : 殺帝×明王	3 0 : 双頭×明王	2 9 : 悪夢×進呈	2 8 : 悪夢×前夜	悪夢の英雄編!!	2 7 : 大神×武神	2 6 : 日常×風呂	2 5 : 巫女×秘密	2 4 : 巫女×秘密	2 3 : 巫女×秘密	2 2 : 巫女×外道	2 1 : 神会×称号	2 0 : 昇格×降格
							後編	中編	前編			後編
501	479	456	438		422	413	395	378	363	346	331	308

4 3 : 姉妹×舎弟	4 2 : 姉妹×舎弟	4 1 : 暗黒×卵焼	4 0 : 奮闘×号泣	3 9 : 奮闘×号泣	3 8 : 奮闘×号泣	3 7 : 復活×銀腕	3 6 : 帰郷×過剰	嫁と舎弟と時々妹	3 5 : 失意×再起	3 4 : 絶望×切札	3 3 : 絶望×切札	3 2 : 最後×正義
後編	前編		後編	中編	前編					後編	前編	
747	722	708	682	666	652	628	603		582	551	539	523

	44	： 珍客×屋台			770
		弟子とスバルタ教育			
		地獄編			
	45	： 手刀×暗殺			791
	46	： 貴猫？凡夫			
	47	： 妖精？試験			808
	48	： 妖精？試験		その2	828
	49	： 妖精？試験		その3	854
	50	： 師匠？弟子		前編	869
	51	： 師匠？弟子		中編	896
	52	： 師匠？弟子		後編	917
		武神偏			
	53	： 来訪？武神		その1	937
	54	： 来訪？武神		その2	950

オラリオ到来前

01：物心×祖父

【転生】

これには大きく分けて二つのパターンがある

一つは何かが原因で死亡後に同じ世界、もしくは別の世界で赤ん坊から人生を別人になってやり直すというもの、

もう一つは何かがきっかけで前世を思い出し、結果的に転生したということに気づくパターンだ、

ちなみに俺の場合は後者だった。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

片田舎の何てことはない普通の平屋、そこで老人が孫であろう男の子を膝に乗せて本を読んでいる

そんな、見ているだけで平穏という言葉が頭によぎる光景の中で俺は唐突に何の前触れもなく前世を思い出した

そのときの衝撃は凄まじいもの、というほどでもなかったな、うん

まあびつくりはした、受験日に会場で受験票を忘れたくらいの衝撃だ、一瞬頭が真っ白になるだけで済む

ん、洒落にならない？ 大丈夫大丈夫、来年もあると思えば開き直るから

まあ、最初はびつくりしたけど持ち前のポジティブ感でもって開き直ったって話だ。

|||||

「っえ!？」

なんじゃこりや、え？ 待って、ナニコレ、は？

「どうした『カイト』、突然声を上げて？」

見上げると髭もじやのじいさんが俺を見下ろしていた、

誰あんた・・・いや俺の祖父だわ、あぶね声に出すとこだった

んでもってカイトって・・・カイト、そうだ、そうだった今の俺の名前だ

「・・・んーん、何でもない、それよりも早く続き読んでー」

「?・・・ま、ええじやろ、どこまで読んだかのお、おお、ここじゃったな・・・『そう

してー英雄であるアルスターは——』」

あつぶねーセーフセーフ、いきなり前世のことを思い出しましたー、なんて言ったら

この世界でなくとも間違ひなく痛い子扱いだ、最悪、気味悪がられて捨てられかねない、まあ、今までのカイトとして生きてきた記憶からこのじいさんが孫を捨てるとは思えないけど、変な子扱いされるよりは何も言わない方が双方のためだろう。

しかし、まいったねこりやマジで転生つて奴なのか、完璧ではないが何となく前世の地球人であつた頃の記憶が今のカイト、俺の記憶に追加されている

えーと、前世の死因は——ひき逃げつすか、しかもリア充っぽいヤンキーカップルに挽肉みたいに念入りに殺られたと、クソがつ！

こいつら絶対許さん、文字通り死んでも許さんぞ、とりあえず末代まで崇つておこう
南無南無

—— 閑話休題

さて一旦落ち着こう、とあえず今ままでカイトとして生きてきた5年間の記憶からこの世界の情報をまとめてみると——

Q1:ここはどんな世界？

A1:剣と魔法の世界、時代は中世[♪]

Q2:家庭環境は？

A2 : 祖父が一人、両親いない、弟一人、裕福ではないが特別貧しいわけでもないZ
e!

Q3 : お名前は?

A3 : かいとくらねる、よんさいです?
以上だ。

さすがに5歳児ではこの世界についても自身についても、持つてる情報が少なすぎる
な、今後は情報収集に努めよう

まあ、死んだのは残念だがこうやって生まれ変わったわけだから前向きに行こう

ただ、問題があるとすればここが異世界であるということだ、もし地球の現代なら
色々子供の頃から勉強やスポーツで無双できたんだが、剣と魔法の世界となると勝手
が分からない、子供の頃から二次方程式や三次方程式が解けたところで役に立ちそうに
ない、っていうかよく考えたら前世で社会人になってからも役に立った事なんかねえ
な、英語がペラペラで筆記もOKでもここでは意味がないっぽい、いや、だつて、そ
もそも文字自体が違うことが目の前の絵本を見れば分かってしまうし

前世の知識を活かせる気がしない・・・詰んでないか、これ。

こんなことならもつと転生ものの小説とかコミックを読んどくべきだったなあ

俺ってばコミック派でラノベとか転生系の小説とかはほとんど読んでないからこう

いうときどうすればいいのかよくわからない、転生もので読んだのは無職転生と幼女戦記、あとは本好きの下克上・・・・のコミック版

全く役に立たないわけではないが原作に比べれば明らかに情報量は少ないだろう

とりあえずこの三作品で共通するのは子供の頃から一定以上の努力で魔法なり内政なりを鍛えているという所だ

フィクションを見本とするのは褒められた話ではないが、実際にフィクションがこうしてこの身に起こってしまっている以上、今更といった感じだ

それに前世では親孝行の一つもせずに死んでしまったから今世ではちゃんとして親孝行をしてやりたい、してやりたいが、このじいさん見た目的には結構歳がいつている感じだ、急がねば親孝行する前にあの世にあばよと、なりかねない

・・・・ふむ。

先ほどは詰んだ、と思つた今世だが翌々考えてみたら色々とやりたいことが出てきたな

おかげでかなりやる気が出てきた、やはり人間、明確な目標を持てば自然と力が漲ってくるもんだな

『——めでたし、めでたし』と、ここまでじゃな、そろそろ畑を見に行かにならん、

カイト、ベルの面倒を見ててやってくれ」

考え事をしていたらじいさんが本を読み終わってしまった

色々調べたいことがあるんだが・・・適当に何か言ってみるか

「じいちゃんっ！た、たいへんだ!!」

「ん、何がじゃ?」

「さつきちよつと声上げたときな」

「うむ」

「物心付いた」

「・・・は?」

じいしがポカーンとしてたが、これからの俺の変な行動はしばらくはこれで押し通そう
あれ、でも物心ってこんなだっけ?

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

《side : ゼウス》

×1年○月△日

最近、上の方の孫、カイトの様子がおかしい

急に物わかりが良くなり、今まで何度も読んできたお伽噺話の本ではなく、地理やこの世界の一般的な事に関する本などを読んでくれとせがむようになった

それだけではない、今までより弟の面倒もすっかりと見るだけじゃなく、農の畑の手伝いや、体を鍛えると言つて村の周囲を毎朝走り、筋トレまでするようになった

最初は急に物心が付いたとか言つておつたが、人とはそんな感じに物心が付くものじゃつたかのう？

まあええか、人の子の成長はとにかく早い、こういうこともあるじやろうて

とか、考えてた時期もありました

×3年○月△日

あれから、2年が経ち、ある日カイトが毎朝日課にやつてる素振りを見たんじやが、
ナニアレ

何回も振つてるはずの木刀が残像を残して気づけば振り下ろされているんですけど

!

ていうか何その引き締まりすぎた細マツチヨは!?

しかも最近弟の方のベルまで兄のカイトの真似なのか細い棒を持って庭で振っている

ベルの方はさすがにまだ年相応の速度なことに安心した——儂がアホじやつた

×5年○月△日

あれからさらに2年、カイトは9歳、ベルは5歳になった、

最近素振りじゃなく、二人並んで正拳突きをしたり、瞑想したりと、どこの修行者じゃと言いたい程に鍛えまくっておる、

あと、わしの眼と耳がおかしくなったのか、カイトの正拳突き、たまにだが、音の方が若干遅れて聞こえるような気が・・・いや、さすがに気のせいジャロ、気のせいだよ
ね?

ベルの方も普通に正拳突きをしないとるが拳を放つたびに空気を切り裂くような音がつとるし

これで修行ばかりにかまけて畑仕事を疎かにしておったら何か言えるんじやが、そう

いうわけでもないので何も言えん、むしろ「兵農一体——!! F o o o o o o o o o o o!!」と言って喜んで畑を耕しておるし、最近は逆にすることがない。

他にも、前から儂の昔の女性達が偶に尋ねてくるんじやが、最近はカイトやベルばかり構うもんじやからちよつと寂しいのお、それだけでも精神的にくるといふのにカイトやベルに「あの人みたいにならないように」とか吹き込むのもやめてほしいんじやが

その後の苦笑いしながら儂を見るときのカイトの目が・・・

『でもそんなじいちゃんでも僕の大切なじいちゃんなんだ』的な優しい目が逆にいたたまれない、良心の呵責に押し潰されそうじや・・・

さらにその後ベルに「浮気物ってどんな物なの？」とか聞かれたときは本気で昔のことと後悔したのう

はあ、やはり男手一つで子を育てるのは思っていた以上に大変なのかもしれん

こんな昔の女達にボロクソに言われているじいじいのことを孫はどう思っているのだらうか・・・

やばい、尊敬される要素や理由が思い浮かばない

ヤバイ。

×5年○月◇日

うおおおおおおおんうおおおおおん儂は幸せ者じやったー！

先日、何故そんなに強くなろうとするのかカイトに聞いてみたら冒険者になって金を稼ぎ、儂の暮らしをもっと楽にしてやりたいと言ってきた、なんとという親孝行！いや祖父孝行な子じゃー！！

こんないい子を少しでも怪訝な目で見ていた儂は最低じゃー！うおおおおおん

．．．よし、冒険者になりたいのであれば儂が色々．．．教えるのはさすがにまずいのう、うーむ．．．

そうじゃ、ヘルメスの奴に冒険者とは何たるかを孫に色々教えてもらおう、うん、そうしよう

そうと決まれば奴に手紙を書かねば、さつさと来んと昔の恥ずかしいことを神達に匿名でばらすと言えばすつ飛んでくるじやろ

×5年○月アホ日

手紙を書いてからしばらくしてから、ヘルメスが訪ねてきた

何のために姿を隠してるんですかと、小言を言われたが、知るか！

儂のかわいい孫のためならそれくらいは些事じやい！

ほれ、とつと今のオラリオのことや冒険者のことについて教えてやらんか！

まあ、少々文句を言っていたが、カイトとベルの修行を見ると、急に態度を変えてペラペラと今のオラリオについて話し出した、怪しい……こやつ、何か企んだりしとりやせんだろうな？

まあ、ヘルメスのアホが何か企んでもこのかわいい孫達ならその企みごと食い破りそうじゃから、心配せんでもええかの

×6年○月ヘル日

あれから、二月ごとにヘルメスが家を訪ねてくるようになった、ついでに水色の髪のかわいい少女も一緒に連れてくるようになった、ヘルメスから聞いた話ではどうもこの少女どこかの王族らしい、王族の生活に嫌気がさしていた所をヘルメスが連れ出したらしい、まあ無理矢理ではなく少女の方から懇願してきたそうなのでええか

それにこのアスフィと名乗った少女、どうもカイトに少々気があるらしい、さすがはわしの孫、たった数回の逢瀬で身持ちの固そうな女子を陥落させおった

この分じやとオラリオに行ったらすごいことになりそうじやのう

それにしても、カイトとアスフィのやりとりは見てて微笑ましいのう

ベルもアスフィのことを姉のように慕っておるようじやし、ええのう、ええのう、何かこの感じええのう、ほっこりするわい

このような平穩をあと幾ばく見ることができるとじやろうか・・おそらく、あと数年の内にカイトはオラリオに旅立つじやろう、じやがヘルメスから聞く今のオラリオは酷い状況だ、儂とヘラが居ったときは比べものならんほどに闇派閥イウイリスが幅を利かせ混沌と恐怖の日々に市民達は怯えて暮らしているそうだ、口惜しい、せめて儂かヘラの派閥が十全であつたならそのようなことオラリオで起こさせんというのに、いや、今の儂がいくら悔しがるうがただの負け犬の遠吠えじやな、儂に何か言う資格などもはやありはしない。

オラリオに行けば新人のカイトはおそらく様々な事柄に忙殺され村に帰ることもままならないじやろうて、だがそれまでこのような穏やかな日々を良き記憶として胸に納めておいてほしいのう

×7年○月メス日

数年以内にオラリオに旅立つじやろうとは思っていたが、その翌年に旅立つとは思わなかった

何でもアスフイも11歳で冒険者になったらしく、なら自分も11歳で冒険者になるうと前から思っていたそうじやが、おそらく背中をさらに押したのはアスフイのランクアップのせいもあるんじやろう

ヘルメスのアホから聞いた話ではアスフイが最近Lv. 2になり、超の付く希少スキル【神秘】にも目覚めたと聞いた、わずか2年足らずでランクアップとは、数年間Lv. 1のままの冒険者が数多く居る中でこれはかなりの成長速度じや

やつぱ、あれかのお、惚れた女にこれ以上実力を離されたくないといった感じかのほつほつほ、カイトは年の割に大人びすぎていると思っていたが、存外ちゃーんと男の子じやった

カイトのこういう所が見れてじじいちよつと嬉しいぞい

だがなカイトよ油断するでないぞ、オラリオには富も名声も何でもある、何でもはあるが、それは綺麗事ばかりではない、この世全ての悪意すらもその中には含まれるとうことじや

油断すればどんな者でも見えない何かに食い潰されることになるじやろう、だから油

断せずに進め、振り返らずに前に行け

儂はベルと共にここからお主の活躍する噂を期待して過ごすでしょう

ほっほっほ、泣くでない、せつかくアスファイからもらった帽子にシワが付いてしまうぞい

「・・・じいさん、ベル、行つてきます！」

うむ！良い顔じゃ！・・・いつてらっしやい。

PS

先日ベルが岩を何発も拳で殴り、その岩にヒビを入れておるのを目撃した・・・何で拳が無傷なのだ、ベル曰く自分は全力でこれだがカイトの方はもつとすごいらしい・・・オラリオでもカイトなら余裕かもしれん

02：天才×愛弟

○1年×月キン日

とりあえず、身近のことからコツコツと親孝行していくことにした

弟のベルの面倒はもちろん、（むしろかわいいので積極的に愛でます）家事の手伝いから畑仕事までこなす傍らで、基礎体力を養うために早朝ランニング及び筋トレを行う。

この世界は魔法なんてものがあるだけじゃなく、〈冒険者〉なんていう現代ならお巡りさんに職務質問されそうな職業があるくらいファンタジーに溢れている。

最近では「最後のファンタジー」なんて名前なのにバリバリ機械感丸出しの飛空艇や車が出ているというのに、この世界では主な移動手段がいまだに馬車であることからどれだけ文明が発達していないかがわかる、

つまりこの世界では戦国時代よろしく、暴力に溢れているということだ、自衛のためにも体を鍛えるのは当然なことだろう、

まあ、贅沢を言えば強くなつて、職務質問されない方の冒険者とやらになつて金を荒稼ぎしたい

もちろん稼いだ金でじいさんに楽な暮らしをさせてやりたいからだ、便利な都会に移

り住んで、のんびりセレブライフってのをさせてやりたい。

○2年×月×日

前世を思い出してから早いもので一年も経ってしまった、あれから日々身体を鍛えたり家事をしたりベルを愛でまくったりして過ごしていたわけだが、この生活サイクルを続けて1年以上経ってから筋トレ中に自分の体の回りに何か、こう、モワツとした何か纏わりついていることに気付いた、

最初は運動後の熱放射と周りの気温差で体から湯気でも出ているのかと思っただが、どうも違うようだ

そこで俺は気付いたわけだ、これは、まさか、忍者的に言う所のチャクラ「気」という奴ではないのかと

もしそうなら全男子の憧れの一つである水上走りや壁走りができるのでは!?

さっすが異世界!

そう思った俺はその日の内に早速、近くの小川へ向かった

結果

普通に川に沈んだ、水に対して微塵も反発する気配がない

ちくしょーそれなら壁走りはどうだおらああああ、と木に向かって蹴りを放つように

脚をかけて見たら

足裏で踏みつけた部分の木がベキリととんでもない音と共に陥没した

当然俺の足は木に埋まり、そのまま逆さ吊りの状態になって頭部を強打

痛みにのたうち回った後になんとか四苦八苦して木から抜け出すことに成功、

その後、改めてこのモヤつとした^{チャクラ}へ気^{チャクラ}（仮）について考える

おかしい、木が陥没するくらい^{チャクラ}のへ気^{チャクラ}が練れているのなら水の上に立つか反発力く
らい感じてもいいはずだ、つまり・・・

・・・どゆこと？

いや、俺はアホではない、はず

もちつと発想を柔軟にするんだ

このモワつと、というかどちらかと言うとネチヨつとして俺の^{チャクラ}へ気^{チャクラ}（仮）

もしかしなくともそもそも^{チャクラ}へ気^{チャクラ}じゃないのか？

これに似たような力って他の漫画で・・・あつた、あつたあつた、そーだわ、何で思
いつかなかつたのか

あまりに作者が仕事をせず、スツカリ雑誌からご無沙汰になってしまったせいですつ

かり忘れていた

たぶん、これ〈念〉だ。

○2年×月ニクニク日

〈念〉、人気コミックであるHUNTER×HUNTERで今では必須とも呼べる能力の
総称

人が本来なら無意識に垂れ流している生命力を自身の意思で支配し操る秘技だ。
つてことは——だ。

〈念〉、俺の容姿、白髪、そして俺の今世でのカイトという名前——決定的だ。

どうやら、俺はHUNTER×HUNTERの主人公の恩人にしてハンターを目指す
きっかけになった男——、カイトの身体を持って転生したようだ

そうか、カイトかー……ヤバくないか？

えっだって、主人公と再会後にすぐに片腕と首がなくなつてから性転換しちやつた人

だよ？

もしかして、今世でも同じ目に遭うんじゃない、いや、早計は良くない、この世界はそもそも HUNTER×HUNTER の世界とも異なっている感じだ、証拠に一般人にまで魔法の存在とか知れ渡ってるし、あの世界はこの世界よりも遙かに、下手をしたら俺の居た地球より文明が先を行っているかもしれない世界観だったはず。

今居る世界の文明はどう見積もっても中世といった感じだ

だが、この身体がカイトと同一もしくは似ているだけだとしても同じ運命を辿ることになるかもしれない

それを回避するためにもこれまで以上に訓練に励まねば、とりあえず念の基本四大行の内の、纏てん、絶ぜつ、練れんを基本に今後訓練をしていこう

ちなみに

纏てんは体内の精孔と呼ばれる気穴からあふれ出ているオーラを肉体の周りにとどめる技術。

絶ぜつは纏の真逆、体内の精孔を閉じてオーラを絶つ技術で気配を消したり極度の疲労を癒すときなどに効果がある、注意点としては防御力が紙装甲並に脆くなることだろうか

練れんは体内の精孔を広げ纏の状態よりも多くオーラを生み出す技術だ

わかりにくければ纏で通常のサイヤ人に、練が界王拳、絶がヤムチャになると覚えてくれ

まあ、念を発動させる「纏」はできてるつばいので残りのヤムチャと界王拳を集中的にやっつけていくでしょう

他の応用はもつと〈念〉の扱いに慣れてからだな

○3年×月トリコ日

念に気づいてから、一年たった。

毎日の訓練で何故かオーラを出さないようにする「絶」だけはかなり上達した、おかげで森の野鳥とかを楽に狩ることができるようになった、毎日の食卓に肉が並ぶだけでじいさんもベルも喜んでくれるので嬉しい

逆に「練」の方は微々たる進歩だ、俺の理想的なイメージとしてはスーパーサイヤ人みたいに『ドン！シュインシュイン』みたいな感じでオーラを纏いたのだがどうも上手くないかない、

一応、量自体は増えているには増えているのだが相変わらずネヴァくとした感じで体にまとわりつくだけだ、ましになったのは持続時間くらいだろう、最初は1分ともたなかつたが1年で1時間くらいには延ばすことができた。

もうちよつとしたら应用到手を出してもいいかもしれない

そんなことを考えていた矢先のことだった、

いつもの日課となった訓練の一つ、練を纏いながら木刀での素振りをしていたら

かわいい我が弟のベルが兄である俺の！かっこよくて頼れる兄である俺の!!ああもうつ、なにそのくあわい顔は!?!とととと俺の周りを不思議そうに回らないでええええ、ああああ今すぐ訓練を止めて、頭を撫でくりまわしてえええええ、ちよつ、こら、首をかしげるんじゃない！これ以上俺の心をピョンピョンさせてどうするつもりだ

!?

と、まあ俺の心中など知らずにベルが俺の訓練をじつと見ていたときのことだった

「?・・・にいちちゃんのまわりがもやもやしてる、なにそれー」

・・・・・・え、オーラが見えてる？

ベル三歳、俺が七歳の春のことだ

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

||

《side:べる》

○3年×月はれ日

きょうはにいちやんにへねん」というのをおしえてもらいました

これができるとすごいのだそうです

ぼくはみえるだけでそのへねん」というのはつかえませんが

でもがんばればつかえるようになるとおしえてもらいました

ぼくはにいちやんみたいにつよくなりたいからあしたからにいちやんといっしょに
がんばります。

○3年×月はーれ日

なつになりました。

あれからにいちやんといっしょにがんばってへねん」がつかえるようになりました

にいちやんはてんさいじやてんさいじやとおじいちやんみたいなことばでよろこん
でます

でもにいちやんにくらべるともやもやのおおきさがぜんぜんちがいます

もやもやはたくさんだとすごいじゃなくてすんごいんだそうです

はやくにいちちゃんみたいにたくさんだせるようになりたいです。

○4年×月はーれー日

にいちちゃんにおしえてもらった『ぜつ』がぜんぜんできません

でも『れん』といういつぱいもやもやだすのはちよつとだけできました

そしたらまたにいちちゃんがてんさいじやてんさいじやとおじいちちゃんみたいなことばでよろこんでます

『ぜつ』がぜんぜんできないのでーやったらできるのかにいちちゃんにきいたらかくれんぼをすることになりました

『ぜつ』ができました

やっぱりにいちちゃんはすごいです、にいちちゃんというとおりにしたらすぐにできました

でもあいかわらずにいちちゃんはてんさいじやてんさいじやと――

○5年×月はーれー日

さいきんはおじいちちゃんのとこだちのおばちゃんがいつぱいきます

ほかにもさいきんはほんもののぼうけんしゃのアスフィさんがいえにあそびにきてくれます

とかいのおはなしやほんとうのぼうけんのはなしはとてもおもしろいです
にいちやんはしようらいぼうけんしゃになるそうです

にいちやんならぜつたいにつよいぼうけんしゃ、えいゆうになれるといったら
にいちやんはぼくならもつとすごいだいいゆうになれるといってくれました
でもぜんぜんにいちやんよりつよくないから、がんばつてはやくにいちやんみたいに
つよくなりたいなあ

○6年×月ぎつぷる日

さいきんはあすふいねーちゃんとおそぶことがおいです

あそんだあとにいちやんのすきなものやほしがつてるものをよくきかれます
そーいえbaumうちよつとでいちやんのたんじょうびです

もしかしたらなにかふれずんとをかんがえてるのかもしれない
なのでいちやんがぼうしをほしがっていることをおしえてあげました
ぼくは木で作ったてづくりのねつくれすをあげようとおもいます

○6年×月ぎつぷりや日

だんじょうびのひからにーちゃんとおすふいねーちゃんのようにすがおかしいですかをおあわせるふたりともかおがまつかになります

おじいちゃんはそれをみてわらつていますがふたりはけんかでもしたのかな？

おじいちゃんにきいたらいずれわかる、とだけいわれました

にーちゃんみたいにつよくなつたらわかるかなあ

よし、きょうもくんれんがんばります。

○7年×月泣き笑い日

今日、兄さんがオラリオに旅立ちました

さすがの兄さんも少し寂しかったのかちよつと悲しそうな顔をしていました

でもおじいちゃんに元気づけられて笑顔で馬車に乗り込んでいきました

僕はおじいちゃんがいるからこの村でしばらく修行しつつ過ごそうと思います

おじいちゃんは将来行きたければベルも行っていいぞ、と言っていますがおじいちゃんを一人残してはいけません

それに兄さんの足下にも及ばない僕の念程度で冒険者なれるとは思えないから、もしなるのならもつと修行して強くなつてから兄さんを追いかけようと思います。

さて、それじゃ日課の岩割りをやるとしましょう。

オラリオ到来！

03：幼女×劍姫

村から旅立ち馬車に揺られること数日

普通なら間違いないが尻が痛くなるだろうが、そこは便利な念能力者

『凝』^{ぎょう}という体の一部にオーラを集中させる技を応用して尻にオーラ座布団をまとうことで退屈だが比較的快適な旅を過ごすことができた

暇つぶしに『流』というオーラを大体の分量で各部位に配分する練習をするだけで意外と暇を潰す事が出来た

俺の尻も守れて念の練習もできて一石二鳥である。

ちなみにこれをさらに高度な技に昇華させると『硬』^{こう}になる、本来の『硬』^{こう}は集めた部分以外には一切のオーラが出ない状態を指すが、同じ念能力者が今の俺を見たら、尻を中心に全身からローションを垂れ流す未熟者だ、俺の今の実力で完璧な『硬』^{こう}を使用するにはまだまだ修行不足だ

『硬』^{こう}は念の基本技を4つ同時発動させ、体中のオーラをすべてを体の一部に集める複合高等技術だ、ゴンさんはこれをほぼ一発で成功させていたが、俺は数年かかってようやく

く形になっていいるかな?といったレベルだ、さすがゴンさん、天才すぎる。

俺に念の才能がないわけではないと思うのだが俺のオーラは何故かドロドロしてる上に妙に圧縮しにくいせいで制御が非常に難しい、ここまでオーラの制御訓練のみを集中的に行うことはなかったのが旅の間は意外と有意義な時間を過ごせたと思う。

そんなことをしていると御者のおっちゃんが声を掛けてきた

「おーい坊主、見えてきたぞ」

ようやくか、そう思つて馬車の幌から顔を出すと、かなりの距離があるにも関わらずその巨大さがわかる街壁が見えてきた

「おー、あれがオラリオ、世界の中心都市と謂われる街かあ」

ヘルメスとアスファイから聞いてはいたが、マジででっけーなあ

巨人が進撃してきても大丈夫なくらいの広さと高さがある

「坊主、オラリオは初めてかい?」

「ええ、というより村から出る事が初めてかな」

「はっはっはっはっは!それなら驚いただろうな」

「他の街もあんなにすごい壁が?」

「いやいや、一応他の街もそれなりの壁があるがここまでの街壁は世界でもここだけだよ、それを最初に見れた坊主はラッキーだな、村からつて事は・・・坊主の目的は出稼

「ぎかい？」

世間知らずが冒険者を目指しにきたとはなんか言い出しにくい

「・・・ええ、まあ、似たようなもんですかね」

「そうかい、ただ最近のオラリオは物騒だから気を付けないといけないよ？」

「話には聞いていますけどそんなに酷いんですか？」

「ああ、元々はそこまでじゃなかったんだけどねえ・・・」

そんな風に意外と気の良いおつちゃんとは適当な会話をしながらも馬車はオラリオに向かつて進んでいった

その後、特に何のトラブルもなく検閲を終えて街に入ることができた

「お、おおう、この人混み前世以来のなつかしき」

右を見ても左を見ても人、人、前世ならいざ知らず今世では見ることのなかった光景だ

「まあ、あそこは村だし、当たり前か」

この人混みのせいで村の穏やかな光景が、というかベルが恋しい・・・あとじいちゃんも。

ま、この数年で当初より色々と目的が増えたため村に帰るわけにはいかない

「まずは、ヘルメスがお勧めしてくれたファミリアから行ってみますかね・・・大丈夫かなあいつのお勧めって」

悲しいかな、田舎者の俺にはオラリオにコネなどなく、あの胡散臭い男神やっしか頼る者がいない、アスファイがあいつの眷属じゃなければ信じてなかっただろう

初っぱなから不安だ・・・だが、俺の夢を叶えるためには冒険者として頑張るしかない！

うっし行くか

そう意気込んで俺のオラリオでの初めての活動が始まった。

間。

orz・・・マジかー、全部入団拒否された、一部OKそうところがあつたが、最後に言われた採用条件が怪しすぎたのでこちらからお断りさせてもたつた、さすがに何でもは無理だ、ナニをされるかわからん。

俺が入りたいのはダンジョンの探索をメインとするファミリアなのだが、このひよろつとした見た目と年齢のせいで中々採用してくれるファミリアがない

ちつくしよー覚えとけよ、いつか有名になって勧誘されてもお前らの所だけは絶対受けねえ、とりあえず拒否られたファミリアはメモつとこ、俺は結構根に持つタイプなのだ

しかし、本当にどうしようかな、さすがにどこにも受かりませんでしたー、コネでヘルメスファミリアに入れてくれませんかねえ、うえつへつへつへと、ゴマを擦れたら楽なのだが、男のプライドに掛けてそんなかつこ悪いとこアスフィに見せられない、

ヘルメスにお勧めされたファミリアは全滅、となると直接自分で探すしかないか

|・・・

なんか業績の上がない企業戦士サラリーマンの気分だ

1ヶ月後。

「そこは街中であるはずだ、だがその一角だけ今は静寂に包まれていた
……いくぞで」

その中心に居る男が小さな声で呟いた瞬間

手に持っていたジャガイモを中に放り投げる！

「シャシャシャシャシャシャシャアアアアアア!!」

一瞬でジャガイモだったものは小さく切り裂かれていく

「・・・つおばちゃん!!」

「あいよおおおお！」

かけ声と共に女性が所定の位置にボウルを持って立つ、するとそこに吸い込まれるように切り裂かれたジャガイモだったものが投入されていく

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ」

細かくなったジャガイモを残像すら残るスピードで潰しつつ調味料を投入し混ぜる、その間、僅か5秒フラット！

「シヨオアアアアアアアアアア!!」

次におばちゃんと共に潰したジャガイモをもはや多重影分身のレベルで一口大に丸めていくこれは10秒フラット！

「せいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせい!!」

それをすかさず男は高温の油に投入していく、しかし驚くべき事に勢いよく入れているはずの油は一滴として周りに飛び散ることはなくノースプラッシュで揚げられている、そして終に！

「完・成!!」

「「「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」」」

それを見ていた周囲から惜しみない拍手喝采がスコールの如く降り注ぐ

人を魅せる、しかし無駄のない動きで無駄に盛大に『じゃが丸くん』を作る充実した顔の男がいた。

・・・っていうか俺だった。

「まいどーまたいらっしやいませー。」

どーも、お久しぶりです、意気揚々と村を出てから早いもので一月が経ちました、今では立派な一人のじゃが丸職人やってます

俺の大道芸じみた調理を見ていた人々が笑顔で次々とじゃが丸くんを買っていつてくれるおかげで売り上げは上々です

最近のオラリオは物騒すぎて人々の笑顔が少なくなってきたが、俺の大道芸で少

しでも笑顔が戻ってきてくれるのは喜ぶべきことだ

うん、それはいい、それはいいんだが・・・

・・・何やってんだ俺。

もう一度言おう、何やってんだ俺!!

あれから、バイトを募集していた「じゃが丸くん」を屋台売りしているおぼちゃんに何とか雇ってもらえたまではいいのだが、そこから「じゃが丸くん」作りにちよつと熱が入りすぎた、一応買いに來てくれる客にそれとなくファミリアの情報とか聞くのだが、あまりいい情報はない。

「いやーカイトのおかげで今日も完売!ここんどこ売り上げが上がってきて助かるよ、まあちよつと忙しすぎるのが難点だけどね」

「ははは、すみません」

「ばーか、謝らなくていいんだよ、お前さんのおかげで新しい『じゃが丸くん道』に目覚めたからね」

「なんですか『じゃが丸くん道』って、あきらかにそんな道走っていったら「スーパーサイズミー」みたいな末路にまっしぐらじゃねーか

「それより、良いフアミリアは見つかったのかい？」

「いや、それが全然ですなー・・・」

「・・・まあ、店主としてはあんたみたいな売れっ子看板が居てくれる分には何も文句ないからいいけどさ、・・・いつそのことこの店に永久就職でもしてみるかいい？」

「最近はその、洒落じゃないレベルで頭をよぎるんで勘弁してください」

惚れた女が魔物と戦っている一方で男の方はじゃが丸くん作ってますとか、かつこ悪すぎる、マジで勘弁してくれ・・・あれ、待てよ？

・・・今まさにこの状況がそうなんじゃね？

いやいやいやいや、違うから、まだ俺はスタートしてないだけだから、ノーカンだよノーカン!!

そんな風に屋台の片づけをしながらあばちゃん(店長)と談笑しつつ自らの境遇に絶望しかけていた所に、息を切らして一人の女の子が店に向かって猛スピードで走ってきた

腰に届きそうな長い金髪を垂らした、かわいい少女だ

ただ、そんなかわいらしい少女が猛ダッシュしてくる、しかも無表情で

その様は「※ヒソカ」みたいな注意書きが必要なくらいには恐い、軽くホラーだ。

しかし、今では慣れたので特にビビることもない

「おー、今日も来たのか」

実はこの子、最近毎日ここにじやが丸くんを大量に買いに来てその場でそれを全て食べ尽くすプチ常連さんだ

あの小さな体のどこに大量のじやが丸くんが消えているのか、世の中不思議で一杯である

「う、うん、あ、あの、．．．もしかして今日の分のじやが丸くんは」

「わりの、売り切れちゃった」

「あう．．．」

ガーンと音が聞こえてくるくらいにシヨックを受けている

いつも無表情の娘がここまでシヨックを受けているのを見ると罪悪感が半端ないな

うーむ、どうにかしてやりたいが材料がなければどうにもできんしな．．．あ、そうだ。

ナイスなアイデアと共に電球が頭に浮かぶ

「おぼちゃん、今日はもう上がっても大丈夫？」

「いいよいいよ、あとは荷物まとめるだけだし、．．．常連さんに接待してやんな」

わあお、俺の考えてることばれてーら、さすが店長

ならば善は急げだ

「嬢ちゃん、今から時間ある?」

「?・・・大丈夫ですけど」

「うっし!じゃあ店長にも言われたので常連さんにサービスだ、嬢ちゃんさえよければ、材料買ってどつかでじゃが丸くんを作つてやろう」

!!!

暗かった顔がみるみるうちに明るくなった

「ほんと!?ほんとにほんと!?!」

「ああ、男に二言はない・・・ないんだが材料は買えばいいとして問題は調理する場所なんだ、嬢ちゃんどつかいい場所知らないか?」

「知ってる!」

「よっしや、じゃあ材料買ってそこで調理といこう、まだ店に並んだことのない新作じゃが丸くんを試食させてやろう」

「し、新作!?!は、はやく!はやく材料買おう、はやく!」

「おわつ、ちよつ引つ張るなって、力ちからつよくね!?!」

そのまま引きずり回されるよう様にして市場で買い物を済ますと、嬢ちゃんの知るじやが丸くんを調理できる場所とやらまでやって来た

・・・来たんだが目の中の建物に呆気にとられる

「・・・なんだこの建物」

何と言え方がいいのか、そこそこの敷地に本来なら広大な城と塔をぎゅうぎゅうにくつつけてあちこちにサザエさんハウスをはめ込んだような、まさに混沌カオスと呼ぶにふさわしい建築物だ

しかも一応お城という体裁のつもりか、いっちよ前にきちんと門番までいるし

「あ、おかえり」アイズ」

「た、ただいま、です。」

「ん、後ろの人はどちら様？部外者を入れるわけにはいかないんだが」

「えっと、この人は・・・」

なんかいきなり雲行きが怪しくなってきた、せつかく材料まで買ったのに作れませんでした、という展開だけは回避したいところだ

ここはお得意の口車でどうにかすんべ

「・・・ビーも料理人シェフです、今日はお嬢さんや他の方々に出来たての料理を食べていただくように上の方（店長）に言われてやって来ました」

「え、そうなの？こんな小さい子が調理人？」

忘れてるかもしれないが俺の年齢は12歳、見た目は成長期に入るか入らないかくらいの子供だ、門番が怪しむのも当然だ

確認を取るように門番がお嬢ちゃんを見る、その際に口裏を合わせるよう軽くウインクしておく

「えつと、はい、今日は料理人さんに直接来て作ってもらうことに」

「いやあ門番さんも大変ですねー、料理ができたらあとでお裾分け持ってくるんで楽しみにしててください」

「おお！助かる！いやあ、門番って退屈でしかたがないんだが褒美があると思えばがんばれるな！」

「ご期待に添えられるように頑張りますねー」

ははははは、とお互い笑ってから、隣でボーとしているお嬢ちゃん、アイズと一緒に城に入る

先に行くアイズの後に続いて廊下を歩いて行く俺

「……………」

……だ、大丈夫なんだろうかこれ、自分でやつといて何だが不法侵入とかにならないだろうな、いや大丈夫のはず、なんとたつてこつちにはこの身内（のはず）のアイズがいるのだ、最悪の事態だけは避けられるはずだ

「着いた、ここが調理場」

考え事をしていたらいつのまにか調理場まで来ていた

つて、おお、めっちゃ広い！すげえな、ほとんどの調理器具がそろってる

確かにこれなら思う存分調理できそうだな、

……ただその前に、ちよつと気になることができた

「お嬢ちゃんの名前はアイズ、で合ってるよな？」

「うん」

「アイズ・ヴァレンシユタイン？」

「うん」

「……マジかよ」

マジかよ、田舎から来たばかりの俺でもその名前は知っている

わずか8歳、しかも所要期間1年で冒険者Lv. 2になった最年少かつ最速ランクアップの世界記録保持者^{ワールドレコーダー}

オラリオに存在する無数のファミリアの中でも最大手のファミリアであるロキ・ファミリアに所属する『劍姫』という二つ名持ちの真正正銘の天才、ここ最近はその話題で街中が賑わっていたが、まさかこの子のことだとは・・・

ということとはつまり、だ

このヘンテコな建物は当然ロキ・ファミリアの拠点つてことか

ハア、こんな俺より4つも年下の子ですら冒険者に、それも大手のファミリアの団員として冒険者になれているのに、俺はじゃが丸職人か、グスン

・・・悲しくなってくるので深く考えるのは止めておこう

じゃが丸、そう俺にはじゃが丸があるのだ、劍姫でさえ首を垂れるじゃが丸が!!
べ、別に悔しくなんてないんだからね!

「うっし、じゃあ早速作るか!早く食うためにも手伝ってくれよ、劍姫?」

「うん、まかせて、でも何で泣いてるの?」

ほっといてくだささい心の汗です。

そして現在、目の前にうず高く積まれたじゃが丸くんをハムスターの様に、しかしダイソンよりも衰えない吸引力で一心不乱に食すアイスがいた

調理は結局、俺が一人で全部やった、この子に料理をさせてはいけない、じゃがいもと一緒に台座ごとぶった切るような不器用さだ、俺の方から早々に戦力外通告をさせてもらった。

「はあ、しつかしまあ・・・」

「・・・?」

「うまそうに食べるもんだねえ」

「じゃが丸くんは最高、あなたのじゃが丸は至高」

「なはは、うれしいこと言ってくれるねえ、ほれ気にせず好きなだけ食え」

そう言うのと黙々と食事を再開する

(こんなに嬉しそうに食べてくれるなら世界一の料理人を目指すのもありかもなー、アスフィごめんー俺ってば主夫になるかもしれない)

そんな悲観的ではあるけど精一杯ポジティブに未来を考えている所に声が掛かった

「よう、坊主、家のファミリアに入らへんか?」

何か糸目の女性?からの突然の勧誘だった。

足りない足りない！

もつと敵を、わたしが強くなるための敵をもつと！

○6年X月つ日

ロキとフィン達にダンジョンへ行くことを二日も禁止された
なんでじゃまをするの？

わたしは、わたしはつよくならないといけないのに

○6年X月つよ日

訓練も禁止された

リヴェリアに何のための休暇だと怒られた

わたしのじゃまをしないでほしい

ロキに無理矢理連れられて外で食事を取ることになった

余計なことをしないでほしいと思つたが、そこで初めてじゃが丸くんという食べ物を

食べた

これは うまい!!

じゃが丸くんをたくさん食べた!

ロキが財布を見ながら泣いていたが、今日は好きだけおごつたのでーとか言っていたので遠慮しない

もつとじゃが丸くんをロキにせがんだら財布ごと店主に渡していた
初めてロキが偉い神様に見えた。

○6年X月つよわ日

ようやく今日からダンジョンに潜ることができる

モンスターを倒してもつと今よりもつと強くなる

今日は朝からすぐく体の調子がいい休んだおかげだと思う

○7年X月つよ日

L v. 2 になった

大変だったけど、色々と大切なことに気付けた

私はこれから変われるだろうか

○7年X月つよわい日

L v. 2 になってまたダンジョンに潜るようになって三日ほどたった

なんだが調子が出ない

どうしてだろう。

○7年X月よわい日

原因がわかった

じゃが丸くんだった

じゃが丸くんを食べてからダンジョンに潜ったら最高に気分がいい状態でしかもい

つもより多くのモンスターを倒すことができた

さすがじゃが丸くん、なんてすごい食べ物なのだろうか
 今度からじゃが丸くんを食べるのを私の日課にしよう。

○7年X月 ■ ■ ■ 日

敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺
 殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺
 じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺
 が丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺
 敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺
 じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺

○7年X月気づいた日

ここ最近、体の調子がすごい良い

やはりじゃが丸くんはすごい

しかも先日、最高にハイなじゃが丸くんを売っている露店を見つけた
 いくら食べても飽きない

ここのじゃが丸くんを食べるために最近朝日が昇る前からダンジョンに潜り、昼過ぎには探索を終えるようにしている

フィン達からは今のような生活サイクルを続けるように言われた

早く強くなりたいけど、じゃが丸くんがないと私は弱体化するようになってしまったようだからしかたない、しかたないっただらしかたない。

○7年X月ふいーばー日

ああ、なんてことだろう

ここのじゃが丸くんはおいしい

だからしかたないのかもしれない

でも急いでダンジョンから戻ってきたのに今日の分がぜんぶ売り切れだなんて、神はわたしを見捨てたのかもしれない

帰ったらロキをとりあえず絞めよう

そう思っていたら、わたしより少し年上でいつも至高のじゃが丸くんを調理している男の子がわざわざ材料を買って作ってくれるとのことだ

しかもわたしが買った材料の分だけじゃが丸くんを作ってくれと言ってくれた

おお、神はわたしを見捨てたりしてはいなかった

ロキに今度すこしやさしくしてあげようと思えた。

||

《side：ロキ》

○6年X月黒潮日

うちは女神ロキ、泣く子も黙る天界の奇術師トリックスターや！

天界はヒマでヒマでしょうがないからあちこちに喧嘩ふっかけて暴れ回ってたんやけど、いやー地上こっちは楽しいことも一杯、かわいい子供達も一杯と、まるで果てまで続く豪華料理のフルコースが並ぶかのように飽きることがなくてももう最高や！

でもなー、最近ちよーつと悩み事があるねん

うちファミリアの中でも特にお気に入りの子にアイスって子がおるんやけど、

この子は自分の限界超えてもダンジョンに潜ってモンスターと闘い続けて、今までも

何度も死にかけたりしてゐるよ

最近は更にひどくなつてきてんねん

ダンジョンに言つて傷だらけになつて帰つてきて、風呂と飯食つて寝たと思つたら次の日の午前中から夜までダンジョンに潜りっぱなし

こんな生活が長く続くはずない、遠くない未来に必ずどこかで折れる

巷じゃそんなアイズの姿を見て、「人形姫」や「戦姫」なんて読んでる奴もおるらしいうちのかわいいアイズをそう読んだ奴は絶対にとつちめたるけどな

でもそう呼ばれてもしかたないと思えてしまふ程に今のアイズは危うい

フィンとリヴェリアとガレスに相談してどないかせんといかんな

○6年X月白波日

とりあえずフィン達と相談してダンジョンへの行くことを二日禁止させた、これでちつとは体を休めるやろ

朝にアイズを見かけたら庭で剣の素振りをやつとつた

まあ、体が鈍らない程度の訓練は冒険者として必要やからええか、と思つてその場は

邪魔しないように部屋に戻ったんやけど

夕方にまたそこを通ると、アイズが庭におった

しかもまた素振りをする

・・・もしかして一日中そこで劍振ってたんか？

他の団員達にアイズを見かけた時間を聞いてみたらどうやら朝からずっとらしいということがわかった

おっふ、アイズたん、堪忍してや

ダンジョン禁止させた意味がないやーん

ママー！ー！ヘルプミー！ー！！

って言いながらリヴェリアの部屋に突っ込んだら着替え中やった

おっほ、ラッキーすけーあべし！？

リヴェリアに事情を説明する間もなく一時間以上めっちゃ怒られた

○6年X月黄桜日

フィン達との再度の話し合いの結果、うちが無理にでも外に連れ出して気晴らしさせることにした

ふひひひひひ、これで大義名分の元アイズたんといチャイチャデートができるでー

さつそく、アイズを連れ出して遊ぶ前に腹ごしらえしよ思て軽くつまめるもんでも食べるかってことで屋台名物のじゃが丸くんを食べたんやけど

アイズがこれをめっちゃ気に入ったらしい

めずらしくアイズがキラキラした飛びきりの笑顔（妄想）でうちにお願いをしてきた！

ここで子の願いを無下にしては女神の名が廃る！

そう思ったうちは気づけば財布ごと屋台の店長に投げ出していた

ああ・・・あれでソーマの酒を買おう思てたんやけどなー

しかもアイズたんそのまま日が落ちるまでじゃが丸くんを食べて続けて結局デートができんかったorz

っていうかあれだけの量のじゃが丸くんがどうやったたらこの小さな体に収まるとうのか

これも子供達の無限に広がる可能性の一つなんやろか

いや、これはアイズ限定やろな。

○7年X月黒とんぼ日

ついにアイズがLv. 2になった、世界記録になるほどのランクアップ速度や
なにかご褒美でもあげよかなーと思つてたら廊下を歩いてるアイズたんを発見！

なんか一人でアイズたんがブツブツ独り言つぶやいとつたから話しかけよ思て近づ
いたら

「じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃ
が殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺
じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃ
が殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺じゃが殺
じゃが殺

逃げました

きつと真昼間に見た白昼夢やな

かわいいアイズたんがあんなにごりきつた目であんなこと言うはずがないわー

ありえんわー

今日は酒飲んで寝るわー

○7年X月黒とんぼ日

アイズたんふぁLv. 2になってしばらくしてから、アイズの生活サイクルに変化が現れた

早朝からダンジョンに行くのは相変わらずやけど、帰宅する時間が夕方になる前には帰ってくるようになった

いやほほーい、これもうちやフィン達がアイズたんをどれだけ大事に思っているかわかってもらえたからやで!!

抱きつくといつも殴られるけど!

ペロペロしようとするとか切られそうになるけど!

きつと小宇宙コスモ的な何かを感じ取ってくれたんよ!!!

○7年X月赤霧島日

今日も今日とて、うちは新たな酒とかかわいい子を見つけにあっちまでえ!!

いやー、アイズたんが無茶なダンジョンアタックせんようになったおかげで心配事が

一つなくなつたわー

めっちゃ嬉しいわー

だからお酒に財布の中身全部使つてもうたのもシカタナイワーアヒヤヒヤヒヤ

ヒヤ

これでアイズたんのかわいい笑顔とか見れた・・・ら？

食堂ですごくうれしそうに何かを食べてるアイズがおつた、しかもとびきりの笑顔付きで

うええええええええええ!!?

アイズがめっちゃいい笑顔でじゃが丸くん食べとる!?

いや、なんでじゃが丸くんがあないに大量にあるん!?

いやいやいやそんなことよりアイズたん萌えええええええ!

リスみたいに一心不乱にじゃが丸くんを頬張るアイズたんキャワワ!!

うっひょー！脳内に永久保存やああああ!!

お？坊主ええ所におるな！

今、めっちゃ気分ええねん！

うちのファミリア入ってみんかー？

○7年X月森以蔵日

・・・あつたまイタイ、飲みすぎたみたいや

なんか昨日の記憶が曖昧なんやけど・・・

ん？

なんやこれ

ステイタスの写しやなこれ、

名前は『カイト・クラネル』？

んんんんんん？

そんな奴うちのファミリアに——あー・・・これ昨日うちが酔った勢いとアイズたんのキャワワな笑顔見てテンションがマックスハートになって身近にいた坊主をそのままの勢いで入団させたんやつたなー・・・。

フィン達は何の相談もなく入れてもうたけど大丈夫かなー・・・

・・・ん！気にしなーい！

きつと大丈夫やろ、うちの勘がそう言うとる！

そんなポジティブに考えてる自分の肩を誰かがガシツとつかんだ

「ナニガダイジヨウブンナンダ？」

氷点下も真つ青のリヴェリア^マの声が・・・ついででででで、肩に指が食い込んでる食い込んでる！

あかん、無理やてこれ、後ろを振り向けんつて、これ逃げ——

「コッチヲミロオオオオオオオオオ」
ぎやああああああ堪忍してええええええええええええええええええ

入団試験！

05：期待×疑惑

《side：フィン》

僕は小人族バウルムの「フィン・デムナ」、ロキファミリア団長を務めている

自他共に認めるオラリオでも数少ないLv. 5の第一級冒険者だ

僕の夢は世界規模での小人族バウルムの復興だ

そのためにもオラリオで最大派閥の片割れでもあるこのロキファミリアの団長という役割は意味のある地位だ

ただ、団長という役割は多忙を極める、特にうちみたいに団員だけではなく主神の癖も強いファミリアの場合は特に。

「それで？」

目の前には副団長でもあるリヴェリアの前で正座をさせられ憔悴しきっている我が主神ロキの姿

「今度は何をしでかしたんだいロキ？」

聞き出した内容はロキが僕たち幹部に無断で団員を増やしたという内容だった

そこまで重大なポカではなかったことに、とりあえず安堵の息を漏らす

しかし、こんなことが続くとファミアリアの人員がすぐにパンクする

それに団員には最大大手ファミアリアとしての自覚を持った行動が常日頃から求められるため、よほどの実力者でもない限り入団試験と面接を行うようにしている

今回ロキが入団させたのは村から出てきたばかりの屋台でバイトしている少年とのことだ

・・・これはまた微妙に困った問題だ

現在の団員は他のファミアリアから改コンバージョン宗してきた第三級以上の実力者か厳しい試験と

面接を経て入団してきた者たちが多い

そんな彼らはロキファミアリアに入団できたことを誇りに思ってくれている

そこに実力もなく試験も受けていない者が主神の鶴の一声で入団してきたとなつたらどうなるか・・・胃が痛くなりそうだ

それでも既に恩恵を刻んだ紛れもない家族だ

団長として皆に当たり障りないように説明しなければならぬ、そう言うとき

「いや、その必要はないかもしれない」

正座のままロキがあっけらかんと言いなながらポケットから取り出した紙をリヴェリアに渡す

「・・・なんだ」

「ええから見てみい」

「・・・ふむ・・・ほう、スキルか・・・これは・・・」

それに目を通したリヴェリアの目付きが何かに気付いたように見開かれる

「・・・なるほど、確かにこれなら皆も納得するだろう、ロキよ、これも神の勘というやつか？それともわかっていて恩恵を刻んだのか？」

「いや、どうやらなー、昨日はけっこう飲んでたせいで泥酔状態やったし無意識のうちに勘が冴いたかもしれんけど、それに気付いたのもリヴェリアの説教が落ち着いてからだな、気づいたときは驚いたで、なにせ最初からスキルが発現してるなんて滅多にないからなー」

ニシシシと笑いながら柵からぼた餅つてあるんやなくとロキがつぶやく

2人が見たのはおそらくその少年のステイタスの写しだろう、この2人が驚くほどのスキルに興味^が湧く

「リヴェリア、僕にもそれを見せてもらってもいいかい」

そう言つてリヴェリアから受け取つたステイタスの写しには彼の名前と初期のステイタス

通常の恩恵^{フェアルナ}を刻んだばかりの者であればここまでだ、

だが『カイト・クラネル』の場合はそこからさらに下のスキル欄にさらに追記があつた

~~~~~

カイト・クラネル Lv. 1

力 : I 0

耐久 : I 0

器用 : I 0

俊敏 : I 0

魔力 : I 0



そのスキル説明を読んですぐには気付かなかった、だがそれに気付いた瞬間、僕も目を見開いて驚きを禁じ得ずにいた

このスキルと似たような効果は存在する

身近な例を挙げればアイズが使う「付与魔法」が一番近い、あの子の場合には風を武器や自身に纏わせることで攻撃力や身体能力を底上げすることができる

実際カイトの「念能力」も似たような効果だ、属性付与がない分他人には劣っている様にも感じることだろう、だが注目すべきはそこじゃない、本当に注目すべきはこれが「魔法」ではなく「スキル」であるということだ

「魔法」というのは発動させるために魔力を練りつつ呪文を詠唱しなければならぬ、これは絶対であり例外はない、さらにそれが強力であればあるほど詠唱時間と必要な魔力はねずみ算式に膨れあがる

だが、これが「魔法」ではなく「スキル」であった場合、それが必要でなくなる

冒険者というのは一瞬の選択ミスが死に直結する、その中で魔法と同じ効果を詠唱なしでスキルとして発動できるというのは破格の能力だ

「これは・・・確かに皆の説得は必要ないみたいだね」

それどころか彼が成長すればロキファミリア最強の近接戦闘士アタックにもなりうる

そこでロキが小さい声で笑い始める



「2人とも気付いとらんの?」

「魔法ではなくスキルとして付与魔法が使える以外に何かあるのか?」

「教えたから正座止めてもええかな」

リヴェリアに目線で合図する、確かに勝手に団員を増やしたのは良くはないが、今回はそれが悪くない結果として残ったのでこちら辺で勘弁してあげてもいいだろう、説教はリヴェリアがたっぷりとしてくれたようだし

「・・・いいだろう、それで私とフィンが気付いていないこととは何だ」

あだだだだ、足がシビれる〜と言いなながら立ち上がりつつロキがとびきりの悪戯顔で僕の持っているステイタスの写し紙を指し示す

「スキルの念能力の欄をもちつとよく見てみい、まるでこれから何かが追加されるような空欄があるで」

そう言われて改めて紙を見ると、確かに「スキル」の欄に明らかに不自然な空欄が目立つ、これはつまり――

「スキルそのものが成長する可能性があるか、もしくはは――」

「本来のスキルの一部のみが発現している、か・・・ありえるのか?」

「ありえるんやろうなく、くーんんんん!!これやから下界は止められん!!神達もわからん未知の可能性!!いっだつて神達を興奮させるのは子供達やで!!」

その未知に狂気すら孕んで喜びを表すロキ

「ロキ、とりあえず落ち着いて、それよりもこれだけ希少な能力なら誰かを直接指導につけた方がいいね」

「スキルといえど魔力を使用するなら私の方でも指導は可能だが、どうする？」

そんな風にリヴェリアと今後の彼の指導について話していると

突然の乱入者が現れた

「ならば、あやつの面倒は儂に任せてもらおうか!!」

そう言って扉を勢いよく開けて入ってきたのは最後のロキファミリアの幹部ガレスだった

しかもなにやら大分機嫌が良い、ただ気になるのは右目に包帯を巻いていることだろうか

これはもしかして件の彼と何かあったかな？

||

## 《side:ガレス》

儂はドワーフの「ガレス・ランドロック」一応ロキファミリアの幹部を務めておる  
今日も庭で他の者達と訓練をしていたらリヴェリアが儂とフィンに招集を掛けた

何でもロキのアホがまた何かやらかしたらしい

やれやれ、前回は自分の分では飽き足らず賭博場カジノに団員から借りた金まで使つて遊び  
に行つたとかだったかの

何でも交換景品に幻の酒が入つたというのが切つ掛けだったが思いの外、賭博には  
まつてしまつたらしい

最後には目的を忘れて賭博に夢中になつてしまつたとか

アホじゃのう、せめてその幻の酒とやらを手に入れておれば少しは庇つてやつたん  
じゃが・・・その場合はもちろん庇つた分の分け前(酒)はもらうがの。

とりあえず訓練はここまですて会議室に向かうとするかの

そう思い訓練を切り上げてフィンの部屋に向かつている途中で見慣れぬ坊主が門か  
ら家ホームに入つてきた

話しかけてみると、儂を見てかなり驚いていたようじゃが、落ち着かせてから素性を聞いてみると、つい先日ロキにスカウトされ恩恵を刻んでもらったとのことだ

証拠に背中を見せてもらおうとロキのエンブレムが確かに刻まれていた

・・・今回の招集内容に予想が付いた、多分この坊主のことじゃろうな

まあいいか、確かに儂らに相談もなく団員を増やすのは褒められた話ではないがそこまで問題視するものでもあるまい、

リヴェリア辺りは激怒してそうじゃが、フィンが無難な解決策を考えるじゃろ

それにしても、先ほど背中中のエンブレムを見せてもらったときに坊主の体付きも見ることになったが、年齢の割にかなり鍛えられていた

どれ、今の段階でどの程度見込みがあるか軽く試してみるか

ついでに今まで何をしていたのかと聞いてみると、一月程前にオラリオに初めて来てからは屋台でバイト、その前は村で祖父と弟の3人で畑を耕しつつ冒険者になるために体を鍛えていたということらしい

実戦経験は偶に森に現れたゴブリンを数匹討伐したくらいとのことだが、恩恵を刻んでいない状態の子供がゴブリンを討伐していたというのは驚くべき事だ

・・・ふむ、ロキの気まぐれにしてはこの坊主、当たりかもしれない

||

《Side：貧乳リヴェリア》

私はエルフの「リヴェリア・リヨス・アールヴ」、ロキファミリアの副団長だ・・・なんとなくだが今笑った奴に災いあれ

今回はまた主神であるロキが厄介事を起こした

つい最近、新たに団員を増やしたばかりだというのにファミリアの幹部に無断で団員を一人増やしたという

恩恵を与える代わりに神々が好き放題に生きるのは神代の時代が始まってから人が背負うべき対価ではある

だが、仕方がないとは言ってもこうまで次々と問題が起これると頭を抱えなくなる

不幸中の幸いなのは今回ロキが入団させた少年が希少なスキルに目覚めているということだ

これならば多少特別扱いということが入団させても他の者に説明しやすいし、その子に対するやつかみも少なくともすむだろう

それにどうやらこの子のスキルは魔力を鍛えればそのまま他のステイタスの底上げ

に繋がる能力だ、多少であれば私が指導することもできるだろう、そう考えてフィンと話し合っている所に横槍が入った

「ならば、あやつの面倒は儂に任せてもらおうか!!」

ガレス・ランドロック、私やフィンと同じく、ロキファミリアの最古参にして幹部の一人だ

昔はよくこいつとは気が合わずに喧嘩したが、今では気心の知れた仲となった

そんなこいつが随分と嬉しそうに部屋に入るなりカイトの直接指導員になると言ってきた

ただ少し気になるのは頑丈さでは右に出る者のいないこいつが右目に包帯を巻いていることだろうか

カイトとは間違いなく何かがあつたんだろう、酒と相撲や力比べの好きなこいつが気に入るとなると、模擬戦か何かでもしたのだろうか

だが、その右目は何だ、まさかカイトが付けた傷なわけではあるまい

「ガレス、遅刻だよ」

「おお、すまんすまん、ちよつと意気のいい坊主の相手をしとつたら思いのほか時間を忘れてしまうたわい」

「その意気のいい坊主というのはカイトのことか?」

「おう、そうじゃ、そのカイトじゃ!あやつ見所があるぞ、わしに育てさせてくれ」

ガレスがここまで入れ込むとは、どうやら思っていた以上にカイトという子は優秀なのかもしれない

そうやって三者三様で思惑に入ろうとしたとき、パンパンと手を叩いてロキが注目を集める

「とりあえず、カイトの情報を共有しよか、まずうちらの方から、その後にガレスがカイトと何があつたか」

私達がカイトのスキルとその特殊性について説明するとガレスは納得した様に相づちを打った

「なるほど、どうりでL.V. 1であの動きというわけか、それに成長する可能性のあるスキルか・・・なるほど」

「なんやガレス、やっぱカイトと模擬戦でもやらかしたんか？」

「おう、どの程度の実力か試験代わりに見てやろうと思つたんじゃが、多少油断してたとはいえ・・・いいのを一発喰らっちゃまったわい」

そう言つて右目に巻いた包帯に触れる

「「っ!？」」

その言葉に私だけでなくロキやフィンも呆けた顔になつて言葉をなくす

ありえない、L v. 5のガレスに昨日恩恵を刻んだばかりのL v. 1が一撃を、しかも負傷を追わせるほどの攻撃を決めた？

バカなという言葉が思わず漏れてしまった、カイトという少年は一体何者なのだ

「・・・ロキ」

「んー、そやな一応、うちの前で軽く面接といこか」

神の前では地上における人々は嘘をつくことができな、さすがにカイトが何者なのか問いたださねば成るまい

最悪の場合、ファミリアに害を為す存在になり得るなら即刻除名もありうる

剣呑なことを考えているとガレスがカイトを庇つてきた

「おいおい、カイトは何か後ろめたいことをしてきた奴じゃないと思うぞ、あの動きは日頃の鍛錬で磨き上げたものだったぞ」



「だとすれば、彼はアイズに並ぶ将来の幹部候補かな？」

「そう思ったからこそ儂が名乗り出たんじやろうが」

「こりや、棚からぼた餅どころか万能薬エリックサーでも降つてきた気分やな」

まっただくだ、だからといつて今度から勝手に団員を増やすのは許さないが

「わかつとるがな、今回はちよつとした事故みたいなものや、まあ転んでもただでは起きないのがうちやで〜」

どうやら、あまり懲りていない様なので正座を一時間再開させてやった、ロキが悲鳴を上げたが知らん、いいかげん反省しろ、次同じ様なことがあつたらギザギザの板の上で正座させてやろう・・・

「まあ、とりあえず、面接はここにいる全員で食事前には行うでしょう」

フィンがそう言つてとりあえずは解散となつた

カイト・クラネルか、怪しいところもあるが私も興味が出てきた、午後の面接が楽しみだ。

## 06：面接×物理 前編

ディーもディーもカイトです

世の中何が起きるか分かりませんね

幼女（強）に、じゃが丸くんを作つてあげたら何故か最大大手のファミリアに入団できました

その際の、記念すべき初めての恩恵を刻まれた時の記憶は酒臭い女神にゲロを吐かれながらというものでした・・・最悪です

そのせいで、この女神は前世のアニメでちらりと見た水の駄女神と同類なのではないかと戦々恐々しています

きつと女神は無能でもファミリアのメンバーが非常に優秀なのでしょう

上が駄目だと下が非常に優秀に育つのは異世界でも同じようです

人を導くはずの女神が反面教師って大丈夫だろうか、そう思っていたときに前世の知識からロキという神は確か悪戯の神様だったなど、ろくでもないことを思い出し今から不安で一杯です

大手だからと大丈夫と根拠もなく浮かれていた昨日の自分に腹パンしてやりたいで

す

とりあえず昨日は恩恵を刻まれた後、屋台の店長にロキ・ファミリアというビッグ中のビッグなファミリアへ入団できたことを伝えてバイトを辞めることを伝えることにしました

急な辞職の報告に何か言われるかと思っていきましたが店長は笑顔でこれから頑張るなど応援してくれたときには涙が出そうになりました、この人本当にええ人や、拾ってくれたせめてもの恩返しに暇なときは口ハで手伝いにくる事を伝えて店長の屋台を後にして一ヶ月世話になった激安宿に帰りました

元々そこまでの荷物があるわけでもないので荷物をまとめて宿から引き払う準備には大して時間がかからなかつたです

翌朝、ロキファミリアの本拠である「黄昏の館」に向かいました。

昨日のうちに門兵には挨拶ついでに約束通りじゃが丸くんを渡し、談笑できる程度には仲良くなったので顔パスで入れた。

入ってからはとりあえずどこに行きやいいのだろうか、とりあえずそこら辺ウロウロして誰かにゲロキの場所を聞けばいいかなー

最悪門兵の人の所に戻って場所を聞けばいいや、と行き当たりばつたりなことを考えながら館の中に入ろうとしたら――

「おい坊主、ここはファミリア関係者以外は基本的に立ち入りを禁じている所なんじゃが？」

そこで化け物みたいなおっさんに声を掛けられた

その存在を自覚し目にした瞬間、全身の毛穴が開いて冷や汗が止まらなくなった

姿はずんぐりむっくりした典型的なドワーフの姿をしている、これだけなら問題ない、問題は

(なんちゅーオーラ量だよ!?)

そう、今の自分のオーラがただの燃えかすにすら感じられないほどの圧倒的なオーラをその身に宿していることが感じられることだ

やばい、なんか怪しい奴を見る剣呑な雰囲気を感じる、弁解を！

何も悪いことしてないけど早く説明せねばマズイ気がする!!

「えええええつと、一応昨日こちらのファミリアに入団した者で、す」

「何じゃと、昨日入団した?」

はい、と答えると確認のために背中中のエンブレムを見せるように言われた、逆らう意味もないので大人しく服を真つ昼間からストリップ、ちよつとだけと言わず上半身全てを脱いで背中中のエンブレムを晒す

「間違いないのう、ロキの奴めまた勝手なことを・・・」

その言葉を聞いて自分の入団は気まぐれなロキの予期せぬ行動であったことが伺えた、

あれ、もしかして俺ってばこのファミリアにとつて厄介事になる感じなのか?

第一印象が悪くなるような事態は勘弁願いたい、そんな風に不安を感じていると

「・・・まあ、いいか」

と、思ったより軽い返しをされた

「え、大丈夫なんでしょうか、入団させてもらった身でこう言うのは変かもしれません  
が・・・」

「大丈夫じゃないか?・・・儂あまり考えるのは苦手じゃし」

ああ、見た目通りの脳筋系なのね

「それにしても中々いい体をしとるのう、かなり鍛えていると見える、名前は何と言うんじや?」

「カイトです、カイト・クラネル」

「そうか、・・・いきなりで悪いがカイトよ少し付き合え」

「え、何ですかいきなり、ていうか、どこに?」

「何、普通とは順序が逆になってしまいが軽い模擬戦形式で一応現時点でのお主の実力を測らせてもらおうと思つての」

（あーなるほど、確かに新人の実力もわからないままでは訓練とかで色々と不都合があるんだろうな）

「ただし、あまりに出来ない結果じやと即退団になるかもしれないが・・・」

「うええええ!!」

「くつくつく、なので死ぬ気で頑張れ、やる気だけでも見せればどうにかしてやる」

（冗談じゃない! バイト先の店長にもかっこよく送り出されといて翌日に出戻るとか情けなさすぎる!）

「・・・わかりました、未熟者ではありますが死ぬ気で頑張るので一手お相手お願いします」

「お主かつたいのー、もうちよつと年相応の話し方の方がかわい気があるぞ」

「初対面というだけでハードル高いのに、あんな脅しの様なこと言ってきた相手に無茶言わないでください、慣れたらもうちよつと砕けた話方になると思いますが．．．」

「ま、それもそうじゃの、ほれこつちじゃ、裏に訓練もできる広場がある」

そう言つて歩き出すおっさん、てか俺あんたの名前聞いてないんだけど

歩きながらおっさんにこれまでの経緯と出身や年齢を聞かれたので素直に聞かれた内容について話した

そんな風に雑談しながら歩いていると、見えてきたのは結構な広さのある広場の様な庭だった、俺たち以外にも団員がちらほら訓練しているのが見える

なるほど、これだけ広ければ多少は暴れても大丈夫そうだ

「では、お互い少し離れてから開始といこうかの、審判は．．．お、ちようどよい、ラウルお主がやれ」

「へ？」

おっさんが声をかけたのはいかにも、ザ・平凡といった感じの少年だった

||||| 間

「——というわけで、こいつの後日試験みたいなもんじゃ」

他の訓練をしていた同い年くらいの少年におっさんが事情を説明し審判に命じる

「・・・なるほど、そういうことなら任せてください、自分が審判を務めさせてもらおう  
す、カイトって言ったすね、俺はラウルって言う者っす、頑張るっすよ！」

「お、おう」

あ、暑苦しい

なんか体育会系の部活によく似てそうなしやべり方だなこいつ、まあ悪い奴じゃなさそ  
うだけぞ

「とりあえず、ハンデとして儂がこの半径一メートルの円から出たら儂の負け、その前に  
カイトが戦闘不能になったらカイトの負け、ということにしておくか、ラウル、こっち  
はいつでもいいぞ」

そう言いながらガリガリと木の棒で周りに円を描いてその中心に立つおっさん

「え、そんなにこっちが有利な条件でいいんですか？」

「は？」

そう言った俺の言葉におっさんとラウルがキョトンとした顔になる

「ガハハハハハハ!!この条件でもお主には荷が重すぎるわい、それを有利とは！」



こちらに有利すぎるその条件について聞いて逆に笑われてちよつとムカツつときた俺つてば舐められてない？

確かに最初はおっさんのオーラに気圧された

ぶつちやけ、今でも勝てる気はしないけど、それでも円の中から動かずにカウンターかこつちが力尽きるまで相手をして持久戦でも勝てると思われているのはちよつと面白くない

いや、しかたないとは思うよ、なにせ恩恵刻んだのは昨日だし、先人が自分の力に自信を持つのも悪いことじゃないけどさ、舐められて怒らないほど俺は人間ができていない

だつて12歳だしー、子供だしー大人げない？子供でうえうえ！

「えつとあんま無理しない方がいいつすよ、とりあえず始めるんでカイトの方も準備はいいつすか？」

「ちよつと待つてくれ、すまないけど帽子を預かつてくれないか、．．．とても大切な物なんだ」

アスファイからもらった大切な帽子だ、その重要度はかの海賊の麦わら帽子に匹敵すると言つても過言ではない、激しく動く模擬戦なんかで汚したくない、雑魚相手なら脱が

「ずともいいだろうが今回は相手が相手だ、そんな余裕微塵もない。」

「いいっすよ、もしかして彼女からもらったプレゼントとかっすか？まっさか」

「よく分かったな、とても大切な奴から誕生日にもらった物なんだ」

「・・・ハジメテイイッスカ」

あれれ、なんか急にラウルの目が死んで元気がなくなっちゃぞ？

「?・・・あ、ああ、いつでもいいぞ」

俺の言葉を確認したラウルが少しふらつきながら審判として少し離れた中間に立つ、去り際に「——ジュウバクハツシロ」とか聞こえたような気がするがどうしたのだろうか

ま、いいか、先人に新人が勝てるわけがないと思ってるであろう、常識をぶち壊してやろう

おっさんと俺がお互い数メートル離れて対峙したのを確認したラウルが俺とおっさんを確認して開始の合図を放つ

「では、模擬戦始めっす!!」

（最初っから【練】全開!!）

【堅】!!」

【練】は通常より多くのオーラを体から発する念の基本だが、これよりさらに全力でオーラを噴出させる技がこの【堅】だ、練との戦闘力を比べればその差は最高で数倍に達する、長年の修行でようやく数分間だけこの状態で戦闘行動が取れるようになった、なにせ最初は動かずに数分間【堅】を維持するだけに二月もの時間がかかったのだ、ただし以前にも言ったように自分のオーラの質はなんかネチョットとしているのでいつもの『ネバア』が『ゴポオ』といった感じになる・・・ぶつちやけこれって本当に【堅】なのか？と思った人、大丈夫その疑問は俺も思ってることだが、大丈夫だ問題ない・・・タブン

さらに今回はそれよりもどうしようもないレベルの問題として、今の俺の【堅】の状態よりもはるかに質も量も化け物級なおっさんが相手だということだ

まず間違いないガチの戦いでは今は絶対に勝てない、だが試合としてのルールでこのおっさんの鼻を明かすくらいはやってやる！

おっさんは俺が念を使えるということを知らない、なりたてホヤホヤのただのLv.1のガキだと思ってるはずだ、付け入る隙があるとすればそしかなない

故に先手必勝！

全身を今出せる限界のオーラで包みながらおっさんに突進、全力で殴りかかる、殴る瞬間にオーラの部位量を【流】で制御、拳を70、全体防御30にして俺の動きに驚い

ているおっさんの顔面に向かって拳を放った

(もらったあ!!)

辺りに破裂音が響き渡る

「つつつつ?!!」

「・・・なんじゃ、この程度か?」

俺の拳はニヤリと笑ったおっさんの顔の直前で手の平によって難なくガードされてしまっていた

「マジかよ!? つどらあ!!」

すかさず蹴りを数発たたき込むが全て腕で防御される、しかも蹴った足に鉄でも蹴ったような感触が返ってくる、

(攻撃したこっちの方がダメージを受けるとかどんだけ頑丈な肉体だ!?)

防御している腕に蹴りを放った反動を利用して一旦距離をとる

(クツッ、なんだよ今の!?)

冷や汗が止まらない、今出せる最高に近い一撃を難なく防がれた事実とその後の防御力に思考が止まりかける

一方おっさんの方はガードした自分の腕を見てからゆつくりとベガ立ち体勢に戻って俺を見据える、ベガ立ちつてのは腕を組んで直立不動の体勢のことだ、この体勢は見

「た目からも分かる通り腕を組んでいるので初手が遅れる上にまっすぐに立つていて不意の攻撃によってすぐにバランスを崩す、およそ実戦では使うことのない立ち方だ、だがおっさんはその体勢で俺の攻撃を完璧に防ぎきった、腹が立つが堂々とした絶对的な強者のみに許される余裕の姿だ、どうやら実力に驕っていたのはこちらの方だったようだ」

「蹴りの方は納得できるようにしても拳は当たる直前だった、普通に防御が間に合ってもそのまま貫く勢いだったのにベガ立ちのまま片手で完全に防御されるとか……. . . どんだけだよ」

「しかもこっちはおっさんが防御する際の動きが全然見えていない、おっさんの実力は過大評価していたつもりだったが、それでもまだ足りなかったようだ、更におっさんの実力を三段上に上方修正する、そこから出される結論としては——ヤツベ、常識をぶち壊す! とか、かっこつけたのに無理っばいぞ、自分で自分が恥ずかしい、赤っ恥も良いところだ」

「残念なことには奇襲はもう使えないだろう、動きを見るだけの模擬戦ということで今回はお互い武器無しの手空拳、そのせいで距離を取っておっさんの手の届かない位置からの攻撃も無理となると残るは——」

「(あれに近接戦闘かあ、. . . うわあ超やだあ)」

こっちの攻撃はほぼ完璧に防御される上にたとえ攻撃が届いても効くかもわからない存在と殴り合いとか、それももう死ねって言うてるようなもんじゃん

(・・・負けて元々、だったら一か八かの一発勝負の作戦で行くしかない！)

確率は百分の一か千か万か億か、ヤケクソだこんちくしょう、こんな勝ち目の薄い勝負が模擬戦でよかったと無理矢理ポジティブに考えておっさんに向かって全力で突っ込む

「ツシ!!」

ただし、できるだけ低く地面をすべるかのように疾走する、狙いは足下、足を刈り取るような鋭い下段蹴りを放つ

「ふん!!」

だがこれをまるで踏みつけるように足裏で迎撃されて止められるが――

(これは狙い通り！)

「ぬううりやあああああああ」

脚と足裏が接触した状態のままですそのまま全力で振り抜いた、自然とおっさんの片足が高く上がりその自重を支えるのが左足一本になる、その残った左足に向かって下段の後ろ回し蹴りを放つ

「甘いわい」

「ツガア!?!」

蹴り上げたはずのおっさんの右足が俺の蹴りよりも早く、咄嗟にガードした左腕ごと俺の体を吹っ飛ばした

これだけで軽く10メートル以上吹っ飛ばされた

「くっそ、っ!?!痛っ~~~~!!」

すぐさま起き上がるが蹴りを受けた左腕に激痛が走った、折れてはいない様だがこの痛みはヒビくらいは入ったかもしれない、左腕はこの試合中は使い物にならないだろう(となると残りの右腕だけでおっさんの相手をするしかない………無理でしょ)

おっさんの体が少しでも浮いたらその隙にぶん殴って円外に吹っ飛ばす算段だったのが既におじやんになった今、文字通り万策尽きたような状況だ

おっさんは円内で未だにベガ立ちしている、その姿勢好きなのか?

いや、そんなことどうでもいい、それよりマジでどーすっつかない、

さっきおっさんに言われたが出来ない結果を出せば即退団なんて言われてしまっている、降参なんて下手な真似をしたらおそろく即退団だろうな

でもなー、ぶっっちゃけ、もうやりたくない、腕とかアホみたいに痛いし、そろそろ

オーラが底を尽きそうでキツツイ、……けど、合格・不合格関係なくこのじじいの鼻を明かすのは死ぬほど気持ちいだろうなあ

そんな弱気なのか強気なのかわからないことを考えていたら俺があきらめたと思つたのかじじいが話しかけてきた

「……まだやるかの？」

挑発するかのようには、ニヒルに笑いながら言ってくるじじいにかなりイラつく、あれだな、上から目線つて人によつてはこんなにも力つくんだな

「当たり前だくそじじい、老い先短い老人が未来ある若者になんてことしやがる、もちつと手加減しろや」

色々と脳内麻薬がドバドバ出ているせいとおっさんに対する敬語がなくなつていた

「年寄りの方を労わるのが普通じゃろ、あと儂はまだそんな歳じゃないわい」

「言つてろ、くそじじい」

とはいえ、マジで手詰まり

そこで問題だ！ この片腕でどうやってあのじじいをぶつ飛ばすのか？

三択、一つだけ選びなさい



答え

- 1 : オサレなカイトは突如新たな能力に目覚めてオラオラ
- 2 : 突如、友情に目覚めたラウルやその他団員が駆け付け参戦してオラオラ
- 3 : このまま負ける。 現実是非情である。オラオラ

「どうした、さっさと掛かかって来んか」

じじいが指でちよいちよいと挑発してくる、いいぜえその挑発乗ってやらあな！

「選択その4！真つ正面からぶつ倒す!!」

こうなったら右拳に全オーラを集中、時間は掛かるがこれを防御なりなんなりで受けてもらって円外に少しでも出てくれることを祈ろう、かわされたり反撃されたら？そんな時は知らん、ドーにでもなあくれというやつだ。

玉碎する覚悟を決めて右拳にオーラを集中し始める

『そいつはお勧めできねえなあ？』

だがそこに人を馬鹿にするような声が待ったをかけてきた

(まさか!?)

そう、俺には一つだけ思い浮かぶ事象があった

この本来の身体の持ち主であるカイトには固有の能力があった、その名を

【<sup>クレイジー</sup>ピエロ<sup>スロット</sup>】

1から9までの数字がスロットによって表示され、その数字によって特殊な武器を使えるようになるという念能力だ

(ピンチによる能力覚醒キタアーーーーー!!)

そう思つて横を見ると俺の横にフワフワと浮いていたそれはまるでロキファミアアのエンブレムであるピエロがデフォルメ化され実体化したような存在・・・ではなく

「・・・なんだお前」

『おいおい、俺つてばかなり有名なはずなんだが、もしかして自意識過剰だったりする?』

「いや、知つてはいる、めっちゃ知つてはいるんだけど・・・名前を知らない」

『あちゃーそーいうパティーンかー、まあたしかに知名度はあるけど名前は知らないつてのはあるかもなー俺つてば黒板消しの正式名称よりも名前だけは知られてないつばいし、じゃあ覚えとけよ俺様の名前は「ジャンプパイレーツ」天下の大人気週刊少年誌のロゴマークだZe!!よろしくな御主人様?』

まさかのジャンプマークのアレだった。

十  
十  
十  
十  
十  
十  
十  
十

この片腕でどうやってあのじじいをぶっ飛ばすのか？

三択、一つだけ選びなさい

答え

1：オサレなカイトは突如新たな能力に目覚めてオラオラ

2：突如、友情に目覚めたラウルやその他団員が駆け付け参戦してオラオラ

3：このまま負ける。現実是非情である。オラオラ

選択肢1・・・になるのだろうかこの場合。

## 07：面接×物理 後編

||

## 《side：ラウル》

○7年X月平凡つす日

初めまして！自分はラウル・ノールド、今年で13歳になったつす、田舎暮らしの三男坊で日々親に兄弟にと、こき使われる毎日に嫌気が差して、男として一旗揚げるために世界の中心、ダンジョン都市オラリオに来たつす

来た当初は右も左もわからなかった所をロキに誘われ、ちようど行われる入団試験で見事合格、おかげでロキファミリアの一員になれたつす

ただ自分が思っていた以上に冒険者というのは過酷なものなんすよ

まず単純に神に恩恵を刻んでもらってもすぐにダンジョンに潜れるわけじゃなかったつす

最初の2週間とちよつとは先輩方との訓練とダンジョンに関する様々な知識をつけ

るための勉強尽くしで、生まれてこの方農業しかしてこなかった自分には頭から煙が出るかと思うほどキツイもので、ああ、思い出すと涙が・・・

中にはさつきとダンジョンに潜りたいと言う反発心を持った奴も出て来たつす、原因はアイズさん、アイズさんはLv. 2の冒険者で真正銘の第三級冒険者しかも世界最速のランクアップの世界記録保持者・・・なんすけど何と年齢がわずか8歳、しかも見た目からはとてもじゃないけど自分達よりも強い様には見えないうんすよね、でもそういう奴は大抵がアイズさんに身の程を体に叩き込まれたつす、

おかげで反発心を持っていた奴らは全員が大人しく訓練と勉強に打ち込むようになったのは怪我の功名って言うんすかね？

入団して3週間後にはようやく、初めてダンジョンに潜ることになったすけど自分は緊張で何も出来なかつたつす、他の皆はそれなりに闘えてたんすけど自分はビビッてゴ布林相手に終始逃げ回ってそのままその日のダンジョンアタックは終わつたつす

悔しかつたつす、皆がモンスターと闘えている一方で自分だけが逃げ回つた

悔しくて悔しくて、その日は与えられた自室で夜中まで泣いたつすよ、同室の団員がいなくてよかつたつす

○7年X月脱つす日



試合が終わった後に自分は驚きすぎて放心状態になっちゃう程だったつす、彼、カイトは一体何者つすか？

模擬戦形式で始めた瞬間に文字通り目にも止まらぬ速さでカイトはガレスさんに殴りかかったつす、それでもガレスさんには通じず一旦距離を取ったみたいつすけど……ありえねーつすよ、何なんすかカイトは!?

あの動きはとてもじゃないけど昨日今日に恩恵を刻んだ者の動きじゃねーつすよ、むしろ2ヶ月も訓練してきた自分所よりも明らかに上、下手したら先輩方とタメを張れるほどの速度つす

しかも先輩方でも受ければ気絶必至のガレスさんの蹴りを受けて起き上がるだけじゃなく、そこからさらに反撃をしてきて、あのLv. 5のガレスさんに傷を負わせたつす

試合を遠巻きに見ていた先輩方も顔に驚愕の表情を貼り付けて固まってたつす

ああ、せつかく後輩ができたと思つたんすけど、カイトには先輩面できそうにないつす

でも先輩としての意地もあるんで負けないように頑張るつす!

||

《side：ガレス》

「なんじゃあ・・・あれは？」

カイトとの模擬戦は最初から驚きの連続じゃった、最初の一撃は余裕そうに見せたが危うくもらいかけた、その後の追撃も素晴らしい物じゃった、全てが的確に人体の急所を狙ってきおった、とてもではないが先日恩恵を受けた者の動きではない

続く攻撃には思わず反撃してしまっただが、かなり手加減したとはいえLv. 2でも受ければ気絶するであろう儂の蹴りを咄嗟に防御し立ち上がりおった！

さすがに無傷とはいかなかったようじゃがそれでも驚くべき反射神経と防御力じゃ、それにこの状況で儂に生意気な言葉を言い返す度胸もある



じゃが、これは今日一番の驚きじゃ、カイトの横にわけのわからん下手なおっさんの絵？ の様な小さい何かが浮いておった

『ヒイヒイヒイ……ハアア……!! それじゃいくぜえええええ？ 良い目が出るよお!!』

しかも喋っておるし

不思議な物体の口にあたりであろう部分から何かスライドして出てきたと思ったからカジノにあるスロットの様に回り始め、数字の3が止まった、一体何の意味があるのだ、いやそもそもあれは何なのだ

困惑するこちらを見て不敵な笑みを浮かべるカイトの姿が不気味に見えた

「……おい、じじい覚悟しろよ、とびきりの物を喰らわせてやる」

カイトが体の正面に手を合わせるとその手の間に何か黒い何かが現れた、その禍々しさは筆舌に尽くしがたいほどだ

それを手にしつつ、こちらに今までで一番の速度で突っ込んでくる

「うおおおおおおおおお!!」

「むう!!」

(まさか伝説に聞く魔法、その中でもさらに異質と呼ばれる闇属性の魔法か!?)

だとすれば、あれは闇属性唯一の魔法!!

「『暗黒物質』<sup>ダークマター</sup>を無から生み出したというのか!？」

本能がアレに触れるのは不味いと警鐘をならす、直感に従い回避を選択、儂の顔面に向かつて放たれるそれを最小限の動きで避ける、本来であれば距離を取ることで難なく避けられるが今はルール上この円の中から出ることが出来ない、そのせいで避けられる範囲が狭められているが、これでも儂は現役の冒険者、それくらいの芸当は朝飯前のはずじやった

(っ避けられん!?)

だがカイトから放たれた黒い塊は追尾機能でも付いているかのように避けたはずの儂の顔に向かつて追尾して来た

(っ・・・やむを得んか)

左腕を犠牲にする覚悟で『暗黒物質』<sup>ダークマター</sup>を腕で振り払う

『パン』という音と共に『暗黒物質』<sup>ダークマター</sup>が粉々に砕け散った、だが予想していたようなダメージは何もなく拍子抜けしてしまう

(何もないじゃと?)

「何じやったんじゃこれは・・・」

儂が黒い何かに気を取られている間に背後へと回ったカイトが裏拳を放ってくるが軽く腕で止める

「暗黒物質じゃねえ、卵焼きだよ」

卵焼き？何を言ってるんじゃない？

カイトがそう言うと同時に儂に、向かい風が吹く、カイトが握っていた拳を開くとそこには黒い塊の残滓が残っていた、それは風のせいで儂の右目に向かって飛び散り、そのかけらが目に入った

「これのどこが卵やぐあああああああ!?目があああああ目が焼けるううううううう!!?」

まるで眼球が焼けるかのような激痛に襲われる

「見たか、これが卵焼きの実力だ!」

マジで何を言ってるんじゃない?いつは!?

こんな卵焼きがあるかあ!!

「隙ありいいいいいい!!」

儂が激痛にのた打ち回っているのを好機と見たのか再びカイトが飛び掛ってきた

「ぬおおおおおおお!!」

「おべえし!」

あまりの激痛に手加減を忘れて振り回した腕がカイトに命中した、

「しもうた!」

本気ではないとはいえ手加減抜ききのLv. 5の豪腕をその身に受けたカイトは先ほどの倍の距離を水平にすつ飛んでいき、庭の木にぶち抜いて壁に激突することによってよくその身を止めた

「まずい、やりすぎた！」

「ラウル！ 急いで回復薬ポーションを持ってこいつ、とびきり高い奴じゃ！ なければ農名義エリクサーで万能薬でもかまわん!!」

「っ!? は、はいっす．．．って．．．嘘だろ!？」

ラウルに言いつけてから急いで吹っ飛んだカイトの元に駆け付けようとしたが、信じられぬものを見たような顔をしたラウルがカイトが吹っ飛んだ方向を見て呆けていた

農とカイトを遠巻きに見学していた他の団員も同じ方向を見て呆けておる

まさかと思ひ、農もラウルや他の団員の見ている方向に目を向ける

「．．．なんと」

まるで体中が錆び付いたかのように、ゆっくりとだが確実に立ち上がりつつある姿があった、

十秒以上かかっただろうか、本物の戦闘なら致命的な隙だが、Lv. 1がLv. 5の手加減無しの攻撃をともに受けた場合は本来なら良くて危篤状態重傷必至、最悪という可能性などなく、普通に死ぬ

だというのにこいつは死ぬどころか立ち上がった

L v. 5の豪腕を受けたにも関わらず成り立てのL v. 1の冒険者は立ち上がった  
いた

おそらく防御に回したのであろう両腕は紫に腫れ上がり、もはやぶら下がっているだけの様にダラリと垂れている

肋骨か内臓もやられたのか口からは血を吐いたような跡が今もアゴから血の雫を落としていく

その姿はまさに満身創痍

だがその目から放たれる威圧感をして一体誰がこの姿に満身創痍等という戯れ言を彼に被すことが出来るというのか

儂の方を見たカイトはまるで不気味な半月状の口で笑いながら言葉を搾り出してきた、その声は喉に血でも詰まったのか酷く掠れている、L v. 5の聴力がそれを拾い不思議と良く儂の耳に通った

「……え、円……内……から……出た……な……」

「!?!」

気付けば儂は決められた円内から出ていた、今から駆け付ける所だったのでカイトを

助けに行こうとして出たものではない

「……あ……まあ……だ……やるか……い？」

いくら目が死んでいなくともその身に刻まれた傷は本物である、だということにこの言葉だ

「……………くつくつくつくつくつくつく」

「……………しっしっしっしっしっしっしっしっし」

どちらかが笑いだし釣られるようにもう片方も笑い出す

「ガツハハハハハハハハ!!イヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツ!!」

ダメだ笑いが止まらん、こんな楽しい馬鹿者は久しぶりじゃ。気に入った!気に入ったぞ!!

此奴は儂が育ててやろう、いや儂が育ててみせる!

おっとその前にそのための一区切りの宣言をしてやらねば

「儂の負けじゃあつ!!」

儂がそう言うところの馬鹿は文字通り糸が切れたかのように顔面からぶつ倒れおった、元々限界を超えたダメージを受けていつ倒れてもおかしくないのを、精神力だけで支えて立っておったのじゃろう、くつくつく、なんちゅー意地っ張りじゃ、アイズ以上じゃ

の、これは

い  
ほれ、ラウル何をボサツとしとるんじや、さつさと回復薬か万能薬でももってこんな

おつとそうじやった、リヴェリアに呼集されとつたのをすっかり忘れておつた

おそらく呼集内容は間違いなく此奴の事じや、何か勝手に決められる前に儂が割り込まねばせつかくの此奴の教育係を別の誰かに取られかねん、

そこからはラウルの持つてきた回復薬を全てカイトに使わせて治療を行い、儂は包帯を巻く程度の軽い治療だけですませ急いで招集された場所まで足早に向かつていった

あれ程の激痛だったはずの右目が時間が経つごとに痛みも引き、視力も戻ってきた

本当にアレは一体何だったのか、断じて卵焼きではないということだけは確信を持つていえるのだが・・・本当に卵焼き等と言うのなら今度から卵焼きが食えなくなりそうじや

まあええか、今度改めてカイトに聞くとしよう

しかしまいった、完つ全に遅刻じやな、リヴェリアとフィンに小言を言われそうじや

《side out : ガレス》

||

目が覚めたら激痛が急に襲ってきた、ということもなく快適な目覚めだった場所は先程と変わらず訓練所兼庭の様な場所

どうやらあの後、邪魔にならないように隅っこに寝かされていたらしいな

起きてから自分の現状を把握し始めて、体のどこからも痛みがないことに気付く

あれ、俺ってばかなりの重傷だったよね？

腕とか痛みがズンガズンガだったし呼吸はまともにもできないし血が噴水みたいに口からあふれるしで結構ヤバかったはずなんだが、今の俺の体には文字通り傷一つ付いていない、服はボロボロなのにその下にある皮膚だけが妙にツヤツヤして綺麗な状態に違和感を覚える

自分の状態を不思議に思っていると先程審判をしてくれていたラウルという少年が声を掛けてきた

「お、早いすつねもう起きたっすか、どこか体に異常とか違和感を感じたりしてないっす



か？」

「いや、逆にどこにも異常がないことに違和感を感じるんだが、どれくらい寝てたんだ？  
いや、その前に俺って模擬試合でおっさんにちやんと勝ったんだよな？　実は夢でし  
たー、とかじゃないよな？」

実は最初の一撃の後にカウンターでノックダウン、そこから先は

———という夢をみたのさ、良い夢見れたかよ？

とかだったら悪夢だぞ。

「安心するつすよ、カイトはちゃんとガレスさんに勝ったすよ、怪我とかは回復薬ポーションですぐ  
に治したつす、治した後カイトは2時間くらい寝てたんすよ」

ラウルの話聞いてとりあえず夢ではなかったことに安堵する

それにしても、すげーな回復薬ポーションつて、あんだけの傷がすぐに回復すんのか、現代医学  
もビックリだ、さすがファンタジー！

村ではお目に掛かることすらなかった初めての回復薬の効果に多少浮かれていたが、  
今のラウルの台詞におかしな単語が混じっていたことに気づき頭に電撃が走った

寝ていた時間ではない、俺と試合をしたおっさんの名前に関してだ

これが聞いたこともない名なら良かったのだが、ガレスというのはロキファミリアに  
おいて1人しかいない・・・はずだ

もしかしたら俺が知らないだけで同じ名前の者が居るだけなのかもしれないので一応ラウルに聞いてみた

「なあ、ラウル」

「どうしたんすか？」

「ガレスつてもしかしてガレス・ランドロック？」

「そうっすよ」

「重<sup>エルガラム</sup>傑の？」

「し、知らないで試合してたんすか・・・」

スンマセン

あまりの事実に頭痛がしてきて頭を抱える

「普通、Lv. 5が模擬試合の相手とか思わないだろ・・・」

Lv. 5とかガチで世界中を見回しても両手の指だけで数えられる位の第一級冒険者じゃねーか

「まあ、名乗らなかつたガレスさんもガレスさんっすけど、ここに入るのに幹部の顔も知らないカイトもカイトっすよ？」

返す言葉もないっすわ

「まあいいや、それで俺つてばこれからどうすりやいいだ、このままここでキャンプでも

すりやいいのか？」

「ホームの庭で一人キャンプって悲しすぎるっすよ・・・」

うん、自分で言ってるで悲しくなってくる

「まあ、冗談はここまでにしてマジでどうすりやいいか聞いてたりしないか？」

「一応、『目が覚め次第、カイトの容態が大丈夫そうなら団長室で軽い面接だ』って、さつきガレスさんが伝えにきたけど・・・大丈夫そうっすね」

俺の様子を見て安堵したように言っているが、無理

「いや、無理、できれば三日後とかにして欲しい」

「あれ、やっぱりまだどこかがすごく痛むとかっすか？」

違う、そうじゃない、俺の想像通りなら精神が持たん、発狂するぞ

「いいからウル」

俺はできるだけ声を落として呟くように声を吐き出す

「な、何すか？」

「俺はな、おっさんに軽い模擬戦って言われてこうなったんだ・・・つまり面接するのはアレだろ？何かの隠語で実際には精神的な拷問とか尋問とかが待ってるってことだろ？」

模擬戦でコレだ、きつと精神と肉体の限界に面会とかそんな感じではないだろうか

「いやいやいやいや！あそこまで激しい試合は自分の入団試験の時でもなかったっすよー！」

ナヌ!?

「え？じゃあ何であのおっさんあそこまで俺のことボツコボコにしたの、OKもらうまで死にものぐるいだったんだが」

「それはわかんないっすけど、少なくとも団長はそんなことするような人じゃないっすよ、それに元々ガレスさんだつて普段の訓練はそりやあもう厳しいっすけどここまで怪我を負わせるほどのことはしたことはないっす」

「じゃあ、何で俺だけスタボロにされたんだよ」

「さあ？、案外気に入られてとかじゃないっすか？」

このファミリアは気に入った奴を半殺しにするのか、こえーよ

それにしても面接かー、しかも団長の部屋、ラウルの発言からも間違いなく面接相手はこのファミリアのトップ

「今度は『勇者』<sup>プレイバ</sup>フィン・デイムナ・・・か。」

確かに噂では相当な人格者であると聞いているが、はてさて

「あ、面接は幹部全員とロキの前で行うらしいっす」

「・・・それってラウルも入団試験のときに全員と面接したのか？」

「そういや、自分のときはロキとだけだったすね、全員暇なんすかね？」

珍しいなー、とかラウルがお気楽に言ってるが幹部全員にファミリアの主神ががん首そろえて面接

・・・それは尋問というのではないのでしょうか？

やっぱ拷問とかが待ってそうだ

〔模擬試合〕（条件付き）

カイトVSガレス

カイトの勝利

両腕骨折 肋骨骨折 内臓中度損傷 全身重度の打撲複数

ガレス敗北

右目負傷

【ジャンプバイレイトツ  
の海賊印】

3 『お妙の卵焼き』 new!

顔面への命中補正

口内摂取の場合、即死以外の様々な状態異常をランダムで引き起こす

状態異常は毒・麻痺・発熱・腹痛・記憶障害 等多岐に渡る

口内摂取を長年続けた場合、状態異常への耐性が出来る代わりに失明まではいかない  
が視力が落ちる（某弟が眼鏡を掛けているのはこのせいだと言われている）

## 08：面接×正常

||

《Side：フィン》

カイトが意識を取り戻し、面接を行うのに問題がないとの報告を受けてから1時間後  
今、僕達の前に椅子に座っているカイトが居た

見た目は年相応より少し背が高く、白い雪のような髪を背中まで伸ばしている、そしてまるで鋭い目付きを隠すかのように帽子を深めに被っている。

こんな子がガレスに負傷を負わせたとは、直接本人から聞いたのではなければ信じられなかっただろう。

ただそれ程の子でも緊張はするのか椅子に座った状態で微かに震えているのがわかる

「あまり緊張せずに気を楽にしてくれてもかまわないよ」

「・・・無理っすう」

緊張を解きほぐすために気楽な感じを装って声を掛けるが帰ってきたのは拒否の声だった

「フィン、無茶言うたるなや、うちに加えてここの幹部が勢ぞろいなんやで？そりや緊張の一つもするんやろ」

確かにこの状況で緊張するなという方が無茶な話かと、そう思っているとロキの言葉に対しても否定の言葉が出てきた

「・・・正確には違う・・・います」

「「「「？」」」」

「俺が緊張してるのは、この面接とは名ばかりの尋問もしくは拷問試験に気後れしてる、ます。」

・・・カイトが言っている意味がわからない、尋問？拷問試験？

何をどうすればそのような考えが出てくるのか・・・まさか何か後ろめたい事情でも抱えているのだろうか

「自分はいつ先程の軽くと言われた模擬試合で両腕と肋骨をバキバキに折られた上に全身打撲に加え内臓が破裂して血をドバドバと吐いて、生死の境をさ迷う目にあつた、だからこの面接でも同じことが起きるのではないかと戦々恐々としてい、ます」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」



おそらくではあるがカイトがこのような考えに至る原因のたとある人物に僕達の視線が集中する

プイと顔を背けるガレス

・・・ガレスそれは君がやってもかわいくない

君がそれで誤魔化すのは無理があるよ

その証拠にカイトの話の聞いたリヴェリアの目付きが鋭くなってるしね

「ガレス、確かカイトはお前と軽く試合をしてその時にお前に負傷を負わせるためにも自らも負傷してすぐには動けない程度、と聞いていたが？」

咎めるような視線にガレスが小さくなる

そして僕からしか見えなかったが、二人のやり取りを見たカイトが突然ニヤリと笑った

「あー・・・その、なんじゃ、ちーつとばっかしやりすぎたのは認めるがー」

「あいたたた、いたーいめつさいたいー！Lv. 5の英雄さんがLv. 1になりたての新人に容赦なく攻撃を加えた所がいたたたたたたた！」

「おい！傷は万能薬で治つとるじゃろうが！・・・あ」

どうやら、カイトは僕達の会話から先の試合の結果はガレスのやり過ぎと察したのでろう、自分を殺しかけたガレスに意趣返しのもりか明らかにわざとだとわかる様に

煽ってきた

それに対してガレスも要らぬ失言で自らの立場を悪くしてしまう、万能薬は本来なら気軽に使用できない超が付くような回復薬だ、その効果は死んでしまうような傷も瞬く間に完治させてしまう程だ、そして今回の模擬戦でガレスはカイトに万能薬を使ったということはそれほど重傷を負わせてしまったということだ

「ガレス、万能薬を使わざる得ない程の状況にした君の負けだ」

「うぐう!?!」

それを見たカイトがピューピューピューと口笛を吹いてすつきりしたかのように余所見をしていた

いや、一応この場は君の面接の場だったはずなんだけどね？

最初のは演技だったのか今は随分と余裕に見える、と思っていたらここが面接の場であることを思い出したのか真面目な表情に戻った

・・・なんとというか、読めない子、というより喰えない子といった感じだ。

これが僕、フィン・ディムナのカイトに持った第一印象だった

《side out：フィン》

||

《side：リヴエリア》

まったく、この馬鹿は何を考えているのだ

入団したばかりの団員にファミリアの幹部が瀕死の重傷を負わせたなど、都市の新聞記者達の格好的になるネタだぞ

ただでさえ私たちのファミリアは都市の注目を集めているというのにその自覚があるのかと後でしつかりと問い詰めてやろう

入団した翌日、しかも同じ団員の幹部に殺されかければ怯えるのも無理はないかわいそうだとは思うがとりあえず今はカイトの面接が優先だ

ガレスの話をとりあえず置き、フィンがカイトへといくつか質問を重ねていく  
出身や年齢と言った基本的なことから順番に聞いていく

ふむふむ、オラリオから北の山間部にある名前もないような村が出身、年齢は12歳、両親は幼い頃に他界しそれ以後は祖父がカイトと弟の面倒を見ていたとの話だ

壁に寄りかかるようにしてカイトを見ているロキの反応から嘘は含まれていないようだ

これでカイトがどこかのファミリアや国のスパイである可能性はなくなったな、懸念が一つ消えホツとする

「なるほど、じゃあ最後の質問だ、君は何のために冒険者になりたいんだい？」

これは新入りの団員に必ず最後に聞く質問だ、大抵の者は名誉や生活のためと答えるが……

「将来を約束した相手と一緒にするため」

カイトからは少々意外な答えが返ってきた、将来を約束……つまり婚約者？

まだ12歳の子供が言うにはませていると言われてもしかたがない台詞だ

「なるほど、君はその年で既に相手が居るのか……でもそのためだったら別に冒険者にならなくてもいいんじゃないかな、むしろ冒険者というのはいつ命を落とすか分からない、本当に相手と一緒にになる未来を考えるのならもつと安全な職業に就くことを僕はお勧めするよ？」

フィンの言うことは正しい、冒険者はどれだけ安全策を事前に練ろうともダンジョンの気まぐれで意図もたやすく命を落とす

そうなってしまえば残された者は悲しみに暮れるしかなくなる

この子は冒険者になる道しか選べなかったアイズとは事情が違う、他の選択肢もあつたはずだが

「・・・相手は普通の身分じゃないんだ、ただの平民の俺が相手と一緒にするには世界に轟くくらいの名誉と財力がいる」

なるほど相手は貴族かどこかの大商人の娘といった所だろうか・・・

「失礼を承知で聞かせてもらいたい、それは本当に相手も君の事を想っているのかのかわかる？」

フィンがこのような質問をするのにも理由がある、貴族となると一時の気まぐれや遊びで平民をたぶらかすことも多いことを思つての質問だ、大抵の場合は男の貴族がそのような下種なことをすることが多いが、逆のパターンがないわけではない

「そういう懸念はもつともだけどそういういた心配はない、相手は家出同然で家を飛び出たつて言つてたし、そもそも向こうから『別に冒険者にならなくても私が養う』とか言つてきたし」

なんとも豪気な相手だ、だがそれなら尚更冒険者になる理由が分からなくなつてきた相手は家を出ているのですぐにでも一緒になるのに障害は何もないように感じるのだが・・・

そう思つてみるとカイトがこちらの疑問に答えるかのように理由を述べてきた

「俺に両親は居ない、でもあいつの両親は健在だ……祖父が居たおかげで俺と弟はこれまで生きてこれた、もしあいつの両親の許可なく一緒になれて子供ができたとしてもその子にとっての祖父母に認められないなんてことは嫌なんだ、俺はあいつの両親に認められて、その上で幸せな家庭を築きたい」

なんとまあ、この年齢でこれ程までに将来のことを見据えているとは

「ここまできちんとして将来のことを考えた上でならばこの子は大丈夫だな、どこかの戦闘狂の娘にも見習って欲しいくらいだ」

「とりあえず、冒険者を目指した理由はこんな感じなんだけど駄目だろうか？」

「いや、予想以上にしつかりとした目標があつて関心したくらいだよ」

「っ……それじゃあ!!」

「うん、文句なしの合格だ、これからよろしくねカイト」

うむ、この子は私が予想していたよりもしつかりしているようだ、これからの成長が楽しみだな

「ふむ、とりあえず面接はこれで終わりかの？」

「ああ、一応これで全部になるね」

「ならばワシからカイトに質問がある、お主が模擬戦で見せたあれは何じゃ、お主のステータスの紙を見たがあのような能力があるとは書いておらんかったぞ」



## 《Side：ロキ》

うーむ、フィンが適時質問していく内容には嘘偽りがなかったんやけど、どーもまだ何か話してないことがあるような感じがする

まあ、自分の子供に隠し事全部話せなんていう無理矢理な感じは好かんし、隠し事の1つや2つくらい誰にでもあるやろうからええか

そんな風に思いつつこれからのことにも考えていたら、カイトがステイタスを更新して欲しい言うてきた、よお考えんでもLv. 1がLv. 5との模擬戦で、しかもLv. 5のガレスに負傷させる程の戦闘となればダンジョンの上層なんかで得られる経験値なんかよりはるかに多いはずやんな

そう思つてカイトのステイタスを更新してみたら——  
ナニコレ

いつもの口調が変わるくらいおかしいことがカイトに起きとつた

~~~~~


カイト・クラネル Lv. 1

力：I 0 ⇒ H 102

耐久：I 0 ⇒ H 180

器用：I 0 ⇒ I 80

俊敏：I 0 ⇒ I 98

魔力：I 0 ⇒ H 110

アビリティ

【 ー 】

魔法

【 ー 】

スキル

【念能力】

・ 魔力を身体能力へ能動的に上乗せできる、熟練度次第で効果は倍増する。

【ジャンプバイレイトツ】※念能力のチェインスキル

なんやねんチェインスキルって!?

っていうか三つ目のこのスキルヤバすぎるで!?

まじかこくsd sfl; あどいあsd fjk : あsd p f k

間。

・・・ハアハアハア、うちがここまで混乱するなんて中々ないで?

とりあえず、うちの見たステイタスの写しを他の三人にも見せるとガレスは大笑い、リヴェリアは驚愕、フィンに至ってはいつも被つとる仮面が剥がれて昔みたいな好戦的な笑みを見せとる

三者三様の反応を見てようやく落ちついてきたわ、あれやな、自分以上の反応を見ると逆に落ち着くな

それと、ようやく冷静になってきたおかげで腑に落ちない点がいくつか浮かび上がってきた

まず、一つ目がカイトがスキル「念能力」を使ってガレスとやり合えたというのがそもそもおかしい、スキルの内容には確かに習熟度によって効率が上がるとは書いてはあ
る、でもカイトがこのスキルを発現させたのは昨日のはずや、それなのにスキルを使い
こなしてガレスとやり合えたということ

二つ目はガレスの話の内容から推測するにカイトがステイタスの更新無しで新たな
スキルを使用できたと言うことや、基本的にスキルや魔法はうちら神々がステイタスの
更新をして子供達の中にある実現できる可能性を引つ張り上げることによって発動できよ
うになる、なのにカイトはそれをすつ飛ばして新たなスキルを使用した、はつきし言っ
て前代未聞、うちら神々の地上での存在意義が疑われるで

そして三つ目がこの「英雄達の星の下」というスキルや、スキルちゅーのは魔法と違
うて、本人の心の奥底にある願望や、自身でも知らない本質が現われる、新たに現れた
二つ目の「ジャンプバイレイト」はガレスと闘つてるときに何かを犠牲にしてでもどうし
ても勝ちたいとも思つたんやろ、たしかに強力やけどその分の失敗したときのダメ
リットとしてステイタスを最低でも100も犠牲にせなんあかん、このスキルだけでも
十分凶悪なのに三つ目のこのスキルは更にヤバイ、「英雄達の星の下」というスキル、こ
れの名は別名「根源の渦」「宇宙の記録層」「アカシックレコード」と呼ばれる神の力す
ら超える存在のことを指す、この存在を知るのは神だけの筈や、もしかしたらどこぞの

09：面接×異常

ロキにステイタスを更新してもらったら予想通りに新たなスキルがステイタス紙に記載されていた

だが、やはり自分の知るカイトの本来の能力である「クレイジースロット気狂いピエロ」とはかなり違う能力になっていた

自分の元ネタであるカイトの「クレイジースロット気狂いピエロ」は1〜9までしか数字がなく、しかも武器のみを具現化させるものだったはずだ、なのに俺のは武器を具現するだけでなくスキル、おそらく何かの能力まで使えるという、上位互換みたいな能力になっていた、ただしその分のデメリットもキツツイ、今回500以上ステイタスが上昇しているが、もし6以上の数字をキャンセルしたらマイナスになる、そしてこれは本能のような直感だがおそらく0を割ってマイナスになった場合・・・死ぬ

ヤバいなこの能力、発現させても扱いきれないような能力がきたらキャンセルするしかない、そんなことが続けば破産してリアルゲームオーバーだ、今後この能力は気軽に使わないようにしましょう

そして完全に予想外の能力が三つ目の「アーリーカーシャ英雄達の星の下」というスキルだ、おそらく

だが【^{クレイジー}スロット】が亜種みたいな異常変化を起こして【^{ジャンプ}パイレーツ】なものになったのは間違いなくこのスキルのせいだ、そうでなければ何が悲しくてあんなかわいそうな卵を無から生成せにやならんのだ

たしかアーカーシャって世界の意思とかそんな感じじゃなかったけ？

昔何かの漫画かアニメでちらりとそんな単語が出てきたような気がする

まあ細げえことはどうでもいいや

とりあえず【^{ジャンプ}パイレーツ】の海賊印】はよつほどステイタスに余裕があつてピンチにならない限りは使用しない方向で頑張つていこう

そう考えると今回の模擬戦でいきなり使用したのはかなり危なかったかもしれない、もし扱いきれない能力や武器が出てきたら自滅して死んでいた可能性もある、むしろ数字も少なく扱いやすい・・・もの？が出てきてラッキーだったかもしれない・・・まさかあんなかわいそうな物体に感謝する日がこようとは。

色々と考え事をしていてロキが質問をしてきた、面接が終わった後の質問なので緊張らずにあっけら感と答えられるので楽でいいな

「カイトはガレスとやり合った際に、スキルを使用したんは間違いないか？」

当然だ、むしろ念能力無しでこの化け物みたいなおっさんとどうやってやり合えというのか、というか全開で向かって返り討ちに遭いましたか何か？

「いや、そもそもそれがおかしいねん、何で昨日発現したばかりのスキルを使用できるだけじゃなくて使いこなしとんねん」

は？

いや確かに「ジャンプジャンプの海賊印パイレーツ」や「英雄達の星の下アーリー」は発現したばかりだけど念能力は最近じゃなくて6年前に自力で目覚めてましたけど何か？

村でのことなどを掻い摘まんで説明する

「はあ!?!スキルを自力で発現させたやて!?!」

ロキだけでなく幹部3人の視線が厳しいものに変わる

・・・え、なんかマズった？

「それ、ホンマか?」

誓って本当なんだけど

「・・・マジみたいやな」

信じるの早すぎないか？

あ、そうか人は神に嘘がつけないんだっけか、最強の嘘発見器だな

そう思っているとあまり発言のなかった副団長のリヴェリアが信じられないといった風にしてロキに聞いたです

「ロキよ、そんなことがありえるのか? 魔法種族が弱くとも恩恵なしで魔法を使用で

きるのは割と有名な話だが、ヒューマンが自力でスキルに目覚めたなどとエルフの国の書物ですら見たことも聞いたこともないぞ」

「・・・かなり前の話になるけど前例は確かにあるで、ホンツツトにかなり昔の話になるんやけどな」

なんだ前例がいるんじゃない、でもこの3人が知らない位って事はかなり珍しいんだろ
うな

「ハア~~~~、とりあえずカイトは先に部屋に行つて・・・つてそーいやカイトの部屋どこになつたんやつけ」

「カイトならラウルと同室にしといたぞ、あやつは儂との模擬戦の審判役もやつとたから無用な諍いもないと思つてな」

ああ、あの地味な少年か、少ししか言葉を交わしてないけど善良であるとわかる少年だった、歳の離れたおっさんとかより100倍ましだ。

「ラウルならまだ庭で訓練中のはずじゃから部屋に案内してもらえ、ここから庭までの道はわかるか？」

それはさすがにわかる・・・と思う。

「じゃあ、皆へのカイトのお披露目は夕食のときに僕の方から行うとしよう、食堂へはラウルと一緒に来ると良い、初めての人は高確率で迷っちゃうからね」

りよーかいです団長閣下

「フィンでいいよ」

了解フィン

「変な語尾みたいになってるぞ、ついでに私もリヴェリアでかまわない、これからよろしくなカイト」

了解、リヴェリア

「ちなみに儂は——」

おっさんはおっさんでよろしく

「おい、儂だけ扱いがおかしくないか!？」

今更、呼び方変えるのも変だからいいじゃん

あ、そうだ夕食時に紹介されるときに関してお願いがあるんだけどいいかな？

||

《side:ガレス》

カイトが出て行った後、それぞれが色々な意味を含んだため息をつく

「・・・それにしても、自分のファミリーネームは秘密にして欲しいとは珍しい頼みをする奴じゃな」

カイトが部屋を退室する前に妙なことを頼んできた、普通はそんなことはせん、むしろ家族がおるならその名声が届くことを誇りにするものだ

「今のオラリオの現状を考えれば、闇派閥の手が家族に届く可能性を少しでも減らすためだろう」

むう、なるほどの、確かに奴らなら団員の家族を人質にとつて何かをさせるくらいのこととはやりかねんな

「それにしても、去年はアイズ、今年はカイトか、もしかしたら来年はもつとすごい新人が入ってくるかもしれないね」

「アイズだけでも手を焼かされているのだぞ？ これ以上は勘弁してくれ」

最近は大分マシになったとはいえ、まだまだやんちゃなアイズに手を焼いているリヴェリエは疲労をにじませる様な顔でぼやく

「大変じゃのう、ママ？」

基本的にアイズの面倒はリヴェリアが主に見ておる、儂も偶に面倒は見るが精々ダンジョンでの御守くらいじゃ

ておらん、カイトが自力でスキルに目覚めたというのはワシも聞いたときは信じられなかったがロキ自身が前例があると言うたはずじゃ、前例があると言ったのはお主じやろうに何をそんなに興奮しておるんじや？

「ガレス、確かにロキは前例があると言ったがそれは随分前の話だと言っていたはずだ、寿命に関しては超越存在のこいつがそうとう昔と言っていたのだぞ？ 少なくともここ数百年のエルフや一般の書物でそんな記述は見たことがない」

それを聞いたロキがまた笑い出す

「リヴェリア大丈夫かーボケるにはまだ早いぞ？ ここにいる全員がその前例を知ってるはずやでえ」

ケツケツケと、さも面白おかしそうに笑うロキ

・・・どうということじゃワシも知つとるじやと？

フィンもリヴェリアも思い当たる節が無いのか眉を潜めている

「灯台元暗しつて奴やなー、ヒントは『子供の頃』や！」

子供の頃？

わからん、考えるのは苦手じゃ・・・こういうのはフィンやリヴェリアにお任せじやな

「子供・・・前例・・・遊び・・・読み・・・ん？」

む、フインは気付いたのか？

「ロキ、質問だけどその前例ってもしかして千年以上前のことだったりするかい？」

千年以上前・・・暗黒期の話じゃと？そんな馬鹿な!？」

「なんやもう気付いたんかー、早すぎておもしろくないで、そっちの2人はギブアップかい？」

「・・・・・・ああ、お手上げだ」

儂は元からあまり考えとらんかったぞ

「・・・・・・」

「アホはほつといて、とりあえずカイトがスキルを自力で発現させたことの何が問題なのか聞かせてくれ」

誰がアホじゃ!!

「ままま、ガレスも落ち着きいな、・・・つまりやな、今まで自力でスキルに目覚めた存在のうちゆーのはスバリ【英雄】や!! みーんながよお知つとつて、子供が大好きな御伽話、そしてうちら神々が認めた実在の英雄達の話『ダンジョン・オラトリア』!! そこに出てくる英雄達のほぼ全てがうちらが降りてくる前に自力で何らかの力に目覚めてる」

なんと、ではカイトはそんな者達と同じだと？

「間違いないでえ、うちの勘もピンピンに訴えまくつとる、それにそう考えるとカイトがうちのステイタスの更新無しで新たなスキルを使用した理由もわかるんよ」

なるほど、元から自力で使えたスキルの派生の能力なら更新無しで使えるのも納得できるな

「つまり、カイトは英雄足り得る存在である・・・ということか」

「これからでどうなるかはわからんけど、うちの育て方次第でとびきりの第一級になるで、間違いない」

ふむ、聞けば聞くほど育て甲斐があるのう

「ガレスに教育係を譲ったのはもったいなかったかな？」

「なに、別に教育係だからといって四六時中尽きつきりではないのだ、私達からも何かしら教えてやればいい、アイズと同じ要領でいけば問題ないだろう」

「まあ、当分はそんな感じでいこか、あと勿論このことはここに居るメンバー以外言無用や、カイトにもスキルを自力で使えるようになったこともしやべらんように上手く説明したつてや」

むう、めんどくさいがロキの様子からしても間違いないカイトは神々の格好の玩具にしか見えぬであろうな

食後にも事情を説明してスキルのことを口外せぬように伝えておくか

冒険者開始！

10：歓迎×一步

「まじでガレスさんに勝ったのか、すげーなお前!?!」

「マジもマジっすよ、審判をしてた自分が証人っす」

「こんなちっこいのにねえ？」

「アタシも見てたけどすごかったよ〜？」

「試合に勝って勝負に負けたといった感じだったかな」

「お前さん酒は飲めるか？」

「おい、この子にはまだ早い」

「俺とも闘ろうぜ!!」

「いや俺が先だ!」

「いいや、俺だね!」

「どぞどぞどぞ」

「・・・あれ〜？」

飯を食いつつファミリアの先輩方にもみくちやにされる俺

や、やかましい、飯を食わせて、おいやめる酒をコップにつぐな、俺は未成年だぞ
!?

ガレスのおっさんとは別のドワーフが酒を並々と注ぎ、それをエルフが止めようとするよりも先に酒が注がれ、されるがままに先輩に肩を組まされ、コントに巻き込まれる
うう、歓迎されないよりはいいが歓迎されすぎも困るものとは知らなかった・・・

現在は夕食時、ラウルに部屋を案内してもらい荷物整理をしている間に飯の時間になったのでラウルと共に食堂へ

食事前に団長であるフィンに紹介されたのはいいが、その際に俺がおっさんに試合で勝ったということ面白おかしく伝えた

そのせいでこの惨状である。

だが、俺がこの惨状に辟易していると先輩が気になることを言ってきた

「それにしても重傷を負うくらいのも模擬戦をしたなら『高位の経験値』エクセルリアが結構貯まったんじゃないか？」

あまり聞きなれない単語が耳に入った、アスファイからも聞いたことがない言葉だ

「高位の経験値?・・・普通の経験値とはちがうのか?」

俺がそう疑問の声を出すと、先輩はヤツベとでもいうかの様な表情になった、周りもあのバカ、とでも言うかのような様な雰囲気になっている

え、何この空気、俺にか変な質問でもしたのか?

「高位の経験値とはランクアップに必要な、通常とは異なる経験値のことだ」

俺の疑問に対する声が後ろから返ってきた

「リヴェリア様!」

周りのエルフが跪こうと席を立とうとするがそれをリヴェリアが手で制す

「楽にしている、別にもう教えてもかまわんさ、隠すことでアイズの様な二の舞はゴメンなのでな」

「それは・・・ですが、大丈夫でしょうか」

「ああ、この子はそこまで聞き分けのない奴ではない・・・おそらくだがな、少し隣を失礼するぞ」

「あ、じゃ、じゃあ俺がどきますね!」

肩を組んでいた先輩が顔を真っ赤にして恥ずかしそうにそさくさと去って行く

先輩ウブすぎるだろ、いや確かにリヴェリアは俺から見てもとんでもなく美人ではあるけどさ

だが、アスファイがいる俺にはあまり気にならない・・・フツこれが彼女持ちの余裕という奴か

・・・それにしてもアイズの二の舞ってのはどういうことだ？

「アイズに何かあつたのか？」

「ああ、実は少し前にあの子がやらかしてな・・・」

リヴェリアからの説明によると冒険者が強くなる手っ取り早い方法はランクアップすることなのだが、それには通常の経験値とは異なる、自分よりも強いモンスターや人を打倒することでしか手に入らない特別な経験値が必要になるらしい、それを偉業といい、それを数多く、もしくは質の高い偉業を達成することでランクアップ可能になるらしい

それをアイズには隠してこの一年間、冒険者としての経験を積ませていたらしいが、中々上がらないレベルにアイズは大分イライラしていたらしい、どこから聞き出したランクアップの条件を知って、さらにその条件を隠していたフィン達に激怒、危険なダンジョンアタックで死にかける目にあつたらしい

なるほどなー、ランクアップって大変なんだな、きつとアスファイも実は相当な苦勞を・・・いや、ちよつと待て

「え、じゃあもしかしてランクアップって今日の模擬戦みたいなことを何回もしなきゃいけないってことか!？」

命がいくつあっても足らんわそんなの!

「安心しろ、通常は十分に経験値を積んだ後に複数人のパーティを組んで、強者を打倒し高位の経験値を貯めるものなのだ、もちろんランクアップできなくとも通常の経験値も貯まるのでランクアップするための偉業が貯まるまでアビリティを上げつつ、それを繰り返すことでレベルを上げることになる」

それを聞いてホッとす

「よ、よかった、さすがに今日みたいなことを何回もやるのはキツイ」

「重ね重ね、あの馬鹿がすまん」

本当に申し訳なきような顔をしてこちらに言ってくる、別にリヴェリアのせいじゃないやな
かろうに、なんかこつちが悪いような気がしてくる

「いやいやいや、でもおかげで新しいスキルが生えたからどつちかというと得した感じだから!!」

「そう言ってもらえると助かる」

「そ、そういえば俺ってば明日からどうすればいいんだ?そこら辺を全く聞いていないんだけど」

何か変な空気になったので無理矢理話題を変えてみる

「うむ、さつきこちらに来たのは実はそれを伝えるためにきたのだ」

随分と話は脱線してしまったがな、と苦笑するリヴェリア

「とりあえずカイトは明日の朝食が終わったら、フィンと一緒にギルドに行つて冒険者としての登録をしてもらう、なに、簡単な書類手続きだ、一時間もかからんさ」

なるほどなるほど冒険者つてのはギルドのバックアップがあつて初めて十全に活動できる、そのためにもギルドへの冒険者としての登録は必須であるとバイト中に仕入れた情報やアスファイから聞いた話で知つてはいるのだが・・・

「わざわざ、団長のフィンが付いてくるのか？」

「ちようどギルドに用があるそうなのでそのついでだな、私もガレスも別でやることもある」

「なぐる」

「登録が終わつたら軽く二時間ほどダンジョンに潜つてみる」

「え、いいの？」

普通はダンジョンに関する知識とかを得てから潜るんじゃないの？

「ああ、フィンが一緒なら上層ではよほどのイレギュラーが起こつても問題ない、要はダンジョンのお試し体験みたいなものだな、百聞は一見にしかずという奴だ、ただし二時

間だけだ、それと帰ってきたらダンジョンに関する勉強会に参加してもらう」

あ、やっぱりそういうのあるのね

「それと明後日からは午前中はガレスや他の者との訓練、午後からは私の座学に参加してもらおう」

「あれ、ダンジョンは？」

「明日はお試しだと言っただろう、明日を除けばしばらくは探索無しで訓練と座学漬けだ」

まあ、仕方ないか安全第一だしな

「了解だ」

「……………」

納得しているとリヴェリアがこつちをじーつと見てきた

「な、なに？」

「いや……聞き分けが良すぎて本当に分かっているのか不安になってな」

「安全第一って大切じゃん」

ダンジョン探索つてのは命がけだ、焦って命を粗末に扱うわけにはいかない

俺が今、命を掛けるのはアスフィとベルとじいちゃんのためだ、そのためにも簡単に死んでなどやるものか

「最初ここに入ったばかりの者はそれが理解できず不満を言う者が多いのだ、特にアイズなんかは他の者達よりもさらにひどくてな、登録初日から——」

その後リヴェリアから日頃の愚痴をぶちまけられた

苦勞人やねこの人

愚痴を聞き終わった後は仲良くなった他の団員とも軽く談笑し、ラウルと共に部屋に戻り床について

床についてようやく体から力が抜けていくのわかった、やつぱかなり緊張していたみたいだな

真つ暗な天井を見ながらこれからのことについて思いを馳せる

色々あったけどようやくスタートラインに着けた

明日のダンジョン、そして訓練、座学、やることが一杯だがこれからの生活にワクワクが止まらない

暗闇の中で天井に向かって手を伸ばす、まだ何も見えはしない、それでもいつか夢を掴み取ってやる

そう意気込みつついつの間にか襲ってきた睡魔に身をゆだねて眠りについた。

翌朝

朝食はパン派のおれはむしやむしやとパンにかぶりついていた

さすが大派閥のファミリアは食事から違いますわ

贅沢にジャムを塗りたくれる環境、これだけでもここに入って良かったと思う

今まで朝食は具のないスープやクツソ硬い黒パンだったからな、白いパンとか徐々に見たわ

俺の前には食パン一斤と肉の山、ポテトサラダに野菜の山、そして米！

米ですよ皆さん米!!

前世が日本人の俺からすれば久しぶりの米はいくらパン派といえど見逃すわけにはいかなかったのでこれまたてんこ盛り、そして最後に大皿にスープとフードファイター並みの食事量だ

贅沢を言うならここで味噌汁が欲しいがないものは仕方がない、米があるならきつと味噌もどこかで売っているはず、俺の食事当番のときに味噌汁を振舞ってそのままこのソウルフードにしてやろう

そうやってロキファミリア和食化計画などを考えている間にも俺の腹からでかい腹

の虫の音が鳴り響いてきた

いつもはこんなには食べないのだが、なぜか今日は朝から激しくお腹の虫がハングリーと絶叫してきたのでこんな量になってしまった。

まあ原因に心当たりがあるつちやあるのだが確証がないので考えるだけ無駄だ、それよりもこの腹の虫を沈めることの方が急務である、

そして本日二度目のいただきますをして食事に集中した

ちなみに食事は団員が交代制で作るらしい、今のと同じ量を再度のおかわりにきた俺を先輩方が目を丸くして見ていたのが印象深かった

「・・・すげー食欲っすね」

俺の食事風景を見たラウルが胸焼けしそうな表情で言ってきた

「何言ってるんだ、朝食は一日の行動の基本エネルギーなんだぞ、どれだけ朝食えたかで一日の行動量が決まるんだ、それに朝食った分はいくら食べても脂肪にもなりにくいって言うしな、逆に夜に多く食べて朝が小食だと太るんだよ」

まあ今日みたいな量は例外だとは思うがな

「へー、カイトって結構博識っすね」

ラウルが感心している横で俺の話を聞いていたのか多くの女性団員がガタガタと動き出した

「おかわりお願い、夜の分まで溜め込むわ!!」「こっちもお願ひ!」「私も!」「くっ最近の腹の肉は夜のケーキが原因か」「それは当たり前でしょ」

「……………」

俺とラウルがその女性達の行動力にあきれる

「…………何で女つてのはこの手の情報には敏感なんすかね」

「モグモグ…………ンツグ、別に太ってるようには見えないのになあ」

「いつまでも綺麗でいたいからじゃないかな?」

ラウルと女性の理解できない行動ついて話していると、トレイにパンやサラダにスープにソーセージとバランスの良いメニューを載せたフィンが隣に座ってきた

「だ、団長!」

「おはようふいん」

「うん、おはよう、でもまた僕の名前が語尾みたいになってるから言葉を切つて発音してくれると嬉しいかな」

へーい、と返事をしつつ食事を再開する、しばらくお互い食事に集中していると

「・・・それにしてもすごい量だね」

呆れたような声でフィンが話しかけてきた

「それ、さつきラウルにも言われたよ」

「あはは、食べる量に反してカイトって全然太ってないからすごい違和感だよ」

「いつもはこんなに食べない、多分スキルのせい・・・かも」

今朝からの猛烈な空腹感にはそれしか心当たりが無い

「へえ、あれって使うとお腹がすくのかい？」

「んー、昔から使いすぎると体の中からゴソツと何かが持っていかれる感覚はあるけど、昨日みたいに全力で使い続けたことってないからなー、空腹の原因だとは思うけど確定はできないって感じ、また全力で使う機会があったら確定できると思うけど、当分は勘弁して欲しいなあ」

そんな風にフィンと何気ない会話をしていると隣でオロオロしていたラウルが我慢できないとでもいうように俺とフィンの会話に突っ込んできた

「っていうかカイトは何で団長と普通にため口で会話できるんすか!?! しかもカイトがスキルを使えるとか聞いてないっすよ!?!」

「あ、そーいや言っただけだったか、俺のスキルは——「ちよつと待った!」」

俺が自分のスキルを説明しようとしたら慌ててフィンが止めてきた

「カイト、君のスキルはおそらくレアスキルだ、同じ団員でもおいそれと吹聴していいものじゃない」

「ありや、そーなの？」

「レ、レアスキルツ!？」

フィン曰く何でもレアスキル持ちってのはそれだけで他派閥から個人的な勧誘だけじゃなく色々な意味で狙われるようになるらしい

特に今は閥派閥の勢力が幅を利かせているのでバレると冗談抜きで俺の身が危ないとのことだ

「あ、もしかしてギルドの登録にフィンが付いてくるのってそういう理由?」

「それももちろんあるけど、ギルドに用があるのも本当だよ、それとラウル、今聞いたことは他言無用だ、いいね?カイトもこのことは同じファミリアの団員であつてもあまり教えないように」

「は、はいっす!!」

「あいよ〜」

びしつと敬礼して返事をするラウルを横目に俺は軽く返事をしつつ食事を進める手を休めない

それから数分間は黙々と衰えない空腹感を満たすために一心不乱に食事に集中した
周りがドン引きしていたが気にせず吸引力の衰えないダイソンとなる

そのおかげもあつてあれほどの空腹感が大分満たされた

あれからおかわりに3回行って合計5回もおかわりしてしまった

「ふい、余は満足じゃ」

「ふい、この食事には満足できたかい？」

さすがのフィンもこの食事に少し引いていた

「満足も満足、大満足！これで今日も一日頑張れる!!」

「そ、そうかい、じゃあ準備が出来次第ギルドに向かおうか」

「おう!!・・・って準備？ 準備って何すんの？」

よく考えたら俺ってば丸腰なんだけど、ゴブリン程度なら素手で倒す自信はあるけど
装備ってどうすんだ

『武器は持つてるだけじゃ意味はないぞ、装備するのを忘れるな』ってのは有名な台詞だ
が、そもそも何も持ってねえよ

「二応、倉庫に君の先輩方のお古の装備が大量にある、ギルドで新人に有料で渡す装備よ
りも格段にマシなはずだからそこから一式そろえようか」

「助かるわー」

さすが大派閥！至れり尽くせりだな！！

なんでも倉庫は地下にあるらしい、ってかここ地下なんてあんのかよ……。

食堂を出てからいくつかの通路を曲がり下に続く階段に到着、螺旋階段になっているそれを降りること三階分

途中には「書庫」と書かれた部屋もあった

フィンに聞いたら団員であればいつでも使っていいらしい、ただし持ち出す場合は口キか幹部、もしくは上位団員に許可をもらわないといけないらしい、暇潰しや見聞を広めるのに役に立ちそうなので今度利用させてもらおう

そんなことを考えていたらようやく着いた

螺旋階段の終わりがそのまま倉庫の入口になっていた

フィンが鍵らしきもので扉を開けてから入ると、あるわあるわ、樽に無造作に突っ込まれた剣や槍を初めとした武器の数々、武器だけでなく木箱から溢れるくらいに積まれた防具が所狭しと並んでいた。

「じゃあ、とりあえずカイトの戦闘スタイルは近接って聞いているけどそれで間違いないかな？・・・なければ近接を中心として装備を決めていこうか」

フィンから具体的にどんな装備がいいのか聞かれたので防御よりも回避を念頭に置いた軽装備がいいと言ったらパツパツと動きやすい皮装備を見繕ってくれた、これに加え念のために軽くて最低限の急所を守ってくれるライトプレートも選んでくれたのでそれを装備することにした

「武器はどういったもの使うんだい？」

「んー．．．これと言ったこだわりはないんだけど、ん？」

俺の目に付いたのは奇妙な籠手だった、肘の先から指先までを一つとしたような一体型の防具にも見えるが、よく見ると右は指先から指の付け根まで刃物が付いていて、付けたまま素手の相手と握手でもしようなものなら相手の手をズタズタに引き裂けそうな機構になっている、一方左の方は指先だけが鋭利な爪のように尖っていて抜き手にすればそのままモンスターを貫けそうな形になっている

他にも色々武器はあるのだが妙にこの武器？に目が行く

(こういうときは勘に従ってみるか)

「．．．これでいい」

「また珍しい装備を選んだね、．．．でもカイトがいいならそれで行こうか」

その後、籠手は常時装備するのは危ないので紐で腰にぶら下げてから倉庫を後にした

「それじゃあ、さっそくギルドに向かおうか！」
「おうよ!!」

オラリオに入ってから約一ヶ月、俺はようやく冒険者としてダンジョンに潜ることに
なった

——道中

(初のダンジョンから、何も起きずに無事に終えられるといいなー)

と、あえてフラグを立ててみる(笑)

いや、大丈夫大丈夫、フラグってのはあえて立てると叶わないものって言うし。

そう、今の俺はそんな風に軽く考えていた……なんちやつて

11：登録×冒険

ロキ・ファミアアの拠点である『黄昏の館』はオラリオの北に建っている、そしてギルドの位置は北西、そのため最も早く行くには北のメインストリートと北西のメインストリートの間である第八区画を突っ切って行くのが近道になる。

「——ただし、遠征なんかで荷物が多い時は街の中心、バベルを経由してからギルドで換金を行うんだ」

「なる、確かに大荷物を引いてこの狭い道を通るのは住民の迷惑だろうな」

雑談をしつつアスフィやヘルメスホから聞いたことの無い情報を頭の中で補完していく

大派閥だからこそそのダンジョン豆知識を道中でフィンから聞くのはかなり楽しかった。

そんな風に色々と聞きつつ歩いていると北西のメインストリートに出た、しかもちやうど目の前がギルドだ

さすがはオラリオで長く生活しているだけはあるな、この街でまだ一ヶ月しか生活していない俺ではまだまだ道が未知でいっぱい・・・ゲフンゲフンいや、なんでもない

くだらないことを考えている間にも俺とフィンはどこんぐルドの中に入っていく
お上りさんよろしく、キヨロキヨロと辺りに目を配る

「カイト、こつちだ」

数ある受付の中でも目的の受付口でもあるのかそこに真つ直ぐに向かつていくフィンに大人しく付いていくと、赤髪のお姉さんが受付嬢の窓口に着いた

「やあ、ローザ、ミッシヨンの報告に来た、手続きを頼む」

「はいはいっと、相変わらず仕事が早くて助かるよ、そつちの子は？」

「うちの新人団員さ、この子の登録も一緒に頼むよ」

強気そうな受付嬢がこちらを見てくるので軽く頭を下げて挨拶とした

「・・・この前、団員を大勢補充したばかりのはずじゃなかったのかい」

「ロキの気まぐれって言えばわかってくれるかい？」

「はあ、まーた神の気まぐれかい、苦労してるねあんたも」

「はは、君程じゃないさ」

「うっさい、ほらそつちの子はこの紙に必要な事項を書いてちょうだい、その間にフィンは奥で部長に細かい報告をしてきな」

「はいはい、じゃあカイト、ちよつと行ってくるからその間に手続きをしといてくれ」

「了解だ、早く終わったらそこら辺で時間を潰しとく」

「そうしてくれ、じゃあローザ、カイトを少しの間頼むよ」

「わかったから、早く行きな」

シツシツと追い払うような仕草でローザと呼ばれた受付嬢がフィンを奥の部屋に送り込むが、そこには長年による見知った相手への気軽さを感じた

とりあえず、登録のための書類にざっと目を通してから自分の情報を書き込んでいく、フィンがいなくなった途端に会話が途切れて微妙な雰囲気なので空欄を埋めながらこちらを見ているローザさんに話しかけてみる

「フィ、……うちの団長とは付き合いが長いんですか？」

「……まあね、私がここに就職してからすぐの付き合いになるからもう5年か6年の付き合いになるね」

「そりやまた結構長い付き合いですねえ」

「フフ、そうね、……こんなに長い付き合いはあいつらだけね、冒険者つてのはすぐになくなつちやうけどずっといるのはあいつらくらいかな」

（そっか、受付嬢つてのは一番新人冒険者と顔を合わせる……必然的に死んでいった冒険者とも……）

少ししんみりしたが、その会話をきっかけにポンポンと言葉のキャッチボール、フィ

ンやリヴェリアだけじゃなくガレスの昔の話も聞かせてくれた、以外な話として、ローザも人伝に聞いた話らしいが、あの3人はファミリア結成当初相当仲が悪く口喧嘩ばかりだったらしいということだ・・・信じられん、しかもフィンは今とは違いかなり生意気な性格だったとか・・・これは聞かなかったことにした方がいいな、いつもニコニコしている奴ほど切れたときの反動は怖いからな、あつそうだ、これ聞いといた方がいいか「ここに書いた情報って後で変更は出来るんですか？」

「具体的には？」

「名前とか家族構成とか」

「無理じゃないよ、基本的に冒険者つてのは無数にいるからね、大雑把に言えば名前と所属ファミリアがわかっていれば問題ない、脛に傷を持った奴なんてめずらしくもないし」

「なぐる・・・じゃあこれでいっかな」

名前を書き込む部分で家名だけを書かずに書類をローザさんに渡す

「・・・ふーん、じゃこれで受理するよ、おめでとうこれで正式にあんたはこの街の冒険者だ、後はフィンが戻ってくるまでそこ等辺で大人しくしてな・・・これから頑張りなよ」

最後に優しい感じで叱咤されたので、へーい、と軽く返事をして広いロビーの中に

数本立っている太い柱に背中を預けて目の前の人並みを視界に入れていく、バイトのときは忙しくて眺める暇なんてなかったけど、【凝】を使ってみると、見た目とまったく異なる冒険者の強さがわかって意外とおもしろい、ただやはりフィン達ほどのオーラを纏っている者はいなかった

それからポケツとしていると5分もしない内にフィンが奥から出てきた

「すまない、待たせちゃったかな？」

「いや、5分も待つてない」

「それじゃあ、これからダンジョンだ、準備は良いかい？」

「おっけー」

そんなわけでギルドを出る前に軽く装備の確認をしてから街の中央のバベルへ、そしてその下に広がるダンジョンへと向かった、バベルに入ると最初に巨大な螺旋階段そして東京ドームかよと勘違いする程の広いドーム状の空間に出た、そこから30人が手をつないで並んでも余裕がありそうなダンジョンへの本当の入り口が見えてきた

自分達以外に何人もの冒険者が出て行ったり今から入って行ったりしている

（おお、なんかそれっぽい雰囲気あるな）

地味に感動だ、向こうの世界では一生お目にかかれないような光景だからな

「カイト、今回僕は基本的に手を出すことはないから自分の判断で進んでみてくれ、幸い

い速度でカイトと共にダンジョンを走っていた

カイトと共にダンジョンに潜ったのはいいが目の前で起きていることに頭を悩ませる

「ほいほいつと、そりゃ！〜♪」

曲がり角から急に現れたゴブリンをカイトはまるで見えていたかの様に回避し、即座に反撃、しかも巧みなフットワークでモンスターの死角から鋭利な籠手による抜き手で魔石を直接抉り出すという容赦のない、しかし無駄のない動きでしとめている

現在の位置は2階層、本来なら1階層が限界のはずの新人団員はまるで熟練のLv.

1冒険者のような立ち振る舞いでダンジョンを突き進んでいた

(普通はもうちょつと気後れしたりするんだけどなあ・・・)

それどころかフィンは聞いてしまった、見てしまった、初めてなら誰でも緊張するはずのダンジョンでカイトは鼻歌をしながらまるで楽しむかの様に闘う光景を。

『異常』『規格外』

フィンの頭によぎるのはそういつた言葉だ

昨年、初めてアイズがダンジョンに潜った際にリヴェリアがアイズの戦闘を見たとき

の気分がようやくわかった気がした、ただ違うとするなら――

(カイトにはアイズと違つて戦闘に対する不慣れや油断がない、しかもさつきは無理だなんて言いながらきちんとなんと気を張りつつ適度にリラックスできている、というところだろうね、でも――)

だからこそ困つた、とそう思う。

今のカイトを他の新人団員と共に訓練に参加させていいものか思案する

明らかに他の新人団員との実力に差がありすぎる、はつきり言つて入ったばかりのカイトの動きや実力を目の当たりにした他の団員がやる気や自信をなくしてしまう可能性がある

道中で話した限りではまだまだダンジョンに関する知識はそこら辺の一般人よりは詳しいものの、新人冒険者に毛が生えた程度だったため、座学は一緒でもかまわないだろう

二日、いや三日程度で訓練を切り上げさせてダンジョンに潜らせた方がいいかもしれないな……

他の新人は午前を訓練にしてその間にカイトは勉強、入れ違えるように午後は他の新人団員が勉強会、カイトはダンジョンに、いやでもそんなことをしたら他の団員との交

流が

「おーいフィン」

思考の海に浸かっていたところにカイトから声がかかった

見ればカイトが3階層へと続く階段の前にいた

(しまったな、考え事に夢中になりすぎた)

フィンの実力からすれば上層の、しかも2階層など昼寝所か熟睡しながら突破出来る程度の階層ではあるが、新人であるカイトがこれ程早く進むとは計算外であった

(正直彼がどこまでいけるのかを見てみたいという気持ちもあるけど、初めてのダンジョンで3階層は早すぎる、ここは——)

「フィン、今日はここまでで戻ってもいいか?」

自分が言う前にカイトから撤退を進言されたことに内心で少し焦るが、それをおくびにも出さずに返答する

「・・・まだ余裕があるように見えたけどいいのかい?」

「ああ、確かにまだ余裕はあるっちゃあるけど『まだ行ける』って思った時点でそれは危険サインだと思ってるんでな、それにこのあとお勉強会とやらもあるし勉強中に居眠りしてどやされるのは勘弁願いたい」

軽くおどけて見せるカイトは確かにまだ余裕があるように感じるが、それでも撤退を選択したカイトの判断に舌を巻く

(この年齢で、この実力にこの判断力か・・・末恐ろしい、いや・・・これからが頼もしいと思うべきだね)

「え・・・あれ、撤退だめなのか?」

無言の自分を勝手に勘違いしたカイトが慌て始める、先ほどまでの異常な姿とはかけ離れたその姿に苦笑を禁じえない

「ふふ・・・いやすまない、うん、かまわないよ、午後の勉強会で居眠りをされたら監督役だった僕までリヴェリアに怒られそうだしね」

「うわゝ、もしかしなくてもリヴェリアって勉強とかに対してスパルタだったりする?」

「まあ、そこそこかな・・・ちなみにアイズは二日で逃げ出した」

「・・・マジでか」

そこからは軽く談笑しつつ元来た道を逆走することに、もちろん帰り道でもしつかりとモンスターと遭遇するのでカイトがそれを一掃、その光景を見つつ改めてこの鬼才とでも呼ぶべき子を見いだした己が主神の昨夜の取り乱し方に納得する

(L.V. 1のそれも初期の状態でこの実力・・・ロキ、君が興奮する理由がよくわかったよ、でもこれなら僕が遠征で最前線に専念できる日も近いかもしれないね・・・ふふ、今

から楽しみになってきたよ)

今ではオラリオでも屈指の大派閥となったロキ・ファミリア、団員も実力者が多く、ダンジョンの遠征も人数が増えたことで昔に比べ遥かに大規模となった、だがその弊害として団長であるフィンやリヴェリア、ガレスといった幹部は団員たちへの指揮が主な役割となり、昔のように前線に立つことは少なくなってしまった。

L.v. 6 に到達してから数年、もうそろそろ自身のためにも、そして何より一族再興のためにさらなる名譽を求めて前線に戻りたいと思い始めていた、そしてそんなことをふと思い始めた矢先に逸材とも呼べる人材が文字通り転がり込んできた

(アイズの実力は問題なくこれからも上っていくだろう、だが全体を見通せる指示を出せるようになるかと言われると、今の状態を見るに難しい、でもカイトなら・・・)
現時点でこれほどの視野と判断力を持っているのなら、幹部、もしくは自分の後釜として育成するのはありだ

(この子は稀有な人材だ、逃さないように多少の事は多めにみるつもりで接していい・・・そしてゆくゆくはすべて押し付けオツホンゲツフン・・・任せる・・・ふふロキ・ファミリアの未来は明るいなあ)

心の中でケケケと笑う

カイトの知らない内に実は腹黒い勇者が真つ黒なそろばんを叩き始めていた

《side out：フィン》

||

コボルト2匹を悠々と相手をしている最中に一瞬寒気を感じたが特に何もなく討伐が終わったので気にしないことにした、というかそんなことがあまり気にならない程に今の俺はテンションが高かった

(神の恩恵という奴は最高だな!!)

昨日までの自分とは全く異なる程の身体能力には自分自身で驚きと興奮が隠しきれない、おっさんに殺されかけたのは最悪だったが、それに対する見返りはでかかった、身体能力が上がっただけではなく、あれ程制御が難しかったオーラの部位量制御を行う【流】が少し楽になってきているということに加えてオーラを自身から円形状に展開しその中の全ての動きを知覚することが出来る【円】というチート級の技が使えるようになっていた、まあ使ええると言っても半径4mが限界だったけど・・・ノブナガさんちよ
りーっすwww!!

だがそれでも上層のモンスターを相手にするには十分すぎたようで俺TUEEE EEE EEE!といった状態だ

そんな精神状態なので先程自分から撤退を進言させてもらった、命の取り合いでは調子に乗った者から死んでいくとどっかの偉い人も言っていた気がするし

その後は何事もなく無事にダンジョンから地上に帰還

ギルドで魔石を換金して3000ヴァリスを受け取り、初の冒険者としての稼ぎを喜びつつ本拠に戻った、ちなみにじやが丸くんの屋台でのバイト代は日給平均600ヴァリスなので一気に所得が5倍になったことになる、やったぜ!

◇ ◇ ◇ ◇

本拠に戻ったあとは食堂で昼飯を済ませてから軽く休憩を取った

そして今は他の団員と共に勉強中である。

他の団員やラウルもウンウンと唸りながらやっているが、受験戦争体験者にとってこの程度は特に苦にならない

パツパツと要点や重要な所を押さえてから細かい所は関連付けで覚えていく

暗記系というのはいかに覚えるかではなく、いかに自分に思い出させるかが勉強のコ

ツなのだ

「・・・リヴェリアこれで全部できたと思う」

「ふむ、では採点をするので少し待て」

本日の勉強会最後の締めである確認テスト、一番に解き終えたので先生役のリヴェリアに採点をしてもらう

「・・・どう？」

「・・・ふむ・・・むう・・・合格だ」

「いや、なんで面白くなさそうに言うんだよ」

「間違えすぎるのも腹が立つが、余裕綽々で一発合格されるのもテストを作った者としては面白くないものでな」

「副団長すげえめんどくせえ！」

そんな風に話しているとテストを解き終わった他の団員がチラホラとリヴェリアに採点を頼みに来た、採点の邪魔としては悪いので机に戻って今日教えてもらったことを軽く復習しているとラウルが肩を落として採点から帰ってきた

「どうだった——・・・てのは聞くまでもないみたいだな」

「うう、夕食の後に再試験って言われたっす」

「どうやら不合格者は再試験らしい、おそらく合格するまで続くんだろうなあ・・・」

「はあ、カイトは一発で合格だったすけど何かコツとかあるんすか？」

「んー・・・まあコツかどうか分かんが覚えたことをどういう風にすれば思い出しやすいのか自分で色々試してみるのがいいと思うぞ？」

この後ラウルに効率の良い勉強方法を教えつつ勉強を見てやったらあれよあれよと他の団員にまで教えを請われてしまった

め、めんどくせえ・・・そう思っていたらリヴェリアに人手が足らんのでこれからも確認テストに合格した後は手伝えと言われてしまった

あれ、俺ってば入団したばかりのヒヨコちゃんなのに何で先輩方の勉強も見る事になってんだ・・・解せぬ、その後、結局夕食の後も勉強会に付き合わされた

この日、新人団員ですらこき使う現状に俺の中でロキファミア、ブラックファミアア説が浮上したのは仕方がないと思うわけだよ、うん。

まあ、他の団員との交流がてらに教えてやるとしますか！

12：思惑×日々

||

《side：ロキ》

今は夕食が終わり、それぞれの団員がゆったりと過ごす時間帯

うちの部屋にはフィンとリヴェリアとガレスの幹部メンバーが集合しとる

ただしその内のフィンとリヴェリアだけが頭を抱え、うちとガレスだけは笑いを堪えるのに必死やった

「いやー、それにしてもカイトは予想の斜め上に突っ走るなあ?」

「ガッハツハツハツハ！当たり前じゃ儂が認めた男じゃぞ！それぐらいわけもないわい!!」

今、フィンとリヴェリアが頭を抱えとる理由はカイトが何か問題を起こしたからやないわい

むしろその逆、何も問題がなさすぎる、端的に言つて優秀すぎるといふことが問題に

なってもうた

最初のフィンからの報告では既に上級レベルでの探索が可能な実力に加え、自分の実力に驕らず油断もせずさらに余裕のあるうちに撤退を選択できるほどの判断力まであるとのことや、それを見てフィンは早急にカイトの訓練の質を上げて、ダンジョンに潜らせた方が本人のためにも良いということや、将来的には最低でも幹部、できれば自分の後釜に納まって欲しいほどの人材らしい、カイトの訓練の質やダンジョン探索を積極的に行うというのにも驚いたのに最後の自分の後釜候補発言にはうちら全員の動きが固まってもうた

そんなフィンの報告の後にカイトに勉強を教えたというリヴェリアからの報告では、驚く程に知識の覚えが良く、また面倒くさいと言いつつも他の者に勉強を教えるくらいには面倒見が良いとのことや、カイトより先に勉強会に参加してた子たちですらカイトに教えてもらっているくらいには優秀とのことや、そんなカイトを見て今度はリヴェリアが自分の補佐として育てたいと言ってきた

これに対して教育係の主導を任せられたガレスが何か言うかと思たら、戦闘面を自分が育てられれば他は別にかまわなと言ってきたので現在ファミリアの団長と副団長が武をメインにするか文をメインにするか、それとも欲張ってどっちも英才教育するか

で悩んでるつちゅー状況や

文武両道、天は二物を与えたつちゅー奴やな、チートここに極まれりや!

さてここで問題なのがカイトのこれからの育成方針についてや、カイトが才能に恵まれた子だとしてもあからさまな鼻屑は他の団員との無用なトラブルを引き起こす、かといって他の団員と同じようにしてもせつかくの人材を腐らせるだけじゃなく、その才能を目の当たりにした他の団員のやる気を削ぐことになってまうかもしれん

あつちを立てればこつちが立たずな状況にうちらは頭を悩ませとる

どないしたもんかなーとうちらが頭を抱えとると

「・・・一応、儂には良い考えがあるぞ」

意外にもガレスから発言があつた、ただ発言するときの顔がものすごく悪巧みをしているときのうちの顔とそっくりやったことからカイトに対しての意趣返し的な意味もあるんやろうなー、ただそれが良かろうと悪かろうとそのアイデアは確かにかなり無駄ではあるものの妙案とでも言うべきアイデアやった

他にも良い考えが思い浮かばないのでとりあえずしばらくはガレスのアイデアで行くことになった。

さーて、これが吉と出るか凶と出るか、神のみぞ・・・いや、神すらもわからんなあ？

まあ、カイトはここ数週間は地獄を見ることになるやろうけど頑張つてなー？

《Side out：ロキ》

||

入団してから早くも四ヶ月が経った

そしてようやく気付く、ブラック・・・ではない、もはやこのファミリアはそれを超
越したブラッドファミリアだということに!!

なぜかって？

・・・それはね、

幹部の悪魔共がものすごい笑顔で俺に試練という名の拷問を仕掛けてくるんだよ!!

他の団員との訓練に加え俺にだけ人一倍、いやもうあれは10倍くらい厳しい、そん

なおつさんとの訓練に加え、さらに勉強会で俺にだけ倍の量の課題を押しつけてくる海龍リヴエイアサンさんのように怖ろしいリヴエイア、そして笑いながら俺をモンスターリヴエイアサンの群れに突っ込ませる団長とか!!

逃げた

当たり前だろうが!!村での修行や生前含めてここまで働かされた記憶はねーよ!!
せつかく大手ファミリアに入れたのにもつたいない?

ふざけんな!夢を叶える前に過労死するわ!

そんな生活が数ヶ月続くものだから、一度弱音を吐いてそれとなく退団すつぞ的なことを言ったら訓練と課題が倍になりフィンの笑いがより一層濃くなり威圧感増し増しで倍のモンスターの集団に突っ込まされた

そのうえ「おやあ、カイト?君の婚約者を思う気持ちはその程度なんだねえ(笑)」
といった感じでこちらを挑発してきやがる

騙されてはいけません奥さん、実は三十歳を超えたアラサーシヨタの腹は真つ黒でした

そんなわけで現在脱走中、時間は深夜の丑三つ時

コソコソと夜逃げのように逃げ出す、ほとぼりが冷めてから戻ってこよう、

あ、ちなみに先程俺は逃げると言ったが違う、そう、これは・・・一時的な撤退である！

十分な休息を取りしかるべきときにアイウィルビーバックするための対処療法なのだ！

(夢を叶える前に俺の身体が保たない・・・幸いスマイルデビルな団長との無茶なダンジョンアタックのおかげ・・・とは言いたくないが資金は十分、これで――)

「おやあ？ こんな夜更けにどこに行くつもりなのかな・・・カイ ト？」

!!??

振り向けばどこぞのセーラー戦士の様に月をバックに屋根の上に立つ影

「げえ、フィン!？」

驚く間もなく別の方向の屋根から声が掛かる

「まったく、子供は寝る時間だぞ・・・カイ ト」

「り、リヴェリアまで・・・いや、これはちよつと夜風に当たって散歩を」

さらにまた別の方向の屋根 r y

「そんな大荷物を持つてかの？．．．カイト？」

「おっさん!!」

(ツクソ！やつぱバレたか!!)

ここにきて俺の企みが三人にモロバレだったことに気付く、だが俺はそこであきらめたりはしない、即座に三人のいない方向に反転し自由への一時撤退を敢行する

「ぬおおおおおおおおお!!」

走れ!! 走るんだ俺!!

誰よりも早く光の速さで駆け抜けりゆんだああああああああ

「「逃がさん」」

異様に目がギンギラギンの悪魔共がニヤリと笑いつつこちらに向かつて跳んでくる

「くそがああああL v. 1の新人にL v. 5が三人がかりとか恥ずかしくねえのかあんたらは!!」

おれの全力疾走もむなしくあつさりと地面に叩き付けるように拘束される

だがそれは予想済みだ!!

「ぬおおおおおおおお」

蛇の脱皮が如く、重ね着していた服を脱ぎ脱出!!

「甘いわ!すぐに捕らえうおお!」

「おい!引つ張るな!?!お前が引つ張るとこつちがぬわあ!」

ちなみに脱いだ服には強力接着剤を塗布して動きを封じるようにしてある

「ふははははははは、これぞ忍法“空蟬の術”じゃあ!!さらばブラックすぎる職場!そ

して!こんには自由!!」

「まだまだ甘いよ」

「なぬう!」

どうやらフィンはお馬鹿なおつさんとリヴェリアとは違い引つ掛からなかったよう
だ

「だが、喰らえ!!コシヨウ弾!!」

「ははははは効かないなあ、そりゃ!」

「う、打ち返すだもげっほげっほぎゃあああ」

それからこつちが次々と飛び道具を出すも全て交わされるか逆にこつちが喰らい、そ
んなことをしている間に復活した怒りと恥辱やその他もろもろの感情により鬼と海龍

アキは呆れてるけど自分は仕方がないのでと思うんすよね

なにせカイトが入団してから数日して徐々につすけどカイトに対しての訓練や教育が倍々で厳しくなって、今では自分を含めた他の団員もあまりのスパルタっぷりにドン引きしてるっす

ただすごいと思うのは団長達のスパルタっぷりだけじゃなく、それを全てギリギリでもクリアするカイトの負けず嫌いな所っす

イヤだイヤだと泣き言を言いつつも結局ポロポロになりながら団長達の訓練や課題を次々とこなしていく姿は自分たちも頑張らねばと奮起させてくるっすよ

ただ問題があるとすれば団長達が予想以上にカイトが無理難題をクリアしていくのを面白く感じてしまったのか、ただでさえ厳しい内容にさらにとんでもない訓練を最近では課すようになり、そしてそれに負けじとカイトがクリアし、そしてさらに厳しい課題が——、というように負のスパイラルが発生し、ついにその我慢の限界を超えたカイトが脱走劇を一月と半前に起こしたのが始めとなり、それ以来このようなイベント？が起こるようになってしまったすよ

「それにしても、ガレスさんはともかく団長や副団長まで一緒になってこんな無茶をカイトに課すなんてらしくないと思わないっすか？」

「さあね、とりあえず私は今のカイトを見て生まれて初めて自分に才能とかがなくてよ

かっただと思っただわ、まあでも偶にその才能に嫉妬やあこがれ『WRYYYYYYYY
YYYYYYYYYYYYYYYYYYYY!!』メキメキメキ

「……………」

「また悲鳴が……最近カイトって人間やめてないっすか？」

「……いや、ほんと才能がなくて良かったと心の底から思うわ」

「普通が一番すよ、普通が」

うんうん、とお互いに頷いてからお互い自室に戻ったす

騒ぎが終わってしばらくした後自室で寝ていたらガレスさんが泡を吹きながら簀巻きにされたカイトをベットに放り出して去って行ったす……南無。

《side out:ラウル》

||

ネバーギブアップという言葉がある

決して諦めずに何度でもリトライするということだ

つまりはゲームとかでよくあるコンテンツニューのことなのだが

何度もクリアできないラスBOSSを倒すにはどうすればいいのか・・・答えは簡単だ。

『レベルを上げて物理で殴ればいい』

だが悲しいかな・・・この世界でレベルはゲームの様には簡単には上らない、むしろそんな簡単に上ったらえらい事になるがな

レベルというのがどれくらい大事なのかというと、そうだな・・・わかりやすく別の漫画で例えるなら、科学と魔術が交差する超能者達の基準だと思えば分かりやすい
最高Lv. のLv. 5、その第一位で『圧縮ウ♪圧縮ウ♪』『クケケケケケケケケ』「ツイッーーーーー!!」とか頭のおかしい発言なのだ、ならば同じLv. 5のフィン達がおかしいのも当然な話ナわけだ

今現在、俺は呼び出しをくらってロキの部屋にいた

大方昨夜の脱走もとい一時撤退の件に関してだろう、だが俺にもきちんと言いつがあら、入団してからの周囲とは明らかに異なる訓練内容と量

今まで無言の圧力ではぐらかされてきたが今日こそは文句の一言や二言は言わせてもらおう

「まーた、訓練サボろうとしたんやって？」

「サボりじゃない、一時撤退だ」

「いや、一緒やからそれ」

「後ろに向かって前進しようとしただけだ！」

「やから、意味一緒言うてるやろが!!」

ぎやーぎやーと言いつ合をするが今日こそはロキに問いただすと決めているのだ

「おいロキ……ちよつとマジな話しようぜ」

「……なんや」

俺の真面目な雰囲気を感じ取ったのかロキがとりあえず黙ってくれた

「正直、最近……というか最初からだが俺の扱いがおかしすぎるだろ、訓練も勉強も他

の奴らより倍ってのはよ？」

「それだけ、フィン達が期待しとるつちゅーことやろ」

「それでも最近はやりすぎだろうが！」

念能力を全開でフルブツパしてもかなりキツイ、俺じやなかつたら死んじやつてるよ「ただのかわいがりにしても限度がある、せめてここまで急激に訓練を課す目的を教えたくないところつちのモチベーションが維持できないんだよ」

俺だつてフィン達がただの面白半分でこんなことをさせてくるとは思わな・・・いやどーだろうな、やりそうな気がする、いやでも・・・だがしかし、毎度毎度、俺がギリギリより少し無理な感じの課題をさせるのは相当俺のことを見ていなければできないわけだから——

そんな風にドS幹部達の少ない良心について考えているとロキが観念したように口を開いた

「・・・・・・・・ん————はあ、そやなあ、カイトは口が堅そうやからええかなあ・・・」

——————間。

「なめてんのか(´)らあ!!」

ようやくロキから聞き出した内容はアホみたいな内容だった

「特別扱いすると他の団員のやつかみがあるかもしれないからって、文句も出ないから
いの厳しい訓練ってなんじゃそりゃあ!?!」

いらんわそんな扱い!!

「あははー、まー絶対文句言われると思うて言えなかつたんよ」

「あーはいはい、短い間でしたがお世話になりましたー」

「ちよ!?!カイトどこ行くねん!」

「うっさい黙れ! 実家に帰らせて頂きます!!」

「後生やああああ! うちんこと見捨てんといてやあああ!!」

「は な せ え え え え !!」

部屋を出て行くこうとする俺の腰にへばり付くロキを引きはがそうとするも中々剥がれない、なめくじかこのアホ神は!

「まって! まってや!! まだ他にも理由があんねんて!」

「・・・んだよ、他の理由って」

一応聞くだけ聞いたやるために部屋を出る、というかファミリアを出て行くことを一旦保留にしてやる

「あんなー、その、あれや、アイズの新しいお目付役が早急に欲しいんや．．最近のアイズは多少は落ち着いたけど、それでも一般の冒険者の視点からすればまだまだ過剰なダンジョンアタックを繰り返しとるのと変わらなくてな？ それを押さえる人材、もしくはこれからの成長次第でアイズの相方を務められるようなんがカイトくらいしかおらんねん」

「お嬢のお目付役にはフィン達がいるだろ」

実際ここ数ヶ月俺に訓練（拷問）をしていないときはお嬢に付き添ってダンジョンに行っていたはずだ

ちなみにお嬢というのは俺がアイズを呼ぶときの愛称みたいなものだ

「無理や、今まではそれでよかったんやけどな．．．ここ最近闇派閥達の行動が激しくなってきたな、正直今でもフィン達の手が届ききつとらん」

それも知っている、オラリオに来る前からはチラリと、そして来てからは実体験を持って闇派閥の厄介さは身にしてみている

爆破テロから殺人、暗殺、良派閥ファミリアへの過剰なまでの攻撃、弱小ファミリアへの一方的な虐殺とも言える攻撃など、奴らが犯した悪行を挙げればキリがない

そいつらを捕縛し闇派閥に所属するファミリアの主神を天界に送還、もしくはオラリオから永久追放するのがオラリオでも最大派閥の片割れでもあるロキ・ファミリアの暗

黙の義務となっている、有名というのはなまじつか良いことだらけではなく余計なしがらみも付いてくるということだ。

ガレスのおっさんも、奴らのせいで中々大規模遠征に行ける時間が作れないとぼやいていた

実際、俺が入団してから未だに遠征が一度も行われていない

案外遠征に行けないストレスも俺の訓練（拷問）にぶつけていたのではなからうか：だが、お嬢の面倒を俺に押しつけるため、早急に訓練のレベルを上げるってことは

「・・・もしかして近いうちに閻派閥への大規模作戦でもあんのか？」

ロキの表情は変わらない、だが腰にへばり付いているロキの身体に一瞬力が入ったことで疑問が確信に変わる

「・・・カイト、それマジのマジで外でもホームでも口に出すんやないで、思わせぶりな事を言うことも禁止や、主神権限での絶対命令や」

ロキの目が開いて瞳孔が丸見えのマジ顔モードで言ってきた

さすがにマジもんの神様なのか真面目モード迫力は背筋に氷柱でもぶち込まれたかのようなプレッシャーだ

「・・・わかつてる」

萎縮するのは悔しいのでぶつきらぼうに返事をする

「カイト、重く感じるやる思て口に出して言わへんかったけど、うちやフィン達は正直な所カイトにはめっちゃ期待しとるんよ、アイズに続く将来のエース級候補の団員、しかも今はまだアイズよりレベルは低くても冷静な思考や分析力はアイズより上や、これでレベルがアイズと同じになれば諸手を挙げてアイズの面倒を任せられる、期待するなつて言う方が無理な話やっちゅーねん」

今度は先程の威圧感を感じさせない、むしろ真逆である母性を感じさせるような優しい声で背中がむず痒くなるような事を言ってくる

「だったら、もう少し大切に扱えや！ 訓練で身体がぶつ壊れそうなんだが!？」

「ダイジョウブ！ダイジョウブ！フィンタチヲシンジテ!!」

「何で片言やねん!!」

うっかり関西弁でツツコンでしまった

とりあえずこの後フィン達にも事情を説明し、お互いの情報をすり合わせたおかげで以前より多少は訓練内容がマイルドになった

ただ今回の案を発案したと言うガレスのおっさんには例の卵焼きを今度はきちんと食べさせてやると脅したら青い顔をしていた、ザマアw。

襲撃編！

13：倍増×倍増 前編

オラリオ南東・第三区画、時間は既に日も大分前に落ちた時間帯

色欲の街区とも呼ばれる第三区画を一手に牛耳るイシュタル・ファミアリアの本拠
ベレト・パピリ
 『女主の神娼殿』で二柱の神が対峙していた

対峙していると言っても片や冷や汗をかき、もう片方の神はニヤニヤとしてはいるが
 全身から今にも吹き出しかねない憤怒が漏れ出し、飄々としている普段からは想像でき
 ない威圧感を放っている

「それでえ、この落とし前どうやってつけたるか、おどれらは滅ぼされる覚悟は勿論ある
 んやろなあ？」

威圧感を放っているのはロキ、言わずと知れたオラリオの双壁を為すファミリア、そ
 の片翼である、そして冷や汗をかいているのは美の女神イシュタルである

「ま、待てロキ、今回の件、私は完全に関与していなっ『ガン!!』ひっ」

「・・・イシュタル、うちはいい訳聞かためになざわぎ足運んだんとちゃうんよ、お前
 んとこのガキがうちの子に手を出した、しかも襲われた4人のうち2人は重傷、その内

の1人に至っては瀕死で万能薬エリクサー使用してもまだ生死の境をさ迷うくらいに衰弱しとる」

ロキは今でこそ大人しくなったが、かつての天界では領土を無視して誰それかまわず、文字通り見境なく殺し合を吹っかけてくる手の付けられない暴れん坊であったのは神々なら誰でも知っている、そしてかつてのその姿を実際に目の当たりにしたこともあるイシユタルは焦りに焦っていた

（くそつ、どうしてこんなことにつ、あのガマガエル女なんて事をしでかしてくれたんだい!?!）

——— 事件が起こったのは今から二日前。

イシユタル・ファミリアの団長、『男アンドロクトノス殺し』フリユネ・ジャミールによるロキ・ファ

ミリア所属の『劍姫』アイズ・ヴァレンシユタイン及び下級団員3名への襲撃

しかし、駆け付けたフィン達のおかげで襲撃は失敗。

ちなみに、フリユネの動向を怪しんでいた同じイシユタル・ファミリアの構成員からイシユタル本人に密告があり、その報告を受けたイシユタルはすぐさま事の顛末をロキに知らせた、おかげでフィン達の救援は間に合ったが事は既に起こった後であった。

ただ、死者が出なかつたことが不幸中の幸い、そうでなければロキはこのような話し

合いの場など用意することなく問答無用でここを襲撃してきていただろう

(下手な手打ちを行えば、こちらが潰されるか・・・くそ)

数日後、

ロキ・ファミアリアはイシユタル・ファミアリアから多額の賠償だけでなく、希少なマジックアイテムや魔剣を譲渡させることで手打ちにした

余談だが、このときの賠償のせいでイシユタルのとある目論見は大幅に遅れることになる

|||||

——— 二柱の神が話し合いの場を設ける二日前

場所は上層の10階層

「お嬢、前方1時方向にオーク3、同方向45度にインプ2」

「んー」

『円』でいち早く相手の構成を読んだ俺がパーティメンバーに報告するやいなやアイズが相手に向かって飛び出す

独断専行気味だがもう慣れたのでこつちがお嬢に合わせる様に動く

「オークは俺とお嬢、インプはラウルとアキで対処、こつちが済み次第すぐに来るから最悪時間を稼げ、もしくは倒せるならそのまま倒してくれ」

「了解！」

お嬢に遅れること数秒、着いたときには3体の内一体が腕を切り飛ばされて頭をかち割られていた

「おいおい、あんまはりきりすぎないでくれよ、俺の分の獲物がなくなっちゃう」

お嬢の後ろに迫っていたオークを抜き手で魔石を抜き出して瞬殺しながら愚痴る

「早い者勝ち」

「さいですか、じゃあ残りは——」

俺がもらつちやうぞ、と言いつ切るまえに文字通り目にも止まらぬ速さで残りの一体をアイズが袈裟切りにする

「だああああ、早すぎるだろ!？」

獲物を先に倒されたのは悔しいがそれよりもラウル達の方の救援に向かう

「つてこつちも終わってるし!?!?・・・あれ、ラウルどうした」

現在のステイタスでは2人がかりでも相手にするのが厳しいはずのインプを倒してきたというのに何故かラウルだけが項垂れていた

「うう・・・アキに踏み台にされたつす」

「しかたないでしょー、最後のインプが飛んで逃げようとするんだもん、仲間とか呼ばれたら厄介じゃん」

「だからつて何も顔を踏み台にしなくていいじゃないっすかー」

顔を上げたラウルの顔面には綺麗な足跡が残っていた

「・・・ぷっ」

「カイトはともかくアイズさんまでヒドい!？」

現在俺たちはパーティーを組んで上層の中でも中層に近い10階層にきていた

アイズを除く、俺を含めた三人は本来ならこの階層はまだ早すぎる、だが俺がパーティーに入るといふ条件でなら9階層まで、さらにアイズが加わった場合は11階層までの進出が認められていた。

無事に戦闘を終えてひとまず弛緩した空気が流れる、もちろん最低限の警戒は維持したままだ。

そのおかげで誰よりも早くこちらに迫ってくる何かに気付けた

(な!?)

『円』を張りっぱなしにしていたおかげで全員の顔面に向かって飛んでくる拳大の石を
関知

しかも当たれば大怪我ではすまない速度、声をかけてはともじやないが間に合わない

(やばい!?)

判断は一瞬、気付いたと同時に身近に居たアキを押し倒してなんとか回避、だが残りの2人には声を掛けることすら出来ていない、一瞬最悪の光景を想像する

(ラウルとお嬢は!?)

お嬢の方を見るとラウルを突き飛ばし、自らは屈むことで難なく回避していた

「さっすがお嬢、そこにシビれる憧れるってな！」

「ちよつ、カイト!?なにすん「敵襲!!」!?」

押し倒したことでアキが文句を言ってくるが俺の言葉を聞いてすぐさま寝たままで体制を立て直し、すぐにほふく前進でその場から移動する、移動してからすぐさま先程まで居た位置に凶悪な速度の投石が襲ってきた

「つ・・・なによこれ!？」

ほふく前進しながらアキが悪態をついてくる

「だから敵襲だつて、しかもたぶんモンスターじゃなくて人の」

この階層でこの速度の投石が出来るようなモンスターは存在しない、そこからおのずとこれが人による襲撃であると説明する。

「まさか、闇派閥イウイルスじゃないでしょうね・・・」

「ひいひいひい死ぬつすまじヤバイつす!？」

いつのまにかラウルとお嬢も合流していた、つてかラウル無駄に洗練されたほふく前進だな・・・

「落ち着けてラウル、ちったあお嬢を見習え、あと騒がしいと集中的に狙われるぞ」

「~~~~~!!!」

「ちなみに、お嬢、こんな感じの襲撃に心当たりは?」

「んー．．．わかんない」

「さいですか．．．」

まさか、ダンジョンでの初ピンチがモンスターではなく人の手によるものになるとは（それにしても闇派閥イワイルスの襲撃？　こんな浅い階層でわざわざ低級の俺たちを？　なんの意味があるんだ、人質とか？　くそ、せめて9階層ならまだ楽に対処できるんだが）

10階層からは初のダンジョンギミックとして霧が発生するようになってくる、そのためこのような遠距離からの襲撃の場合、目視での確認が困難になる、ちなみに俺の『円』の半径は初のおためしダンジョンから数ヶ月、リアルに血のにじんだ努力の結果半徑20メートルまでは伸びた、だがこの程度の範囲では遠距離の相手を感じするのは不可能だ、放ってきた何かを感知して何とか避けるくらいが精一杯だ

（このままじゃ、相手に一方的に攻撃されて廻られるな．．．）

石が飛んできた方向から相手の位置を移動していることを含めて大凡で推測する

（問題はどうかやって相手の遠距離からの攻撃をいなしつつ接近．．．は駄目だ、先程の攻撃から相手はおそらく格上．．．逃げるしかない）

状況分析から現在の最善手は一つのみと判断する

「全員聞いてくれ、相手はおそらく格上の冒険者、しかも複数の可能性もあるんでこちら全力で逃げる、異論はないな？」

全員が俺の提案に頷いてくれる

「よし、じゃあ——」

「逃がさないよおおおおおおお」

ズドン、という衝撃音と共に全身鎧を着込んだ、おそらく今回の襲撃をしたであろう敵が逃げようとした方向を塞ぐように降ってきた

「ゲツゲツゲツゲ、最初のでやられてりやいいものを生意気だねえ」

鉄仮面の中から聞こえてくる不気味な声はつぶれたガマガエルを想起させるような醜い声だ、手に持っている強大なスパイクと相まって余計に嫌悪感を与えてくる

「はあああああ——!!」

問答無用でお嬢が斬りかかる、おそらく相手は上級の冒険者、この中ではお嬢のレベルが一番高いため先手必勝は正しい判断ではあったが・・・

「甘いんだよおおおお!!」

「くうっ!」

「お嬢!」「アイズ?!」「アイズさん?!」

L v. 2のお嬢があっさりと吹き飛ばされた

(やっばL v. 3以上か!)

「アキ、ラウル!!全速で救援を呼んできてくれ、時間は俺とお嬢で稼ぐ!!」

いつもの余裕もかなぐり捨てて全力で叫ぶ、こいつ相手にはマジで余裕はない
「で、でも!!」

「行け!早く!!」

「させると思ってたのかい!」

お嬢が復帰する間、先にこちらを仕留めると決めたのか襲撃者が襲ってくる

(オーラ!!全!!開!!!)

「早く行けえええええ!」

「ぬがぁ!」

こちらをただのLv.1と思い油断していた所に後先を考えないくらいオーラを込めた体当たりをぶちかます

「でりやああああああ!」

そのままの勢いでアキとラウルから襲撃者との距離をとらせるためにオーラを噴出させるようにして一緒に吹っ飛ばす

「ぎ、ぐ、ぐ、このっ・・・調子に乗るなこの雑魚がああああああ!!」

「ぐばあ!」

吹っ飛んだ勢いが無くならない内に地面に叩き付けられる

「雑魚がこのアタシに何してくれてんだ、このクソビチグゾ野郎があああー！！」
「ぐうううううあああああー！！」

地面を紅葉下ろしよろしく引きずられて振り回されたあげく、投げ飛ばされてダンジョン内に生えていた木に叩き付けられた

(ぐお・・・やっべえ、まじで死ぬ)

後先考えずにオーラを全開にしていたのが功を奏したのか、幸いなことに深刻なダメージはそれ程なかったがそれも時間の問題だった、このままでは早急にオーラが尽きてしまい立っていることすらままならなくなってしまう、そうなれば後はただの人間サンドバツクだ。

だが身体を張ったかいてもあってアキとラウルは離脱に成功したようだった、すでに先程居た場所にはその姿が確認できなくなっている、おそらく襲撃者の方も一緒だろう
「ちっ、面倒な、すぐに追いかけて殺してやろうか」

「させない」

アキとラウルを追いかけようとする襲撃者の前に復活したお嬢が立ちはだかる、かつこいいなおい・・・ちなみに俺は現在死んだふりをしている

「・・・ゲッゲッゲッゲッゲ、まあいいさ、元々の目的はあんただからねえ」

「わたし？」

「そーさ、最近調子に乗ってるガキがいるって聞いてねえ、世界記録だかなんだか知らないが男神を含めた男共がうるさいったりやありやしない、その不細工な面ズタズタにして二度とダンジョンに潜れないくらいに痛めつけて、ガキに世の中の厳しさを教えてやろうと思ってるねえ」ゲッゲッゲッゲッゲ

（うつわ、くつだらねえそんな理由で襲撃したのかよ・・・）

どうやら闇派閥イッイルスではなく敵対ファミリアによる襲撃のようだ、しかもファミリアという個人的で理不尽な怨恨によるものっぽい、しかも口調や会話の内容から襲撃者は女の子のようだ

・・・あれが女？

ゴリラに豚の贅肉を十倍にしてくつつけたような体系、声を聞いた者に不快感しか与えないような・・・あれが女!?

「そんなことのためにこんなことを？」

「そーさ、あんたはそんな理由で潰されるただの雑魚って事だ！おらあ!!」

俺が目の中の現実にフリーズしている間にもお嬢と敵の戦闘が激化していく

『おい、どーすんだこれ、呼びだされて出てみりや大ピンチじゃねーか』

死んだふりの俺の横に居る『ジャンプパイレーツ』が小声で話しかけてくる、

何を隠そう、お嬢に全部丸投げで死んだふりをしていたわけではない、実はこっそり

こいつを召喚していたのだ

ちなみに既にスロットの方も回し済みだ

「それで数字は？」

『6だな』

「6か・・・」

初めての数字だ、というか今までデメリットがやばすぎるので初めて使つて以来フィッン達から使用を禁じられていた、暇なときに話し相手としてこいつを呼ぶことはあつてもスロットを回すことはなかったがさすがに今回は緊急事態だ、デメリットを鑑みても使用をためらう理由はないだろう。

そんなことを考えている間にスロット番号『6』の能力についての知識が頭の中に染み込んでくる

・・・こいつは、また、なんというか、えー・・・

強力なのは間違いないが俺の身体が耐えらえるかわからない能力だった。

だが、目の前で徐々に、しかし確実にお嬢を追い詰めていくこの格上の襲撃者をどうにかするには多少の無茶はしなければならぬ

覚悟を決めて起き上がる

幸い、敵はこつちに気付いていないので『練』を全開にしつつ能力を使用する

「第一開門……開!!」

纏うオーラの総量が一気に倍になる

俺の頭の中に刻み込まれてきた『6』の能力は『八門遁甲の陣』

前世ではおそらく世界一有名な忍者漫画に出てきた禁術の一つ

その能力は単純明快、本来なら身体に負荷がかからないように無意識にセーブしている力を強制的に解除し、文字通り限界を超えた動きができるというものだ

(やっば、この技けつこうキツツううう)

ただし、この技は先程も言ったように無意識のブレーキを外すため身体に多大な負荷がかかるというデメリットが存在する、身体にかなりの負荷がかかるのがわかるが止めるわけにはいかない

「ぐっ……続いて第二休門……開!!」

(ぐびやあああ痛い痛い痛い！)

この技、思ってた以上にヤバかった

ガイ先生もリーもすごいなあと僕は思いました。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

《side:アイズ》

「ゲツゲツゲツゲツゲ、おらおらどうしたあ！チマチマ避けるだけかい『劍姫』！」
(くっ・・・)

現在アイズは明らかに自分より上のレベルの冒険者を相手に防戦一方の状況を余儀なくされていた

それでも格上の相手に対して薄皮一枚の攻防が出来ているのは相手が動きにくいフルプレート製の鎧を着ているのが原因だった、おそらく正体を隠すための全身鎧だろう

が、今回はそれがアイズに味方した。

小柄な体型を活かして相手の攻撃を何とか避けていくが追い詰められているのは誰の目にも明らかだった

(せめて、風を溜める時間があればっ!!)

それが出来ないことに対して歯噛みをしていると

「おらああああああああああああ」

誰かが敵の背後から頭に跳び蹴りを放ってきた、完全な不意打ちのため敵も避けることができずに自分の頭上を越えて吹っ飛んでいった

「ヨオー！ブジかアおジョー！？」

「カイト!？」

乱入してきたのは先程まで気絶していたはずのカイトだった……声が裏返っているのは何で？

14：倍増×倍増 後編

現在フィンはダンジョン上層を自身の持てる限りの速度を持って全力疾走していた（L v. 3、それもL v. 4にランクアップ間近の冒険者に襲撃されればカイトやアイズが居てもかなりマズイ）

事の起こりは自分がギルドでガレスとリヴェリアと共にギルド員と今後の閩派閥イウィルスの対策について部屋で話し合いをしていたとき

ロキから使いとして言つてを頼まれた上級団員が息を切らせてノックも無しに部屋に飛び込んできたことから始まる

言つての内容は要約すると、とあるファミアリアの第二級冒険者がアイズの襲撃を目論んでいるという内容で、その計画の首謀者である男アンドロトロノス殺しが先日から姿を消したという内容だった

イシユタル・ファミアリアの団長フリユネ・ジャミールと言えば、あまり良い噂を聞かない冒険者の例として挙げられる程度には悪名が轟いていた、そんな者に狙われていると聞いた途端に、常に下の団員に冷静さを説いているリヴェリアが部屋を飛び出し、それに続くように自分とガレスも飛び出した

アイズには下級団員とパーティを組んでいるときは11階層までの進出を許可している、しかし上層、と一口に言ってもかなり広い、なにせ1階層から12階層までの広さを合わせればおそらくオラリオそのものの広さに匹敵する、それを手がかり無しで即座に探し出すのはいくらLv. 6といってもかなり難しい、だが今日に至っては手がかりはゼロでは無かった

(確か、今日はパーティメンバーにカイトがいたはず、ならギリギリ許可されている11階層にいる可能性が高い)

そう目算を付けて、2人に今考えていた内容を話す、

「つまり、私達は11階層付近を探せば良いということか」

「儂は一応9階層辺りから風潰しにアイズ達を探してみよう」

「頼む、僕は10階層から、リヴェリアは11階層を念入りに探してくれ」

「了解(じゃ)」

そこから散会して、それぞれの持ち場の階層をとにかく走り回る

2人と途中で別れてから数分もしない時にそれは起こった

入った途端に今日ダンジョンに潜ってから一番の衝撃が襲ってきた

「ぐっ!?!・・・っな、何だこれは・・・っ!?!」

衝撃により巻き起こる砂塵を堪えて目をなんとか開ける

そこで自分の目に飛び込んできたのはアイズが膝を突き、全身を血に染めた満身創痕のカイトが吹き飛んでいるという最悪に近い光景だった。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

とりあえずお嬢は何とか無事だったらしい、とりあえず三門まで開けてから敵を蹴り飛ばしてみたが思いの外吹っ飛んでいった。多少は効いていてくれないだろうかという願いも空しく、ムクリと敵が起き上がる。

「ちなみにお嬢、あいつを倒せるような奥の手とか必殺技とかないか?」

「ある」

「だよねー、そんな都合良く・・・ってあんの!?!マジで!?!」

とりあえず望み薄いよなーといった感じで聞いてみただけなんだがまさかの返答にこつちがビビった

「でも、使うには時間がかかる」

あーはいいい、元氣玉的な感じで撃つのに時間が掛かるタイプの本殺技なんかねー？
つてことは俺は足止めのベジータ役か・・・ボコボコにされそう

「・・・カイトー人じゃアレの足止めは無理」

俺のスキルを知らないお嬢が心配してくれる

「そこら辺は心配しなくていいぞ、ちよつと奥の手使つて時間稼ぎくらいならできる、だからお嬢は気兼ねなく奥の手とやらの準備を頼むわ」

「本当にできるの？」

「まーかせろ！だからいつちよ派手なのを頼む、外すんじゃねーぞ？」

「大丈夫、ちゃんと狙う」

・・・敵をだよね？こちらを見ながら言われると若干不安になるんだが
「・・・一応言つとくけど俺ごとバーンとかは勘弁だぞ」

「?・・・当たり前」

で、ですよねー、疑つてすまん、素直なお嬢に心の中で謝罪する

「う、うっし、じゃあ気合い入れて行きますかね!・・・第四傷門・・・開!・・・ぐっ

「うるせえぞ雌豚がああああ!!」

痛みもあつて脳内麻薬がドバドバだぜ!!

|||||

フリユネは怒りを通り越してぶち切れていたが、腐つても第二級冒険者、相手の異常さを感じると次第に冷静さを取り戻していった

(下級の雑魚があたしと互角だ?!)

普段とは違う装備のせいで動きが制限されているとはいえレベルの差とはその程度で覆されるものではない

(・・・いや違う、こいつの動きは後先を考えていない奴の動きだ)

こちらの戦闘スタイルは言ってみれば長距離走、対して向こうは超短距離走

実際よく見れば攻撃を避けてダメージを受けていないにも関わらず相手は血反吐を吐きながら自分と攻防を繰り返している

「第六『景門』開」

あと一步で攻撃が届くと思った所で、
またしても先程と同じように邪魔が入り劍姫の
前から蹴り飛ばされる

「くっそがあああ何なんだ手前はあ!!」

10

吹き飛んだこちらを雑魚だと思っていた奴が追撃してくる

9

「朝 孔 雀 !!」

8

「チィ!!」

まるで孔雀が羽を拡げた様な形をした炎とそれを作り出すほどの目にも止まらぬ拳
撃が津波のようにフリユネを襲う

7

「鬱陶しいんだよ雑魚があ!!」

6

5 炎と拳の速度は厄介だがフリユネの耐久値で耐えられない程ではない

4 相手の攻撃が自分の耐久力に対して力が足りていないのが分かる、この技は明らかに時間稼ぎが目的だろう

4

(まずいまずいまずいまずい!!)

3

だが、それが分かったところで身動きを取ることは出来なかった、このまま被弾覚悟で剣姫に辿り着いたとしても、かなりの痛打をそれまでに受ける、一撃一撃は軽くともその量は津波と評する程なのだ、敗色は濃厚となってしまう可能性があった

2

故に、フリユネは決心を固め、剣姫の技への妨害を諦める

1

(邪魔できねえってんなら、正面から回避か防ぎ切っちゃえばこちらの勝ちだ!!)

0

かつて、アイズがL.V. 2にランクアップする際に倒したモンスターの名は「ワイ

ヴァーン」適正Lv. 2以上、しかもその異常個体であった。(推定ではLv. 3ではないかと推測されている)

そして今のアイズはLv. 2

フリユネのレベルはLv. 3

「あああああああああああああああああああ!!!」

溜めに溜めた暴風をアイズが身体と剣に纏わせ一気に爆発させる

それは後にアイズ自身が名付ける必殺の技『リル・ラファーガ』、その速度は閃光
とてもではないがLv. 2では考えられない速度だった。

「ぎゃあああああああああ!」

Lv. 1時のアイズでもLv. 2以上のモンスターに通じたその技をフリユネが完璧に回避するなど不可能、アイズの持つ剣がフリユネの左肩に深々と突き刺さった

だが

になつていく

「お嬢——————!!」

「いい加減しつこいんだよおおお——————!!」

不意打ちで後ろからカイトがフリユネに迫るがカウンターの様にアイズを投げ飛ばし二人をまとめて吹き飛ばされてしまう

ようやく勢いが止まった頃には2人の姿は全身打撲と擦り傷だらけになっていた

(仕留めきれなかった・・・早く立たなきや、早く・・・)

投げ出されてしまった身体をすぐさま無理矢理動かそうとするも膝立ちするのがアイズには精一杯であった

それでも敵はそんなことはお構いなしにこちらに向かつてくる

「グゲゲゲゲ死ねえええええ劍姫いいいいいい」

一直線に自分に向かってくる敵、いや、今や2人にとつての死そのもの

しかし、それからアイズを庇うように前に立ちはだかる男が一人

『切り札は先に見せるな、見せるなら更に奥の手を持って』

「……え？」

「俺の好きな言葉だよ、お前も覚えとけ」

ポン、と頭に手を乗せてからニカツと笑いながらそう言ったカイトの姿がかつての父の姿と重なる

「あ……」

「じゃ、ちよつくら行ってくるわ」

そう言つて自分と同じくらいダメージがあるにも関わらず敵に向かって走り出す

その光景が今でも夢に見る、悪夢と重なる

ダメ

またしても届かないと分かっているながら手を伸ばす

「第七・驚門」

二度とそんな景色を見ないように、起こさないように強くなったのにも関わらずまたしても手だけを伸ばすしかない

イツチャダメ

「開」

敵はアイズの眼前に立つ男に躊躇無く手に持った凶悪なスパイクを振り下ろす

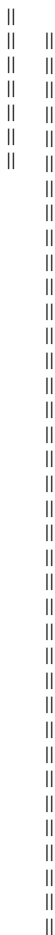
そしてそれ以上の躊躇遠慮容赦一切無く、男はたった一つの究極の正拳を突き出す

虎

昼

その時、その瞬間、世界から確かに音が消えた。

15：後悔×前進



《side：リヴェリア》

「やつほー、出迎えあんがとなーリヴェリア」

オラリオ南東・第三区画、イシユタル・ファミアの本拠『ペーレト・パペリ女主の神娼殿』の入り口からロキが歩いて出てくる

例の事件から既に10日、その事件の落とし前を付けるために数日前からロキは神イシユタルと会合という名の喝上げに来ていた

「ふん、さっさと帰るぞ。ここは居心地が悪い」

エルフは基本的に心を許した者以外に肌の接触を許さない、過度な者であれば見せることすらしない

自分はさすがにそこまででは無いがエルフが見世物として当たり前に居るここは心

地良い場所では決して無い

「・・・この様な場所、潰してしまえばよいものを」

「えー、できんことはリヴェリアの方がようわかつとるやろ？」

「わかっているさ、これはただの個人的な感情だ」

「それにしても、ここにいる娘達どれも際どい格好で眼福やで〜」

「おい」

「ええやん、見るだけならタダやし」

「・・・はあ」

これが私の主神かと改めて思うと頭が痛くなる

「・・・それに、ホンマなら今頃ここを火の海にしとったのに・・・それ止めたんはリヴェリアやろうに」

そう言っつていつもとは違う剣呑な目付きで『ペーレト・パピリ女主の神娼殿』を睨み付けるロキ

個人的にはこの区画は好きではない、だが潰すわけにはいかない理由があった

この歓楽街はオラリオの大事な収入源の一つにして、住人達（これは男女含む）のストレス発散場所でもある、そんな所を潰してしまえば住人の反感を買うだけになってしま

それ以上に闇派閥が暴れている今のオラリオの状況で歓楽街を取り仕切るイシユタル・ファミリアを潰してしまえばギルドからの重いペナルティだけでなく、ただでさえ治安が悪くなっている今のオラリオを無用に混乱させるだけだ

以上の理由からイシユタル・ファミリアへの直接的な報復は断念せざるえなかった
先程の言動からもわかるように最後までイシユタル・ファミリアを直接潰すと言つて止めなかったは実はこのロキであつたりする

ちやらんぼらんに見えて自分の眷属への愛情は深い

ロキが感情を全開にして憤怒を表したおかげでフィンとガレスと私も冷静になれたと思つている・・・まあ、このような事決して口に出して言わないが。

「それで、カイトはまだ目え覚まさないんか？」

「ああ、かなりの精神力を消費したようだから、それだけでなく怪我をした際のシヨックも少なからず影響があるだろう」

「うちが見たときはもう怪我が治療されて綺麗になつた後しか見てないんやけど、そんなに酷かつたん？」

「あれは…酷いというレベルのものではなかつたぞ、特に両手首から先は骨しか残つていない損傷・・・いや、もうあれは損壊状態と言つてもいい状態だろう、万能薬を使つてもキチンと肉と神経が再生するか不安になる程だつたぞ」

「うへえ・・・」

「それだけでなく両手首から吹き出す出血もさることながら・・・」

「いや！もうええから！ちよつストツプストツプ！想像するだけでもキツイから堪忍してくれ!!」

「ふむ、そうだな・・・まあとりあえず応急処置を済ませた後に私が背負って回復魔法をかけながら地上に急いで帰還、その後すぐにディアンケヒト・ファミリアに預けたおかげで何とか一命を取り留めたわけだな」

今思い出しても何もかもがギリギリだった

あの時

フィンが駆け付けて吹き飛ばされたカイトを受け止めなければ、

その直後に着いた私の回復魔法が無ければ、

その後駆け付けたガレスの高級ポーションが無ければ

そしてディアンケヒト・ファミリアで輸血用の血が足りなければ。

このどれかが欠けているだけでカイトは今頃神々の言うところの天界とやらに向かつていたことだろう

カイトは運というものには恵まれているのかもしれない

(いや、そもそも運が良ければこのような事件に巻き込まれることはないか・・・それと

「まだ目覚めぬカイトの方も問題だが、それよりも問題は・・・」

「アイズたんやなー・・・」

「アイズだけではない、ラウルとアキも・・・特にルームメイトのラウルは相当ショックを受けている」

今回の件で助けを呼ぶためとはいえ、カイトとアイズを残して逃げる様になってしまったラウルとアキはかなりの責任を感じてしまっている

「でも2人が途中でガレスと合流できたおかげでカイトの応急処置に使うポーションが足りたんやろ? 大手柄やん」

「そう言っではいるのだがな・・・」

「言葉でわかれば苦労はない、かあ・・・」

未熟な内は誰しも足手まといにならぬ様にと、自分よりも実力が上の冒険者に負けじと無理をするものだが、今回のラウル達の行動はそのままに無理せず、正しい判断だったと間違いなく言えるものだ、しかし理屈と感情というものは都合良く一致するものではない、もし自分が強ければ、逃げなければ、今現在ラウル達はそういった後悔に

苦しんでいるのだろう。

「アイズに至っては——」

「せっかく良い感じに精神が落ち着いてきとつたのに、ちよつと前に戻つてもーたな——」

そう、ガレスからの報告で今回の事件以来、アイズはランクアップ前の様に無茶なダンジョンアタックをまた繰り返し始めたらしい

理由は私もロキも解っているが止めなければいけない、しかし、どうしても事件があつた夜に、あの子が私達の前で叫んだ慟哭が忘れられない、それを思い出すたびに止めるのを躊躇つてしまう

『私はまだ弱いままだった！守らなきゃ行けないのにつ！！今度こそ守らなきゃいけないのにつ！！私はっ・・・また・・・っ』

膝を抱えて泣き続けるアイズに掛ける言葉が思いつかず、泣き疲れて眠るまでただ頭を撫でることしかできなかつた

『また、守れなかつた』か・・・

「……そんなことはない、と言ったところで本人がそう思えなければ誰の言葉でも虚空を切るのみだろう」

「はあく……神様言うても自分の子供一人の悩みも解決できひんとは……無力な神やなあ、うち……」

その後は、私もロキもそれぞれ思うことがあり会話が途切れ、そのまま大通りの街道に出た所で都市内馬車を拾った、馬車内では軽い雑談とイシユタル・ファミアとの交渉内容に関するものに留めロキと共に本拠まで帰還した。

「んじゃ、あんがとなりヴェリア、明日は別のもんに護衛頼むからアイズとカイトのこと頼むな」

そう言つて手をヒラヒラ振つてロキはそのまま自分の部屋に帰つて行つた

(……様子を見に行つてみるか)

ロキに言われたからではないが、少し気になったので自分の部屋に帰る前にアイズの部屋を見に行つてみることにした

『コンコン』

扉の前まで来たのでノックをする

「アイズ、今時間はあるか？少し話があるのだが。」

返事がない

（寝てるのか？）

「アイズ、入るぞ」

仕方がないので許可はないが部屋に入らせてもらったが部屋は物気のことだった

（・・・いない？）

既に日が落ちて大分経っているにも関わらず未だアイズは部屋に帰ってきていなかった

（まさか、まだダンジョンに!?)

今のあの子のならやりかねない最悪の予想をしてしまう

急いでダンジョンに行こうと、ロビーに出たところで声が掛かった

「アイズならカイトの見舞いに行つたよ」

焦っているところに後ろから見知った声が掛かってきた

「フィン!? いや、そうか・・・カイトの所ということはデインアンケヒト・ファミリア

の療養所か」

教えてもらった内容にホッと安堵するが何故かフィンがニヤニヤしていた

「なんだ」

「ふふ、いやあ、ロキじゃ無いけど本当に母親みたいだなー、って思ってたね」

「わたしは未婚だ!!」

カクンと膝から崩れ落ちそうになるのを堪えて叫ぶ、つ、ついに、こいつまでそのネタで私をイジリにくるとはっ！

新たな頭痛の種に眉間にシワを寄せつつ文句を言おうとしたところに真面目な口調の言葉が帰ってきた

「・・・リヴェリア、アイズの方は任せてもいいかい」

「何だ、藪から棒に・・・」

「実は昨日からアイズだけじゃなくラウルのダンジョンアタックも自暴自棄になりかけてるって報告があつてね、それこそまるでアイズみたいに、彼らしくなく我武者羅にモンスターを狩ってるってね、アキの方は大丈夫みたいだけど・・・」

「どうやら先程ロキと話した内容と似たようなことのようにだ」

「ラウルの方はこっちでケアしておく、代わりに――」

「分かっている、ちようどここに來たのもアイズと今回の件について話をするためだったからな」

「助かるよ、やっぱり男は男同士、女は女同士じゃないと相談しにくいことや、わからないことってあるからね」

「なんだ、えらく弱氣じゃないか、そんなことだと嫁とやらを捕まえることはできんぞ？」

「耳に痛い話だねえ」

さっきの意趣返しにからかってやるが軽く肩をすくませるだけで受け流される

そんな風に気心の知れた同士で軽口を叩いていると

『だ、だだだだだだだ団長—————!!!』
本拠ホームの入り口からフィンを呼ぶ声が聞こえてきた

「なんだ？」

「この声、ラウルかな？」

噂をすれば、と言う奴だろうか、ラウルが全力疾走でこちらに向かつて走ってくる

「ラウルこつちだ」

「だ、団長！あの、カ、カイカカ」

「落ち着かんか」

ズビシ！と音がする程度の軽いチョップを食らわせる

「イタイ!?あ、副団長も、ちよ、ちよほど良かったす！」

「なにがだ？」

私が居てちよほど良いこと？

「カイトが！カイトが目を覚ましたんすよ!!」

「!?!」

暗い内容ばかりだった所に来た、ようやくの朗報にフィンと顔を見合わせる

「ふ、随分と寝坊助だったなカイトは、ようやく目を覚ましたか」

「カイトが目を覚ましたのは間違いなく本当のことなのかい？」

「はい！何せ起きたカイトとちゃんと話したんすかから！今はデイアンケヒト・

ファミリアの団員とアイズさんと・・・そのー・・・」

何故か最後の方でラウルが口ごもる

「まだ、誰か一緒に居るのかい？」

誰だ？思い当たるのはガレスや他の団員だが口ごもる理由が解らない

「その・・・カイトの知り合いだつて言う男神ヘルメスと、カイトの婚約者？つて言ってるヘルメス・ファミリア所属の子と一緒に・・・」

「・・・・・・・・・・は？」

いやいやいやいやいや！なんだそれは!?

婚約者がいるというのは聞いていたが冒険者!?!しかも別のファミリアの者だと!?

ラウルから話を聞いてからフィンが胃の辺りを押さえ始めた

「うう・・・胃が痛くなってきた・・・」

「私もだ・・・」

せっかく朗報だと思って聞いた内容の後に余計な情報が付いてきた、2人そろって胃がキリキリと締め付けられる感覚に襲われることになるとは、寝てても起きてても心配を掛けるのは変わらない困った奴だと改めて認識させられた。

「ラウル、とりあえずこの事を今すぐロキにも伝えてやってくれ」

「了解つす！」

敬礼しながら元気に走り去っていく姿からは先程フィンから聞いたような雰囲気を感じ取れない

「目が覚めたカイトと何かあったのかな？」

フィンもラウルの変化に気付いたようだ

「ラウルの変化も気になるがああの様子なら一旦保留にしても問題ないだろう、とりあえず、我々もカイトの様子を見に行くぞ、これだけ心配を掛けたんだ、愚痴の一つくらいは言つてやらねば気が済まん」

「一応、重傷の怪我人扱いだから程々にね？」

「分かっているさ、それよりもヘルメス・ファミリアか・・・」

「イシュタルの次はヘルメス、前の問題が解決しない内に次々と新たな問題が積み上がっていくな・・・」

しばらく待っているとロキとガレスを連れてラウルが降りてきたのでラウルに事情を聞きながらデリアンケヒト・ファミリアの療養所に5人で向かうことにした。

16：誤解×前進

||

《side：名無しの団長》

私はヘルメス・ファミリア団長の
????? ·
????? だ!!

何かモザイク的な物が入った様な気がするが気にするな、神々の言う所の設定上の都合という奴だ!

さて、そんな私だが現在、ありえなさすぎる目の前の光景に対して完全にフリーズ状態だ

え?全然フリーズしてない?

いやいや、このように思考していることさえ目の前の光景からの現実逃避なのだよ

で、だ。

私が何故フリーズしているのかというと・・・目の前で主神であるヘルメス様がアスファイに顔をボコボコにされたあげく吊るされていたからだ

「・・・おい、これはどういった状況だ？」

私の近くでその光景を遠巻きに見ていた他の団員に事情を聞いてみる

「ヘルメス様が金庫からお金をちよろまかして遊びの金に使ったそうです」

・・・全てを把握した

「な、なるほど、それでアスファイがあんなに怒っているのか」

アスファイはLv. 2の時点でこのファミリアの将来を、いや次期団長として期待されるほどの優秀な冒険者だ

その腕と明晰な頭脳を買われて今ではファミリアの財政責任者を担っている

アスファイの計算された財政手腕のおかげでファミリアの収入はウナギ登り、しかし時々我らの主神が金をちよろまかすせいでアスファイの完璧に計算された財政計画に綻びが生じたのだろう

「だ、団長、た、たすけてくれ・・・」

ヘルメス様が自分に向かって助けを求めてくる、自業自得だと思いつつもさすがに哀

れみの気持ちが一湧いてくる・・・いや、それ以前に主神だしな

「ア、アスファイ、ヘルメス様も反省しているようだし、もうその辺で・・・」

「では、次の遠征での団長の分け前から捻出を——」

「てめえ、こらボケ神もつと反省しろやあ!!」

「裏切り者お!!」

すまないヘルメス様、この次の遠征で儲けた金で高級娼館にこうと思ってるんだ、殴られて吊るされるだけでアスファイの気が済むのなら耐えてくれ

「ア、アスファイ、等価交換といかないか?」

なにやらヘルメス様がささやかな抵抗を試みている、アスファイは物等で釣られる様な性格をしていないのは重々承知のはずだが?

「何とです、金庫からちよろまかした金を今すぐに倍にして補填するのなら降ろしますか?」

「ば、倍はさすがにちよつと・・・でもこの情報は中々のものだけ?」

そこでヘルメス様がニヤリと笑った・・・逆さに吊るされた状態で顔が腫れてなければ様になっていただろう

「いや、俺が娼館で手に入れた情報と——オボボボボ!」

「なるほど、私達が血を流し、汗水流して稼いだお金を娼館そのようなことに使った．．．と」

ちなみに逆さ吊り状態であるヘルメス様の頭のすぐ下には水の入ったでかいバケツが設置しており、アスフィの作り出した力のいらぬ魔道具の滑車と連動、アスフィの意思一つでヘルメス様が上下して水責めも出来るようになってる

だが、さすがにこれはやりすぎでは？

そう思ったのは私だけではないようで、他の団員もさすがに止めに入る

「ア、アスフィ、これって拷も——」「お仕置です」

「いや、どうみても、ごう」「ただのお仕置です」

「．．．．．」

「ただの軽いお仕置です、それともあなた方がこのアホが散財した分を補填してくれま
すか？」

「ちなみに、どれくらいの金額なの？」

「．．．．．これくらいです」

「「「．．．．．!?!」」」

アスフィが懐から出した紙に書いてある金額を見て私達は何も言えなくなつた

我らが主神ヘルメスよ、無力な私達を御許し下さい。

「オボベデエエエエ!!」ゴボゴボゴボ

間。

しばらくの間、拷m・・・お仕置を見て見ぬ振りをしていると

「なんでそれを早く言わないんですか!!!」

今日一番の怒声の本拠ホーム中に響き渡った。

言わずもがなヘルメス様とアスファイだった

先程ヘルメス様が口にした娼館で手に入れた情報とやらだろうか？

「場所は!?!いえ、その前に彼は無事なんですか!?!」

「く、詳しいことまでは、わ、わからな——グベエ!?!」

ぶおん、という音と共にヘルメス様が宙に舞い潰れたカエルのような声を出して着地した

「・・・・・・・・団長」

「は、はい!？」

その時のアスフィの迫力は得も言えぬ迫力があり、何故か敬語になってしまいう程だった

「ちよつと休暇を取ります、ついでにこのアホもお借りします」

「え……ちよ、それは困」

「……イ イ デ ス ヨ ネ ?」

普段あまり表情を動かすことのないアスフィのキラキラと輝くとびきりの笑顔が逆に怖かった

「イエス・マム!!」

私はその時初めて知った、女性の笑顔とは威嚇なのだということを。

《side out:名無しの団長》

|||||

||

《Side：ラウル》

○7年X月ボックス日

情けないっす悔しいっす

自分は友を、家族を見捨てて逃げ出したっす

救援を呼ぶためと行っても自分たちの足じやダンジョン10階層からじやどう頑

張っても片道1時間以上かかるっす

それがわかっててもその場を離脱するしかなかったっす

途中でガレスさんと出会えた時は奇跡とは存在するって思ったっすよ．．．でも自分たちが駆け付けたときには全てが終わっていて．．．ルームメイトのカイトは文字通りぐちゃぐちゃになっていて

団長や副団長、ガレスさんの焦ったような声が周りに響き渡るっすけど頭に入ってこなくて、自分は．．．自分は．．．

カイトはその後、何とか一命を取り留めたみたいですが、あの時の地に足が着いているのにまるで浮いているかのような気持ちの悪い感覚は一生忘れることが出来な
いっす……

その日、カイトのいない部屋で寝ようとしても、今日のカイトの姿がまぶたの裏に焼き付いて眠れなかつたっす。

○7年X月金りんご日

あれから三日経ったっす

自分はゴミっす、ただの生ゴミ、いや、それ以下のタダ生きてるだけの血袋の塊

ゴミが少しでも価値を上げるには強くなること

もう、あんな思いはしたくない。

○7年X月銀りんご日

今日、ダンジョンでモンスターを狩っていたらガレスさんにアイズさんみたいだと言われたっす

・・・どこがっすか？

自分とアイズさんとは実力が違いすぎて話にならないというのに。

○7年X月銅りんご日

カイトの見舞いに言ったらバツタリ、アイズさんと出会ったっす

そのまま流れで一緒にカイトの病室に行くことになったっすよ

病室のベットで寝ているカイトの姿はすっかり元通りになってるっすけど、自分にはまだあの時のカイトの姿が忘れられないっす

しばらくの間、病室はカイトを見つめる自分とアイズさんの間で静かだったっすけど

「いめんさいこ」

突然アイズさんが謝ってきたっす

何故謝るのか事情を聞いたら、一番レベルの高い自分が守らなければならなかったのに守ることができなかつたからと言われたっす

昨日のガレスさんといい今日のアイズさんといい

なにを言ってるんすか

自分は・・・守るところか一緒に闘うことすらできなかつたというのに・・・っ

○7年X月聖晶石日

今日はカイトが目を覚ましたっす!!

目を覚ましたカイトに今回の件を謝つたらデコピンを喰らってお説教までされて・・・でもその後の言葉で何もかもが救われた気分になつたす、それは自分だけじゃなくアイ

ズさんも同じ様な感じになってたつすよ！

なんていうか、カイトはやっぱ色々でけー男つすね、同期なのに器の違いってものを感じたつす。

あ、あとカイトが目を覚ましてからすぐ後にちよつとしたゴタゴタもあつたんすけど、カイトの彼女つて、めちやくちやかわいい娘だったすよ！．．．ウラメシイ

まあ、別のファミリアの眷属つてことでロキと相手の神ヘルメスと一悶着あつたみたいすけど．．．自分は外で人払い兼、見張り役を命じられたので詳しい内容までは聞かせてもらえなかつたつす

まあ、とにかくカイトが無事でよかつたつすよ!!

．．．本当に良かったつす、神は既に地上に居るけれど．．．それでも、もし今回の奇跡を起こした神が居るのなら

ただ、ありがとう。

そう伝えたいつす。

《side out : ラウル》

||

|||||

17：幸運?×不運?

夢を見た

何故か俺の手首から先だけが妙に美肌で超美白になる夢だ

(・・・ナニコレ)

何故に手首だけ？

いやいや、それ以前に俺は確か敵を倒すために、今の俺では撃てないはずの『昼虎』という超を付けても足りないような技を『念』＋『八門遁甲の陣』の二重発動というオーバードーピングの様な無茶をして本来の威力より大分弱体化したとはいえ強制発動したはず・・・まさか!?

『昼虎』に美白効果が!?

.....。

ふむ・・・何故だろう、『チガウ ソウジヤナイ』と、たくさんの天の声が聞こえる気がする。

とりあえず改めて自分の手を良く見てみると俺の手は美白効果で白く

なったのでは、もちろんなく、ただ単に

骨 になっていただけだった♡。

|||||

「アインズさまあああ!?!」

荒い息と共にベッドから起き上がると、そこは見知らぬ部屋だった、ちなみにそれなりに広い

(!?!?!?!?)

知らない部屋で寝ていることに混乱するも、すぐに先程見た映像を思い出した
(それよりも手だ!! 俺の手は!?!)

急いで自分の手を確認すると

「・・・ある、骨じゃない、普通の手だ・・・」

ためしに握ったり開いたりするが、何の問題もなく動くいつも通りの手があることに
落ち着く

「ゆ・・・ドリカム？」

すまん、ウソだ、まだめっちゃ混乱してました

そんな感じで、まっつったく現状把握ができずに戸惑っていると、俺しか居ないと一
目でわかるこの部屋唯一のドアが開いた

「っ!？」

警戒し、【円】を張るのに一瞬

(ん? これ・・・ラウルか?)

だが、そこから入ってくるのがラウルとわかりホッと気を抜く

「わ わ わ、忘れ物♪」

ラウルが変な歌を歌いながら部屋に入ってくる、てか何でその歌知ってんだ・・・歌
の内容からして先程までここに居たのだろうか?

とりあえず、声を掛けて見る

「オッスー」おら悟空!!といっても通じないので前文だけ言ってみる

「・・・エ」

か!?

さつきは気が動転して病室を飛び出してアイズさん呼びに行っちゃったすけど、もうちよつと何か話をすべきだったす・・・

「ア、アイズさん、先に行つてくださいます、俺は後で追いつきますから」

「・・・ん、・・・ありがとう」

俺の速度に合わせて走つてくれていたアイズさんが一気に加速して見えなくなつたす

「ぜえ、ぜえ、げっほ、はあ」

全力の走りから小走り程度に抑える

こちらは全力疾走でもアイズさんからしてみれば全然遅い速度、それが今のアイズさんと俺の実力差

(これのどこが似てるんすか、ガレスさん・・・)

先日言われたことに対して改めて疑問しか湧いてこない

そうやって、アイズさんに遅れること十数分、ようやくデイアンケヒト・ファミリアの療養所に着いたす

・・・着いたんすけど

「あの、大丈夫すか? もしもしくし?」

なんか療養所の前で見知らぬ男神がボコボコにされた状態で野晒しにされてたつす、早くカイトに会いたいですけど・・・さすがにこれを無視して行くのは、ちよつと気が咎めて無理だったつす。

「うう・・・犯人・・・は・・・ヤス・・・」ガク

「ちよつ!? 遺言みたいなこと言つて気を失わないでください!？」

仕方が無いので手持ちの安いポーシヨンを飲ませてあげたつす

「んぐ・・・んぐ・・・ぷっは! 生き返ったあ!!」

「そ、そりやよかつたつすね・・・」

安いと言つても俺の手持ちじゃそう易々と買える物じゃないんで、そう一気飲みされると複雑つす

「いやあ、おかげで助かったよ! あのままじゃ下手したら死んでたぜ、まったくアスフィの奴め、加減を知らんのか、ちよつとファミリアの金をちよろまかしたくらいでボコボコにするとか、まったく酷いと思わないか!？」 親切な少年!!」

「めちやくちや自業自得じゃないつすか」

俺のポーシヨンは基本的に体力回復なので相変わらずこの男神はボロボロっすけど、とりあえず会話できるくらいまで回復できたみたいっす

「ふむ、それにしてもここは・・・ディアンケヒトの療養所? ってことはアスフィの奴、カイトに会いに行つたのか」

「っ!?!」

男神の口からカイトの名前が出てきたことに驚き、警戒心が煽られる

そんなこちらの様子に気付いた男神がこちらを見てニヤリと笑う

「おいおい、そんなに警戒しなくてもいいじゃないか」

「あんだ・・・一体何者っすかっ!?!」

「俺は無力なただの神だぜ? 地上じゃ君達の方が遥かに強いんだ、もつとリラックスしてくれてもいいと思うんだが? なあ、ラウル・ノールド君?」

「!?!」

(何で俺の名前を知ってるっすか!?!)

お互い、・・・いや自分にだけ緊張が走る、相手は先程からまったく警戒も緊張もしていない、この男神が言ったように地上では神力を自ら封じている神々のほとんどは人より、特に恩恵を授かった地上の人間より弱い

そして今、正体不明の男神に対して自分は敵意に近い感情を発しているというのに、この神は今だに余裕の表情を変えない、それがブラフなのかそれとも別に何かあるのか・・・不気味な雰囲気気に気押されて身動きが出来なくなる

そんな風に硬直していると

「ぶっ、・・・ククククク、あっはっはっはっはっは」

突然目の前の神が大笑いし始めた

「何がおかしいっすか!？」

「い、いや、すまないラウル君、ちょっとからかったんだけど、あっはっはっはっは『あんな!』いったいなにものだあ!』ってぶっ!あっはっはっはっはっはっは」

この神、マジで笑ってたっす

「マジでなんなんすか・・・」

明らかに向こうはこちらへの敵意がないと感じられた

「~~~~はあ、笑った笑った、いやすまないね、本当に警戒はしなくていいぜ、俺はカイトの敵じゃあない、ちなみにカイトとの付き合いの長さでいえばかれこれ数年の付き合いになる、ルームメイトである君の数はあいつのを知ってるぜ?」

嫉妬しないでくれよ?と叫びつつウインクしてきたっす

「はいい!？」

「さて、改めて自己紹介だ、俺はカイトの恋人であるアスフィの所属するファミリアの主神ヘルメス!、よろしく、ラウル君!」

「え、は、恋人!?!はあ!?!えええええ!?!」

脳の処理が追いつかない情報内容に驚くことしか出来なかつたつす。

「ほらほら、ブーツとしてないでカイトの部屋まで案内してくれ、まだ入院中なんだろう? 意識の無い彼と会っても面白くないが顔を見るくらいはしてやらないとね」

「え、いや、実はさつきカイトの意識が戻って」

「ほう!そいつは重畳だ!なおさら会いたくなってきたよ、久しぶりだなく、何ヶ月ぶりだろう、アスフィとはコソコソ会ってたみたいだけど・・・」

案内しろって言いつつズカズカと療養所に入っていく神ヘルメス

仕方が無いのでカイトの部屋まで案内したんすけど・・・

「・・・んなつ!?!」

「はっはっはっはっは!相変わらず面白いなカイトは!!」

俺と神ヘルメスが着いたカイトの部屋では

入り口のドアが細切れになり

「あべし!？」

ビンタされた

ナニコレ、やだコレ

俺つて目が覚めてから何回ナニコレつて言えば良いの？

まだあんの？

こんな理不尽な展開がまだあんの？

「あ、あのですね、アスファイさん？キスは嬉しいんだけど、別に俺は叩かれて喜ぶ趣味は」
そこから先は言葉が続かなかった

殴られた頬をさすりながらこちらを見下ろすアスファイを見上げると

泣いていた。

もちろん俺が——ではない。

いつも気丈でプライド高く、美しさを持ちながらもかわいらしさも併せ持つ俺の愛しい人が

泣いていた。

ポロポロ、ポロポロと真珠のような大粒の涙を止めることなく、隠すこと無く

泣いていた。

その姿はまるで、迷子の幼子がようやく親を見つけたときの、それまでの恐怖を思い出して泣くときの様な、そんな困ってしまう表情で。

「え……と……うお!？」

呆然としているところに泣いている顔を隠すように、俺の胸に押しつけるようにして抱き付いてきた

「……アスファイ?」

「わ……わ・たし……あ、あなが意識不明のじゆうた……い、でここ……に、運び込まれたって……きいて……心配で……死ぬほど心配でえ……よかった、無事で……よか……たっ 生きてて……よかった……っ」

そこから先は言葉にならず、ただただ涙を流す声と嗚咽のみが続いた

「え……う……えっ」と

混乱しつつも胸の中のアスファイの背中に手を伸ばす

泣き止まない赤子をあやすように、俺はただ、ゆつくりと背中をさすることしかできなかつた

その時になって、まだ俺が村に居た頃に、じいちゃんが言っていたことを今更ながら思い出す

「カイト覚えておけ、女の涙はのう、ありやもう男性特攻を持った兵器じゃよ、男があれに勝てないのは世界の理と言つてもええじやろうなあ・・・」

ああ・・・違う、じいちゃんの言うとおりで
卑怯すぎるだろ、これ

惚れ直しちまったじゃねえか。

・・・惚気かよつて？ ああ、そうだよ惚気だよ、文句あつか！

「落ち着いたか？」

「・・・ン」

返事の代わりに俺の腕の中で頷くようにアスフィの頭部がモゾモゾ動く
・・・かわいいかよっ!!

閑話休題

ようやくアスフィが落ち着いてきたので話を切り出す

「・・・すまん、心配掛けちゃったか」

「当たり前です」

今度は小さな声できちんと返事が返ってくる

「ありがとな・・・でも・・・そっか」

「・・・?」

「いや、実はついさつき、意識が戻ったばかりみたいだな? たぶんアスフィが会いに来てくれるぞ〜! って何となく俺の勤が囁いてくれたのかも、だから目覚めたのかもしれないな・・・ふふ、アスフィはやっぱ俺の女神だな」

「~~~~~!!」

恥ずかしくなったのか、アスフィが俺の胸にさらに顔をゴリゴリと押しつけて顔を隠そうとしてくる

(ナニコノ かわいい生き物!?)

恥ずかしがっているアスフィを微笑ましく思いつつも、現在の状況をようやく再認識した瞬間

脳に電撃が走る――。

彼氏と彼女

密室

時間は夜

雰囲気は最高ボルテージ

何も起こらないわけがなくっ!!

そんな事を考えているとどこからか声が聞こえてきた

ゆけえええええカイトオオオオオオ! 今こそ大人の階段を昇るときぞおおおお!!

じいちゃん!?

そのままいくのじゃあああああ、今こそ最終^{ラグナロク}戦争の時いいいい!!

俺の中のじいちゃん? が俺の背中を後押ししてくる

でも、じいちゃん俺まだ13歳なんだけど！アスファイとか14・・・いやもう15になっただったか・・・15歳なんですけど!?

安心せよおおおお、この世界では12歳から成人扱いじゃああああ

マジかよじいちゃん!?

マジのマジじゃああああああ

おなごに恥をかかせるなあああああきらかに相手もわかっておるうううう

なぬう!?

そこで顔を桃色に染めたアスファイと目が合う、その瞳は確かに艶を持って俺を見つめていた

・・・ゴクリンコ。

喉が鳴る!

鳴ってしまふ!!

いやさ、鳴らいでかあ!!!

ゆけえええええ我が孫よおおおお

うおおおお！行くぜじいちゃん!!俺はいくぜ!!!

「・・・アスファイ」

「・・・カイト」

寝ている体勢のまま、上に乗ったアスファイのリボンをはずす

それだけで年齢に見合わない程に大きく育った胸の一部が露出する

初めての緊張と焦りで手が震えてくるが、今度はお返しとばかりに潤んだ瞳でアスファイが俺の服のボタンを外していく

お互いの荒い息づかいのみが妙に響き、心臓にいたっては息をつく間もないくらい早鐘を打っている

そこで

聞き取れないほどの斬激音と同時にドアが細切れになり――

「カイトから離れて!!」

今からまさにというタイミングでお嬢が部屋に突っ込んできた。

彼氏と彼女 ただし事情を知っている者は少ない

密室 ではあるものの鍵が掛かっているどころか半開き状態

時間は夜 といっても陽が沈んだばかり

雰囲気は最高ボルテージ のせいでお互い周りが目に入らなくなってる

確かに・・・何も起こらないわけがなかった・・・

18：羞恥×会合

《side：アイズ》

今日もカイトは目を覚まさなかった。

ダンジョン帰りに見舞いに寄ってはみたけど昨日と変わらずその瞳は閉じたままだ
私と同じように見舞いに来ていたラウルさんと帰路に着く

途中でラウルさんがカイトの部屋に忘れ物をしたらしく取りに戻っていった

その姿を見送ってから十数分後、本^{ホーム}抛への距離が半分を切ったところだったと思う
「アイズさああああああああん！」

大声で私を呼ぶ声が聞こえてきた

(ラウルさん?)

どうしたのだろうか

「カ、カカカカツ・・・カイトが！　カイトが目を覚ましたつす!!」
「!？」

（カイトが目を覚ました!? 本当に!?!・・・でも）

「アイズさん！何してるつすか!?　行くつすよ!!」

その事実には呆然となるがラウルさんの声で正気に戻る

「・・・うん!!」

その後はラウルさんに言われ、足の速い私が先んじてカイトに会いに行つた

何も考えずに、とにかくカイトの部屋を目指してただ走る

しかし、療養所の中に入り、いざカイトの部屋へと向かおうとしたところで足が止まってしまう

（何を話せばいいんだろう・・・）

今回の事件で昏睡状態になってしまった原因は自分が未熟だったせいだ

本来なら守るべき立場の自分が逆に守られてしまった、そして実は、負い目を感じている理由はそれだけではない

そのことを改めて考えてしまい、どのような顔をして会えば良いのか今更になって怖

くなってくる

(・・・でも)

ここで立ち止まっても仕方が無い、まずは意識の戻ったカイトに会うわなければ何もできない

止めていた歩みを再開させ、カイトが居る部屋の近くまで来たとき

扉が半開きになっていることに気付く

(ラウルさん開けっ放しで来たのかな?)

今思い返しても先程までのラウルさんは相当焦っていたように見えたので仕方が無いのかもしれない

だが

「っ・・・!?!」

開いた扉の隙間から見えた光景に息が止まる

何者かがカイトに馬乗りになり首を絞めている様に見えた

弛緩していた考え、思い、全てが冷め、それが一気に殺意へと切り替わる

実は、今回の件でアイズが必要以上に罪悪感を感じていたのには理由があった

初めて人との本気の殺し合い、それは、まだ幼いアイズに攻撃を躊躇わせるには十分であった、そのためフリユネ・ジャミールに放った最後の必殺の一撃も無意識ではあるが手加減した威力となり、結果としてそれがカイトが今回の昏睡状態に陥ってしまうことに繋がってしまった

故に

今のアイズは敵と認識すれば手加減という枷が外れていた

人であっても敵であれば一切の躊躇をしないと固く誓っていた

(もう・・・同じ過ちは犯さないっ!!)

「カイトから離れてっ!!」

相手に防御も反撃の隙も与えない、障害になる扉を切り刻み相手の意表を突いた速攻

しかし、それでも相手はこちらの攻撃を躲してきた

———
違う。

見間違いで無ければカイトが何故か相手を突き飛ばした様に見えた

いや、敵の注意がこちらに向いた隙を突いて相手を突き飛ばしたのだろう

タイミング悪くこちらとカイトの攻撃が被ってしまったことによる失敗と判断

即座に追撃を――。

そう思ったところでカイトが何故か敵との間に割り込んだ

どうして邪魔するの!?

「カイトどいて！そいつ殺せない!!」

「お、お嬢、落ち着けえ！こいつは俺の知り合いだから!! 敵じゃないから!!!」

「……え?」

カイトの発言で一瞬、頭の中が真っ白になる

「え……でも……その人、カイトの首を絞めてた」

そう、確かに自分は何者かがカイトの首を絞めているのを見たのだ

「誤解!誤解だつて!むしろ逆でアスフィは俺のボタンを外そうとしてただけで……あ」

「ボタン……?」

言われてみればカイトの入院服であるシャツのボタン部分が中途半端に外れていた

わざわざあんな体勢で?

そこで、敵だと思われた人物に目を移す

「どうやら相手は女性のようだ、薄水色の綺麗な髪に眼鏡をかけたカイトと同じか少し上くらいの女の子だ」

私と目が合うと、何故か顔を真っ赤にして目をそらされた

「どうやら本当に敵ではないらしい」

「・・・でも、何であんな体勢でボタンを？」

「うえ!?・・・あー・・・それはだな、その、ほら・・・俺ってばさつき意識が戻ったばかりでちよつと寝苦しくてさボタンを外そうと思っただけど起きたばかりで身体を動かすにくいなーって思ってるところにちよつとアスファイが見舞いに来てくれたからついでにちよつとボタンを外してもらおうと思っただけアスファイが思いの外不器用でな全然はげせないんだわそれで色々やつてる内にあんな体勢になっちゃっていやー大変だったよなアスファイ!!」

「え!?・・・ええ!!そうですね!!我ながらマジックメイカーであるというのにこの不器用さには辟易してしまいます、不器用すぎて何故か私のリボンまで外れてしまって本当に困ってしまいますねわたしもちよつとはげせないくらいでムキになってしまってあんな体勢でボタンを外すことになってしまふなんてええもう自分の不器用さにはあきれてしまいます!!」

「ははははははははははははははははっ!!」

すごい勢いで2人が事情をしゃべりだし、お互い納得し合って何故か笑い出した

(・・・?? でも、まあ・・・いいかな)

「よくわからないけど、・・・カイトが無事でよかった」

何故だか分からないけど・・・このとき私は久しぶりに自然に笑えた気がした

「つつぐ!!」

カイトが突然、胸を押しさえて苦しそうな表情になった

「カイト!?! どうしたのもしかしてどこか痛むの!?!」

「・・・いや、大丈夫だ・・・ちよつと良心の呵責に押しつぶされそうになったただだから」

「・・・???」

またしてもよく分からないが、とりあえず大事ではないようだ

「・・・えつとそれでこつちの人は?」

「ん?・・・ああ、すまんすまん紹介が遅れたな、彼女は――」

「ごほん！・・・初めまして『劍姫』、私はアスフィ・アル・アンドロメダ、ヘルメス・ファミリア所属の者です、先程は誤解を与えられる様なことになってしまい申し訳ありません。」

ヘルメス・ファミリア？

いや、疑問に思うのは後だ、まずは先程のことを謝らねばならない

「は、初めまして・・・あの、こちらこそ さつきはごめんなさい、勘違いで斬りかかってしまつて・・・」

「あなたはカイトの身を心配してあの様なことをしたのでしよう？ なら私はあなたを怒ることは出来ません・・・もし私が同じ光景を見たら・・・そうですね、私は見間違ひなどしませんから・・・自分を抑える自信がありませんねえ・・・」

何やら意味深な感じで最後の方はカイトの方を見ながら言つていた

カイトの方は、そんな事しねーよ、と軽くあしらうように手を振つていたがどういう意味なのだろうか？

「それにしても、お嬢的には久しぶりって言えいいのか？」

「うん、10日ぶり」

「はあ!?!・・・俺そんなに寝てたの!?!」

「知らなかったのですか？」

アスフイさんが呆れたようにため息を着いている

「いや、さつきも言ったけどマジで目が覚めたばっかなんだよ、お嬢、この10日間で何か変わったこととかあつたら教えてくれないか？」

「うん」

その後に私は、この10日の間に何が起こったのかを、私が知る限り説明していった
事件後カイトが瀕死でここに運びこまれたこと

首謀者はイシユタル・ファミアアのL.V. 3、それもランクアップ間近の『男殺し』アンドロトロノス
ことフリユネ・ジャミールであったこと

今のオラリオの状況ではイシユタル・ファミアアに直接的な報復ができないこと

現在、ロキがイシユタルに対して報復の代わりの制裁を加えるために神イシユタルと直接話し合いをしているということ

そして最後に、ラウルと自分が責任を感じていること

「……いめんなさん」

全てを話し終わった後に改めて私は頭を下げた謝った

何故謝る必要があるのかと、カイトに聞かれたので頭を下げたまま答える

今回、自分が相手に手加減を加えてしまったせいでのこのような事態になってしまったこと等を伝えた。

そしたら――

「お嬢、顔を上げてくれ」

そう言われたので顔を上げると

ビシ!!

「あう」

額にデコピンをされた

「馬鹿野郎……とりあえずお嬢、ちよつとここに正座な」

「……」

罰か何かだろうか、でもその程度の罰で許されるものではない

「いいか？ あの時の俺たちはパーティだ、そんなもってLv. 1とはいえ一応俺がリーダーだ、その俺の判断でこうなったんなら……そりや俺の責任だ」

「でも！「確かに！……お嬢やラウル達が責任を感じる必要は全く無いとは言わない、だが責任の感じすぎはダメだ」

「でも私はLv. 2で、守らなきゃいけないかったのに」

「別にいいだろ、お嬢――、俺たちは全員生きてダンジョンから帰れたんだ、それ

でいいじゃねえか、でもそうだなそれでも言うべき事があるとしたら」
カイトの手が私の頭を優しく撫でてくれる

お疲れ様。

こんくらいのもんだろ？ ああの時の様にニカツと笑いながらそう言った。

「あ」

それだけで心の闇が晴れ渡っていく

事件後からずっと私を縛って苦しめていた何か霧散していく

何故だろう、とてもポカポカするのに目がぼやけるのは

何故だろう、とても気分が良いのに涙が流れるのは

何故だろう、何故だろう、何故だろう

幸せだった昔を、父を、母を、皆を思い出すのは

不思議な感覚だった、まるで自分に兄が出来たような、そんな変な感じ

不思議な感情に困惑している内に、ラウルさんと神ヘルメスが現れ、ラウルさんも私と同じようにカイトと今回の件の話をして説教されていた

お疲れさん

こちらの頬をゴムのように引つ張りながら好き放題にしつつロキが聞いてくる
「にやにがだ」

扉のことなのか、それともヘルメスのことなのか、アスフィのことなのか、代名詞が
指すこれが多くて特定できない

っていうか俺の顔で遊ぶのをいい加減止めろ

「せやなー、それじゃまずこの胡散臭い神との関係からやな」

「別にそんなに大した話じゃない、この胡散臭い馬鹿との出会いは数年前からでな・・・」
「ねえ、ナチュラルに俺をデイスるの止めてくんない？」

無視して俺はヘルメスとはオラリオに来る前、住んでいた村の近くにある遺跡の調査
とやらで訪れた際に何度か会っていたことを話した

そしてその際に同行していたアスフィと何度か会う内にお互い恋仲になり将来を約
束した仲であるということもついでに話す。

話し終わった後で、ほとんどの者が顔を苦渋に染める

その中でロキが口を開く

「カイト、知つとる思うけどな、異なるファミリアの者が一緒になるいうんはかなり難し

いことなんやで？ そりや例えばファイたんとかこの子とかとやったら、うちとファイたんの仲がええから問題ないかもしれんけど、それですらかなり難しいんや」

「知ってる」

ちなみにファイたんと言うのは世界一の規模と実績を誇るオラリオ最大の鍛冶ファミリアである、ファミリア・ファミリアの主神、燃えるような灼髪に右目の眼帯が有名な神ファミリアのことだ

「やったら、何でうちのとこに入ったんや？ その子がヘルメスんとこの眷属なら・・・嫌やけど！めちやくちや嫌やけど!!・・・そのままいつのファミリアに入った方がよかつたんちゃう？」

自分の眷属に、他の派閥のファミリアに入った方が良かったのでは、そう言ったときにロキの顔はとても嫌そうで苦しそうな表情だった

そんなことを実は眷属への愛が人一倍強い女神に言わせてしまったことを申し訳なく思う

反論するために、ロキが来てから静かにしていたアスフィにアイコンタクトで確認を取る

「・・・かまいませんよ」

話しても言いという許可が出たので全てを話すことにする、最悪このファミリアを出

て行くことになるかもしれないが覚悟の上だ。

「入団での面接でも言ったが俺は婚約者、そこにいるアスファイと一緒に、アスファイの親にも認められたい、そのためには世界に轟くような名声がいる、ここまでは話したよな？」

確認を取りつつ話を続ける

「ヘルメスのファミリアはダンジョン探索がメインじゃない、色んな商売にも手を出してるから、強くなりたいた俺の目的とは微妙に合致しないんだ、そりゃあ、ヘルメスの所でもダンジョンには潜れるには潜れるが、俺が求める名声つてのは中途半端な名声じゃ駄目なんだ・・・何故なら、アスファイの親は、とある国の王様、つまりアスファイはとある国家の王族なんだ、ただの村人だった俺が認められるには冗談とか、目標とか、夢じゃない、俺は・・・本当の意味で世界に轟くほどの栄誉が欲しいんだ・・・」

俺の話した内容に全ての事情を知らなかったロキ・ファミリアの面々が絶句

特にアスファイが王族であるということ、そして俺が夢物語のような英雄になりたいという台詞に啞然としている

だが、俺は本当にそれを目指しているんだ

「・・・ロキ、もしアスファイとの仲が認められないなら、俺は・・・」

そこから先は言葉にできない、したくない

まだ半年とはいえ家族同然……いや、もはや自分にとっての第二の家族と言ってもいい帰るべき場所になっているところを辞めるなど……

だが

それでも

課程のために目的をあきらめるなど本末転倒もいい話だ

——それだけは絶対に出来ない。

……

部屋に沈黙が続く

それを破ったのは意外にもヘルメスだった

「……ロキ、取引と行くこう」

「……なんやねん」

「今後、俺たちのファミリアはそっちのファミリアの依頼を優先的に受ける、もし眷属の中に遠く離れた家族に手紙や物を贈りたいといったものもあれば他よりも優先しよう、どうだい？ 2人の仲を認めるとはいかなくとも黙認するくらいはしてもらえないか、

どうせ今すぐどうこうなるものではないだろう?」

「ヘルメス・・・お前・・・」

「気にするな俺と君の仲だろう?」

感謝の言葉を言おうと思つたがこちらに向かつてウインクしてきたので言う気が失せた

「・・・なんか気持ち悪」

「ははははは!!照れるな照れるな☒」

「照れてねーよ!」

たとえ照れていてもこいつにだけはそんな事言いたくない

そんな風に少し場の雰囲気が弛緩し始めたとき

「・・・~~~~っだああああああああああ、わかつた!うちの負けやあ!!好きにせえ!!」

ロキが折れてくれた

「・・・ロキ」

「ただしや!さつき言つたヘルメスの条件は全部飲んでもらうで!うちには森から出てきたエルフの子がぎよーさんおるから覚悟せえよ!!」

ビシイっとヘルメスに指を指して宣言するロキ

「わかつているさ、俺はヘルメスだぜ？約束は守るよ」

それに対して軽い調子で返答するヘルメス

軽く受け流されたロキは不機嫌になり、乱暴に椅子に腰掛ける

「・・・ふん、それにしてもお前が眷属のために・・・いやそれ以外の者のためにも動く甲斐性があつたとは思えないんやけどなあ」

「なに、偶には子供の機嫌を取ってやらないとね、これでも自分の子を俺なりにではあるが大切に思ってるんだぜ？」

まだ、神々の間で確執がありそうだがとりあえず話はまとまったと判断してもいいのだろうか

(・・・やったなアスファイ)

(はい・・・カイトもお疲れ様です)

アスファイと無言で目を合わせお互い、喜びをあらわにする

そうやってようやく話が平和にまとまり後は解散かと思われたとき

「それはそうとカイト、さっきは聞きそびれてしまったんだが・・・何で扉が細切れになつてるんだ？」

ヘルメスのバカがとんでもない爆弾を投下してきやがった

(くつ、誤魔化せたとおもったんだが・・・)

「あー・・・それな、いや、実は俺の部屋に居たアスフィを襲撃に来た敵対派閥の刺客と勘違いしたお嬢が——」

仕方が無いので嘘を混ぜず、そうなってしまった原因を話さないようにいい訳をする

「・・・ふーん、『劍姫』がねえ？」

「アイズたんだったら・・・お茶目やなあ☆」

ロキ達の後ろでは今の話を聞いたフィン達も苦笑い、リヴェリアは例によって例の如く、頭痛を堪えるように眉間のシワをもんでいる

「まあ、そういうわけで扉がご臨終なさってしまったというわけだ」

(ヨツシャ！イケる！このまま誤魔化しきれる！)

そう勝利を確信してしまったのがいけなかったのか

「ん？・・・それは本当のことなのかなあ？」

ヘルメスの野郎が何かに気付きやがった

(こ、こいつ 余計なことを言うんじゃないか!!)

「カイトくちよ〜つと、質問に答えてくれるかな、一つだけでいいんだよ、うん一つだけ」
 「な、なんだ、よ」

ニヤ〜つとでも聞こえてきそうな笑みでこちらを向くヘルメス、嫌な予感しかしない
 「アスファイと何か『いや〜ん♥』なことでもしてた？」

「ブツ!?!」

俺とアスファイが同時に吹いた、まさかここまでド直球な質問が来るとは!?

「つ………」

それに対する俺の答えは沈黙、

地上の子は神々に対して嘘をつくことが出来ない、より正確に言うならば嘘をついてもすぐにそれが嘘とわかってしまう

そのためここで、それを拒否してもすぐに嘘だとバレる

だが、真つ正直に、「ハイしてました、でも未遂なんで無罪です」

——なんて言えるわけがない。

かといってこのまま沈黙を続けるのは肯定しているのときほど変わらない

(助けてクラピカア!!得意のクラピカ理論で助けてくれえ!!)

非情なるかな

偉大なクラピカ理論の提唱者、クラピカの「沈黙こそが正解」もここでは通じない

(もう・・・万事休すなのかつ・・・俺に救いの手はないのか!?)

そう絶望しかけたとき、俺の肩に優しく触れる手が置かれた

「・・・ロキ?」

唯一の希望に一縷の望みを懸け、振り向いた先で見たロキの顔は

「ホッホーウ? それでそれで? カイトー? ウチも続き聞きたいわ、ほほう? ほほう?」

悪戯小僧・百割増しみたいな顔でこちらを煽ってきた

「ロキイイイイイイ!! 貴様もかあ!!」

まさかのロキの裏切りである。

「ほほう? ロキ、君も気になるかい?」

「ほほう? 何、当たり前のこと言うんねん、自分の子供の貞操やぞ? こんなおもしろい大変な案件見逃せるかい!!」

最悪のタイミングで最悪な奴らが意気投合しやがった

「てめえ、ロキ! 今確実に面白いって言いやがったな!? てかお前らさつきまで険悪な雰囲気だったじゃねえか、なに結託してんだボケ共があ!!」

それから俺の周りをほっほう、ほっほうと言いながらウロチョロするアホ共

フクロウかてめーらは!?

ちなみにフィン達は呆れて部屋を出て行った

アスフィに至っては部屋の隅で体育座りでうずくまり、耳を塞いで自閉・・・という
か現実逃避に走ってるし

「ほっほほーうカイトほっほほーう?」

「うぜええええええええええ!!」

こうして俺の久々の目覚めは最悪のまま終了し（結局この後、全部がバレた）
一連の事件は騒がしいままですべて終了した。

様々な出会い編

19：昇格×降格 前編

《side：フィン》

今日は10日に一度のロキ・ファミリア幹部会——と仰々しく言つてはみたけれど、要はただのお互いの情報交換と既知情報の確認といった報告会だ

今回のメインの情報は大きく分けて四つ

最初はイヴィルス閩派閥への討伐作戦の計画に関して、まずはこれがメインだろう

二つ目は新人団員及び下級団員の育成状況

三つ目は遠征に関してだが、現状では難しいので愚痴や雑談だけで終わるだろう

そして

最後の四つ目が、カイトに付随して着いてきたイシユタル・ファミリアとヘルメス・ファミリアに関することになるだろう

そう思案しつつ、もはや自室と言つても差し支えない団長室に入ると、既にリヴェリアとガレスが待っているところだった

「おや、やっぱり僕が最後かな？」

「いや、ロキがまだだな」

リヴェリアに言われて部屋を見渡すと確かにロキだけが見当たらなかった、けっこうギリギリだったので自分が最後だと思っていたがどうやらロキはまだ来ていないようだ

「まあ、あやつのことじゃその内来るじやろ」

主神抜きで報告会はできないのでしばらく待つこと数分、雑談をしつつ時間をつぶしてはいたものの、姿を見せないロキにリヴェリアが愚痴を流し始めそうになったとき

バン!!

「いや〜！スマン!!遅れてもうたわ、堪忍してや〜!」

ロキが扉を勢いよく開けつつ駆け込みように入室してきた

「・・・遅いぞロキ」

リヴェリアが不機嫌そうに言ってくる

「いや、ホンマすまんで、カイトに療養所まで呼ばれてステイタスを更新したんやけど・・・そこでちよつとなー?」

またか、と 思うのは早計だろうか、それともやはり、と言うべきか

ちなみにリヴェリアは前者の様に考えたのかため息を

ガレスは腕を組んだまま面白そうに笑っている

「もしかして、また何かあった？」

こと、ここに至る少し前から僕は、カイトを常識や普通といった枠組みに当てはめるのを諦めている、逆に次はどんな面白いことをしたのかと興味深く思うようになった、我ながらそれは団長としてどうなのかと思うがカイトに関しては何の好奇心の方が勝ったようだ

「まあ、これは会議の最後に話すとするわ」

僕の質問に対して楽しそうにニツシツシと笑いながら口キがはぐらかしてきた
ふむ、・・・どうやらメインの議題に五つ目が追加されたようだ

議題のタイトルは何だろうか 『く今日のカイトく』とかだろうか？

いや、彼はそんな可愛い感じは似合わないか・・・

「じゃ、はじめよか〜」

そんなどうでもいい戯れ言を考えつつ会議は始まった。

・ ・ ・

.....

「では、ヘルメス・ファミアとは同盟では無く良好な取引相手ということまで今後対応していくことでいいな？」

「それがええやろな、あいつは癖もんの多い神々の仲でも指折りや、さすがにカイトのためとはいえ同盟を組むのはちよつとなあ・・・幸いあつちもそれを望んどるようやし、よほどの大問題でも抱えん限り同盟はしとらないな」

同盟というのは言ってしまうえば一蓮托生、いくらカイトのためとはいえ、たった一人の団員のために他派閥のファミアと同盟を結ぶことはできない

「・・・ま、そんな所じゃろな」

決定した内容にガレスも賛同する

「とりあえず予定通りの議題はこれで大体は話おわったね」

闇派閥、団員の育成状況、次回の遠征、そしてイシュタルとヘルメスのファミリアとの今後の付き合い方についての意見も全員の賛同を得てとりあえずではあるがファミリアの行動方針がとりあえず決定した

「……じゃあロキ、君が先程から話したがっている内容を聞いてもいいかい？」

ロキが会議の最中もどろどろとソワソワしていたのはここにいる全員が気付いていた、他の団員なら気付かないささいな違いだが、付き合いの長い僕たちにはわかりやすすぎる違和感だ。

「ありや、やつばばれてもうた？」

ロキが笑いながら舌を出して茶目つぶりにあっけらかんと答える

「バレバレだよ、僕たちに隠し事をするならもつと上手くやらなきゃ……それで？」

「ニヒヒヒヒ！ いやなくカイトが面白すぎてな？……言う前に聞いとこか？ カイトに関して、めちやくちやええ話が1個、そこそこ悪い話も1個、面倒くさそうな話が2個……いや、やつばちよい待って……面倒くさそうな話が1個におもろそうな話が1個や、さてどれから聞きたい？」

面倒くさいという話が途中で2個から面白い話とやらに分かれたのが気になったが（結局は全部聞くことになるからどれからでも良いかな、他のメンバーの意見に合わせるとしよう）

「別にどれでもいいが・・・儂は良い話とやらから聞きたいのう」

「・・・僕も良い話からがいいかな」

「私はどれからでも・・・いや、やはり他の二人と同じで良い話とやからが良いな、悪い話から聞いた場合その場で私の胃に穴が空きかねん」

「あれ、僕の胃の心配は？」

「お前は既に奴のすることを「面白い」ですませて、事前の問題解決を諦めているだろう・・・」

「あいかわらず心配性だのう」

「小言を言う者が一人くらい居らねば、このファミリアはとつくの昔に混沌と化しているぞ・・・」

三者三様の反応をロキが確認して口を開く

「ほな、決まったな！ でな？ でな？ 良い話ってのは・・・カイトのランクアップや!! 所要期間半年！ 最年少とはいかんけどアイズの最速記録を抜いて新たな世界記録保持者の誕生や!!」

ロキの発言に全員が絶句する、だが、最初からそれなりに覚悟を決めていたのですぐに我を取り戻して嘆息する

「ふう・・・さすがは僕が選んだ次期団長候補、とでも言うべきかな？」

さすがの僕でも乾いた笑いしか出てこない

「信じられん・・・あのアイズでさえ一年、それすら異常すぎる速さだったというのに」
リヴェリアに至っては未だ半信半疑のようだ

「ガツハハハハハハ、彼奴ほどの男が死の淵に立たされる程の死闘をしたんじや、通常の経験とはわけがちがったんじやろう、むしろ今回のランクアップに儂はむしろ納得じゃぞ!!」

カイトを推しているガレスはむしろ自慢げな様子だ、一番期待しているカイトが期待していた以上の成果を出したことが嬉しいのだろう

それにしても、確かにこれはビッグニュースだ、限りなく低い可能性の一つとして考へてはいたが本当にランクアップを果たすとは・・・

「じゃあ、サクサク次いこか、悪いニュースはカイトのステータス値がおかしなことになるってなあ・・・」

「・・・例のスキルか?」

この場に居る全員が心当たりのある原因を思い出す

目が覚めたカイトから後日に聞いていたが、やはりカイトは僕たちが使用を禁じていたスキルを使用していた、だが今回は使わなければ死んでいたであろう状況なのでさすがに不問としていた

「本当にスキルの影響でステータス値が下がるのか・・・ロキ、ステータスの写しは持っているか？」

「あるでー」

そういつてポケットから折りたたんだ紙をリヴェリアに渡す、それを見たリヴェリアの顔が曇る

「なんだ・・・これは・・・さすがに初めてみるぞこんなステータスは・・・色々な意味で意味がわからん」

「僕にも見せてくれ」

リヴェリアからガレスに渡ったステータス紙を横から僕も一緒に見せてもらう

—————

カイト・クラネル Lv. 1

力：C⇒D 6 1 2⇒5 1 4 (―9 8)

耐久：D⇒C 5 4 5⇒6 3 4 (+8 9)

器用：C⇒C 6 7 1⇒6 6 0 (―1 1)

俊敏：C⇒C 6 8 0⇒6 5 8 (―2 2)

魔力：A⇒S 8 9 0⇒9 8 2 (+9 2)

「・・・・・・・・ロキ？」

ナニコレ

上昇しているステイタスの上昇具合も異常だがプラスとマイナスがぐちゃまぜになっ
ていた

「やから言うたやろー？わけがわからんことになつとるつてー」

カイトのスキルは出た目に従い何らかの能力が発現する、そしてそれをキャンセルす
るには出た目の数×100のステイタス値が下がるというのは初期の段階でここに居
る全員が知っていたが、この紙を見る限り上がっている物もあれば下がっている物もあ
る

「これはいつたい・・・・・・・・あ」

そういうことか

「ガレス、ちよつとその紙を貸してくれ」

あまりに異質なステイタス紙の内容に当たり前のことを忘れていた

「さつすがフィンやで！もう何か気付いたんか？」

「ああ、たぶん本当の・・・というか、わかりやく書き直すところ言うことだと思うよ」
 気付いたことを、ステイタス紙に訂正して書き込んでいく

カイト・クラネル L.v. 1

力：C⇒D 6 1 2⇒5 1 4 (―2 0 0) (+1 0 2)
 耐久：D⇒C 5 4 5⇒6 3 4 (―1 0 0) (+1 8 9)
 器用：C⇒C 6 7 1⇒6 6 0 (―1 0 0) (+8 9)
 俊敏：C⇒C 6 8 0⇒6 5 8 (―1 0 0) (+7 8)
 魔力：A⇒S 8 9 0⇒9 8 2 (―1 0 0) (+1 9 2)

「割り当てるは適当だけど、たぶんこういうことだと思うよ」
 当たり前のこと

ランクアップするほどの戦闘をしたのならそれに見合うほどのステイタスの上昇もあつて当然のことだ、おそらく最初の数値はカイトの上昇値からスキルの影響で下がったステイタスを合算した数値なのだろう

「あゝゝゝ、あかんボケてたわ、確かにステイタスも上昇するわなあ、スキルにばつか目がついてそんな当たり前のことも忘れてたわ・・・」

ロキが灯台もと暗しの様な状態に天を仰ぐ

「まあ、ステイタスが下がるなんて現象は彼奴だけじゃろうからなあ、ロキ、お主も、物珍しくてはしやぎすぎたんじゃないか？」

確かに、ガレスの言うとおり初見では僕もこのステイタスには面食らつてしまい、すぐには意味がわからず混乱してしまつたのでロキを馬鹿にはできない、だが、これよりもさらに見落としていることがあるのを皆は気付いていない

「ここでの問題はステイタスが下がつたことよりも、何故下がつたのかだ」

「・・・どういう意味だ？ カイトはスキルをキャンセルしたからこそステイタスが下がつたのだろう？」

リヴェリアですらこれには気付いていないようだ

「いや、カイトからそんな事・・・スキルをキャンセルしたとは聞いていない、というよりそんなことに意識を割く余裕は無かつたはずだよ」

「確かに、彼奴から聞いた話では最後の技を出してからの記憶が無いと言っておったな」「つまり、自動でスキルがキャンセルされたつちゅーことか？」

「たぶんね．．．しかも、だ カイトがあんな状態になってまで放った技を使用してもカイトのスキルはそれでは「使用していない」と判断したということになる」

「強力な分、やつかいなスキルじゃのう」

「まったくだ、「使用した」ということになるのにも何か条件があるのかもしれない．．．明日、もしくは近い内にでもカイトに使用する際での条件に何か心当たりが無いか呼び出してでも聞かねばならないだろう．．．まあ、今の彼はかなりヒマを持って余しているだろうから、こつちから出向けば喜んで答えてくれるかもしれないが」

「そういえば、そのカイト自身の容態はどうなのだ？ もちろん怪我の方ではないぞ．．．」

リヴェリアが眉間にシワを作りながらあきれ声でロキに質問しているが．．．無理もない

そもそも、カイトが目覚めてから既に一週間、本来ならとつくに退院している頃合いなのだが、カイトは未だにディアンケヒト・ファミリアの療養所に入院している

原因はカイトが目覚めたその日の晩に起こった、あろうことかカイトは絶対安静の身であるにも関わらず夜中に療養所を脱走、着の身着のまま、ロキ・ファミリアがひいき

にして飲み会や祝い事での食事会を行う「豊穰の女主人」に突撃、顔見知りでも店主でもあるミアを説得しツケで大量の料理を注文し、さらにそれを完食

当然のことながらカイトは目覚める10日間は意識不明の昏睡状態、食事は点滴のみであった、そんな状態の人間が起きたその日に大量の食事を取ればどうなるか・・・

店主のミア曰く、全てを食べ終わって数秒後、とてつもない笑顔で「ごちそうさま、生き返った気分だぜ!!」と言うと、白目を剥きながら泡を吹いてぶっ倒れたそうだが、ちなみにこのときのカイトの状態は割と本気でヤバかったらしく、現在カイトにはまた脱走しないように24時間体勢でディアンケヒト・ファミリアの団員が監視にしている

「生き返った気分の瞬間に死ぬとはのう・・・」

ガレスが髭を撫でながらシミ、ジミとつぶやく

「いや、生きてるから」

ちなみに、次の日の昼には驚異的な回復力でカイトは目を覚ました

「でも、マジでぶっ倒れた後に心肺停止してたみたいやで〜」

ケラケラと面白そうに語るロキ

「カイトは頭が良い奴だと思っていたのだがなあ・・・」

至極残念そうにため息を吐くりヴェリア

「……とりあえず話を戻そうか、残りは面倒と面白そうな話だったよね？」

内容が脱線しかけたので話を戻すように誘導する

「ん、まあここまでできたなら順番に話そか……面倒つてのはカイトに発現した発展アビリティなんやけど」

「ほう、やはり何かを発現させたか、それで？ 何が出てきた？」

発展アビリティというのは、レベルへのランクアップ時のみに発現する専門職の能力だ

例えば鍛冶師なら鍛冶に関するアビリティが、魔法使いなら魔法に関するアビリティ等々、それまで本人が何に関わりどのような経験をしてきたかによって発現する特殊な能力、ランクアップするまで本人がどれだけ頑張ったのかという特典ボーナスみたいなものだ

これは複数のアビリティを発現する者もいれば1つも出てこない者もいる上にその種類は千差万別、だが凡庸性の高い人気のアビリティや希少なレアアビリティを発現できれば、それからの冒険者としての活動が飛躍的に楽になるので慎重に決めねばならない、何しろ一定のランクから上がるときにしか手に入らないアビリティも存在するからだ。

「とりあえず、3つも出てきててなあ……」

3つ、1つも発現できない者からすれば羨ましいことこの上ないだろう

「多いな・・・それで？」

「1個目は【狩人】や」

ロキが指を一本立てつつ話す

【狩人】一度でも勝利したモンスターと戦闘する際にステイタスが上昇するというレアの人気アビリティだ、このアビリティは取得条件が判明しているにも関わらず発現させる者は少ない、なぜなら取得条件が「短期間の内に大量のモンスターを倒す」という達成するのが困難なものとなっているからだ、カイトは見事にこのアビリティを発現させることに成功したようだ

「まあ、あれだけモンスターの群れに突っ込まれば当然かな？」

「お主、笑顔でえげつないことをするのう・・・」

間。

「2個目は【対人】やで」

【対人】は文字通り人間を相手にした際、ステイタスに上昇補正がかかるアビリティだ、これも取得条件がわかっており、へ激しく人同士で闘争を行う」というものだ、ただしこ

の闘争は生半可なものでなく、それこそ生きるか死ぬかくらいの戦いをほぼ毎日行わなければ発現しない、これを発現する者が一番多いのはコロシウムで闘う劔奴であったりする

「ガレス?・・・お前は一体どれだけカイトを・・・」

このアビリティを発現したことに對して、カイトの訓練のほぼ全てを担っているガレスにさすがのリヴェリアもドン引きしていた

「フツウノクンレンヲシタダケジャ」

何でカタコト?

「いや、だってこれかなりの殴り合いとかしないと・・・」

さすがの僕も一言出てしまう

「フツウノクンレンヲシタダケジャ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今度からカイトの訓練には僕カリヴェリアも参加（監視）することになった

「・・・・・・・・チッ」

僕は何も聞かなかった、うん

間。

「最後の三つ目は【奇運】や、ちなみに文字は〈奇妙〉な方の〈奇〉や」

「なるほど【奇運】か・・・」

リヴェリアが頷き

「【奇運】・・・のう？」

ガレスが髭を撫で

「【奇運】かあ・・・」

僕は天を見上げた

「・・・ナニソレ？」

奇しくも長年の付き合いでする三人の口調が消え去り、言葉が重なる貴重な一瞬だった。

20：昇格×降格 後編

《side：ロキ》

「———で？ 結局、この三つ目のアビリティについての情報は全くなしつてことかー・・・どうすつかねえ」

場所はディアンケヒト・ファミリアの療養所、その中のカイトが監禁・・・もとい入院しとる病室

うちの前にはベツトから上半身を起こした状態のカイトが頭を悩ませとる

カイトのステイタスの更新とファミリアの会議から二日

あれからフィン達とカイトについて話した後、ギルドで珍しい発展アビリティについて聞いてはみたがやはり【奇運】という名のアビリティどころか〈運〉という字が付くものすら見つからなかった。

あまりしつこく聞いても逆にこちらの情報を探られる可能性があるためそこまで深くは聞けなかったが、少なくともギルドではあまり聞かない・・・というより聞いたこ

とのない新アビリティである可能性が高いということが判明した。

(それにしても【奇運】てなんやねん、これが【幸運】とか【不幸】とかならわかりやすいんやけどなあ……)

「ロキ的にはこのアビリティ、当たりだと思おうか？」

「んー……どやろなあ、でも字から考えて間違いなくクセの……それも相当尖り方が強いアビリティやないかなあ……〈奇〉と付くものにまともなもの期待せーへん方がええ、なにせ自分、天界じゃ異名で奇術師^{トリックスター}って呼ばれててな？ 自分で言うのもなんやけどろくでもなかつたで？」

「なるほどお、つまりこのアビリティはロキ並に駄目でクズでダメダメダメダメダメダメ——」

「そこまで言つとらんわ!」

「この子はもうあれやな!?!うちのことなめきつとるな!」

「カイト、うち主神な? 偉い神様な? 忘れとらんよね?」

親しき仲にも礼儀ありやで?

「Shē^ッテルよ?」

「……」

嘘や無いとわかるけど・・・何やろかこの騙された感じは

「はあく・・・とりあえずや、このアビリティを選ばなくても【狩人】なんてレアアビリティも発現しとるんや、わけのわからんもん選ぶより、こつちを選ぶのも全然アリやで？　むしろ普通ならそうするやろな」

実際、この【狩人】のアビリティは手っ取り早く強くなるのに最適なアビリティという理由だけで人気なのではない、このレアアビリティはLv.2にランクアップするときにしか発現しない限定アビリティでもあるからだ、故にいくら未知のアビリティといえどこれから先のことを考えると【狩人】を選択しないという判断は非常に難しい

堅実に【狩人】か、それとも大博打に出て効果のわからない【奇運】という謎のアビリティにするのか、こればかりはカイト自身が決めねばならないことだ

（幸い、考える時間はあるからなあ・・・カイトには言うてないけどな、ニヒヒヒ）

悪戯心から珍しくカイトが悩む姿を楽しもうかと思っっている

「じゃあ【奇運】でいいや」

カイトがあっけらかんと言うてきた

「は？・・・いやいやいやいや！　もちよつと考えた方がええやろ!?　なに今日のお昼を決めるみたいなのりで決めとんねん!?!」

うちの話聞いてたんかこの子は!?

何も考えてないのではなからうかと、さすがに口を出してしまふ

「ロキがさつき言つてたじゃん、普通ならつて……俺の目標は普通じやたどり着けないからこそのこの選択だ、俺の夢は時間制限も付いてんだぜ？　アスファイはいつまでも待つて言つてくれてるけど俺はあいつを行き遅れにするつもりはねーんだよ」

こちらを見返すカイトの決意とその目があまりに真摯すぎて一瞬気圧される

「そ、そやな……いや、そやつたな」

先日のアスファイちゃんとの告白からこの子がどれだけ途方もない夢に向かつて走っているのかを思い出す

文字通りのお伽話の様な夢

ただの村人が冒険者になり、そしてそこから成り上がって一国の姫を娶るという、聞く者が聞けばどこの作り話だと馬鹿にされるような夢だ

「んじや、さつそくランクアップの更新よろしく」

うちがこの子の目指すものの難しさに複雑な思いをしているというのに、カイトは軽そうに言つて上着を脱ぐために着ている服のボタンに手をかける

（この子はホンマにもう、いきなり真面目モードかと思うたらこれやもんなあ、調子が狂うわあ……あ）

おちよくろうと思つてカイトにわざと言わなかつた内容を思い出す

「あ!?! ちよつ、まち、カイト!」

「ん?」

「あー……実はこの前の会議でフィン達とカイトのランクアップについても話したんやけど……後二ヶ月くらいランクアップ待たへん?」

「え……なんで」

カイトが疑問に思うのももつともやけど、これにはちゃんと理由がある

器を昇華させれば人の子は格段に強くなれる、だがLv. 1時のステータス平均がAとCの冒険者が同時にランクアップした場合、ステータス平均がAだった者の方が強い、うちら神々はこれを〈貯金〉言うとする、この貯金の差が大きければ大きいほど同じレベルの者でも差が出てくる、そのためランクアップをするのはステータスが上昇しにくくなる時こそが最もベストなタイミングとなるわけやな

ちなみに弱小の零細ファミリアなどはこういうことを知らずに即ランクアップをさせたせいで後になってから泣きを見るが多かったりする

「——つてなわけや、ちよつどカイトがぐつすり寝ている間にデナトウス神会も済んだ

ばかりやねん、ランクアップは次の神会に合わせて行った方がええ、て話になつてな?」

「それは初耳だったな……うん、まあ、それなら仕方が無いかあ……」

たぶんランクアップを楽しむにしていたのか、カイトがあからさまに意気消沈してい

く

「そんな訳で明日から三日くらいは鈍った身体を鍛え直すために訓練、その後の二ヶ月間はほぼダンジョンでステイタスを上げるのに集中つてのがこれからの予定やなまあ、カイトなら二ヶ月もステイタスの上昇に集中すればステイタス平均をBくらいまでは持つて行けると思うぞ？」

なにせカイトはまだLv. 1、あまりのはちやめちやさに忘れそうになってまうけど一番ステイタスを上げるのが楽な初期レベルや、これまではダンジョンに関する勉強会にも他の団員との交流という目的で参加させてはいたがしばらくはお休みや、既にうちのファミリアでカイトを知らん者はおらんからこそステイタスを上昇させるためにダンジョンに集中させることができる、これも今まで入団してから無理して二足の草鞋履いてでもカイトが頑張つてきたからこそできることや

「それつてつまり、今まで以上にお嬢と一緒にモンスター群れに突つ込まされるつてことだよなあ・・・うわあ」

数日後からの地獄を想像しみるうちにカイトがしぼんでいく・・・フィンも結構な無茶させとるつて聞いとるからなあ・・・まあ頑張りー、と他人事のように考えていると

コンコン

と、控えめにドアをノックする音

どうぞー、とカイトが入室を許可すると、めっちゃかわええ娘が入ってくる

「げっ！アミッド!？」

「こんにちはカイトさん、お昼の時間になります・・・神ロキもいらしてたんですね」

この娘はオラリオ最高の治療師「アミッド・テアサナーレ」Lv. 2のディアンケヒト・ファミリアの構成員・・・なんやけど、先日フィン達との会議で最後に話した（面白い話）いうんがこの子に関してだったりする、というのも――

「はい♡カイトさん、あゝん♡」

「いや、自分で食べれるし・・・」

「何を言ってるんですか？カイトさんは病人ですよ？食べさせてあげるのは普通じゃないですか、はいあゝん♡」

「明日には退院なんだけど・・・んぐ!？」

問答無用とでも言うようにしやべるために開いた口に料理を突っ込むアミッド、ただそのせいで食べた物が喉に詰まったのかカイトが咳き込む

「げっふお!?!いきなり食べ物をつっ込む奴がいるかあ!?!」

「ご、ごめんなさいやはりまだ固形物は早かったみたいですね・・・では失礼して・・・」

何を思ったのか、何故かアミッドがカイトの料理を口に含み咀嚼しはじめ

「お、おい・・・お前 何を・・・」

「ふあい、口移しで食べさせてあげまふ」

「ロキイ！ヘルプミイイイイイ！！・・・っ!? ぬぐああああおおおっ!」

L v. 2のアミッドがL v. 1であるカイトの顔をホールドして今まさに親鳥が子にエサを与えるように微笑ましい・・・とは明らかにかけ離れた光景が展開される

見て分かるように・・・いやこれ見て分かる奴おるかなあ?・・・まあとりあえず、何があったのかよーわからんけど、この一週間で『戦場の聖女』ディア・セイントと名高い彼女はカイトにべた惚れになつてもうたらしい

・・・ちなみにカイトはこの娘の激しいアタックをつい昨日まで異常な看護愛と勘違いしとつたが、それも先日カイトに恋人がいるということを知つてアミッドが暴走、なんでも夜這いに来たらしいがカイトはこれを全力拒否し一悶着あつたとかかなかつたとか

カイト曰くアミッドはどこぞの狂戦士の看護師くらいヤバイとか、てか誰やねん狂戦士で看護師で存在が矛盾しすぎやろそれ

（それにしても……こんなところアスフィちゃんに見られたら修羅場待ったなしやなあ……
ん、ありや？なんや急に寒気が……）

「……カイト？」

ロキがゆつくりと振り返ると手には花束、しかしバックには絶対零度の吹雪ブリザードを連想させる程の鬼気をまとったアスファイがいた

（あかあ

ん!!?!)

「あ、あんな？これは、違うで、カイトは——あり？」

固まったワイそつちのけでツカツカとカイトに歩み寄るアスフィちゃんとアミッドの目が合う

「んのにぬままぬすか」

「しゃべるならせめて口の中のもん飲み込んでからしゃべれ！あと、いいかげん 離せえええ!!」

「んぐ……どちら様でしょうか？」

「ゼエ、ゼエ……た、助かった……」

つい先程までのカイトとの攻防を感じさせぬ顔でアミッドがカイトのベット越しにアスフィちゃんと対峙する

「初めまして、『戦場の聖女』^{ディア・セイント}カイトの恋人のアスフィ・アル・アンドロメダと言います、どうやら体調のよろしくない私の彼氏のために余計な世話をさせてしまったようで、でも御安心下さい、ここからは私が代わりに面倒を看ますので」

アスフィちゃん、こわあ・・・所々でカイトとの関係を強調したいのか声のトーンが一部強めで言われとる、しかも最後は逆読みしそらなとびきりの笑顔付きやった

ピキリ

あ アミツドのこめかみに青筋が・・・

「カイトさんに恋人が居るといふのは知っていましたが、あなたでしたか『全能者』^{バルセウス}・・・患者の面倒を看るのは看護師の務めですのでお気になさらずに、それに既にカイトさんのあーんなどこやこーんなどこまで面倒を看ているのでお気になさらずに」

「アミツド誤解を生みかねない言い方はやめてくれ!？」

「意識のないカイトさんの下の世話をしたのは本当ですよ・・・立派でした♡」

頬に手を当てててモジモジし始めるアミツド、それに対して絶句するアスフィちゃん「私ですらまだ見ていないというのにつ・・・!!」

アスフィちゃん、突っ込み方がおかしいて、つかあんなもん見たいんか・・・思春期やなあ

何故か勝ち誇った風のアミツドがアスフィちゃんを見ながらお返しのように満面の笑

現在俺は全世界の男子がもつとも落ち着くであろう場所 個室トイレに立て籠もっていた、というの俺をめぐってアスフィとアミッドが険悪な雰囲気になったからだ
（『絶』が得意でよかったよ……）

不味い雰囲気を知したので即『絶』を発動し全力で離脱、見事に気付かれることなく脱出に成功、このときほど己の才能に感謝した日はないかもしれない……部屋から出る際に俺の監視を命じられていたであろうデイアンケヒト・ファミリアの団員が簧巻きにされていたのは何かの見間違いだと思いたい

（あいつ強行突破してきたのかよ……）

俺の何がアミッドをあそこまで狂行に走らせるのかわからないが応じるわけにはいかない、俺はピュアな男、アスフィ一筋だ。

なら、もつと強めに拒絶すればいいのではないか、と思う者もいるだろうがさすがに命の恩人を無下に扱うことはできない

なにせ俺がここに運び込まれた際に輸血用の血を貧血寸前まで提供してくれたのがアミッドなのだ、なぜアミッドがそれほど大量の血液を提供することになったのかというと、どうやら俺の血液型は相当珍しかったらしく適合する血液保持者がアミッドしかいなかったというのが理由だ

この事実はこちらから、もしも俺が今回と同じような怪我で運び込まれたとき、アミッ

ドが血液を提供してくれなければ死んでしまうことを意味する

つまり、あまり拒否しすぎてプラスの感情が反転してマイナスの感情になってしまった場合、アミツドが俺への輸血を拒否してくるかもしれないという思惑もあるために最低限の否定しかできないというわけだ

(つていうか、何で振られたのに翌日には再アタックしてくるんだ・・・メンタル強すぎ。女つて皆こんなに凶太いのだろうか・・・ん?)

気付けば何故か共同トイレの個室の中が少し薄暗くなっていた
(ランプの魔石が切れたのか?)

そう思い上を見上げると――

「カイトさん見iiiiiiiiiiiiつけたああAAAAAaaaaaaa
aa!!」

「ほぎやああああああ!!」

アミツドがいた

入り口の上から這い上がり、男の聖域に嬉々として侵入しようとしてくるその姿は軽くホラーである。

俺氏、前世を含めて恐怖感からここまでの絶叫を上げたのは初めてであった。

「つてアミッド何やってんだあこらあ!？」

「何つて、逃げたカイトさんの臭いを追いかけただけですけど?」

「獣か何かかお前は!？」

それが何か? とでも言いたげなアミッドと問答をしていると

「ここか、この泥棒猫!! つて何やってんですか?! 下りなさい!!」

「痛だだだだ!?! ちょ!?! 足を引つ張らないで下さい!!」

どうやら救援アスフイがきたようだ、ずるずるとアミッドの姿が見えなくなり、ホツと息をつ

く

「『戦場の聖女』ディア・セイントを確保——!!」

アスフイの掛け声と共に複数の足音が近づいてくるのが聞こえてくる

「なあ!?! あなたたちまで何故私の方を捕らえるのですか!?! 捕らえるのはそっち!」

『全能者』ベルセウスの方ですよ!! 裏切り!?! 裏切りですか!?!」

個室のドアを少し開けて覗いてみたら、どうやらディアンケヒト・ファミリアの団員も駆け付けてアミッドの捕縛を手伝っているようだ

「いやアミッド、お前さんディアンケヒト様から彼の部屋への入室は禁止されていたのに破つただろう? しかも見張りをしてくれていた団員の意識を奪つてまで……さす

「がにやりすぎだ」

「・・・な、なんのことでしょう か」

同僚であろう男性からの質問に対して、ここからでも分かるくらいアミツドの目が泳ぎまくっているのが見えた

「アミツド、お前さんこんなことする奴じゃなかっただろう、一体どうしたんだ・・・」

「カイトさんへの愛が私を変えたのです!!」

（俺のせいみたいに関こえるからその言い方は止める!!）

「はあ・・・とりあえず彼が正式に退院するまで謹慎と神命が下った・・・連れて行け」
 「え? うそ? うそですよね!? ちよ、運ばないで下さい!? カイトさん助けてえええええつええええええー・・・」

「ビチビチとはねる巨大魚の様な必死の抵抗も空しくアミツドはどこかに運ばれていった」

「脅威は去りましたか・・・カイト、もうそこから出てきても大丈夫ですよ」

アスファイがこの場が安全になったことを教えてくれるが忘れる事なかれ、ここは男子トイレ、女人禁制の男の聖域である

「お、おう・・・マジで助かったサンキューなアスファイ・・・つかここ男子トイレなんだが・・・」

「そ、そうでした．．．すみません外で待つてますね」

ここがどこか忘れていたのかアスファイがそさくさとトイレから出て行く、その後ようやく個室から出て手を洗いアスファイと無事に合流、部屋まで一緒に帰ることにした

．．．．

「すまん、改めて助かった．．．マジで」

「もう少し強めに、彼女を拒否すればいいだけなのでは？　そうすればこのようなこと．．．」

「まあ、カイトにも色々事情があるんやで？」

ちなみにロキの奴は部屋で見舞品である果物を騒動そつちのけでムシヤムシヤと食べながら俺のベッドでだらけてやがった

「あんな女を許容する程の事情があるのですか？」

「一応あるんだよ、しかもこれがまた死活問題でな．．．」

場所は俺が入院している個室、アミッドのことに対して強く出られない理由を説明するとアスフィの眉間にみるみるうちにシワが出来ていく・・・これはこれでかわいい

「——と、まあこういう理由でなあ・・・機嫌を損ねすぎると今後のことが恐くてなあ」

「むぐう、カイトの命には代えられません・・・理解はしても納得したくないです・・・あの変態の血がカイトに入っているのかと思うと、なんでしょうね・・・言葉に出来ない腹立たし感情が、こう・・・沸々と湧いてきます」

「だからって俺の血を抜こうとしないでくれよ？・・・ま、どっちにしろ明日には退院だし、今後あいつと関わり合いになることも激減するだろ、さらば退屈な入院生活！さらばアミッドってな!!」

「そうだといいのですが・・・」

——余談ではあるが、数日後からギルド経由でディアンケヒト・ファミリアからロキ・ファミリアのとある団員へ名指しの指名依頼（依頼の品は直接ディアンケヒト・ファミリアの本拠に届けるのが絶対条件）が連日舞い込むことになることを俺はまだ知らなかった。

その後はアスフィとお互いのファミリアの話や久しぶりにベルやじいちゃんのみり変わっていないらしい近況を教えてもらった

「・・・そっか、ベルもじいちゃんも変わらず元気か」

「ええ、お爺さまもこちらは気にせず頑張れと言っていましたし、ベルの方に至っては心配する必要も無いくらい元気な様子でした」

「また今度、村の近くまで行くときは教えてくれ、手紙と一緒に仕送りとなにか日持ちするお菓子でも贈りたい」

「ふふ、任せてください・・・あ、もう時間ですね、カイトと話しているとあつという間に時間が過ぎ去ってしまうのが難点です」

「まったくだ、楽しい時間ってのはどしてこんなに過ぎ去るのが早いかな」

「我慢した分だけ楽しい時間は濃密に感じる物ですよ・・・またお互い頑張つて時間を作つたらどこかで食事でもするとしましょう」

「喜んで・・・ん」

最後に一時の別れを惜しむ軽いキスをする

「ん・・・では、また」

「ああ、またな」

精一杯伸ばして繋いでいた手が離れる

お互い名残惜しいがそれぞれやることがあるため仕方が無い、まあ今の俺は休むのが仕事で働いているアスフィには少し申し訳ないが・・・あれ？俺ってばヒモみたいじゃね？

そんな俺の葛藤に気付くことなくアスフィが退室

しばらくしてから入れ代わるようにしてロキが入ってきた、ただしニヤニヤと形容しがたい表情で。

「ロキ、盗み聞きとは趣味が悪いぞ」

「ちよつとくらいええや〜ん、いやあしつかしアツアツやなく、最後の方は聞いているこつちが恥ずかしゆうなつたわ」

ちなみにロキは先程から気を利かせて席を外してくれたのだが、どうやら外で聞き耳を立てていたようだ・・・というか悪戯が大好きなこいつはおそらく最初からそのつもりで席を立ったのだろう、くそ、予想して『円』を張っておくべきだったか・・・己の迂闊さを悔やむ

「それで？ まだ明日以降の予定で何か言っていないことでもあるのか」

「んにや、一応それは全部伝えたで、戻ってきたのはアスフィちゃんにも聞かせられない身内の話があるからや」

「・・・【ジャンプの海賊印】の〈使用した〉ことになる条件についてか？」

「そーや、なんやうちが聞いてくるの予想できとったんかい」

ロキの質問は予想はしていたがやはり俺のスキルに関してだった、俺としてもこれは気になることなので一応ではあるが俺の予想を話しておきたかった

「まだ、『3』と『6』しか出てないが大まかな予想はできてる、『3』の方はたぶん出したものを誰かの体内に・・・とにかく何でもいいから体内に取り込むこと・・・だと思
う。」

「ああ、ガレスの言ってたくつそやばい卵焼きやったつけ？・・・うーん今でも信じられへんなあLv. 6のガレスの耐久や耐状態異常をぶち抜いてくるような卵焼きて・・・いや絶対それ食べ物ちやうやろ」

ロキよ、もしその台詞、卵焼きを生み出した原作の張本人に聞かれたらその卵焼きのフルコースが待ってるぞ

「まあ、ある意味チートだよなこれ」

食わせてよし、投げてよし、ぶつけて良しの三拍子がそろっている、ある意味これが一番万能かもしれない

「で、今回こんななつた原因の『6』・・・『八門遁甲の陣』やったつけ？　これの条件の予想もできてるんか？」

「予想としては2つくらい思い浮かんだな、一つ目は単純に俺の練度不足で使いこなせ

なかったからって理由だ、これだったら今まで通り修行でもすればいいから気が楽なんだが……」

「なんや、もう一つの予想はやばいんか?」

「ああ、『八門遁甲の陣』ってのは身体にある一般的には常に閉じてる八つの門を順番にこじ開けてリミッターを徐々に開けてから最大解放するんだ、そんでもって最後の八門目の〈死門〉を開けるとさらに爆発的な力を一時的に得られるって術なんだけど：〈死門〉って名の通り、開けちゃうと死ぬんだよねこれが」

「んなあつ!」

「〈死門〉まで開けるのが条件だとやっべーよなこれ」

さすがに予想した二つ目の条件にロキの顔が真っ青になる

「ヤバイどころやないわあ!?!カイトおまつ!?!なんちゅー技使てんねん!」

「いや、前も言ったけど使わなきや死んでたぞ」

「それでもや!ええか!?!以後この数字が出たら即キャンセルや!!」

「えく……もつたいないからちよつと使ってからキャンセルした方が良くないか?」

「だーめーやー!?!カイトのことやからそのまま勢いとノリで最後の門まで開けかねんやろうか!?!」

確かに、ガレスのおっさんとの模擬戦や今回の襲撃でも追い詰められると頭のネジが

かなり緩くなつてることが多い気がする

「んー・・・仕方が無いか・・・わかった、今後この数字が出たらキャンセルするよ」
「ホンマか!？」 その場しのぎのウソやないやろな!？」

「誓う、誓う。『6』の数字を引いたら即キャンセルする・・・これでいいか？」

「神々にウソは通じない、ロキには俺の言ったことが本当だとわかったはずだ

「うう、まあ分かったならええねん、一応このことはフィン達にも伝えとくで」

「頼むわ」

俺が『6』の能力を使わないと誓ったことでロキも落ち着きを取り戻してくれたよう
だ

「あ、そやカイト、もう一個、伝えなあかんことがあつたわ」

「まだ、あんのかよ」

ロキがポケットから何やら紙を取り出してこちらに渡してくる

ざわ ざわ

ざわ ざわ

ざわ ざわ

紙にはたたくさんの「0」が並んでいた、何故だろう心が ざわざわ する

「・・・ロキサマ・・・コレハ・・・ナンデシヨウカ」

「カイトの入院費に加えて怪我に使うた高級回復薬ハイポーションや万能薬エリクサーだけやのうて万能薬入り点滴とか諸々の諸経費やな」

「・・・自費？」

「自費や、これでも結構な額をファミリアが負担しての額やで？」

ファミリアでも負担してもらってコレ？

「慈悲は？」

「ないなあ」

「・・・」

この後にロキは頑張り々と軽く言っただけで帰って行った

当然ながらロキが帰ったあとも俺の気は決して休まることなく、ぐぐにやるといふ音と共に世界がねじ曲がっていく感覚に朝まで襲われ続けた

オラリオに来て半年

借金返済生活スタートのようです。

21：神会×称号

オラリオの中心にそびえ建つバベル

今から千年前に「暇なので」と言うしようなもない理由で神々が降臨した最初の地でもあり、世界の暗黒期を終わらせた始まりの地でもある

その塔の高さは世界最高峰を誇り今でもダンジョンからモンスターが地上に溢れないようにするための蓋という重要な役割を持つ

そのバベルでは一定の階層からは神々しか立ち入ることが許されない、そのとある階層のフロアを丸ごとぶち抜き行われるのが神会デイトゥスである。

開催は基本的に三ヶ月に一度、参加は自由であるがその神会の内容に自分の眷属が関わっていた場合は必ず参加しなければ自分の子供が確実にイタイことになってしまうので要参加となる

ちなみに例外的に延期されることもままあるので開催は絶対ではない。

今宵はその神会が行われていた

「最近あいつらウザくねー?」「それよりラクアでまーた何か動きがあるってよ」「闇派閥イヴィルス

どもめ：「今日はフレイヤ様いないのー？」「イシュタル様もないじゃん俺帰るー」
 「私がガネーシャだあ!!」「はいはい」「ガネーシャガネーシャ」「怠慢ですね」「まっじめ
 ー」

だが神会とは言ってもその実は、ただの神々の井戸端会議に近い情報交換会であった
 これを知らない人の子は神々同士による厳かな会議が開かれていると勝手に思っ
 ている。

・
 ・
 ・
 ・
 ・

そこそこの時間が経ち情報の交換が終わり喧騒が落ち着いてきたところで今回の司
 会役の神が宣言する

「では！情報交換はここまでする、闇派閥に対してはこれまで通り厳粛に対処する
 ということでいいな!!」

「「異議なーーーし!!」「」

一旦、司会役の神が周りを見渡し宣言する

「またロキの所かよ」

「つかこれ世界記録じゃん」

「・・・だよな？」

「最新少記録こそ破れないが、最速の世界記録ワールドレコードなのは間違いあるまい」

「ロキよ、これ程の逸材をどこで見つけてきたのだ？」

その場の神々が親であるロキに問いたさすがロキの表情は変わらない、いつものニヤケ面である

「ニツヒツヒツヒ、すごいやろ〜？つい最近見つけたうちの秘蔵ツ子やねん、将来的にはうちの懐刀になるかもしれん、せやからや・・・なめた称号も付けたらぶち殺す☆」

「[[「イエス・マム!!」]]」

ロキに脅された神々が手元にある資料と似顔絵を元に比較的眞面目に称号を考え始める

(ま、一応脅しといたから下手なもんは出てこんやろ・・・最悪でも、うちが考えたもんを押し通してもええしな)

そう考えつつ話し合っている神々を眺めていると

「——ロキ」

「んあ？ おお、ファイたんやないか、どないしたん？」

声の掛かった方を見ると灼髮隻眼のヘファイストスが隣まで来ていた

「さすがにちよつとロキの子に興味が湧いてね？ それにしてもこの子のランクアップの所要期間が8ヶ月って本当なの？」

「マジもマジやで、まあランクアップの原因は今日はこちらにおらんアホの子の第二級に襲われたせいなんやけどな」

「もしかして……それを倒しちゃった？」

「せやで、もちろん一人じゃ無くて複数で相手してやけどな」

「それでもとんでもない逸材ね、巡り合わせの多いロキが少し羨ましいわ」

「いくらファイたんでもカイトはやらんで？」

「そんなことしないわよ……まあでもうちの子と専属鍛冶氏の契約を結んでくれたりとかは狙ってるかもだけど……ね？」

「お、それええなあ、実は最近カイトが刀とか使いたがってるみたいでな？ 詳しい子とか紹介してくれると助かるわあ」

「あら、そうなの？ じゃあこつちもそれなりの子を紹介しようかしら……刀だったら……椿がお勧めだけど」

「その子、確かガレスと契約結んでたんとちゃうん？ あ、ちなみにカイトはガレスの弟

「ロキーこいつ巫山戯た名前言ってましたー」

「やめてえチクらないで!?! 出来心だったんですう!!」

「とりあえず後でその奴は締めるとして、いいから決まったのを見せろや」

一柱の神が悲鳴を上げる中、ロキの手の中に話し合いで決定した称号の書かれた紙が渡される

そこに書かれた称号名に目を通すと、いつもは細く閉じられ気味なロキの目が薄く見開かれる

ゴクリ

それを見た神々が緊張の余り喉を鳴らす

最大派閥の片割れ、ロキが本気になればそこら辺のファミリア等、冗談抜きで消される

故にロキの反応に短い静寂が生まれたのだが――

「・・・ほお、ええやんけ、見直したでお前ら!!」

どうやら予想以上に気に入られたらしく、かなり上機嫌な反応が返ってきた

「つしやあああ合格出たぞー!!」

「じゃあこの子の二つ名は――」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「くそっ!? 引け! 引けー!!」

屈強そうな男と女性の入り乱れたパーティーが脇目も振らずに一目散に逃げ出していた

「GRAAA!!」

それを追いかけるのは子牛程の大きさをもつ超大型犬ヘルハウンド 人程度であれば骨まで焼き尽くす炎を口から吐き『放火魔』パスカビルとも呼ばれる、中層でもパーティー全滅の原因のトップをひた走る厄介なモンスターである

ここは中層の始まりにして最初の死線とも呼ばれる13階層

とあるパーティが運悪く怪物の宴に巻き込まれ、逃げ出している最中である

「よりもよつてヘルハウンドの集団かよ……つて危ねえ!!」

盾持ちの前衛である男がヘルハウンドの吐いた炎を持っている盾で防ぎ仲間を庇う、しかし

「どわつちャー!?」

ヘルハウンドの炎が瞬く間に盾を赤熱させ、男に盾を捨てさせる

せめてもの抵抗にと、盾をヘルハウンドに向けて投げつけるがあつさりと避けられる「ちくしょう! 予備の盾は後何枚ある!」

「んなもんとつくに捨てたわ!!」

「はあ!」

「あんな重い物を持ってこの速度を維持できるわけないだろうが!!」

「こんな時にケンカをしてる場合か! 急げ!!」

このパーティのリーダーであろう女性のエルフが叱咤し改めて全力での逃走が再会する

ダンジョン内だからこそその理不尽に皆が歯噛みしていると前方に人影が見えてきた「しめた! フィルヴィスあいつらに押しつけるぞ! いいな!」

「なっ!? 待てそのようなことっ」

「馬鹿野郎! 仲間と身知らずの他人! てめえが優先しなきゃならんのはどっちかわかってんだろうが!」

言い合っている間にも、逃げる先に居る冒険者との距離が縮んでいく

「っ……わかった、皆あの者達には悪いが怪物進呈パスバレードを行う! 私に続け!」

目先にいる冒険者は三人しかも

(まだ、少年少女と言ってもいい子供ではないか……こんな子供に私は……)

己の行う行為に嫌悪感を感じつつ二人の横を駆け抜ける

「すまないっ……!」

このとき通常なら聡明なこのエルフ

このパーティーのリーダーにしてデユオニソス・ファミリア団長「フィルヴィス・シャリア」は気付いていなかった

ここは中層の入り口13階層、

そもそも付き添いが居たとしても少年や少女程度では簡単に足を踏み入れることすらできない階層であること

そして三人がこちらに気付いているにも関わらずそこから動かず、視線は自分たちで

はなくヘルハウンドの群れに向けられていることに

(都合の良い考えかもしれない・・・でもどうか無事でい——

そんな風にせめて彼らの無事を祈っていると

「おっしやあああー!!魔石置いてけ犬っころー!!」

「ギャウン!?!」「ギャン!?!」

「経^{エッセリア}験値置いてけ・・・」

「キャイン!?!」「ギャウ!?!」

「アイズさん、またカイトの真似してたらリヴェリアさんに怒られるっすよー?」

その有り得ない声とモンスターの悲鳴を聞き、全員が振り返ると10匹以上いたヘルハウンドの群れの半数が頭を砕かれ、もしくは真つ二つにされて息絶えていた

こちらが呆然としている間にも年端もいかなない少年と少女二人によって瞬く間に血袋の塊にされていくヘルハウンド

「あ、あの金髪に金眼、見たことがある、ありや『劍姫』だ・・・」

パーティーメンバーの一人が二人の戦闘に畏怖をもって眩く

(あれが例の『人形姫』か・・・凄まじいな)

自分と同じLv.2だというのにその実力は明らかに向こうの方が上だとわかる、目

にも止まらぬスピードで自分たちを死に追いやりかけたモンスターが次々となます切りされて文字通りバラバラになっていく光景を遙かに年下の少女が作り出していることに驚きを禁じえない

(凄まじいのは、こっちも一緒か・・・)

そしてそれ以上の苛烈さをもつて少年が繰り出す拳と蹴りがヘルハウンドの頭を爆散させ、また吹き飛ばし壁に叩き付け血の芸術アートへと変えていく、だが真に驚くべきはこの攻撃を間合いの調整などと言った『劍姫』へのサポートをしながら行っていることだろう、まるでこの場の全てを把握しているかのような立ち振る舞いは既に熟練の冒険者の動きを連想させる

「た、助かった・・・で、でもよあれって」

「ああ、世界最年少記録の『劍姫』と一緒にいるということは・・・あの少年が最近噂のランクアップの世界最速記録保持者、ロキ・ファミアの——」

『ジョーカー
切札』

大派閥の新人冒険者に付けられたその大それた称号が決して誇張では無いということとを、戦闘を目撃した全員が己の眼を持って証明した。

「つていうか、これヤバくね？」

パーティメンバーの内一人が焦り出す

「何がだ？」

「いや、だつて俺たちロキ・ファミリアに怪物進呈パスバレードしちゃったんだよね・・・」

「[[[[[[あ]]]]]]」

戦闘の終了した方を見ると『劍姫』は無反応

サポーターであろう地味な少年はこちらを哀れむような目で

そして『切札ジョーカー』の方は何か企んでいそうな笑みを浮かべつつこちらに向かつてきてい

た

「わ、私が対応する・・・皆、余計なことば言うな」

この時、フィルヴィスは先程の逃走時とはまた別の意味で死を覚悟した

22：巫女×外道

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

《side：ラウル》

どうも・・・ラウルっす・・・。

え、元気がない？

そうっすねえ・・・なんかもう最近疲れるというか何というか

『むしやむしやむしやむしやむしやむしやむしやむしやむしやむしや』

「むお？ ラウル、ブーツとしてどうした、早く食べないとスープが冷めるぞ？」

「お腹でも痛い？」

いや、原因は朝から目の前で山盛りの御飯を掻き込んでいるカイトと、カイトの食べる食事量には遠く及ばないっすけど、それでも負けじと年齢と体格に見合わない量の朝飯に齧り付いているアイズさんのせいなんすけどね・・・

最近、同期のカイトがアイズさんの記録すら抜いてランクアップの世界記録保持者に

なつたんすよ

それ自体は非常に喜ばしいことで、カイトのランクアップの時には普段は闇派閥イウィルスのせいで忙しそうな先輩や団長達まで参加してファミリア全員で行きつけの酒場『豊穣の女主人』で盛大にお祝いを行たつすよ、いやああれは楽しかったつす！

ただ、問題があるとすればランクアップしたことでカイトが本格的にアイズさんのパートナーとして扱われることになったこと……いや別に寂しいとか嫉妬とかではなくて、自分が言いたいの——

「ふう〜……ごちそうさまでした！ よつしやあ!! ラウル！お嬢！ 今日もダンジョンで稼ぎまくるぞ!!」

「お〜!」

「おー……つす」

なくぜか自分までカイトとアイズさんの死デスマーチの行軍に付き合わされているということなんすよね？

2人にサポーターとして指名されたのは最初は嬉しかったし、付いて行くだけでガンスタイタスが上がるんすけど、この2人の規格外つぷりに自分の身体が保たないつすよお……

ああ……今日もまたモンスターの群れに特攻するんすねえ……

あ、アキ、もし自分に何かあつたら故郷の家族に……え、面倒くさい？

優しい同期が欲しいっす……。

《side out：ラウル》

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

早いものでランクアップから既に一月

あまりの怒濤の日々に過ぎている日常が加速するような感覚に襲われている

ランクアップが可能になってからステイタスを上昇させるための二ヶ月はマジでキツかった……

中層の入り口とも言える13階層でフィン達、そしてフィン達が忙しい時は他の上級団員の監視下の中で延々とアルミラージュや他のモンスターを狩り続けた

当初はベルに似ていて狩りづらかった兎型モンスターのアルミラージュもいまや作業の様に狩れるようになった……なってしまった……慣れとは恐ろしいものだ。

その血がにじむ・・・いや、もうあれは血が吹き出す程の努力と根性だったな、と我ながら思う・・・そのアホみたいなダンジョン漬けのおかげでランクアップ前のステータスがこれだ

カイト・クラネル Lv. 1

力：A 856

耐久：B 702

器用：B 780

俊敏：A 801

魔力：S 999

【念】の修練は部屋でも毎日やってるので魔力とかは早々にカンストしてしまった、逆に耐久の方は俺の戦闘スタイルが回避中心なのであまり上がらなかった、器用もかなり上がるには上がったが他のステータス程は伸びなかったのが残念だ

ロキから言わせれば後半のステイタスがこれ程伸びるのはそれでもとんでもないことらしい

どうせなら全ステイタスをカンストとかさせてみたかったが、そんなことは現実的ではないので事実上不可能だろう

ちなみに発展アビリティは当初の予定通り『奇運』にした

まあ、アビリティとして出るくらいだ、自分にとって不利になりすぎる様な能力ではないと思うが、

「カ、カイトーーーーー!!? また怪物の宴つすよーーーー!!?」

と、まあこのようにランクアップしてからモンスターとの遭遇率が倍以上になってるんだよなあ……

(ま、今の俺にとつては都合が大変よろしいから良いんだけどさ)

「うっし、行くぞお嬢! ラウルは下がっていつも通り弓で牽制を頼む!」

「ん!」

「りよ、了解つす!」

普通の冒険者であれば一日で数回も怪物の宴モンスターパーティに会うこと等なく、もしそのようなことになれば己の不運を呪うだろうが、そこはモンスターを斬るのが大好きなお嬢と借金返済のために金が入用な俺

これ幸いにとバツタバツタと来るもの拒まず去るもの殺すのスタンスでモンスターを滅殺

おかげで魔石がガツポガツポ！ 俺の借金もドドドドンと減ってグヘヘヘヘさらに経験値エクセリアもいつもの倍ゲツトできて、お嬢もホックホクでエヘヘヘラウルは巻きこまれてトホホホホ・・・なのはマジですまん

．．．．．
戦闘がサクツと終了し三人がかりでモンスターから魔石を取り出していく

「カイト、そろそろバツクパツクが魔石とドロップアイテムで一杯になりそうっすよー？」

「もうか・・・仕方が無い、一旦上に戻るか」

こればかりは持つ量に限界があるので仕方が無い

「魔石よりも経験値・・・」

金にあまり興味の無いお嬢が愚図りだす

「勘弁してくれ・・・帰りのモンスターは全部お嬢に譲るからさ」

「むう・・・なら、いい・・・カイトと居るとモンスターが向こうからたくさん来るから
楽」

ちなみにお嬢が俺と積極的にパーティを組んでくれるのはランクアップしてからの、
この異常なモンスターとの遭遇率のおかげであつたりする

（これってやつぱり『奇運』のせいなんかねえ？）

そんな事を考えながら三人で荷物をまとめて撤退の準備を始める。

そこから、えつちらおつちらと地上に向かって急ぎめで移動していると

「「「GRAAA!!」」」

と、どこからか複数の同種モンスターの雄叫びが聞こえてきた

「ひい!? なんすか!? また怪物モンスターパーエイの宴つすか!?!」

ラウルが焦り出すが聞こえてきた声はそこそこ距離がある、おそらく別の冒険者が襲
われているのだろう

「落ち着け、ラウル、こいつはたぶん別の冒険者が相手にしているモンスターの声だ」

「・・・助けに行く?」

お嬢が一応聞いてくるが目的は救助よりモンスターを殲滅することだろう

「いらんだろ」

「冷たいっすねー……」

ラウルが少し意外そうな顔をしているが別に俺は聖人君子じゃないんだ、面倒くさけりや見て見ぬ振りくらいすることはある、だが今回の場合は——

「いや、だってよー……あいつら俺たちに怪物進呈する気満々だし……」

「「え」」

お嬢とラウルが振り返って見た先の道からは、こちらに向かって一直線に逃走してくるパーティの一団の姿が見えてくる

（ん？ あの後ろのモンスターは……おっほ！ ラッキー!!）

「お嬢、運が良いぞ、後ろから来てる集団、ありやヘルハウンドの群れだ」

「!? ……狩る!!」

「応よー!」

「うへえ……勘弁して欲しいっすよ……」

ヘルハウンドは中層の中でも魔石的にも経験値的にも非常においしいモンスターだ、相手が進呈してくれると言うのなら見逃す道理はない

「すまないっ」

怪物進呈をされる時にすれ違った女性のエルフが申し訳なさそうにしていたのが少し気になったが、すぐに頭を切り換え、お嬢と二人でヘルハウンドの群れに突っ込み蹂躪を開始する

「おっしやあああー!!魔石置いてけ犬っころー!!」

「ギヤウン!?!」「ギヤン!?!」

「経^{エッセリア}験値置いてけ・・・」

「キャイン!?!」「ギヤウ!?!」

「アイズさん、またカイトの真似してたらリヴェリアさんに怒られるっすよー?」

そういや何故か最近お嬢が俺の真似をする事が多くなつた、俺は別にかまわないのだが、それを見たりヴェリアからお嬢の前で教育に悪そうな言葉遣いを止めるように言われていたりする、本人はママとか言われると激怒するけど傍から見れば教育に厳しい母親にしか見えないとは俺を含めたファミリア全員の意見である

(つていうかお嬢先走りすぎだつての!)

ヘルハウンドは灼熱の炎を吐くやつかいなモンスターではあるものの、炎を吐く際の予備動作状態の時に邪魔をすればただのどかい犬の魔物にすぎない

そのため炎を吐く動作に入った瞬間に初動を邪魔してさえやれば楽に狩ることがで

きる

(まあ、それも周囲の全てを把握できる『円』が使えるからなんだけどねっ!!)

「ギャン!!」

お嬢に死角が出来ないように、もしくは死角が出来たらそれを埋めるように立ち回る最優先はお嬢とラウルの安全だ、特にLv. 1のラウルに注意が向かないようにせねばならない

「お嬢！かがめ!!」

「っ!!」

間髪入れず、お嬢の上半身があつた所を死体となつたヘルハウンドが猛スピードで吹き飛んでいき、今まさに炎を吐こうとしていた個体にブチ当て、死体諸共爆散させる

「ラウルの方だ」

「ん」

入れ替わるようにして立ち位置を代わり、ラウルを襲うために横を抜けこちらに背後を見せたヘルハウンドがお嬢に切り刻まれる

逆に引いたお嬢を追って飛びかかってきた個体を入れ代わつた勢いでそのまま拳で潰していく、空中で出来上がった死体もつたないのでそのまま投擲武器のように他の個体に投げつけて数をさらに減らしていく

ラウルの方も地味に弓矢で応戦して囷とサポート役を全うしてくれる

これがこの三人の中層での連携だ、一月以上も三人でダンジョンに潜り続けたおかげでそこそこの連携が出来つつある

そして、それを繰り返しているうちに10匹以上居たヘルハウンドの群れがあつという間に全滅

だがここで油断はしない、戦闘が終わつたと思つたらすぐに『円』を限界まで拵げ、周りに隠れている個体などがいないかを確認

(・・・よし、OKだ)

安全であることを二人に伝えようやく一息つけた

「ふう、毎回の戦闘が心臓に悪いっすよお……つてあれ？ さっきのパーティまだ居るっすね？」

ラウルの言う通り彼らは俺たちが戦闘を始めてから足を止めてこちらの戦闘を見ていた、一応モンスターを横取りされないように『円』で感知し続けていたが、こちらに害を為す様子は見受けられない、だが彼らがここから去らない、いや去れない理由なら何となくわかる

「俺たちがロキ・ファミリアつて気付いたんだろ……都市最強と言つてもいい派閥に助けを求めるならまだしも、怪物進呈パスバレードをしたんだ、ここで逃げて後々バレれば報復が恐

いことになるとか考えて動けないんだろ」

「あー・・・確かに」

「つてことでラウル、これから荷物持ちのお手伝いさんが5人も増える予定なんで上に帰るのはキャンセルでこのまま探索続行な」

「え!?!」

「彼らには俺たちに怪物進呈をした罰として一日荷物持ちをしてもらおう」

さすがに、ここで相手に何もしない、もしくは要求しなければ「あそこのファミリアは怪物進呈しても何もしてこない」等と言われてしまいロキ・ファミリア全体がなめられることになる、そうなってしまうえば俺達以外のダンジョンに潜っている他の団員にも結果的に迷惑を掛けることになってしまうので必要な処置だ

向こうからすればモンスターに襲われ、それをようやく押し付けたと思った相手が都市最強派閥の片割れとか災難すぎるが、こちらとしては魔石と経験値をゲット、ついでに荷物持ち用の人手もゲットで一石三鳥だ

「交渉は――」

お嬢 ↑ 基本無口

ラウル ↑ 逆に言い負かされそう

「・・・俺だな」

「ん」

「なはは、お願いするっす」

「まあ、仕方が無いか・・・その分ラウルにはこの後の探索で気張ってもらおうとするけどな」

「うえ!?!」

「安心しろ、彼らをラウル以上に扱き使うから少しは楽になる・・・はず」

「うわあ・・・どつちにしろ碌でもないっすよそれ」

「ぶっ・・・つくつくつく・・・かもな？ そんじやまあ、行ってくるわ」

・
・
・

というわけで先のパーティの所まで来たわけだが

『ガタガタブルブルガタガタブルブルガタガタブルブル』

「モウオシマイダア」「ファミリアオワタ」「ミンナゲンキデナ：」「ウウウ、フコウダナア」
めっちゃ怯えられてて草

「先程はすまない！ 謝って済む事ではないがまずは謝罪を受け取って欲しい」

ただ、パーティのリーダーであろうエルフの女性だけは頭を下げつつも毅然とした態

度だった、無闇矢鱈に怯えられるよりかは好感が持てる

「謝罪は受け取ろう、だが、俺たちロキ・ファミリアに怪物進呈パスバレードをしておいて謝罪だけで許されるなんて思っていないだろうな？」

俺の言葉に後ろのメンバーと目の前のエルフの顔が苦渋に変わる、ファミリアの威厳のために仕方が無いとはいえ心苦しいなあ・・・

「おっと、そういや自己紹介がまだだったな、俺はカイト、ロキ・ファミリアの団員でー
 応 L v . 2 だ」

このままじゃ交渉しにくいので、とりあえず自己紹介から始める

「知っているとも、後ろにいる『劍姫』と・・・もう一人は知らないが、君の二つ名である『切札』ジョーカーの名を知らぬ者は今のオラリオには存在しない」

まあ、分かっちゃいたがやはり俺のことを知ってたか

「噂をされる本人には自覚しにくんだが、それでもあんたの様な綺麗な人にまで知っててもらえるのは光栄だな、まあ実際には名前負けしないようにこっちは必死なんだがね」

「それは謙遜だろう、先程の戦闘を見させてもらったが君の動きはその名に恥じぬ、いやそれどころか噂以上のものだった」

なんていうか、ここまで真つ直ぐな感じで言われたのは初めてだ

「あー・・・あんま褒められるのに慣れてないからちよつと照れる、そつちは、えつと――」

「フィルヴィス、『フィルヴィス・シャリア』だ、レベルは2、未熟ながら『デュオニユソス・ファミリア』の団長を務めさせてもらっている」

団長さんかー、ただデュオニユソス・ファミリアねえ？

デュオニユソス・・・デュオニユソス？ ダメだ、聞いたことがないファミリア名だ、Lv. 2のフィルヴィスが団長を務めていることからおそらく下級の零細ファミリア、派閥の等級はおそらくF、どんなに良くてもE、ギルドからフィン達ミッシェンみたいに強制任務ミッシェンが言い渡されることもない、まだ小さいファミリアなのだろう

「後ろのメンバーは全員Lv. 1か？」

「いや、Lv. 2は私以外にもう一人だ」

Lv. 2が二人にLv. 1が三人か

「Lv. 2が二人も居ればヘルハウンドの群れくらいどうかできたんじゃないか？」

「馬鹿を言うな！ 普通はLv. 2が二人いてもあれ程の数は捌ききれない、その上Lv. 1の団員をフォローしながら等とても・・・君たちの戦闘力が異常なのだ」

「そうか？」

モンスターの群れの相手とか日常茶飯事なんだが・・・腹黒いうちの団長のせいで

な・・・

しかし、そうだとすると困った、荷物持ちだけをさせたとしてもその程度の実力だと強敵に出会ってもギリギリ突破できるかどうかのバランスになる

っていうかぶつちやけ足手まといにしかない

とは言っても何もさせないわけにもいかない

うーん、どうしたもんかね？

(比較的安全な上層で荷物持ちをしてもらうか？ いや、でもそれだと中層こより大分、魔石も経験値もおいしくない、何より時間の無駄だ、ならどうするか——)

そんな風にならぬことについて長考していると何かを勘違いしたのかフィルヴィスが焦ったように話しかけてきた

『切札』、今回の怪物進呈は団長である私の判断で行ったことだ、故に団員に責任はない、あいつらは私の命令に従っただけだ、全ての責は・・・私に有る』

「なっ・・・フィルヴィス!?!」

「「団長!?!」」

他のデュオニユロス・ファミリアの団員がフィルヴィスの言に驚きを顕わにするが

「お前たちは黙っている!!」

フィルヴィスの一喝で押し黙ってしまう

「これも団長の務めだ．．．任せてくれ」

何だろ、なんか声を挟みにくい雰囲気なんだが．．．

何かを決意したかのような顔でフィルヴィスがこちらに向き直る．．．いやさすがにちよつと大袈裟すぎないか？

こつちはきちんとそれなりの罰を与えたという体裁が取れば良いから、そこまで大それた事をやらせるつもりじゃないんだぞ？

ちよ、やめて!?

そんな目でこつち見んといて!

ナニその今から生け贄になるみたいなの決意を秘めた乙女の顔は!?

魔王や竜王にクラスチェンジした覚えはねえよ!?

『切札』、^{ジョーカー}取引だ」

内心で戸惑うこちらにお構いなく勝手にそれっぽい話を勧めてきた

「今回の事を不問とする代わりに」

いや、さすがに無かったことには——

「私にできることなら 何でもしよう!!」

．．．．．ん？

23：巫女×秘密 前編

バンバンバンバン

肉がぶつかる音が辺りに響き渡る

「ジ、『切札』^{ジョーカー}これ以上は、もう・・・無理・・・だ・・・壊れ・・・る」

『デュオニユソス・ファミアリア』の団長であるフィルヴィスが汗だくになりながら息も絶え絶えに己の限界を訴えてくる

バンバンバンバン

だが、その間にも肉がぶつかる音は決して止まらない！

「アアツつんんん・・・これ以上はほんとにつ・・・もうダメ——」

.....

あの時、まるで何かの誘惑を断ち切るような表情をしたカイトが、苦渋の末に搾り出すような声で私に出した条件は『自らのパーティに一ヶ月だけ参入する』という意外にも軽く感じる条件でした

私はその時、軽率にも飲んでしまったその条件を正直後悔しています。

何しろ彼ら、というか『切札』、『剣姫』が規格外すぎます

何なんですか『剣姫』のあの付与魔法は？ 効果もさることながら魔法の詠唱が私よりも短いですし・・・

そして『切札』、彼も色々おかしいです、後ろに目でも付いていなければ説明がつけられないような動きです、何故見えてない攻撃や相手の位置を完全に把握できてるんですか・・・

・・・自分は本当に彼らと同じレベルなのか自身がなくなりそうです。

同じLv. 2でも前衛と後衛では直接的な近接戦闘では実力に差が出やすいとはよく聞きますが、あの二人は明らかに通常の冒険者の常識や実力を逸脱していると断言します

本人達に異常性を説いても

「これくらい普通だよなあ？」

「ん……ふっ」

このように言葉が通じません

というか、そうそう巡り会うことのない怪物モンスターパーティーの宴に1日で、それも連日ではほぼ絶え間なく何度も襲われるということ自体が異常すぎます、そのことについて詰問したら、

私の中で常識人カテゴリーのラウル・ノールドヒューマンという人間の少年にポンと肩を叩かれ「いずれ……慣れるつすよ……ハハッ」

全てを諦めたかのような光のない目、もしくは東方に伝わる菩薩のごとく悟りを開いた目で諭されました

彼らと今まで一緒に居た彼の気苦労を思うと涙を禁じ得ません。

この四人の中で唯一のLv. 1である彼は『切札』や『剣姫』と違い本当に何もかもが普通です、むしろよくこの二人を相手にしててそこまで普通を貫けることに一種の尊敬の念すら抱かせます。

少し話が逸れてしまいましたね、話を戻すとしましょう

あれからカイト達とパーティを組み、ダンジョン探索を行っているのですが、現在の階層は15階層

デュオニユソス様はご存じでしょうか？

15階層からは厄介な、とあるモンスターが出てくることをその名を「ミノタウロス」

牛頭人体、身長は2mを超え、その力と速さはLv. 2であろうとも倒すのが困難、Lv. 1であれば死は免れず、階層主に次ぐ程に悪名が轟くモンスターです。

そして今現在、私達は

「ぬおおおおお!? さすがにミノタウロスの怪物の宴は洒落になんねえええー!?」

30を超えるミノタウロスの群れに追われています

さすがの『切札』と『劍姫』でも数に圧倒され撤退を余儀なくされてしまいました

デュオニユス様・・・私の冒険はここまでももしれません

《side out: フィルヴィス》

|||||

(逃げるとか、久しぶりだな!?)

L.V. 2に恩恵をランクアップさせてからというものの負け無しだったせいがちよつと自惚れていた

ミノタウロスでも4体か5体くらいなら一人でも対処できるが、さすがに30体以上を同時に相手をするのは無理だ。

(・・・っ!・・・むう)

というか普通にヤバイ

『円』を限界まで拡げて分かったが、今走っている曲がりくねった一本道をこのまま行くと広間ルームに出る、しかもそこは行き止まりの袋小路

(使うしかないか・・・)

最後に『ジャンプジャンプの海賊印バイレリツ』使用したのが4ヶ月前、久々の使用に少し不安が残るが背に腹は代えられない

ちなみにこのスキルは「念」と違い、動きを止めて集中しないと出せなかったりする、移動しながら使うには魔道師で言うところの『並行詠唱』クラスの鍛錬がいるだろう

「全員聞いてくれ！もうすぐでかなり広い広間ルームに出る、そこでこいつらを殲滅するため
の奥の手を使う！ちつとばつかし準備に時間が掛かるんだが広間の入り口で時間稼ぎ
を頼めるか!？」

広間ルームの広さに対して入り口はミノタウロスが精々2体並んで通れるかどうかだ

「俺には無理つすよー!?」

「私も難しい・・・相手の勢いと重さで突破されると思う」

L v. 1のラウルは当然としてお嬢でもやっぱキツいかー

「どれくらいで、その奥の手とやらは使えるのだ!？」

意外にもフィルヴィスから質問が飛んできた

「10秒あれば十分だ!!それでも上手くいくかどうかはわからんがな!!何か打つ手でも
持つてるのか!？」

「私の魔法に超短文型の魔法障壁がある！それなら十数秒だけだがミノタウロスの猛攻
を止められる!!」

マジかよ、フィルヴィスと出会えてマジでよかったと心の底からそう思った。

「素晴らしい！サイコーだ!!俺に恋人がいなけりや惚れてたな!!」

「冗談はこの危機を乗り越えてからにしてくれ！ それと『剣姫』！ほんの少しで良い、
風でミノタウロスの勢いを削いでくれ!」

「ん……わかった」

話しながらもドンドン広間^{ルーム}への入り口が近づいていく

「全員、タイミングを合わせろ!!」

そしてゴールである広間^{ルーム}に突入と同時に反転

「あだあ?」

ラウルだけは息が切れたのか突入と同時にハデにすつ転んでいたが、むしろよくこの行軍に遅れずに付いてきてくれたと褒めるべきだろう

後は俺たちの仕事だ

『『剣姫』! 今たゞ!!』

『『目覚めよ』!!』

この広間^{ルーム}唯一の入り口から通路の奥へ物理的な圧力を持った風が吹き荒れる

「『ブモオオオオオオオ!』」

逃げていた獲物からの突然の反撃に先頭部分を走っていたミノタウロス数匹が意表を突かれて転ぶと、運が良いことに後続がそれに足を取られてもつれるように一緒に転んでくれた

おかげでほぼ完全にミノタウロスの特攻の様な行軍が止まってくれた

「後は私に任せろ! 入り口に蓋をする!」

『———盾となれ 破邪の聖杯^{さかすき}』

詠唱と同時に強力な魔導師たる証しである、魔法円がフィルヴィスの足下に展開される

この1週間、一緒に探索をしていて知ったがフィルヴィスは魔法種族であるエルフに多いように魔法を所持している、しかも魔法の威力を増幅させる魔法円を展開できるよ
うになるアビリテイ『魔導』も習得している優秀な冒険者だ、さすがに二つも魔法を所持しているのは知らなかったがここにきて嬉しい誤算だ

(ミノタウロスもフィルヴィスとの出会いも『奇運』のせい・・・おかげなんかな?)
混乱から復活したミノタウロスの群れが再度こちらにむかって行軍を開始する

「ひいひいひい来たっすよ!」

魔障壁
「【デイオ・グレイル】!!」

「ブオオオオオオ!」

透明な壁が入り口を塞ぎ、間一髪でミノタウロス達が入ってこれないように防いでくれた

バンバンバンバンバンバンバン!!!

それでも目の前の獲物を狩るためにミノタウロス達はその膂力に任せて障壁を叩き始める

「『切札』ジョーカー 急げ! 長くは保たんどぞ!」

「了解！ 出ろ！」
「ジャンプの海賊印」!!」

目の前に久々のロゴマークの様な不思議生物？が現れる

「な!？」

「ん？」

「お、久しぶりっすね」

初めて見る不思議生物にフィルヴィスだけでなく、お嬢まで驚く

(そーいや、お嬢はこいつを見るの初めてだったけか)

ちなみにラウルには一度見られて以来、何回か部屋でこいつを召喚して話し相手に
なってもらっていたりするので驚きはない

「いきなりで悪いが、早速頼む！スロットを回してくれ!!」

『……』

「おい、急いでくれ!!」

『四ヶ月モ放置シトイテソレカヨ、アア、オレノマスターハ薄情ダナー』

なんかイジケテル!?

「今はマジでピンチなんだ、文句は後で聞くからさっさとスロットを回してくれ！」

『……プイ』

おiiiiiiiiiiiiiiii今はマジで時間ないんだって!?

バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！

そんな問答をしている間にもミノタウロスの障壁を破ろうとする攻撃の勢いが増していく

「ジ、『^{ジョーカー}切札』これ以上は、もう・・・無理・・・だ・・・壊れ・・・る」

障壁への魔力を込めたフィルヴィスの腕がふるふるし始めてるうううう!?

「わ、わかった！じゃあ、後で酒を飲ませてやるから、ついでにつまみもつける！俺渾身のじゃが丸くんだぞ！」

「カイト渾身のじゃが丸くんっ・・・」ジュルリ

お嬢の方が釣れてしまった

「お嬢には帰ったら作ってやるからそっちに集中な!？」

バン！バン！バン！バン！バン！

ついに障壁に亀裂が入り始める

「アアツっんんん・・・これ以上はほんとにつ・・・もうダメ——」

(ヤバイヤバイヤバイ!?!これは洒落にならん!?)

『・・・チツ、アトマツサージもツケロ、ソレデカンベンシテヤル、ククク肩デモ揉んでモラオウカネエ?』

空気を読んでくれたかはわからないが、ようやく「^{ジャンプ}ジャンプの海賊印」が折れてくれ

た・・・ってか、おめーの肩どこにあんだよ!?

「わかったから、マジで急ぎで頼むって!」

『ワーツタヨ・・・ったくオラア! 久々のスロットダア! イイ目がデロヨ!! ドウルルルル!!』

なんとか説得が上手くいきスロットを回してもらうことに成功する、にしてもこいつ放置しとくと俺の言うこと聞かなくなるのか・・・今後はこまめに召喚してやらねば

そうしてスロットに表示された数字は『11』だった、当然ながら初の数字だ

(『11』かぁ・・・キャンセルしたら、かなりキツいなぁ・・・ん?)

『11』が表示されると「ジャンプバイレックスジャンプの海賊印」の姿が前世で見たジツポライターの形に変化した

(何だ? こいつが何かに変化するなんてパターンは初めてだな、武器・・・なのか?・・・ライターが?)

空中から落ちてくるそれを掴んだ瞬間に『11』の能力がすぐさまに俺の脳内にインストールされる

「こいつは・・・」

「くうううう!!」

「フィルヴィスさん!」

その瞬間、ついにフィルヴィスに限界が来たのか障壁が完全に破砕する、倒れるフィルヴィスをラウルが抱き止める

だが俺は焦らない、何故なら今回のこの能力は――

「・・・当たりだな」

「「ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」」

なだれ込むように次々と広間^{ルーム}に入ってくるミノタウロス、入り口に一番近い所にいたフィルヴィスとラウルに襲いかかろうとしているが

「焼き肉にしてやらあ、畜産物共が」

もはやこちらは獲物ではない

お前らは今この瞬間、狩る方から狩られる側に回ってしまったことを教えてやる

ミノタウロスに向かって走り出すと同時にジツポライターに付いている針を自らに突き刺す

「行くぞ――」

刃
身
の
式

糸 斬 空

チ ツ グ カ ・ 法 血 流 斗

針を突き刺した部分から俺の血が吹き出す

赫^{かく} 縮^{わん} 縛^{ぼく} !!

意思を持った血系が全てのミノタウロスに絡みつき一纏めにして拘束した

「炙りチャーシューの準備完了ってな!!」

い

ならどうするか？

今回限定ではあるが――

お嬢の力を借りる

俺のこの『11』の技の特性上、あの子の『風』は俺の火力を倍加させてくれるはずだ

「お嬢！まだ『風』は使えるな!？」

「ん、いける!」

頼りになる小さな相棒の力強い返事が返ってくる

「ハッ上等！ 今から馬鹿でかい技をぶつ放すからタイミングを合わせて威力が分散しないように『風』で囲んでくれ!!」

それなら間違いなく奴らを殲滅できるはずだ、そう思っていたのだが・・・

「え・・・私の風は離れた場所に発生させることはできない・・・」

「ぐつはあ!?!マジか!?!」

さすがにお嬢の風もそこまで万能では無いか・・・

どうしたものかと迷っている間にも血糸がギシギシと嫌な音を出し始める

(だー!?!どうするどうする!?! 奥義をぶつ放した後にお嬢を火に投げ込んで――

「……ってんなことできるかあ!?! ……ん? 投げ込む?」

そこで思い出すのはこの技の元となった作品、そして斗流ひきつばしりゆうけつぽう血法・火のカグツチと

風のシナトベ

俺が今使っているのはカグツチ、風のシナトベは同じ流派でも使うことはできない

だが、風のシナトベがどのようなようにして使われていたかは覚えていた

(たしか、風のシナトベを使うあの魚類は武器をぶん投げてから風を発生させたりして
いなかったか? だとしたら――)

「……だったらその剣にありったけの魔力を込めた風を付与してから中心に投擲すると
かじやダメなのか!?!」

「!! ……それなら多分いけると思う!」

「うっし! ……じゃあそれで行く! お嬢は急いで風を貯めてくれ!」

時間が無い、今見えている紅い系は全て俺の血液で出来ている、そのため血系をこれ
以上巻き直したら俺が貧血で倒れて動けなくなる

その前に何としても決着を付けねばならない

「お嬢、景気づけだ、俺が」 ■ ■ ■ 「って技名言ったら」 ■ ■ ■ 「って叫ん

でみな、威力が上がるからさ」

「威力が上がるの?」

く

まあ、この威力も当然だ

なにしろ通常は一つの属性でしか攻撃できないところを二つの属性を合わせて威力に相乗効果を生む超が付く必殺技だ。

俺が今回、『11』で宿した能力は発火性の血液を操る斗流ひきつぱしりゆうけつぽう血法のカグツチと言う能力だ。そして目の前に広がる地獄のような光景を作り出した技、本来の名を「七獄天羽韃」と言う

前世での漫画に出てくる吸血鬼退治のスペシャリスト、その超人達の中の技でも一際派手な技が斗流ひきつぱしりゆうけつぽう血法のカグツチだ、しかし、実はこれ一つでは十全な威力を放つことが出来ない

カグツチの炎の威力を最高にするには同じ斗流ひきつぱしりゆうけつぽう血法の風を操るシナトベの使い手が必要となる

本来「七獄天羽韃」はカグツチとシナトベの合体技だが、シナトベまではさすがの【ジャンプの海賊印ジャンプバイレーツ】でも使わせてはくれないらしい・・・まあ、無理もないか、二つを同時に使う場合は二種類の血液を体内で混ぜられないように循環させねばならないとか言ってた気がする、さすがにそんなアホみたいな芸当はできん

今回はシナトベの代用としてお嬢の風を使用し、なんちやつて斗流ひきつばしりゅうけつぽう血法

「七獄 偽・天羽鞆」として使用してみたが思いの外威力が出た

まあ、こいつは本来なら不死身の化け物に使う技だ、エセ奥義であったとして、不死でも何でも無いミノタウロスにはほんのわずかな抵抗が関の山といったところだろう

ただ、少し誤算があるとすれば――

（あ、あぶね、お嬢の風で囲って範囲を限定してなかったら自分の炎で焼け死んでたかも……）

と自らの技の威力を甘く見ていたことだろうか

そんな風に反省している間によく風と炎が止む

数秒前までミノタウロス達が居たその場に残ったのは地面に突き刺さったお嬢の剣のみだった

「ふー……何とかなったかあ……お嬢」

「……なに？」

隣に居る相棒に拳を突き出すのが、拳を見たお嬢に不思議そうな顔をされた

（女の子じゃ、こういうのはわからんかな……）

「こういう時は拳を合わせるんだよ」

「?.....ん」

軽く尽きだしたお嬢のグーとコツンと触れる

「お疲れさん、だ」

「!!.....フフ、うんお疲れさん!」

うむ、どうやらお嬢にもこの何となくの良さが伝わったようだ

(さてと、ゆっくりもしていられんな.....まずは休憩、その後にまだ消えないこの『1』の能力をどうにかして解除だな.....)

俺の手の中には未だに消せないジツポライターがあつた、つまりスキルは俺が使用済み条件を満たしていないと判断しているようだ

しばらくは危機を乗り越えた余韻に浸っていたいが、そうもいかないらしい

「お嬢、とりあえずしばらく休憩したいから広間の壁を壊そう.....ラウル!ピツケルを持ってきてくれ!!」

フィルヴィスの介抱をしていたラウルに声を掛ける

「了解つす! 休憩のために壁を壊すんすね?」

リヴェリアの勉強会で学んだことだが、ダンジョンにはモンスターを産むことよりも自らの修復を優先するという特性があるらしい

その特性を利用して休憩する際にはモンスターが生まれないように壁を壊してから

休むというのが冒険者達の常識となっている

「ああ、それとフィルヴィスの容態はどうだ？」

「ちよつと精神疲弊と、その・・・」

「ん？どつか怪我でもしちまったのか」

「こつから見た限りではそこまで大それた怪我をしているようには見えないが

「いや、カイト達の魔法？を見てから放心状態になつてゐるっすね・・・まあ仕方がないと
思うっすけど」

「なんじゃそりゃ」

「まあ、常識人カテゴリーの自分たちには色々あるんすよ、いろいろ・・・」

「ハハツ、それだと、俺とお嬢に常識がないみたいじゃねーか」

「え？」

「ん？」

「・・・・・・・・・・」

「おい、さて————「そ、それじゃあ、壁を壊すのはフィルヴィスさん以外の全員で
いいっすかね!」」

誤魔化された

(……まあいいか)

「……お嬢とフィルヴィスは先に休ませる、ここは男手の俺たちが踏ん張る——

『No. 11ノ完全習得ノ報酬トシテ ■ ■ ■ ■ ■ ヨリ 識別番号No. 1
1ノ情報ガ開示サレマス』・ぞ?」

ラウルと会話している最中に突然、無機質な音声が届いてきた

(………は? え? 何だ今の声は……報酬? 情報開示? 何のこ……痛だだ
だだ!?)

疑問に思った直後、脳内に『11』能力、そのより詳しい情報、それも最悪と言って
いい【使用済み条件】までもが激しい頭痛と共に無理矢理流れ込んでくる

(おいおいおいおい!? つて、な……なんじゃこりやああああ!?)

|||||

《side:フィルヴィス》

人というものは理解できないものを目の前にしたとき空っぽになるということを今、初めて知った。

私は後衛の魔導師だ、故に近接は最低限の自衛程度しか習得していない
それでいいと思っていた

前衛が崩しきれない敵を必殺の魔法で屠り、時には防ぐ

それを誇りに思っていた、魔法を使えることで前衛に出来ないことができるのだと、
そう思っていた。

だが

そんなちっぽけな誇りもこの1週間で・・・特に、今日をもって崩れ去った

本来は前衛であるはずの者達が魔導師の私より強力な魔法を使う、当然ながら近接攻撃などが比肩することすらおこがましい程に差があるというのに

これが私よりもレベルが上の者ならば自分を誤魔化すこともできただろう

だが、あの二人は私と同じレベル、しかも遙か年下で片方に至っては幼女といっても差し支えない年齢で、だ。

呆けた私の目に入るのは『剣姫』と『切札』と談笑する彼の姿だ

(すごいな・・・彼は・・・何故あんなもの見た後に普通に接することが出来るのだ・・・)
 彼・・・『切札』^{ジョーカー}のことではない、

ラウル・ノールド

化け物のような同期と年下の少女とパーティを組む平凡すぎる少年

もしかしたらあの三人の中で最も異常なのは下手をすれば彼なのかもしれない

実力は並だとしても、その精神力だけは恐らくそこらの上級冒険者よりも遙かに上であろう、並の神経では彼らと共に居るのには耐えられまい

(はは・・・何だ、この中で一番弱いのは私じゃないか・・・いや)

先程の魔法を見たせいにか、それとも精神^{マインド}疲弊のせいなのか、悲観的な考えしか出てこない

そんな、私らしくもないことを考えていると

少し離れたところに居る『切札』^{ジョーカー}が急に頭を抱えたかと思うと

ツカツカと足早に私の方まで歩いてきた

「・・・? 急にどうしたのだ『切札』?」

休憩のために壁を崩すという話はこちらまで聞こえていたが・・・

「フィルヴィス・・・最初に会ったときの『できることならば何でもする』というのはまだ有効だろうか・・・もしそうならた、頼みが・・・あるっ・・・」

「な、なんだ藪から棒に……」

かなり深刻な話なのか、まるでこの世の終わりのような顔で言ってきた

急にどうしたのか疑問に思っていると、いきなり『切札』^{ジョーカー}が私に向かい正座した上で、手のひらを地に付け、額が地に付くまで伏せそのまま地面に亀裂が入るほど額を叩き付けた

（こ、これは……東方に伝わるといふ、交渉における最も相手に敬意と深い謝罪や請願の意を表す時にもみ使われるという DOGEZA!?)

そのあまりに見事な DOGEZA に呆気にとられてたが肝心の内容を聞かないことには返事のしようがない

「ジ、『切札』^{ジョーカー}まずは事情を説明してくれ、そうでないと、一体何が何だが……」

地に額を着けたままの状態ではこちらが困ってしまう、というか彼と『剣姫』の視線が痛い、一体何事かとこちらを見ている

「事情はあまり詳しくは言えない、だが俺の命に関わることなんだ」

「なっ!!? 命!?!」

「ああ、そしてそれから俺を救えるのは、この中ではお前だけなんだ……だから頼む……俺を……助けて下さい……」

搾り出すような心の底からの嘆願

この『切札』^{ジョーカー}の口調と声の真剣さは嘘や冗談ではないとはつきりわかる．．．どうやら私が思っていた以上に自体は深刻のようだ

「それは私が命をかけなければならぬほど難しいものだったりするのか？」

「いや、そこまでではない、だが．．．お前の誇りを傷つけることになる」

エルフの多くはプライドが高く誇り高い一族だ、

だが、それでも命の恩人を無下にするほど私は薄情では無いつもりだ

「もし、私が断つたらお前は確実に死ぬのか？」

「今回は死ぬ確率の方が圧倒的に．．．高い．．．っ」

「．．．．．」

（今回は、か．．．理由はわからないが私達をミノタウロスの群れから救うために何かしたのだろうか？．．．先程の強力な魔法は何か代償があるものという可能性も．．．．．はあ、展開が急すぎで頭がついていかん）

私が先程まで恐れていた少年がどういった経緯か、今は私に助けを求めているという光景に戸惑しか感じない

だが、『切札』^{ジョーカー}が、カイトがいなければ私達は全滅していたのは間違いない

（ならば、迷う必要など最初からではないか．．．）

「カイト、顔を上げてくれ」

「……………」

そういつてようやく顔を上げたカイトの顔は何かに迷い、そして苦しみに耐える、苦渋に満ちた顔だった

「私は……私は何をすれば良い？ お前にはいくつも借りができてしまったから……出来ることなら何でもしよう、『我が友』よ」

それを聞いたカイトの顔がようやく少し明るさを取り戻してくれた

「ああ、やってほしい……というか、正確には、やらせてほしいことは実際には簡単なんだが……難しいというか……」

「……やらせてほしいこと？」

その言葉に一抹の不安と嫌な予感、私の第六感が今すぐに逃げろと継承を鳴らし始めた

「ああ、お前の……」

「私の？」

「おっぱいを揉ませてくれ!!」

奴は決め顔でそう言った。

ふむ・・・さて、切れ味の良さそうな私のナイフはどこいったかな？
目の前のクズを処分せねば

《side out：フィルヴィス》

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

【ジャンプジャンプの海賊印バイレーツ】

No. 『11』 ↑ new

《斗ひきつばしりりゆうけつぼう流血法・カグツチ》

使用すると全身の血液が一時的に発火性の血液となる

さらにその血を糸・剣・刀等の武器に固めて使用することが可能

※備考

『風』の属性を使用できる術者と技を複合させることで火力が増幅する

【以下、第三級機密情報】

〈使用済み条件〉

戦闘終了から30分以内にセクハラを行う

条件失敗で強制キャンセル

※警告

生サクリッアイズ贄アイズに使用するステータス値が足りません。

至急、経験値エクセリアを溜めるか条件の執行を行って下さい。

25：巫女×秘密 後編



《side：ラウル》

「アイズさん・・・あの二人何かあったんすかね？」

「ん？」

「いや、カイトとフィルヴィスさんっすよ」

場所はダンジョンの中層 16階層

自分とアイズさんは見張り、逆にカイトとフィルヴィスさん達は自分たちと交代して休憩をとってるっす

ミノタウロスの怪物の宴

モンスターパーティ

あれから既に三日が経ったっすよ

あの災厄の後は早めにダンジョン探索を切り上げて、翌日は丸一日休みにして昨日からまた探索を再開したんすけど・・・

昨日の探索時から二人の、特にフィルヴィスさんの様子がおかしい

どれくらいおかしいのかと言うと

「カイト、その・・・クツキーでもどうだ？」

「おお、サンキュー・・・んぐ・・・へえ美味しいなこれ、クルミか何かか混ぜたって香りも良いな、どこで売ってる奴だ？」

「いや、それは私の手作りなんだ、私の故郷でよく作る奴でな、その、そうか・・・美味しいか、ソフフ」

なんかあからさまにカイトへの熱烈アタックが始まったんすよ、しかしカイトの方は普通な対応

（あれってフィルヴィスさんの好意に全然気付いてないっすよねえ・・・それにしてもこの変貌ぶり、やっぱあの時に何かあったんすかねえ、カイトに聞いても何も答えてくれないんすよねえ・・・）

こんなキャピキャピした雰囲気醸し出す男女を見ると、いつもなら負の感情がメラメラ無限に湧いてくるんすけど、今回はどちらかというとハラハラして心臓に悪いというか・・・

「・・・2人の仲が悪いの？」

「いや、むしろその逆なんすけど・・・」

「んー？ 仲が良いのは良いことだよ？」

「そーなんすけど・・・何か後々まずいことになりそうな気がするっていうか後が恐いというか・・・」

アイズさんにはまだこういつた男女の機微とかは早かったみたいっす

そんなこつちの心配をよそに向こうは益々雰囲気が良い感じに

「お、お茶もどうだ？ 故郷の森で飲んでいたのと似たような茶葉を最近見つけてな」

「助かるわー、ダンジョンだつてのに贅沢だなあ、おおこれも美味しい！」

「そ、そうか美味いか、よかった・・・フフ」

「いや、将来フィルヴィスは良い嫁さんになるなあ」

「んなあ!!・・・そ、そういうのはまだ早いといふかなんというか」

「ん？ 何か言つた？」

「いや！何でも無いぞ!! うん、平和だなあ、と言つただけだ！」

「はっはっは！ダンジョンに平和も何も無いだろうに、フィルヴィスも面白いことを言うなあ」

「そ、そうか？・・・そうだな、まったく自分は何をいつてるんだか、は、ハハハハ」

(こ、これは一体何がおきてるっすか・・・?)

カイトとフィルヴィスさんの間で会話が噛み合っているようで噛み合っていないよ
うなもどかしい声が聞こえてくるっす

「ラウル、見張りにしゅうちゅう！」

「す、すんませんっす！」

(こ、こんな気になる会話を聞きながら見張りに集中できるわけがないっすよ・・・)

《side out：ラウル》

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

ラウルが2人の雰囲気^{モンスターパーティー}を訝かしみ始めるころより、時を遡ること三日

つまりはミノタウロスの怪物の宴に遭遇した事件当日

、災厄を凌ぎきってから数十分後の出来事になる

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

《side：フィルヴィス》

「フィルヴィス、だ、大丈夫か・・・？」

「ら、らいじょうぶらあ」

「その、なんか・・・すまん・・・」

ビクビクと微かに痙攣し、息も絶え、顔を恥辱と悦楽で混ぜた表情で横に倒れ伏すエルフの姿があつた・・・というか私だ

(しゅ、しゅごかつた・・・)

このような状態になってしまったのは、カイトによるセクハラが原因である。

カイトに『胸を揉ませてくれ！』と言われたときは、即座に切つて捨てようと思った

が、この1週間共にダンジョンを駆け巡って多少はこの男の性格は分かったつもりだが、そしてこいつはいきなりそんなアホなことを言う奴では無かったはずだと、なけなしの理性を掻き集めて斬りつけるのを我慢した

何故そのようなことをする必要があるのかカイトを問い詰めると、数秒ほど沈黙と共に葛藤したかと思うと絶対に他言無用ということまでカイトから掻い摘まんで説明された内容はかなり荒唐無稽な話だった

要約するところだ

- ・ 先程の魔法に見えた炎はスキルによるものであるということ
- ・ スキルはランダムで何が出るかわからないということ
- ・ スキルには代償が必要で、ステータス値を最大で1000以上失わなければいけないこと又、代償を支払えない場合は死が待っているということ
- ・ ステータス値を捧げる以外でスキルを消すには特殊な条件をクリアしなければならぬということ

・ そして今回の条件はセクハラを行うという信じがたい条件、しかも30分以内：この時点で既に10分経っているので実質20分以内にセクハラを行わなければ死ぬ

ということだ

はつきし言おう・・・信じられん!!

なんだそのスキルは？

見たことはもちろんだが聞いたことすらない

セクハラなら『劍姫』にでも・・・と思つたが

『8歳』『幼女』『セクハラ』

この三つの単語が並ぶだけで犯罪臭が凄まじい

仮にそんなことを強要しようものなら私は自責の念で首を吊る

そんなことを悩んでいると

(いや・・・待てよ?)

ふと天啓が降りてきた

・・・別にセクハラをするなら女に限らないのでは？

セクハラは同性にも通用するはず!!

それをカイトに伝えると

「その手があったか!!よつしやあーーーラウルウーーちよつと胸揉ませろーーー!!」

フィルヴィスから女がダメなら男の胸を揉めば良いじゃない！

と助言をもらい、さっそくラウルにセクハラをしに行く

成る程！

確かにセクハラは同性でも成立するはずだ！ナイスアイデア！！

正直、お嬢の胸を揉むのは倫理的に完全アウトだ、フィルヴィスに事情を説明して犬に噛まれたとでも思ってもらえないかと苦しい言い訳を考えていたがこれもぶっちゃけアウトだ、だがしかーし！ラウルなら同性の友同士の悪ふざけですむ！

(フハハハハハハハハハハの『ー』の能力大当たりじゃん！)

同性の胸や尻を揉んだり撫でるくらいなら、気分は非常によろしくないが破格の能力だ！無闇矢鱈に異性にセクハラを行うよりは大分ましと言えるだろう、事情を説明しておけば異性に頼むより抵抗感も少なくて済む！

問題があるとすれば同性でもアツチの気がある奴には気をつけなければならぬって事ぐらいか、誤解から俺の貞操が奪われる事態になったら目も当てられん

(残りの時間は……)

00 : 16 : 36

00 : 16 : 35

00：16：34

(16分半！これだけあれば間に合う!!)

ちなみに先程から意識を少し集中させると残り時間がタイマーの様に頭に思い浮かぶようになった、地味に助かる。

ちなみにラウルはお嬢と一緒に壁を壊すためにこちらを向いていない
つまり後ろから不意打ちで胸の部分を鷲掴みにすればいける!!

「ラウル~~~~!!」

「どうわああ!?何すかあ!?!」

ぐわし!!

モミモミモミモミと後ろからラウルの胸部を鷲掴みにして揉みしだく

(これで条件クリアのはずだ！タイマーは・・・)

00：16：01

00：16：00

ペナルティ
『罰則事項』

00:08:00

なんか半分になった。

「なんでだああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！？」

「ちよ、いったどうしたっすかカイト!?」

（なんでだ!!?・・・まさか同性だとダメなのか!?)

ラウルが困惑しているがそれどころではない、リアルに俺の命のタイムリミットが10分を切ったのだ

アホみたいな理由だが今世で一番の命の危機かもしれない、もはや手段がどうのこうの言うような状態ではなくなった

わかってはいたつもりだったが、自分のスキルのアホさとヤバさを改めて思い知らされる

「ラウル、お嬢、リーダー命令だ!今すぐ作業を中断、広間の入り口の警戒に入ってくれ」

「はい?なんなんすかさつきから?」

「ん・・・説明」

「スキルの後遺症で後8分足らずで俺が死ぬ!それを確実に回避できるのはこの中じゃ

「フィルヴィスだけ！」

「!?・・・わかった」

「え？死ぬ？は？——いってて!?」

かなり端折って説明したが、お嬢は即座に理解はしなくとも状況をわかつてはくれたようだ、今だ混乱しているラウルを引きずりながら入り口に向かつてくれた

(ほんと頼りになるわ・・・)

入り口に向かうラウルとお嬢を確認したので急いでフィルヴィスの元にダツシユ

「フィルヴィスウー——!! まじでやばい！」

ラウルにセクハラっぽいことを行った瞬間に制限時間が半分になったことを説明

「はあ!?なんだその男にとつて都合が良すぎる展開は!?」

「俺が知るかあ!?つてか時間が7分を切ってるんだ、頼む!!胸でも尻でも何でもいいからセクハラと判断できる何かをさせてくれ!!このままじゃ死ぬう!?」

「・・・・・・・・つ」

フィルヴィスが数瞬だけ迷った顔を見せた後、覚悟を決めた顔をした

「カイト、私も覚悟を決めて、その、なんだ・・・お前のセ、セクハラを受けてやる！」

だがその前に答える、今回のことが全て嘘ではないと我が主神デュオニユソス様の前

で釈明することはできるか!？」

「やる! 釈明でも説明でもプレゼンでもやってやるから、だから・・・頼む!!」

それくらいなら喜んで説明してやるわ!

それにそれなら俺の無罪とまではいかないが仕方のない行動であったことの釈明もできる一石二鳥!

「ならば・・・こい! さつさと揉め!!」

そう言つて後ろを向いた、さすがに正面から揉まれるのは恥ずかしいのだろう

「恩に着る!」

フィルヴィスの脇から手を伸ばし胸に触れる

「・・・いくぞ!」

「いいからさつさとやれ!」

モミングモミングモミング

「・・・あ・・・く・・・」

できるだけ痛くしないよう円を描くように優しく揉み込む

(ふむ・・・手の平サイズ・・・)

自ら身体を差し出してくれたフィルヴィスには申し訳ないが俺も男、さすがに女性の胸を揉んで何も思うなという方が無理だ

「フィルヴィス、だ、大丈夫か……？」

「ら、らいじようぶらあ……あ……う……」

「その、なんか……すまん……」

思った通り、タイマーが30分になった途端、スキルによつて出ていたライターが消え、タイマーも表示されなくなったが

犠牲は大きかった……具体的に言うとならフィルヴィスの尊厳とか……。

それにしても胸を揉んでいる最中に何故か所々で記憶が飛んでいるのが気がかりだ（なんか途中でじいちゃんの声が聞こえてきたような……『北〇珍拳』がどーとかこーとか……）

それからさらに数分

「よ、ようやく落ち着いた……」

いつも通りのフィルヴィスが再起動した

「改めて助かった、ありがとうフィルヴィス」

「ふん、気にするな……まあ私の貧相な胸を揉んだところで悦ぶ者は少ないだろうがな」
かなり不機嫌でいらつしやるようだ、まあ俺がやったことを思えば当然だが……

確かにフィルヴィスの胸はひん……慎ましやかな大きさの胸だったが、そこまで卑下するものではあるまい……代わりに感度は抜群のようだし

「んなこたねえよ、男つてのは惚れた女の胸なら……大ききなんて関係ねえよ」

とりあえず、少しでも機嫌を良くしてもらうためにもよいしよしておこう

「うえ!?……そ、そそそそそ、それはいったいどういう!?」

「とりあえず、そちらの主神に挨拶に行かないとな」

先程フィルヴィスが出した、今回のことを神の前で釈明するという約束を果たさなければ

「あ、挨拶!? あわわわわわ、いやそれはちよつと早すぎる! 私達は別のファミリアだしもつとお互いのことを知ってから」

「何言つてんだ? 俺はきちんと約束や責任を果たす男だぞ?」

「しえ責任!? あわわわわ」

雫の落ちる音が響くことすら心地良い

(・・・今日も何とか付いて行けたっすねえ)

あの2人の戦闘はサポートするだけでも一苦勞させられるっすよ

先日、団長達に自分以外にもサポートを増やして欲しいと言ったら

『あいつらはちよつとアレじゃからな・・・頑張れ』

『既に他の団員はあいつらの異常性に気付いてしまったからな・・・まあ、その、なんだ・・・頑張れ』

『うゝん、彼らのデスマーチについていける人員は任務で出払ミツシヨウってるからちよつと難しいかな？ ハハでも君なら大丈夫だよ！うん！根拠はないけど大丈夫！大丈夫!!』

ありがたい激励のお言葉だけをいただいたっす・・・いや言葉じゃなくて人をよこせと言ってるんすよ

(でも、確かに今のオラリオの状況じゃ、無理は言えねえ・・・すか・・・ね・・・ZZZZZZ)

と考へても仕方がないことを延々と頭の中でグルグルと思考していると疲れから眠気が襲って寝入ってしまったっす

「う．．．次は．．．」

「んー」

（あれ？．．．自分、寝ちやってたっすか？）

誰かの話す声で飛んでいた意識が徐々に覚醒する

「お、ラウル起きたか？ 風呂に入りながら寝るとのぼせるぞー？」

「風邪ひく．．．よ？」

「あれ？ カイトにアイズさん？ いつのまに．．．」

いつの間にか湯船の中で寝落ちしてしまったみたいっす

声を掛けられた方を見ると洗い場の方でカイトとアイズさんが．．．

「うーし！ じゃあ髪のを洗い落とすから目をつむれ」

「ん！」

「ほくれジャバ」

「何がだ？」

「いや、だからアイズさんのことっすよ」

「……んー？」

アイズさんの方を見ないようにしつつ質問すると相変わらず 何言っただこいつ？
みたいな反応が返ってくるっす

「うえ……ま、まさかラウルお前ロリコン……いやペドフィリアかよ!？」

「違うっすよお!?! 何でそうなるっすか!?!」

「おいおいおい、お嬢、もうちよいラウルから離れる、危ねえぞ……」

「ん?……ロリつてなに?」

「だから違うっす! 誤解っすよ!?!」

アイズさんの事に対して執拗に疑問を投げかける自分にまさかの変態疑惑、濡れ衣にも程があるっすよ!?!

「はあく……もういいっすよ、自分は先に上がらせてもらうっすね……」

……なんかもう色々諦めたっす

「おう、湯冷めしないように気をつけろよ」

「よ」

「わかったつすよ〜・・・」

まあ本人達は全然気にしてないみたいだしこれでもいいんすかね？

それとも自分が気にしすぎなのか

やはり、あの二人は色々な意味で規格外だなと再認識した日だったつす。

.....

それから数ヶ月後、突然予定していたカイト達との探索が中止になった日があったつす

その日に庭を見ると

(ああ・・・やっぱり・・・)

リヴェリアさんにボコボコにされ簀巻き状態で木に吊るされたカイトと、隣で正座に加え頭に巨大なコブを作って貞操観念や常識について怒鳴られているアイズさんの姿があったつす。

「やっぱ、普通が一番ってことっすかね？」

鬼のようなリヴェリアさんに折檻を受けている二人を見てそう思ったっす。

《side out：ラウル》

|||||

27：大神×武神

時はカイトがミノタウロスの怪物の宴モンスターパーティーに遭遇する少し前に遡る。

オラリオから北の山間部にある名前もないような村

馬車に乗って数日もかかるような辺鄙な村に二柱の神が対面していた

一人はゼウス

かつてのオラリオでは最大最強の名を欲しいままにしたゼウス・ファミアアの主神

しかしそれも過去の話、世界三大クエスト『隻眼の黒童』討伐失敗により落ちぶれ、今ではベルとカイトの祖父として振る舞うただの好好爺だ

もう一人はヘルメス

ゼウスの手となり、時には足となってオラリオ中を駆け回った腹心の部下でもある

そして現在、ゼウスは開いた口が塞がらぬ程驚いていた

「8ヶ月でLv. 2になったじゃと!？」

「ええ、実際には半年でランクアップできたようですがステイタスを限界まで上げるために二ヶ月遅れたそうです」

「~~~~~」

（さすがにこの方でもすぐには信じられな——）

「さすがが農の孫!!」

「信じるの早いですね!」

あまりのジジ馬鹿っぷりにずっこけそうになった

だが、よくよく考えればとある事情で身を隠していなければならぬのに、危険を顧みずに自分を呼び寄せる程にこの大神は孫を溺愛していたことを思い出す

「はく……まあいいか……それよりもこれをどうぞ、その自慢のお孫さんからの手紙ですよ」

「おお！それを待つとつたんじゃよ！」

渡された手紙を嬉々として開け、手紙に目を通す

それなりに長い内容なのか何度も頷きながら手紙を読んでいる、そして全てを読み終わったと思ったら

ニッコリ

いきなりの笑顔

(嫌な予感しかない……)

「よろし！ヘルメス……イシユタルぶつ殺そう☆」

いきなり物騒なことを言ってきた

「できないし、しませんよそんなこと」

自分のファミリアにはイシユタルと争えるほどの子はいないし、その前に間違いないで圧倒される

ファミリアが壊滅してもはや存在しないゼウスに至っては何を言わんやといった話である

「カイトを瀕死に追い込んだんじゃぞ!?カイトに直接手を下したメス豚共々万死に値する!!」

どうやら手紙にはランクアップの経緯も書かれていたらしい

「落ち着いて下さいよ、一応そのおかげでランクアップもできたんですし、おあいこで良いじゃないですか、それにそんなことしたら身を隠している意味がないじゃないですか……あなたの命をどれだけの闇派閥イヴイルスが狙っていると思ってるんですか」

「ぐぬぬぬぬ」

「ぐぬぬぬぬ、じゃないですよ」

その後、何とかなだめて落ち着きを取り戻してくれた

ちなみに、一緒に来たアスファイにはゼウスとの話し合いが終わるまでベルの話相手をしてもらっている

大方、カイトのオラリオでの活躍を話してあげているのだろう、先程も外から

『やっぱり兄さんすごーい!!』

と無邪気な声が聞こえてきた

間。

「うーむ・・・それにしても困ったのう」

「今度は何ですか・・・」

ようやく落ち着いたかと思ったら今度は手紙を見ながら唸りだした

「それがのう、将来オラリオが平和になったら、金を貯めて儂とベルがオラリオに住めるようにすると書いてあつてのう」

「それは……確かに困りましたね」

カイトとしては親孝行のつもりなのだろうが、本当にそんなことをしたらゼウスに恨みを持つ者達に間違いなく殺される、大神ゼウスには元々の権能として神威を消し、市井の者に紛れる能力があるが、それでもゼウスを直接知っている神々に姿を見られれば速攻でバレル

「断るしかないのでは？」

「そうじゃなあさすがに死ぬのは……ん？……死ぬ？……そうじゃな……ふむ」
何かを思いついたのか一人で何かブツブツと呟きだした

「よし……決めたぞヘルメス」

「碌でもない事じゃないでしょうね」

「なに、大したことではない、後数年したら儂は死んだことにするっただけだ」

「はあ？ 何のためにそんな……ああいや、成る程……確かにそれならベル君もオラリオに行くかもしれませんね」

また突然何を言い出したのかと思ったがすぐに大神の思惑を看破する、伊達にゼウス

極東のとある社で一人の男神が手紙を読んでいた

「・・・うーむ」

周りには幼子達がドタドタと元気に走り回っているが騒がしいのに慣れているのか気にせずに手紙の内容に目を走らせている

男神の名はタケミカヅチ

みづら角髪の美丈夫であり、天界では武神と呼ばれ戦いを得意とする神々の中でも並ぶ物なしとまで呼ばれた豪傑である。

だがそんな武神も

「タケミカヅチ様」

「ん？どうした命？」

「あやめがおしっこ漏れそうって」

「どわあああああ!?! 待って待って待て!?! 今連れて行くから我慢だぞあやめー!?!」

今では孤児達の優しき父として社をやし経営していた。

・ ・ ・ ・

「ふー．．．あぶなかつたな、命、よく教えてくれた」

「はい！」

「あやめも今度からもっと早く言うんだぞ？」

「はーい!!」

「うむ！良い返事だ！では怪我しないように遊んでおいで」

「はーい!!」

いつもの一騒動が無事に解決し二人の娘が庭に一緒に走って行くのを見送り一息つく、その目線の先には先程まで目を通していた手紙

「あら、タケ？どうしたの？いつもの貧乏臭いため息とはちよつと違ったアンニユイなため息なんてついちゃって」

「誰が、貧乏臭いだ」

「実際私たち貧乏よ？」

「そうでした・・・」

話しかけてきたのは共にこの社で孤児達の面倒を見ている女神、ツクヨミ月読

「それで？ 悩みの種はその手紙？」

「ああ、ヘルメスのアホ経由の手紙でな・・・」

「燃やしちゃう？」

「待って待て!! ヘルメスを経由しただけで手紙を書いた本人はあいつとはあまり関係ない奴だ!」

「そうなの？ でもタケが難しい顔してるのはその手紙のせいなんでしょう?」

ヘルメスは天界にいた頃からタケミカツチをおちよくることが多かったため仲の良かった月読や他の女神の心象はあまり良くはない

「難しい顔をしていたのは、この手紙にどう答えたものかと考えていただけだ・・・読んでみるか?」

「え・・・いいの?」

「別に読まれても困る内容ではないからな」

そう言つて渡された手紙には共通語コイネで、しかもわざわざこちらに合わせたのか文字が筆で書かれていた

~~~~~

拜啓、タケミカヅチ様

まずは突然の手紙を差し上げたことをお許し下さい

私はロキ・ファミリア所属のカイトと申します。

今回はタケミカヅチ様に折り入ってお願いがあり筆を執った次第です

私は最近まで徒手空拳でダンジョンに挑んでいたのですが、ダンジョンに深く潜るにつれて打撃だけでは通用しないモンスターが出現し始め、苦戦をしている次第でございます、

そこで本格的に武器を扱うことにしたのですが、私が選んだ武器は『刀』

最初の内は剣と同じように扱っていたのですが鍛冶氏曰く『剣』と『刀』では鉈とカミソリくらい扱い方が異なると聞き『刀』を教わる師をオラリオにて探していたのですが、その最中にアホ 神ヘルメスから『刀』を教えることに掛けては世界一というタケミカヅチ様の話を聞きこうして手紙を嗜めた次第でございます。

私はタケミカヅチ様の眷族ではございませんが、どうか刀の扱い方とは言いません、どのような訓練を行えば良いのかだけでも伝聞でもかまいませんので御教授頂けないでしょうか

改めて、突然の手紙と不躰なお願い、申し訳ありません。

追伸

神ヘルメスからタケミカツチ様は孤児を養う社を経営していると聞きました  
自分も物心が付いた頃には両親は既に亡く、自分と弟を祖父が男手一つで育ててくれな  
ければ孤児として育っていたと思うと他人事とは思えません  
微力ながら私も社に役に立ちそうな品等をこれからも贈らせていただきます。

ロキ・ファミア所属

カイトより

~~~~~

手紙を読み合えた月読がタケミカツチに向き直る

「ん〜つまりタケに武器について教わりたいってこと？」

「まあ、そういうことだな」

「でも、眷族でもない子にそういつたのを教えるのは——」

「ちなみにかんりの額の金も一緒に送られてきてな」ズシャリ

「——いいんじゃない?」

「……おい」

熱い手の平返しであった。

「だってこれだけあれば味噌と米が買えるわよ!あの子たちが採ってきた山菜も嬉しいけど!それでも!育ち盛りの子達にひもじい思いをさせずに済むなら良いじゃない!」

実際、この社の家計は常に火の車……どころではなく燃える車輪すらないような状態なのだ、慈愛に溢れるこの女神と男神は常に自らの無力さと闘いながらも子供達を飢えさせぬように各方面の知り合いなどに援助を頼みに行っている、そのような状況の中でも孤児を見つければ拾わずには居られない性分もあつて援助に対して資金が常に足りていない

ギリギリのギリギリのギリギリの生活という限界のギリギリという言葉がゲシュタルト崩壊するような生活を余儀なくされていた

「タケが武術教室でも開ければいいんだけど、そんなことさせるわけにもいかないし……」

もしも武神であるタケミカツチが有料で武術を教えるとなれば、それこそ極東中から人を集めることが出来る

だが、それは国の戦を激化させる事へと繋がりがかねない、そもそも孤児達が生まれる

のは戦事で親を失ってしまった子という場合が多いのにそれでは本末転倒であるという理由からタケミカヅチは己の眷族以外には武術を教えるつもりはなかった。

だが

現在、この社はとある子供達の行動によって経済的危機にさらされていた

具体的には、とある貴族からの援助が打ち切られてしまったのだ

原因は年長組である桜花、命、千草達を筆頭に、そのとある貴族の箱入り娘、春姫という少女をこつそりと連れだし一緒に遊んでいたことが春姫の親にバレたためだ

本来なら桜花達を怒らなければいけないところだが、タケミカヅチと一緒に自分もその娘、春姫のあまりにも自由を知らなさすぎる境遇の不憫さを思い、むしろ率先して煽ったため怒ることはできなかつたし、それを後悔してはいない

しかしながら現状は先立つものがなければこのまま飢えてしまう、といった状況なのだ

子供達のためにもどうにかしてこの武神を説得しなければと月詠が決意していると

「誰が断ると言った」

「え、いいの？」

「この手紙の主……カイトはダンジョン探索のために刀の訓練方法を聞いているからな、全くないとは言えないが、人に対して使うことは早々あるまい、それに春姫の件で桜花

や命が責任を感じるようなことがあつては事だからな．．．

「タケ．．．ありがとう」

「なに、これぐらいの手間はかまわんさ、それに．．．」

「それに？」

「手紙をよく見ると訂正してはあるが．．．ヘルメスのことをアホ呼ばわりする奴は信用できない」

「確かに」

．．．．．

こうして武神タケミカツチは手紙による伝聞のみではあるがカイトの刀の扱いにおける師となった。



「あれ？カイトまた手紙を書いてるんすか？」

本日はダンジョン探索の休息日

二人部屋でもある自室にラウルが入ると机に向かってカイトが何やら手紙を書いていた

「また例のタケミカ何とかっていう神様に？」

「タケミカツチ様だ、いやタケミカツチ様への手紙は少し前に書いたばかりだ、今は祖父への手紙を書いている最中でな」

ちなみにタケミカツチとの文通による刀術指南が始まって既に数ヶ月の時が過ぎている

毎回手紙には訓練方法やこれができたら次の訓練といった風にステップアップ式の指示が書かれていたのだが、この前の手紙には孤児の何人かが支援金のお礼を書いた手紙が同封されていて自然に頬が緩んでしまった。

こそばゆいが孤児達が飢えなくて済んでいるのならそれにこしたことはない、ちなみに入院やらで数百万あった借金はデスマーチの様なダンジョン探索のおかげで既に完済している。

「あれ？カイトっておじいさんと弟にこの町で暮らせるように家を買おうとか言ってたよ
うな気がするんですけど、孤児院に支援とかして余裕ないんじゃないっすか？」

「いや、それなあ……じいさんが都会暮らしよりも田舎でのんびりしたいから別にいいつ
て断られてさ……」

「へー、まあでも確かに年寄り騒がしいオラリオよりも、のんびりできる田舎の方が好
ましく思うのかもしれないっすねえ」

「ラウルは家族に手紙書かないのか？せつかくヘルメス・ファミリアが優先して届けて
くれるって言うんだ、利用しないと勿体ないぞ？」

「えー自分っすか？ 家出同然で村を飛び出したっすからねえ……返事が恐くって
ちよっと」

そんな事を神々の事情を知らずに、雑談しつつのほほんと過ごす二人だった。

悪夢の英雄編!!

28：悪夢×前夜

オラリオの冒険者、魔石の流通や都市の治安を管理するために全てのファミアから独立し絶対中立を謳うギルド、その特性上からギルドは24時間その門を開いている。「怪我人を移送する場所の確保は!?」「住人への説明への報告書作成にかかれ!!」「各ファミアへと協力を要請しろ!急げ!」「確認がとれました!ソーマファミアが場所を用意するそうです!」「今回犠牲になったファミアの主神に生存の確認の要請はどうした!?」「回復薬ポーションを買い占めてもかまわん怪我人へ回すよう手配だ!」「ディアアンケヒト・ファミリアから薬と材料の催促がきてますがどうしますか!?」「かまわん回してやれ今は緊急事態だ!」

時間は夜間、草木も眠る丑三つ時、通常なら、24時間開いているギルドでもこの時間帯は半休状態であるにも関わらず、今は全ての職員が総出で出勤し慌ただしく今回の事件の対応に追われていた

今回の事件

後に『27階層の悪夢』と呼ばれ、闇イヴェルス派閥が今までに起こした事件の中でも最も凄惨

な事件とも言われることになる、オラリオ史上でも凄惨極まる事件である。

さらに事件はダンジョン内だけに限らず、それに連動するように同時に地上でも起きていた

そのせいで現在ギルドはダンジョン内での事件、地上で起こった事件、しかも、どちらもこれからのオラリオの運命を左右しかねない案件に忙殺されていた

「部長、とりあず簡潔にですが上への報告書になります、確認をお願いします！」
「わかった！すぐに目を通す！」

ギルド部長が部下の作成した、簡潔にだが要所をまとめた今回の事件のあらましに目を通す

そこには今回の事件のおおよその経緯、犠牲者数と生き残った人数及び人名、壊滅したファミリア名だけでなく天界に送還された神々の名前までもが記載されていた

オラリオ史上でも類を見ないほどの大事件、それが二つも同時に、しかも僅か一日で起こったというのだからギルドからすればたまったものではない

「とりあえずこれを現状の簡易報告書として上に通す、その間にさらに詳しい調査を作成していきなれ！」

「わかりました！」

「頼む、私はこれから直接現場に向かう、その君！こいつをロイマン氏に持って行ってくれ！」

「は、はい！」

いつもなら愚痴の一つでもこぼすであろう部下が何も言わずに指示に従うことが事態の緊急性を表していた

（それでも、今回の事件はこの都市にとって決して悪い方向に向かうものではないっ……ここが踏ん張り時だ！）

この都市に住みこの都市を愛する一人の住人として中間管理職なギルド部長が事態の究明と解決のため奔走していた。

——— 同時刻

場所は変わり、ダンジョンの入り口であるバベル、その地下

本来ならダンジョンへと大勢が行き来するために広く取ってあるはずの広場が今は怪我人と救護士であふれかえっていた

その中にロキ・ファミリアの主神ロキ、そしてフィン達幹部だけじゃなくアイズやラウル、アキといった姿も確認できる

ギルドは一定の等級に達したファミリアに任務を課す、それは本来なら到達階層の記録更新など何かしらギルドに取って有益な情報や成果を求められるものだ、だが今回は異なるらしい

場所はデュオニユロス・ファミリアの本拠、その一室

そこで団長である私と主神であるデュオニユロス様は明日からの団員達とのファミリアとしての今後の行動について話していた

「強制任務の事については知っていましたが・・・何か訳ありですか？」

「実は先日ギルドが闇派閥イツイルスが下層で怪しい動きをしているとの情報を得たらしい、そしてそのために多数のギルド傘下のファミリアが投入されるそうだ」

「それに私達も加われ、ということですか・・・私を含めてもLv. 2以上の団員は5名しかいませんが」

「それでも、ということらしい・・・なにせ調査する場所が場所だ、大方付いてこれるサポーターが欲しいのだろう、それに今回その調査を主導するのはあのアストレア・ファミリアの全団員だそうだからね、直接的な危険は彼女たちが振り払ってくれるだろう」

「アストレア・ファミリアが・・・確かに彼女たちとなら戦力はそれだけでも十分ですね」

【アストレア・ファミリア】

団員の全てが女性によって構成されており、構成団員は僅か11名のみという少数のファミリアだ

しかし全団員11名の内9名がLv. 4、残りの2名もLv. 3といった、ただの少数のファミリアではなくそこに精鋭という言葉が付く、オラリオでも名の知らぬ者はいないとされる程の上位派閥ファミリアである

正義を司るアストレアの神意に沿って、団員達は率先してオラリオの安寧と秩序を守るために奔走する、まさに^{イヴイルス}闇派閥の真逆を行く者達である。

そのため^{イヴイルス}闇派閥の中には^{イヴイルス}闇派閥殲滅を主導しているロキ・フレイヤ・ガネーシャ・ファミリアよりも敵対視している者達もいるほどだ。

「ふう、ギルドもやつかいな任務を押しつけてきたものだ」

「す、すみません」

「?・・・なぜフィルヴィスが・・・いや勘違いしないでおくれ、別に私はそういう意味で言ったのではないよ」

「・・・はい、ですが」

「むしろ私の眷族ことから初の第二級冒険者が誕生したことはとても誇らしいことなのだか
らね?」

今回の強制任務ミッションが言い渡された原因は間接的にだが私にある、派閥の等級ランクが上がったのは私のレベルが近い最近になってLv. 3にランクアップしたためだ

「ふふふ、それにしても・・・」

「つ・・・な、何ででしょうか?」

何だろうかディオニユス様がニヤニヤと意地の悪い笑みを向けてくる

「いや、なに・・・愛しの彼と揃ってランクアップ、運命を感じてるんじゃないかな?と
思ってたね」

「くくくつ!? デュオニユス様!!」

「ははははははは! 顔が真っ赤のフィルヴィスも可愛いなあ、その表情で彼に詰め寄れ
ばすぐに落とせると思うぞ? ほくらフィルヴィスNTRについて教えてあげるぞ?」

「なあ!?! なななな何を言っておられるのですかー!?!」

からかわれていると分かっているでも恥ずかしさから来る顔の熱りが止められない

時の流れは早いものだ

カイト達と出会ってからもう少しで一年と半が経つ

・ ・ ・ ・ ・

あのミノタウロスとの事件の後、カイトの告白染みた台詞は私の勘違いだったことに
気付いた

・ ・ ・ 半年くらいしてからな

めつちや落ち込んだ、凹んだ、1週間部屋から出なかつた程だ

だがそんな私を見かねたデュオニユソス様が私の部屋に来て言ったのだ

「フィルヴィス！相手に婚約者がいるから何だ！君は美しい私の眷族ことなのだ！ならば君

自身の魅力で相手を振り向かせて見せる!! フィルヴィスいいかい!? 愛とはな! 奪い取るものなのだ!! それとも君の愛はその程度だったのか!? ならばそれこそ相手に失礼だろう!! 愛して愛して究極まで愛し! 突撃して砕けて砂になるまで決して諦めるんじゃない!! 君は私の美しく誇り高い眷族こともなのだから!!」

その言葉に雷が落ちたような衝撃を受けた

愛とは奪い取るもの

私は誇り高いエルフだ、恋した者に相手がいるのなら身を退くのが潔い、そう思っていた

だが、今のデュオニユソス様の言葉で目が覚めた気がした

恋した者に相手がいるのなら身を退くのが潔い・・・本当にそうだろうか・・・いやそんなことはない!!

諦められない程、既にカイトに惹かれているのだ、そうでなければこうして1週間も落ち込みはしない!!

このままあきらめるのはそれこそ闘わずして敗北を認める様なものだ! そんなことわたしのプライドが認めはしない!!

死んでいた心に今まで感じたことがない活力が漲ってくる!!

「フィルヴィス! 私に続けて叫べ!!」

「!?——はいつ!!」

「恋人がなんだああああ!!」

「恋人がなんだ——!!」

「婚約者がなんだああああ!!」

「婚約者がなんだ——!!」

「これが一時間も続いた

最後の方ではデュオニユソス様の喉はガラガラに枯れてしまった

眷族である私のためにここまで身体を張ってくれたこの方に私は改めて忠誠を誓った。

その翌日からディオニユソス様の助言の元、カイトへのアタックがさりげなく始まったのだが中々上手くいかなかった

デュオニユソス様の誤算は思ってた以上に正気に戻った私が奥手であったということだろうか

あの時の私は1週間も部屋に引きこもり、その上食事も緑に取っていなかった、そのため脳がフワフワのポワポワ状態、そこに尊敬するディオニユソス様登場と同時に熱い

激励

言ってしまうえばハイな状態だったのだ、私が正気に戻ってしまえば積極的なアタックなど出来るわけがなかった

その上、カイトとのダンジョン探索は危険もあったが非常に楽しく、今の関係を壊すのを恐れて決定的な一線を越えることが出来なくなってしまった

そしてそれがズルズル続いて気付けば2人そろってL v. 3にランクアップ

ちなみに『劍姫』は私達の半年前には既にL v. 3、所要期間はなんと2年！・・・ちなみにわたしは5年かかっている

サポーターのラウルはその少し後にL v. 2にランクアップしている、そしてこれも所要期間2年と少し！

2人に比べれば倍近く掛かっているが普通はもつとかかる、そもそも一生をL v. 1で終える者がいる中ではこれでも凄まじい速度だ

そして私とほぼ同時にランクアップしたカイトの所要期間は驚きの1年半!!
改めて思う、このパーティにいると感覚が狂いそうだ

「・・・色々な常識が通じないなあこゝは」

「突然なんだ？」

「カイトおかわり」

「おう、ちよつと待つとけ」

目の前にはモキユモキユとじゃが丸くんなる揚げ物を衰えることなく食す『劍姫』と、じゃが丸くんを残像を残しながら素早く作るカイトがいた

デュオニユソス様と下層への調査に関して話した翌日、私はロキ・ファミアリアの本拠の中に招かれていた

しばらくの間は下層への調査で共にダンジョンに潜れないことを伝えるに、ロキ・ファミアリアの本拠まで来たのだが、ちよつどカイト達もダンジョン探索が休日ということであれよあれよ建物の中に連れ込まれ今に至る

他のファミアリアの食堂という慣れぬ状況に少々落ち着かない

「それでしばらく探索に行けないって？」

「ああ、実はな・・・」

昨夜デュオニユソス様と話した内容を掻い摘まんで説明する

「あく、それフィルヴィスの所が参加することになったんか、一応調査の話だけはチラッと聞いたな」

「らいじようぶ？」

「お嬢、口に物をいれたまま喋ると、まゝたりヴェリアに怒られるぞ？」

「むぐむぐ!!？」

戦闘中では決して見せない『剣姫』のあどけない姿に少しホッコリする、カイトと一緒だと本当の兄妹みたいだ

「二応、アストレア・ファミリアの全団員が主導で指揮を執ることになっているからな、滅多なことにはならないだろう」

「まあ、あそこは全員が第二級以上しかいない精鋭オンリーの特種なファミリアだからなあ、下層までなら問題ない・・・か？」

「ああ、帰ってきてからすぐは勘弁してほしいが、休息を数日取ったらまた探索に呼んでくれ、喜んで付き合おう」

「応、そんな時は頼む・・・ちなみに今揚げてるじゃが丸くんはリヴェリアも絶賛のじゃが丸くん、エルフでも食べやすい『柚風味じゃが丸くん』一個食ってみ」

「あのリヴェリア様が!?!・・・」相伴に預かろう」

「私は小豆クリーム味」モキユモキユ

「・・・何だそれは」

明らかに胸焼けするであろう揚げ物を食す『剣姫』に戦慄しつつ、カイトの作ったじゃが丸くんを食べた、リヴェリア様が絶賛するだけはあつて非常に美味しかった

「・・・くっ・・・旨いっ・・・」

「何で悔しそうに食ってた・・・」

・・・前々から思っていたがカイトは女子力が高すぎないか？
女性としての私のアイデンティティががががが

.....

う・・・だん・・・

「・・・ん？」

「団長？ 出発みたいですよ？」

「む？すまない少しボーツとしていた」

「なっはっはっは、珍しいな!?!お前が上の空とか!」

「お前からうるさい、置いて行くぞ」

「おいおいそりゃあないぜ!?!」

今は下層への調査へ向けてアストレア・ファミリア主導でダンジョンに向かう直前だ
考えにふけていた私に気の弱そうな団員が声を掛け、付き合いの長い同僚達が茶化
してくる

(数日前のナイトとの夢を見るとは・・・気持ちを切り替えねばな)

色ボケモードはここまでにしておかねば、なにせ今回の調査に参加するファミリアは
アストレア・ファミリアを除けば総勢8、人数は50を超えている

これだけの大規模な人数でダンジョンに挑むのは初めてで無意識に緊張していたの
かもしれない

なにせ数だけならばロキ・ファミリアやフレイヤ・ファミリアといった大派閥の遠征
する際の数とほぼ同等だ、意識するなと言う方が無理な話だ

ちなみに人数が多いので部隊を二つに分けて18階層で合流する手筈になっている
他の冒険者の迷惑にならないように、少しずつダンジョンの入り口に進んでいく他の
ファミリア

「では、次のパーティも進んで下さい」

後続部隊の指揮を任されているアストレア・ファミリアのエルフから声が掛かり私達
の順番になる

（・・・彼女が『疾風』か）

素顔の下半分を覆面で隠しさらにフードまで被って人相がわからないようにしているにも関わらず同じ同胞のエルフとわかるのは、そのあまりに素顔を晒さないことが有名になりそれが逆に目印になっているからだ

「名高き同胞と共に出来ること光栄に思う」

「いえ、こちらこそ今回は協力感謝します」

すれ違う前に一声掛けてみると思っていた以上の柔らかい声が帰ってきたことに驚いた

（どんな偏屈者かと思ったが・・・綺麗な声だ）

「それよりも後ろが詰まりますのでお急ぎを・・・」

「あ、ああ、すまない・・・」

『疾風』に急かされてから眺めるダンジョンの入り口はいつも通りだ

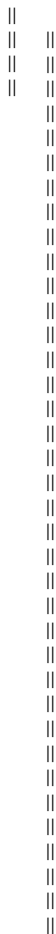
後ろに控えていた団員達に目を配ればやる気に満ちた顔で全員が頷く

「・・・よし！デュオニユロス・ファミアア！出陣するぞ！！」

「！！！！！！！！」

パーティの志気は上々、これなら予定通り進めそうだ

《Side out：フィルヴィス》



フィルヴィスは知らない

この先には悪夢が待っていることを

他の者達は知らない

二度とこの地を踏むことがないことを

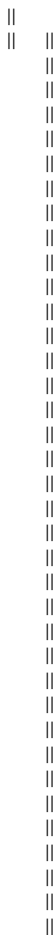
女神アストレアは知らない

眷族から最凶の復讐鬼が生まれることを

そして、とあるエルフは知る

己が身に巣くう暗き激情を

29：悪夢×進呈



《Side：フィールヴェイス》

18階層での合流は特に問題なく予定通りに行われた

この階層はダンジョンでも極めて珍しい、モンスターが生まれない

セーフティポイント
安全階層だ

別名『迷宮の楽園』
アンダーリゾート

水晶と大自然に満たされた地下世界の中でも一際美しいとされる場所だ

天井は全て結晶クリスタルで出来ており時間に合わせて結晶の光がなくなり夜になる

そして驚くべき事にこの階層には街があるのだ

街と言っても冒険者達が勝手に寄せ集まって作った集落に近い

それでもダンジョンでは補給できない貴重な食糧や飲み水、装備や回復薬といったアイテムが入るこの場所はどれほど法外な値段であろうと需要がなくなることはな

い

だが大規模集団による遠征の場合は人数に任せて持ってきた荷物で付近の森で簡易テントを建ててキャンプを行うのが主流だ

そして例に漏れず、私達もそれに倣ってキャンプを行った。

キャンプ中は団長として今回参加したいくつかのファミリアと軽く交流しつつ談笑を行う

正直面倒だが今回の下層への調査は好き嫌いでこなせるものではない、何かあった際に少しでも生存確率を上げるために他のパーティの実力や構成を頭にたたき込んでおくことは必要なことだ。

そして翌日

中層19〜24階層『大樹の迷宮』をアストレア・ファミリアの指揮の下進んでいた
「弓兵は斉射！とにかく足を止めろ!!」

「了解!!」

10名以上による弓の斉射がモンスターの襲撃の勢いを削っていく

「壁役は弓への前へ出て護衛を、打ち終わりにそのままモンスターにシールドバツシュを喰らわせてやれ!!」

「「応！！」」

さすがは上位派閥といったところか、最終到達階層が41階層と言うだけはある

他のファミリアであつても物怖じせずにも冒険者に指示を出していく、おかげで指示された者もその自信に満ちた声に応えるように的確にモンスターを討伐していく

(ふむ・・・指示の出し方一つとっても色々と勉強になるな・・・だが・・・)

後衛の魔道師部隊に組み込まれたため少々暇を持て余す、これがカイト達となら逆に一瞬の油断もできないのだが、これだけの人数がそろうとどうしても気が緩みかける

「今回も私の出番はなさそうだな・・・」

「魔法は文字通りの切札だからね、使える人はできるだけ温存しときたいの」

ポツリと呟いた私の言葉に後ろから声が帰ってきた

「アリーゼ殿・・・」

「殿なんてやめてよー、あたし堅っ苦しいの苦手だから、アリーゼでいいって、はい、リピートアフタミー？」

振り返ると、アストレア・ファミリア団長アリーゼ・ローヴェルが立っていた、

赤髪を後ろで一本にまとめ、眩しく輝く太陽を彷彿とさせるようなイメージを持たせる女性だ、実際に今回の調査の件で昨日、何度か話をしたがイメージ通りの明るい女性

のようだった。

「……アリーゼ」

「オツケー！」

カイトとは異なる距離の詰め方だ、あつちは気付けばといった感じだが、彼女ははっきりとグイグイくる、そしてそれが不快に感じない不思議な雰囲気を持った人物だ

「あなたのことは『切札』^{ジョーカー}からチラツツと話しだけ聞いてたのよ〜？」

「!? ……か、彼と知り合いだったのか？」

「ん〜まあ、都市の治安を守るために一緒に駆け回り回ってるファミリア同士だもの、ちよつとした交流くらいあるの、そこで世界記録保持者の彼と何回か話す事があつてねー」

成る程と納得した、確かにロキ・ファミリアとアストレア・ファミリアは闇派閥^{イヴィルス}と明確に敵対している、おそらくこれまで何度となく共同戦線を張ったことがあるのだろう（そういえばカイトがL.V. 3になつてから強制任務^{ミッション}に連れ出されることが増えたとばかりやいて――）

「でねー？彼と話してるときにあなたのことを彼が話すことがあつてねー？」

「!?」

（カイトが私のことをつ!?あわわわわわ!?）

「……………」

心中で大混乱しつつもなんとか表情を崩さないことに成功したが

「あなた『切札』ジョーカーこと好きでしょ？ラブってやつ？」

「ぶうー……………」!!??」

……続くアリーゼの言葉で無意味になった

「な、なななななにやにを言ってるんだ!？」

「ぶつ、あつはつはつはつは！ だって彼の話を聞いたらバレバレよ？」

「なんだとお!？」

「ねえねえ彼のどこに惚れたの？顔？性格？それとも全部？」

「い、いや、そ、それはちが……」

「ねえねえ教え アダア!？」

「!？」

凄まじい勢いでこちらに詰め寄ってくるアリーゼの脳天に重そうな拳骨が降ってきた

「とつくにこちらの戦闘は終わっているのに、なにを乙女トークしとるのだ……」

「か、かくや輝夜、いきなり拳骨はやめて……これぜったいコブができてる」

（た、助かった……）

涙目で訴えるアリーゼを無視して輝夜かぐやと呼ばれた女性がこちらに近づく

「うちの馬鹿が迷惑を掛けてしまったな」

「誰が馬鹿よく誰が〜」

「い、いやあまり気にしていないでくれ」

東方の格好をしたアストレア・ファミリアの団員が頭を下げてくる

「助かる、うちの団長は子供っぽい所が玉に傷、とか傷だらけでな・・・ほらアリーゼさつさと進むぞ、今日中に27階層まで行けないと食料の割り振りが面倒になる」

「わかっているって・・・じゃ。そういうことだから、またね!」

「あ、ああ・・・」

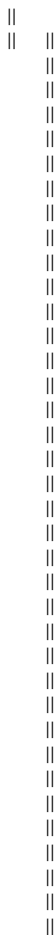
(できれば今回のような詰問は勘弁して欲しいが・・・)

そんなちよつとしたトラブルもあつたが二日目の昼には特に何もなく下層領域である27階層まで到着した・・・いや

言い直そう

——到着してしまった、と。

《side out: フィルヴィス》



《side : アリーゼ》

い 27階層は深層まで到達している上位派閥であつても油断することは決してできない

なぜならここは階層主が生まれるエリアでもあるからだ

27階層階層主『アンフィス・バエナ』、堅い竜鱗に加え前後に首の長い二頭白龍のモンスター

ギルドが設定した強さは推定でLv. 5、得意な水辺であればLv. 6に届くのではないかと揶揄される程の強さを誇る化け物だ

もし奴を討伐しなければならぬとしたら、他のファミリアの指揮を捨ててアストレア・ファミリアの総力を結集して相手をしなければならぬ

だが今回はその心配はいらない

事前にギルドから私達がダンジョンに潜る数日前に階層主の討伐が確認されたという報告を受けたからだ

階層主を気にしなくてもいいということもあつて、これだけの人数でありながら二日という短時間での行軍ができた

だが、ここにきて明らかかな違和感を感じずにはいられなかった

「アリーゼ気付いとるか?」

「ええ、おかしいわね、これ」

私達アストレア・ファミリアと他派閥の混成集団は何事もなく27階層まで到着したが、そもそもその状況がおかしいのだ

私達は閥派閥イツイリスが下層で何かを企んでいるという情報を得てここまでやってきた、だといふのに向こうから何も反応がない

「途中で閥派閥イツイリスの妨害が必ずあると思っていたのだけど・・・それがないとすると・・・」

「・・・情報に間違いがあつたか、それとも」

——
畏か。

お互いの頭に最悪の可能性が浮かび上がる

「どうする……今すぐ撤退をするか？ ワシとしては面倒事は勘弁だからせひそうしたいが」

「輝夜はどつちがいいと思う」

「そうだな……」

うちのファミリアでも輝夜の実力はリオンと1、2を争うほどの腕前だ、そしてそれ以上に彼女はこういったキナ臭いことには勘がよく働く

「畏だとしても食い破つてみせよう……と言いたいところだが、今回は預かっている他のファミリアもおるからなあ……撤退を提案させてもらうか」

「これだけの数を揃えて撤退かあ、ギルドから何かしらの小言でも言われそうね」

「はあ……小言ではすまんじやろうよ、下手をすれば何かしらの罰則もあり——」

「……アリーゼ」

会話が途切れて剣呑な雰囲気を纏わせた声で名を呼ばれる、もちろん彼女とはファミリア創設以来の付き合いだ、この状況でいきなり名前を呼ばれただけなどとは思わない

し、数秒遅れて私もそれに気づいた

「ええ、・・・空気が変わった、これは・・・かなりまずいわね」

長年の冒険をしていると、何かが起こる前というのは何かしらのサインがある、それは音、臭い、湿度、気温、地面の震動から風の流れまで様々な物が今までに経験した危機と総合的に合わさり第六感として警告してくる

そして今の状況と直感が告げている

即ち “逃げろ” と

「アリーゼ!!」

その直感を証明するかのようには後方部隊で指揮を任せているリオンの声が響いた、声色からただのモンスター襲撃ではないと即座に察する

「後方を要警戒!他も——」

「アリーゼ!こつちからもだ!!9時方向!!距離500!!」

「3時方向!敵襲!!距離300!!」

次々と上がる敵襲の報告

前方は下層の中心でもある滝壺の最終地点である巨大湖

後方からの奇襲かと思われた敵の動きはこちらを包囲するかのよう展開してきた

らしい

(・・・まずい!?)

反転しても後方以外は敵、そしてその後ろも水場で逃げ場がない、まさに背水の陣とはこのこと

泳いで逃げようにもこの階層、正確には25階層からこの27階層は大瀑布グレートフォール『巨蒼の滝』で繋がる水の楽園、当然モンスターは水棲系が多く、この階層で水の中を泳ぐのは自殺するのとそう変わりがない

「最悪のタイミングでおいでなすったわね、東方だと噂をすれば何とやらつて奴かしら？」

こういった緊急事態のときこそ余裕を忘れてはならない、それが虚勢であつても現場の指揮官が自信を失う姿を見せればこんな寄せ集めの即興大部隊等すぐに瓦解する

「噂をすれば影、だ。それよりも・・・それぞれの部隊の指揮者は敵の人数の報告をせいで!!」

輝夜がこつちの掛け合いに軽く乗ってきてくれる、これだけでも私の心にくばしかの余裕が生まれる

だが、他ファミリアからの続く報告で一気に余裕が吹き飛ばされた

「敵襲は人だけじゃない! あいつら自滅覚悟で大量のモンスターを引き連れたまま

こつちに向かつて突つ込んできてる!!」

「なっ!! 自滅覚悟の怪物進呈!!^{バスブレイド}あいつらなんてこと考えてんのよ!!」

狂信者の理解できない行動にパニックになりかけたが

「アリーゼどうする!!」

「・・・っ!!」

仲間の声、そしてこの部隊の総責任者としての立場が私に瞬時に我に返させた

(驚くのは後!まずはこの状況から生き残ることだけを考える!!)

「湖の方に後退しつつ弓を使えるものと魔法を所持している人は少しでもいい、敵の数を減らして!!」

「抜けたモンスターはどうする!？」

「そこは私たちに任せなさい!・・・全員傾聴!抜けたモンスター及び闇派閥^{イツイルス}は私たちアストレア・ファミリアで対処する!その間はあなたたちの護衛はできない!無責任かもしれないが各自奮闘し生き残れ!!敵の第一陣を凌ぎ切った後に一転突破で敵の包囲を抜ける!・・・いいな!？」

「おう、まかせろ!」

「やってやらあ!!」

「行くぞおめーら!!」

「了解した」

予断を許さない状況もあつてかすぐに各自のファミリアから承諾の旺盛が上がる

「リオン！あなたの魔法を最後の突破に使う！魔力は使用しないように肉弾戦のみで戦つて！」

「了解しました！輝夜！敵陣の中に私たちだけでも突っ込んで掻き回します！」

「ふふふ、いいのう、うち好みの展開じゃな。アストレア・ファミリアのツートップの実力を披露するとしようかのう！」

（全員準備はいいみたいね・・・）

今回引き連れてきた全ての冒険者がそれぞれの武器を手にし戦闘態勢に入る

「・・・総員！行くぞおーーーーー！！！」

「「「「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」」」」

・ ・ ・ ・

そこから先は乱戦に次ぐ乱戦だった

自分も参戦し、少なくとも20を超えるモンスターを切り捨てたが、そこから先は無我夢中で数えるのを止めてしまった

(な、なんとか耐えきったか・・・)

闇派閥達が連れてきたモンスターはどうやって連れてきたかはわからないが、中層のモンスターまで混じっていた

私達も奮戦したがそれでも撃ち漏らしというのはどうしても出てくる、敵の第一陣を防ぎはしたものの、少なくとも怪我人を出してしまった、だがその無茶のおかげで敵の波のほとんどを一旦ではあるが退けることに成功した、だが安心はできない、既に第二陣と思われる者達の姿が遠目にも確認できる

「リオン!!魔法をお願い!」から一気に安全圏まで突っ走るわよ!」
「了解しました!」——今は遠き森の空。無窮の夜天に」

「な!?!並行詠唱!?!」

「あれほどの高速戦闘を行いながらだと!?!」

リオンへと敵の剣が届きかけたその時

ガキン という武器が激突する太刀音が響き渡る

「ちい!?!邪魔すんじやねーよ!!」

「するに決まってるじゃろうが阿呆、相変わらず頭の中は空っぽじゃなあ!!」

されど私達はアストレア・ファミリア

今のリオンの隣には頼もしいライバル兼リオンの剣の師匠でもある輝夜がいた

「うぜえ——んだよ!!」

「ぐぬっ!?!」

だが、いくら輝夜と言えど相手が悪かった

なにせLv. 4の私達ですら初手の反応に遅れるほどの速度で突っ込んできた相手

は闇派閥幹部筆頭・アラクニニア【殺帝】ヴァレット・グレーデー

柄の悪い毛皮付きの長外套にズタズタのジーンズといった荒々しさを全身で表した

女だ

だがその実力はLv. 5

ここにいる誰よりもレベルが高く強い、そしてそれ以上に厄介なのが執念深さだ

この女は一度でも根に持った相手は地の果てまでも追いかけて殺すくらいは当然の

ようにやっつてのける

「はあ!!」

「ちっ!!アリーゼでめえ!!正義の味方が不意打ちしてんじやねえ・・・よ!!」

「くっ!?!」

輝夜に参戦するために不意打ちで後ろから斬りかかったというのにあっさりと対処されてしまう

(腐つてもLv.5か・・・でも)

「輝夜、アリーゼ、助かりました」

「気にしない気にしない☒」

「ふふん、まだまだ隙だらけじやのうりオン」

「ぐっ、うるさいですよ輝夜」

こちらが軽い小競り合いをしている隙にリオンは魔力を拡散させてこちらの戦線に加わってくれた

(この人数ならなんとか抑えられる・・・けどこれじゃ他の戦線が維持できなくなるわね・・・こうなったら)

「あなた【勇者】^{プレイヤ}の追っかけだったんじゃないの?それともこちらに鞍替えしたのかしら?全然嬉しくないんだけど、浮気するならフレイヤ・ファミリアとかにしなさいよ。こ

こは女しかないわよ?それともそっちの道にでも目覚めちゃったのかしら?あらヤ

「ダ怖い」

わざと罵詈雑言に近い挑発を行う、これでヴァレッタは私に対して特に敵意が向くはずだ、回避と防御に専念すれば私一人でも時間くらいなら稼げるはず——
そう思っていたのだが

「………ククク」

（……何？）

「ぷっ……あはははははははは！ おいおいアリーゼどうしたどうした？ 良い子ちゃんの子いかお前の罵詈雑言には切れがねえんだよ、それともあまりに余裕がなくてあせちやつてるのかあ？ ギヤハハハハハハハハハハ！！」

いつもこれくらい言われたら間違いなくキレてこちらに向かってきたであろう言葉を言ったというのに軽くないなされてしまった……ヴァレッタのこの余裕に薄ら寒いものを感じる

「……でもまあ、ちよつとカチンとくるものもあつたからなあ、ちつとばかり早いがためえらにさらに絶望をくれたやるぜえええ……！！オリヴァス！！あいつを抑えている魔法を解除しろお！！」

ヴァレッタから出てくる他の幹部の名前に身構える

【白髪鬼】ヴァンデッタ オリヴァス・アクト ヴアレッタと同じく闇派閥の幹部 実力はLv. 3

個体としての脅威度ではヴァレッタには劣るもの、爆破テロや殺人などで都市に混乱を巻き起こす最上位の賞金首にもなっている

『ふっ、よかろう、少々早いがいづらの絶望に染まった顔は私も早く見たいのでな』

どこかに潜んでいるのか、それともマジックアイテムでも使っているのか声が辺りに反響するように発せられているため居場所が特定できない

周囲に気を配るも、近づいてくる怪物ガスバレット進呈の第二陣の地響き音で気配を探ることすらできやしない

ドン

だが、その地響きすら細音に感じるほどの衝撃に近い音と共に25階層からこの27階層までを貫く巨大な滝壺でもある中央の湖が爆ぜた

「Guaaaaaaa aaaaa aaaaa aaaaa aaaaa aaaaa aaaaa aaaaa aaaaa aaaaa!!」

(な!?! あれは討伐されたはずでしょう!?! 何でいるのよ!?!)

中から姿を現したのは階層主「アンフィス・バエナ」だった

「馬鹿な!？」

「これは・・・さすがに予想外じゃなあ」

絶句したのは私達だけではない、奮戦していた周りの冒険者たちにもこの状況に対するさらなる追い打ちに呆然となる

ズンズンという地響きを響かせながらこちらに向かつてくるアンフィス・バエナ、安全なはずだった後方の湖からまさかの階層主の登場に全員が絶望に顔を染める

「ギャハハハハハハ!! そうだよーそれだよ!! アタシが見たかったのはア!! 苦労したんだぜえ? あいつの偽情報をギルドに流させるのも、あいつをバレないように他の冒険者の目に止まらないように誘導したりすんのはよお?」

(どうするどうするどうするどうするどうするどうするどうする!!?)

立て続けに襲ってくる不測の事態に対処するために、頭が湯立ちそうなほど回転するも全て空回りに終わり同じ言葉が脳内で堂々巡りする

「ヒヤハハハハ!! いいぜいいぜ!! アリーゼー! その顔最高だあ!! もつとその顔を・・・ああ?・・・なんだあいつは?」

こちららを見て嬌笑を上げていたヴァレットの笑いが止まる

（・・・今度は何!?!）

ヴァレッツタの見ていた方向に目を向けると誰かが25階層から飛び降りてきている所だった

百メドル以上もある高さからの飛び降り、第二級以上なら下が水なら耐えられないこともないが、それでもモンスターが無数にうごめく巨大湖に飛び込むなど正気の沙汰ではない

一体誰だ? という疑問には他の冒険者、今朝話したばかりのフィルヴィスが答えてくれた

「カイト!?!」

（切札!?!何故ここに、いやその前にいくら彼でもあんな所から飛び降りたらタダじゃすまな———）

そう思った瞬間

距離はかなり離れているはずのこちらにまで聞こえてくるほどにカイトが叫んだ

「正・解!!」

それはまるで最初からそこにいたかのように姿を見せた

「「「なああああああ?!?!」」」

驚声は闇派閥を含めたその場にいる全員

ジョーカー
切札のいた場所にいきなり巨人が現れたのだ

それもただの巨人ではない、頑強な東方風の鎧に身を包んだ身の丈五十メドルはあるのではなからうかと思われるほどの巨大な鎧武者だ

『黒縄天譴明王』!!』

ズドン

という先程以上の衝撃音と水しぶきを上げて鎧武者が滝壺に着地し、そのまま階層主と対峙した

大きさの対比で言えば大型犬と大の大人ほどだろうか

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

そのことを伝えると全員が一斉に狼狽え始めた

「早く救援に！」

「・・・ダメだ、おそらく今から救護隊を組んでいたら間に合わない」

既にアストレア・ファミアが下層に出発してから一日、とてもではないが間に合わないし誰かを単独で向かわせるにはあまりにも危険すぎる

だが、これは同時にチャンスでもある

下手をすればこのオラリオ暗黒期と呼ばれる今に終演の幕を下ろすことが出来るほどの千載一遇の機会

「全員聞いてくれ・・・救護隊を組むのは今から話す作戦が成功してからだ」

「なっ!? 調査隊を見捨てるのですか!?!」

これは大のために小を切り捨てると見られても仕方がない、冷酷な判断と思われるかもしれない、だがそれでもこのオラリオの未来がこれからも闇に飲まれ続けるか、それとも少しでも早く光を迎えることが出来るかの分水嶺だ

「元から間に合わないかもしれない可能性に兵を割くくらいなら、僕は確実に勝てる方を執らせてもらう・・・今から作戦を伝える」

そして僕が話した作戦は単純明快だ、現状でオラリオにいるロキ、フレイヤ、ガナー

シャ、それ以外の地上に残っている全てのギルド傘下のファミリアの人員を投入しての
一大攻勢作戦

狙いは闇派閥の首魁である神々の強制送還

資料から察せられるのは敵の人員・資材・物資の動きアストレア・ファミリアを罠に
嵌めるためにかんりの戦力を投入しているであろうということ、そしてそれは同時に奴
らの防御がこれまでにないくらい手薄になっているということだ、この機会を逃せば次
はいっつになるかわからない

「カイト、大至急でフレイヤとガネーシャ・ファミリアのホームまで行って今の話の内容
をそのまま伝えてきてくれ、機密情報ランクは『SSS』って言うのも忘れずにね、こ
う言えば否が応でも幹部クラスが出てきてくれるはずだ」

今回のような伝達事項があったときのために会議室の壁際で待機していたカイトに
言伝を頼む

「・・・了解・・・伝達が終わった後はうちのLv. 3以上の団員に戦闘準備とLv. 2
以下には半々でサポートもしくはホームで待機つてことでもいいのか」

話が早くて助かる、指令が終わった後に関することを言う前に伝えたいことを先読み
して確認してきてくれる、おかげで支持が出しやすい

「いや、下級団員は全員ホームで待機、現場にはアイズと数名のLv. 2の団員を除いた

全戦力を投入する、それ以外は君が言った通りでいい、本当なら全ての戦力を投入したところだけど、さすがにホームを本当の意味で空にするわけにはいかないからね」
大人しく聞いていたカイトの表情が『アイズを除く』と言った部分で眉間に皺がよつた

「ちよつとお嬢を甘やかしすぎじゃないか、お嬢はあれでそこそこ度胸はあるし、戦力で言うならかなりのもんだぞ？」

「そうかもしれない・・・でもさすがに今回はちよつとね・・・なにせ」

今回は過去類を見ないほどの殺し合い

正義と言う名を借りた一方的な

虐殺だ

幼子に見せるのはあまりに惨いだろう？

そう言うと、嘆息しつつ一応納得はしてくれた

「・・・俺もギリギリ純朴な少年って言っつていい年齢なんだが」

「ははははは、うん、それおもしろいね、ウィットの効いたナイスジョークだ」
 特に純朴というところが笑いのポイントが高いね、ここがホームの食堂なら座布団でもあげていたかもしれない

「えー傷つくわー．．．はあ．．．んー．．．じゃまあ、行つてくるわー．．．」
 そう言うところ仕方がないでもため息をつき、やる気のないような言葉とは裏腹に急いで会議室を飛び出していった

．．．．．

一時間もしない内にカイトに呼び出しを頼んだ人物が会議室に集結した

フレイヤ・ファミアリア団長：オラリオ唯一のLv. 7 【^{おっしや}猛者】 オツタル

ガネーシャ・ファミアリア団長：Lv. 5にして都市最多の構成員を誇るファミアリアを

束ねる女傑 【^{アソクレーシヤ}象神の杖】 シャクテイ・ヴァルマ

さらに僕ことロキ・ファミリア団長：【勇者】^{フレイバー}フィン・ディムナ

言わずもがな、構成員の質と量はこのオラリオで五指に入る大派閥の団長三名が一同に会することになった

「・・・それで？」

腕を組んだままの状態のシャクテイが口を開く

時間がないこともあって二人とも既にここに着くまでに事情はあらかた案内役の者に聞いたそうだ

「・・・フィン、単刀直入に聞くぞ、作戦は？」

シャクテイに続くように武人氣質の強い、都市最強の戦士が言葉少なく聞いてくる
オツタルやシャクテイ、特にオツタルとはライバル関係にあるファミリアの団長ではあるが、これも腐れ縁というのだろうか、10年以上も競い合っているとファミリアの家族とはまた別の奇妙な信頼関係できていたりする、おかげで遠慮なく伝えたいことだけを端的に伝えることができる

「それぞれのファミリアの投入できる最大戦力を一気に集めて、敵の拠点と思われる場所を全て叩く」

「隊はいくつまで分けるつもりだ？ お前らの所と違って私のファミリアの最大戦力は

ほとんどがLv. 4だ、できればどちらかに混ぜる形で編成してほしいのだが」

ガネーシャ・ファミリアは団員の数も多く実力者もそろってはいるが、それでも団長であるLv. 5のシャクティが最高レベルだ、Lv. 6を複数所持しているフレイヤ、ロキ・ファミリアには質という点で一步劣るためこの要望は妥当な意見ではあるが、今回の作戦ではそんな心配はする必要がない

「いや、隊は分けない、全ての戦力で持つて一気に敵の拠点を叩きつぶす、潰した後は最低限の人員を後始末に回して次の拠点潰しに向かう、これを5回繰り返して、さらにキナ臭い所も潰す」

「・・・電撃戦か」

「うん、ここで一気に僕たちと闇派閥の天秤の趨勢を一気に傾ける」

「そのための私達、ということか・・・わかった、「群衆の主」としても、ガネーシャ・ファミリアとしても今回の作戦に全力で参加させてもらう」

「協力感謝するよ・・・オツタル、君の所はどうする?」

「・・・ここに俺自身が出向いたこと事態がフレイヤ様の神意だ、『目障りな羽虫を駆除せよ』とお言葉を頂いている」

「それはフレイヤ・ファミリアも全面的に協力してくれるというこでいいのかな?」

「・・・ああ、それでかまわん」

(・・・よし！)

これで戦力は十分に揃った、戦力過剰とも言われるかもしれないが、犠牲なしで圧倒するにはこれくらいがちょうどいい、たとえ生き残りがいたとしても復讐心など芽生えぬくらい心も身体も叩き潰す

「じゃあ、さっそく——」

これからの作戦のための命令系統に関する話をしようとしたときだ

「団長、入ってもいいですか!?ちよつと問題が発生してしまいました・・・」

カイトの同期 キャットビープル 猫 人のアキがノックとほぼ同時に入室を求めてきたので、許可する

入ってきたアキは会議室にいるオツタルやシャクテイを気にすることなくまっすぐに僕の元に向かってくる、だが、そのときの表情は非常に申し訳なきような顔をしているのが気になった

「団長・・・カイトがこの手紙を残して消えました」

「・・・え?」

差し出されたのは二つに折りたたまれた紙

とりあえず内容に目を通してみた

「・・・おっふ」

見なければ良かった・・・おかげで変な声が出てしまった

「・・・フィン？」

「ちよつ、【勇者】^{フレイバー} 顔がえらいことになってるぞ」

「いや、すまないちよつと眼球を潰されてから頭を叩き割られたような衝撃に襲われただけだよ、うん、・・・大丈夫だ」

「一般的にそれは大丈夫とは呼ばないと思うけど・・・」

急に眼精疲労に襲われると同時に頭痛が始めたが、目頭を押さえてから天井を見上げることで何とか耐える

「何があつた？」

オツタルが困惑顔で聞いてきた、彼が表情を崩すとは珍しいこともあるものだ・・・いやそれだけ手紙に目を通した際の僕の表情が不味かつたのだろう

僕は黙つて手元にある紙を二人に見えるように広げる、そこには

ちよつとお嬢と散歩に行つて来ます。

PS：晩御飯は外で食べてくるのでいりません

』

と端的な事が書いてあった

「・・・なんだこれは」

まあ、カイトのことをよく知らないところの突飛な手紙の内容はわからないのも当然か・・・理解してしまえる自分が恨めしい

「たぶんだけど、カイトがアイズを連れて27階層に向かったってことだよ、目的はおそらくアストレア・ファミリアの救援なんだろうけど・・・んー・・・？」

「なんだ？」

「いや、カイトがあそこのファミリアのために指示を無視してまで助けに行くとは考えづらいんだよねえ、確かにそこそこの交流はあったんだけど」

カイトも今回の作戦の重要性はわかっているはずだ、それでも独断で救援に向かったとすると考えられる可能性の中で一番ありそうなのは――

「アキ、ちよつと聞きたいんだけどいいかな？」

「え、は、はい」

「今回の下層の調査に参加しているファミリアの中にカイトと仲が良い人物とかがいたりするかい？」

「えっと・・・あ、そういうえばラウルが何か言ってたような・・・あ!・・・」

アキに質問すると、どうやら心当たりがあったようだ

「昨日の夕食のときにラウルが『カイトとよくダンジョン探索で組むことがあるファイルヴィスっていうエルフの女性が今回の調査に参加するからいつもよりカイトとアイズのサポートが大変つすよ』ってぼやいてたような・・・」

これで確定だ、間違いなくカイトとアイズは下層に向かったのだろう

「アキ、急いでリヴェリアかガレスにこのことを報告、今すぐにカイトとアイズを連れ戻して——」

「待ってくれ」

貴重な戦力を抜けさせるわけにはいかない、そう思いアキに指示をだそうとした所に待ったの聲がかかった

「フィン、【切札】と【剣姫】を向かわせてやって欲しい」

待ったを掛けたのはシャクティだった

ガネーシャ・ファミリアとアストレア・ファミリアは幾度となく共に闇派閥と闘ってきたことは知っているが、理由もなく個人的な感情で貴重な戦力をわざわざ危険な場所

に送り込むことは承諾できない

「・・・二人を向かわせる理由でもあるのかい？」

「二人を向かわせるのは・・・若干であるが私事も入ってはいる・・・だが、ここで本当に一切の救援を送らなければ後々難癖を付けてくる者たちがいるかもしれない、今ここで二人を送り込むことで最低限の戦力は救援として出した、という理由付けにできる」

(なるほど、悪くはない・・・か)

帰ってきた答えは確かに悪くないものだった、派閥というのは大きくなれば成る程敵が多くなる、それは閻派閥だけではない、一番厄介なのはこちらの足をわざと引つ張り最大派閥の座から引きずり下ろそうとする無能な味方だ

(そいつらに対する言いがかり回避するのに今回のカイトの行動は都合がいいか・・・だが、それを差し引いたとしても二人もL.V. 3の団員が抜けるのは・・・)

頭の中で作戦後のことを優先するか、それとも目の前の作戦かを天秤に掛ける

個人的にはカイトの行動を黙認してやりたいが、団長としての立場がそれを拒否するシャクティに目を向ける

気丈に振る舞ってはいるが、やはり知古のアストレア・ファミリアが心配なのだろう、眉間は似つかわしくない程に寄っていた

(・・・)で、シャクティに借りを作らせた方が作戦には都合が良いか・・・ガネーシャ・ファ

主である

その強さはギルドが定めた階層レベルからプラス1をしても足りないとも言われる
真正正銘の化け物であり、階層適正レベルの冒険者が数十人以上で挑むのは当たり前、
適正レベル以上の冒険者でも単独で相手取るのは危険とされている

ましてや適正レベル以下の者が単独で相手をするなど自殺以外のなんでもないと断
言できる

そして、その数少ない階層主の中でも、その能力と唯一の習性、そして特にその周り
の環境によつて適正レベルが跳ね上がる階層主がいる

その階層主こそが下層27階層の主

「双頭竜」アンフィス・バエナ

その名が指すように2対の首が生えている階層主であり、モンスターの中でも強力な
竜種型という凶悪な化け物である

このモンスターの厄介なところは確認されている階層主の中でも唯一の移動型階層
主ということだろう

この巨体のままで移動できる所なら下層の陸と海中どこにでも現れる

この階層主を攻略するにはいくつかの条件をクリアしなければ戦闘にすらならず、一方的に蹂躪されることになる

一つ目は闘う場所

アンフィス・バエナとの戦闘は水上で行われる、そのため水上にできるだけ多くの足場があるルームに誘導しなければならぬ

二つ目 物理的な攻撃

アンフィス・バエナの首の片方は魔法を大幅に減衰させる霧を吐いてくる、そのため基本的にこの階層主への攻撃は水上の足場からの飛び移りつつの近接攻撃か、遠距離から弓などによる攻撃しか通じない、首を切り落とせば魔法も使えるようになるが、それまでの攻撃手段の確保は必須である

三つ目 消化剤の準備

魔法減衰の霧を吐いてこない方の首からは可燃性の液体と共に灼熱のプレスが放たれる、この液体と炎は水でも消えることはなく、専用の消化剤を使用しなければ鎮火させることはできない、そのためこの炎をまともに喰らってしまった場合は消化剤がなければ死ぬまでその身を炎に焼かれることになってしまう

地に足を付けてできない不慣れな戦闘環境

ダンジョンで切札であるはずの魔法の無効化

巨体から放たれるその身を使用した攻撃と燃え続ける灼熱のブレス

まさしく『凶悪』

今までこの理不尽な状況と化物自身の力によつて多くの冒険者がその身を骸に変えてきた

だが

だだだだだ！もしも！もしもである！！

水辺であろうとも地に足を付けることができ、尚且つ、近接攻撃で有りながら遠距離にも匹敵するリーチを持ち、ブレスなど吹き飛ばすほどの脅力を持つ様な存在がいたらどうなるだろうか!?

が次々と刻まれていく

「G o o o o a a a a a a a a a a a a a a a a a a !!」

ダンジョンに生み出されてから初めて感じる恐怖、アンフィス・バエナは後先を考えぬほどの最大量・最大威力の炎を吐き出す

だが——。

「ぶっ飛ばせ！ 明王!!」

その手に持つ巨大すぎる刀を内輪の如く振り抜き、豪風によつて敵の攻撃を文字通り吹き飛ばし、跳ね返された炎と液体がそのままアンフィス・バエナに襲いかかる!!

「P i g y a a a a a a a a a a a a a a a a a a !?!?!?」

あまりの理不尽に階層主の思考は困惑一色に塗りつぶされた

ナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナン

ンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダ
ナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダ
ナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダ
ンダ

——ナンダコイツハ!?

ダンジョンに生み出されるようになってから幾千年、初めて体験する類いの恐怖に、
今や片首となってしまった双頭竜は萎縮した

母に仇為す害虫、それはどれも葉クズの如き小さきゴミでしかなかったはずだった
それがどうだ!?

自らよりも巨大な体躯

そうであるにも関わらず速さは我と変わらず

あまつさえ我の炎すら吹き飛ばしてきた

——アツイ

アツイアツイアツイアツイアツイアツイ!!

本来なら自らの炎すら通じないはずの龍鱗が、目の前の理不尽な存在によつて剥がされたせいでその身を焦がしてくる

——ユルサヌ

生まれ出でてからは、わけのわからぬもので動きを制限され、解放されたと思えば理不尽に襲われる

「GRAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

モンスターのレックス
迷宮の孤王とまで呼ばれる竜王は痛みも熱さも感じなくなるほどの憤怒にかられ忌々しい敵に向き直った——だが

——イナイ!?

双方が動くだけで嵐のような豪風

攻撃を放てばその影響で湖の水が間欠泉の様に舞い上がり自分たちを叩き付ける豪雨となる

地形、いや階層そのものが崩壊しかねない、文字通り格の違う闘争

その圧倒的な光景に敵も味方も動きを止めてしまっていた

何よりも驚くのはその光景を作り出していた片翼はL.V. 3の冒険者だと言うのだから驚きを禁じ得ない

戦闘が終わり先程までの轟音しかなかった喧噪から落ちるような静寂の中、誰かがポツリと呟いた

「……あれが『ジョーカー』……ハハ……化け物じゃねえか」

その言葉に同意するかのように自分を含めた数人の冒険者が畏怖からか喉をならし
て唾を飲み込む

(あれが最大派閥の片割れ、ロキ・ファミリアに所属する期待の新人……新人……)

あれが?)

どこの世界にL.V. 3でL.V. 5相当以上の階層主を単独で撃破する新人冒険者がいるというのか、こんなこと、第一級冒険者であつても出来る奴はそうはいない、いたとしてもできるのは『猛者』くらいだろう

鎧武者が階層主を叩き切った体勢からこちらに向き直る

———その肩に一人の男を乗せて

トレードマークになっている藍色のキャスケット帽

竜尾の様に長い白髪

そしてその目

階層主を倒したばかりだと言うのにその目には一切の油断は無く、遠目からも感じる圧倒的強者のオーラには微塵の隙も感じられない

「ひゅ!?!」

「(ハ、ハ)つちを向いたぞ!?!」

「.....G r r y u u u u」

「Piggy……」

その姿に気圧されたのか闇派閥だけでなくモンスターまでもが気圧されている

（味方……なんだよな？）

現れた時にジョーカーは『助けに来た』と言っていたがその後のあまりの暴れっぷりに味方とわかっているこつちまでブルってしまふ

——二つ名に偽り無し

ランクアップの記録を塗り替えた世界記録保持者、そしてそれを祝福するかのようにつけられた彼の二つ名

当時、熟練の冒険者達はその新人の冒険者に付けられた二つ名を大げさすぎると鼻で

笑っていた

だが

ここに居る者達はそれがこれ以上ないほど彼に相応しい名であると目の前で見せられ、魅せられた。

あれぞまさにロキ・ファミリアの秘蔵っ子

戦況を引つ繰り返すワイルドカード！

まさしく『切札』!!

神々はその身に相応しすぎる名を知ってか知らずか与えたようだ

その場にいたほぼ全ての冒険者がこの一人の冒険者同じ思いを抱き、彼に対して尊敬と畏怖、そしてほんの少しの嫉妬を感じていた。

『やつちまつたぜ キリッ』

というような心境が戻ってきた。

なにせ下層までの強行軍を敢行して、何とか間に合ったか、ふーやれやれ、と思った途端にまさかの階層主登場

無我夢中になって数十メドルもあるにも関わらずアイキャンフラアア〜イとヒモ無しバンジー

というか端から見たらただの飛び降り自殺だぞこれ

下が水だから大丈夫？

ノンノン、一定の速度で水に飛び込んだ場合水はコンクリートと同じ硬度になると、昔、大地っぽい名前の自衛隊員が言っていた

よしんば助かったとしても水の中には肉食の水棲型モンスターがわんさかで助かる確率は限りなくゼロ

そりゃ焦るっつの

おかげでいきなり奥の手まで発動してしまった

ただあそこで無茶をしなければかなりの人的被害が出ていたのは間違いないのでギ

リギリ及第点だろうと自らを納得させる

それに奥の手といってもこの某死神バトルオサレ漫画の『No.10』の能力
こくじょうてんげんみょうおう
 『黒縄天譴明王』

これにはさらに奥の手があるのでただの正解までなら見せても問題はないだろうと
 自分を納得させる

(うむ、大丈夫大丈夫！セーフだセーフ!!)

ちなみに、このような自分にとって都合な事実などを、一見すると少し論理的であるようにも見えるが実際は不合理な説明によって覆い隠そうとする心の働きを合理化と言う・・・

閑話休題

・・・先ほどから姿の見えないお嬢に関してだが、実は途中で分断された

別にダンジョンの罠とかではなく、あの一年前に襲ってきたイシユタル・ファミリアのガマ蛙女ことフリユネ・ジャミールとダンジョンの中でバツタリ遭遇、そこから無茶

苦茶理由のイチャモンをつけられて襲われたのだが――

「ここは私に任せて先に行つて！」

時間がない事もあつてお嬢がガマ蛙とバトルことになった

でもお嬢、そのセリフは死亡フラグだからやめれ

「私もすぐに追いつく！」

さらにフラグを建てていく!?

いや、最近はフラグを建てまくれば逆に安全とか言われてたし大丈夫だろう……大丈夫かなあ……

なんてことを考えている間にもカエル女がこちらにも攻撃を仕掛けてくる

「ゲゲゲゲゲゲ！行かせるわけねえだろうがああああ!!」

『目覚めよ!!』

「くそがあ!?!」

相変わらずお嬢の風の付与魔法は俺から見てもかなりチートな威力と燃費の良さだ
情報通りならこのフリユネは既にLv. 4にランクアップしたはずだというのにそ
れと互角にやり合えている

(これならばマジで大丈夫そうだな)

「カイト！早く!!」

「・・・うっし！じゃあ任せたぞお嬢！キツくなったら全力で引けよ!!」

「ん!!」

お嬢がフリユネを吹き飛ばした合間に駆け抜ける

「待ちやがれえええええクソがああああー！！！！」

(待てと言われて待つ馬鹿がいるかアホウ)

そういつて武器同士の激突する戦闘音を背にして『念』も全開のフルブーストで戦線
を離脱した。

——
なんてことがあったのが半日前

そこから中層の街で軽く補給と最低限の休息を取ってここまで駆けつけたわけだが、間に合いはしたがぶつちやけコンディションは全快時の七割つてところだ、この状態で階層主相手にほぼ無傷で勝利はかなり運が良い

「・・・さーて、と・・・せいじゃいっちよ運が良い勢いに乗ってこのまま派手に雑魚掃除と行きますかねえ？」

——などと調子に乗ったのがいけなかったのだろうか

「つつづあ!？」

俺の腕から突然血が噴き出した

俺が直接攻撃を受けたのではない、攻撃を受けたのは『黒繩天譴明王』だ

この能力、というか刀は大きく分けて二段階の変化がある

まずは始解と呼ばれる第一段階『天譴』

こいつは俺と動きがリンクする巨大な腕と刀を一時的に出現させるといふ単純明快な能力だ

そして第二段階の卍解『黒繩天譴明王』

これは始解で出現する部分を全身状態にしたものだ、始解時に比べその力は数倍とい

うとんでも能力なのだが、結びつきが強力になりすぎて顕現した明王が傷つくとそれとリンクしている自分もダメージを負ってしまうというデメリットも存在する

そしてその明王に傷を付けたのは――

「ひひっ」

その口に怒りと狂気を孕ませつつ歪な笑みを浮かべるのは闇派閥筆頭

「ひはははははは!!なんだあ!!こいつはあ!!ただの木偶の坊じゃねえか!!さっきの階層主との戦闘はマグレか何かだったか!!」

【殺帝】ヴァレッタ・グレーデ

人でありながら直接的な戦闘力なら先のアンフィス・バエナと同等とされるLv.5

それが次々と明王の身に傷を付けていく

「つつうう!!あいつまさかヴァレッタかよ!!」

明王の弱点は簡単である、その巨大さに任せた力を活かすことができない自らよりも遙かに小さい相手だ

それが単騎であれば人がハエ相手に包丁を振り回すようなものだ

加えてその相手がLv. 5となればハエではなく猛毒を所持している蜂といったところだろう

しかもその蜂は頭が回り常にこちらの動きを読んで回避と攻撃を仕掛けてくるときたら、もはや一方的なリンチだ

(よりにもよってこいつか！明王と相性悪すぎるっ!?)

まさか、襲撃にこいつが参加していたとは予想していた中でも最悪のパターンだ

ただし、このままならという条件でならだが

「ぬうっ・・・づううう!?!」

「ひやはははははオラオラオラアアアどうしたアタシはこつちだギャハハハハ!!」
身体中に決して浅くはない傷が次々と生まれていくが何とか根性で耐える

(タイミングが大事だ・・・耐えろ俺!)

「おらあああああア!」

横腹から鮮血が舞う

(ぐっ!?!・・・まだまだ!)

太股の後ろに突き刺すような痛みが突き抜ける

「つづうう!?!」

(まだ、だめだ!)

そして背中からも血が飛び散る

(もう少し!?)

何とか耐えて身体中が血に染まるのではと思ったとき

攻撃の癖とタイミングをようやく掴んだことで好機が訪れた

(っ今だ!?)

「始解・『天譴』!」

肩口に下から上に走る傷が生まれた瞬間を狙って卍解状態を解除する、

そうするとどうなるのか?

「っなんだと!?!」

答えは簡単だ、今まで明王を足場にしつつ斬りかかっていた所でその足場の消失、しかも最も高い場所での足場の消失のため滞空時間は他の部位にいた時よりも長いその結果、比較的長い時間、空中にヴァレッタだけが取り残されることになった。そしてギルドやフィンから聞いた情報が確かならヴァレッタには空中で素早く動けるようなスキルや魔法は持っていない

つまり

「断ち切れええええええ『天譴』—————!!」

「てめゲア!？」

無防備な背中からチヨツキンということだ。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

||

《side:リユール・リオン》

それを見て

故郷にある森でよく見かけた光景を思い出した

二股に分かれた見た目が特徴の珍しい気に生える葉っぱだ

根元に近い部分が二股に分かれているせいで木から散る際にクルクルと回転しながらゆっくり落ちる

そういった光景が特徴の見る者を飽きさせない木だ

散った葉は風が吹けば回りながらかなりの距離まで飛んでいくおもしろい木だった
ただし

今自分が見た光景はそんな幼少の頃の可愛げのあるものでは決してない。

人の上半身が先ほど語った木の葉のようにクルクルと回って遠くまで吹き飛ばされる陰惨なものだ。

(・・・あつけない)

「長年、と言つてもいい怨敵であつても死ぬときはあつさり逝くもんじゃなあ」

全員が息を止めるような光景の中、輝夜のあっけらかんとした声が響く

「リユー、ボケツとするな、今だ戦闘中であるぞ」

「む・・・わかつています」

その声に周りの闇派閥達に対して改めて警戒するがあまり意味がない

「ヴァレッツタ様が死んだ!?!」

「馬鹿な!?!」

「すぐに指示を仰ぎに・・・」

「馬鹿者このまま奴らを皆殺しにするのが先だ!!」

「待て!?!うかつに動くな!!」

なにせ既に向ここの最大戦力であったであろう、階層主とヴァレッツタが消えたのだ

この戦いの趨勢はこちらに大きく傾いたのは誰の目にも明らか、その証拠に闇派閥の

下級団員は見るからにうろたえ始めていた

「つ!?!待てお前ら! なんかくるぞ!?!」

そんな混乱の最中、私の隣に『彼』がどこからか跳躍してきたのか音もなく着地した

「よつと、・・・おまたせ」

「あ、ジョーカー、おひさ〜!」

「おひさ〜」

「「ぎやあああああああああ!?!」」

闇派閥の団員が一齐に後ずさる中、アリーゼとジョーカーがのほほんとした会話を繰り広げていく

「アリーゼ、死者と怪我人はどんくらい出た?」

「あなたのおかげで幸い死者はゼロ、ただし怪我人は多数つてとこねー」

「仏さんが出てないなら僥倖だろ・・・ちなみにフィルヴィスは?」

「あら?あらあら?やっぱそういうこと?え、そういうこと?」

口に手を当ててウフフフフとでも言うかのようにジョーカーに詰め寄るアリーゼ

(ああ・・・アリーゼの悪い癖がこんなときに・・・)

人の恋路に口を出すのが大好きなアリーゼが極上のネタに食いつく

(というか、先ほどまでの緊張感はどこへ行ったのか・・・)

ついさっきまで自分たちは死闘を繰り広げていたはずなのに今のこののほほんとした空気は何なのだろうか

「何を勘違いしているのか知らんがあんたの考えているようなことはないと言っておくぞ、普通に大事な仲間が心配で助けにきたってだけだ」

「え〜〜?ほんとに〜〜?」

「ほんとに〜」

（なんでしようかこれ、なんでジョーカーはこんなにもアリーゼと打ち解けているのでしょうか・・・）

そんなキヤツキヤツウフフな空気が辺りに蔓延しそうになったとき――

『同士達よ!!撤退せよ!!その後予定通りに例の物を起動させるのだ!!』

声が響く

ヴァンデッタ

「ちっ、白髪鬼か!!」

「え、なに?あいつまでいんの?こりやマジで上の方はハチャメチャになってんな・・・」

（・・・上の方?）

「どういふことじゃ?」

闇派閥の構成員が撤退する中、残った大量のモンスターを掃討しながら会話は続く

「あ・・・今回の襲撃にかなりの規模の人数が割かれるって気づいたうちの団長がさ、フレイヤとガネーシャ、その他複数のファミリア共同で大規模な電撃掃討戦を展開中でな、たぶん今回の騒動で闇派閥の連中かなり痛手を被るぞ」

日常的な会話のように話しているがそれと同時に聞こえてくるのはモンスターによる断末魔の重奏

ジョーカーのスキルなのか魔法なのかはわからないが、先ほどの巨人の腕と剣が現れ
瞬く間に大量のモンスターが両断されていく

「ふん．．．儂らは囷といたところか、氣にくわんのう！」

輝夜を囲おうとしたモンスターが飛びかかってくるが居合いによって細切れになる

「まあまあそう言わない、一応こうやってジョーカーが救援に来てくれたんだから」

アリーゼの剣がそこからさらに襲いかかってきた敵を切りつけ

「ふっ!!」

入れ替わるように私が隙間なく攻撃の手を加える

「そう言ってくれるとこっちとしても精神的に助かる」

そう言ったときのジョーカーの顔は非常に複雑な表情だった

．．．．

そうやって残ったモンスターを掃討しきるにはジョーカーという戦力を持つてし
ても数分を要した

「ようやく終わったかー」

「なに、お主のおかげでこれでもずいぶん早く終わった方じゃ」

（確かに・・・彼がいなければ危なかったかもかもしれない）

「あちやく、今から追つてもさすがに追いつけないかー・・・って!」

既にかなり遠くまで退却している闇派閥の者たちを追撃できずに傍観していると突如の爆音が連続で辺りに鳴り響いた

（入り口が!?!・・・いや、それだけじゃない、これはかなりの広範囲で爆発が起きている）

「うっわくやることガみみっちなあ・・・あいつら作戦失敗したからって最後の嫌がらせに入り口や通路を爆破していきやがった」

「あのまま追いかけてたら巻き込まれてたわねく」

「モンスターに足止めされたおかげで逆に助かるとは、いやはや素直に喜べんのう」

「それにしてもこの爆発どんだけの火炎石仕込んでたんだよ、まだ連爆してん・・・ぞ?」

ジョーカーがそう言った後すぐにようやく爆発音が病んだ

「ようやく火炎石が尽きたみたい——」

ね、とアリーシャが言おうとした瞬間

ダンジョンが哭いた。

32：最後×正義

ようやく一息つけるかと思つた矢先の異常
イレギュラー
異常事態の前に起きる地震ではない

黒板に爪を突き立てたかのような不快な高周波は下層全体を巻き込んで発せられていた。

その場の全ての生きとし生けるものがその音から感じるのは『悲鳴』『慟哭』そして最も強い感情

『憤怒』

どうしようもない自然から一定の個人に対してにのみ向けられる殺意は全ての生き物を恐怖で動けなくしてしまう。

これから起こるのはただの狩猟 殺戮 虐殺 蹂躪
対して希望は一つのみ

———
これにハッピーエンドなどあり得ない。

|||||

それは下層でも中層に近い、しかし、誰もいない広大なルームの壁から染み出るよう
に産まれた

┌
└

産声はない

その代わりに発するのは全てに対する殺意のみ

身体を動かす

まるで油を差していなかった鉄細工の引き絞る様な音が鳴り響く

それはまるで睡眠から目覚めたばかりの獣がする伸びにも見える光景だった

後に静寂になったかと思われた瞬間



砲口

爆発

強大な水柱を上げてその場から姿を消す。

向かうは上ではなく下

踏み荒らすかのような進軍が開始した

「やめろくるなぶえあ!?!」

その最初の獲物になったのは闇派閥の構成員、それもただの構成員ではない

地上でフィン達の作戦によって自らの主神が天界に送還されたためにステイタスが一般人と変わらなくなってしまった哀れな者達だ

彼らは逃げる同胞の中でもその脆弱さから脱出の際に取り残され、それから逃げることを優先した『白髪鬼』ヴァンデッタによって脱出口を閉じられたせいで真っ先に殺されていった

「助けてく開けあアピユ!?!」

「くそgゲア!?!」

「おわりだおわ r p い!?!」

ダンジョンの異常鳴動

そして先ほどから『巨蒼の滝』グレート・フォールの底であるこの滝壺の水が流れてくる血肉

それにより真つ赤に染まる巨大湖

全員が感じさせられた

まるでキツイ香水の原液を頭から被せられたかのような感覚だ

香りは当然『死臭』というあの激臭だ

ただそこにいるだけで不意に身体がブルリと震える

——— 今にも迫り来る死の香り

「アリーゼ、こいつは……」

「ええ……かなりヤバい、すぐにここから脱出するわよ」

・
・
・
・
・

アリーゼ達と短い協議の末、早急に下層から脱出することを決めても誰からも反対意

見が出なかったのは不幸中の幸いだったのだろうか

「アストレア・ファミリアは前衛と中衛を頼む、俺はフィルヴィス達と殿を勤める」
 「大丈夫なの？」

「ああ、幸い俺は索敵系のスキルがあるんでな半径150から200メドルくらいからの奇襲なら知覚できる、一緒に殿を勤めるなら俺の動きを知ってるフィルヴィスがいた方が他の奴らも守りやすい」

それを聞いて驚く者もいれば呆れる者もいる

「先ほどの攻撃手段に加えてそんなことまでできるのか……お主が『切札』と呼ばれるわけだ」

「それでもさすがに一人じゃキツイでしょ、……リオン、カイトと一緒に殿をお願い、輝夜は殿寄りの中衛で二人をサポートしてあげて」

「……了解しました、『切札』よろしくお願いします。」

『疾風』がペコリと頭を下げてきたので、こちらも軽く挨拶する
 「おう、こつこそよろしく頼む」

(そーいや『疾風』の声、初めて聞いた気がすんな……つーか本名はリオンって名前なのか……知らなかった)

「くくく、『切札』そやつは無愛想だがよろしくやってくれ」

「うるさいですよ、輝夜」

ギロリとリオンが輝夜を睨むと、おあこわ!と言って輝夜は中衛パーティーに混じっていった

「・・・カイト」

輝夜とすれ違うように近くに待機していたフィルヴィスがこちらに向かってくる

「フィルヴィス、話は聞いていたな？」

「ああ、私たちとお前、そして『疾風』とで殿を勤める」

「そういうことだ・・・すまん、勝手に損な役回りを回しちまって」

「かまわんさ、どうせ誰かがやらねばならないことだ、それなら最も索敵能力の高いお前、そしてそれを熟知している私がサポートに回るのは最も無駄のない編成だ」

「助かる」

「それと・・・」

「ん？」

「・・・た、助けに来てくれて・・・あ、ありがとう」

「「「!?!?」」」

そんな素直すぎる言葉を聞いたデュオニユス・ファミリアの面々が固まる

(おいおいうちの団長顔が真っ赤だぞおい)(うわ団長かわいい)(え?まじで?あれ

「うっわ、大変ねえフィルヴィスちゃんも」

「・・・何のことですかアリーゼ？ 美しい友情ではないですか」

「リオンあなたもカイトと同じ側か・・・」

「?・・・それよりも急ぎましょう」

「そーね、空気もいいかんじになったし・・・急ぎましょうか」

そんな危機的状況で短いながらも少し和やかな会話が交わされた

彼ら彼女達はこのときの会話は忘れるだろう

彼らはこの後のことは永遠に忘れられないだろう

彼女はこのときのことを忘れたいだろう

— 下層の調査団は『最期の日常』を楽しんでいたのだから

・ ・ ・

.

そこからはとんとん拍子で事が進んだ

メインに爆破された通路とは逆の通路なら生きているかもしれないと考え移動を開始

運の良いことにその考えがドンピシャ当たり、かなり遠回りではあるが上に行く道を見つけることができた

なんとか通れる通路を見つけて脱出している最中

「カイト、これを飲んでおけ」

「お、サンキュー」

ファイルヴィスから手渡された試験官には精神回復役が入っていた

手持ちのポーションは先ほどの階層主とヴァレッタとの戦闘で全て使い切ってしまったのでかなり助かる

「精神力マインドの消費はどんな感じだ？」

「常時張ってるからな、ちときつい感じだな」

「?・・・なんの話ですか」

気心の知れたフィルヴィスとの会話の内容がわからないのか

『疾風』ことリオンが質問をしてきた

「俺の素敵スキルは精神力マインドを結構な量消費するからな、いつもは距離や時間を基準に一定間隔で使ってるんだよ」

「なるほど、つまり今はそのスキルを」

「ああ、範囲を全開にして常時使用して——っフィルヴィス！」

「ぐ!?!」

「な!?!」

近くまで来ていたフィルヴィスとリオンをまとめて突き飛ばす

何かがヤバイという雰囲気は異常な高周波を聞いてから感じてはいた、だからこそ普段はやらないオーラの消費を無視した全開の『円』で警戒していた

だから気づけた

《 side : 『疾風』リオン 》

アリーゼと『切札』^{ジョーカー}の協議により殿を任されることになった

道中では『切札』^{ジョーカー}と『白巫女』^{マイナデス}ことフィルヴィス・シヤリアの違和のない立ち回りや

お互いを支えあう会話等には一種の羨望を覚えた

自分たちの村の外の下に見る故郷の雰囲気嫌いでオラリオまで来たのにも関わらず、顔を隠し、他人との接触を嫌ってしまう自分との違いに憧れを禁じ得ない

だから私は勇気を出して会話に入ってみた

だからなのだろうか

輝夜はよく言っていた

「馬鹿が珍しいことをすると雨や雪、ひどければ大嵐が起きる」と

私が珍しいことをしてしまったからなのだろうか

私が

アリーゼを

殺した

《 side out : 『疾風』リオン 》

|||||

33：絶望×切札 前編

クルクルと切断面から血をまき散らしながら宙を舞う腕が一本

まあ、俺の何だが

「つつづううううう!?!」

(知覚してからあれだけあった距離を一瞬で詰められるとかどんな速度だ!?)
それを『円』で知覚した瞬間、尋常ではない気配とその速度に一気に身体の中のスイッチが強制的に切り替わった、そのおかげで咄嗟にフィルヴィスとリオンを突き飛ばす・・・というか吹っ飛ばしたが正解だった、そうしなければ今頃二人はこいつに三分割にされていただろう

その代償に俺の肘から先を持っていかれたが。

(腕一本で二人の女の命、お釣りがくらあな・・・とりあえず切り落とされた方の腕は『念』のオーラで止血――)

正直、未知の痛みに先程は叫んでしまったが頭の芯の方は自分でもドン引きする程キーンキンに冷えていた

「うわあああああぶ g y s ! ?」

「た、たす k」

「ぎゃ! ?」

「ぐえあああえ! ?」

俺の腕が宙に舞っている数秒の間だけでも後続組の冒険者が次々と八つ裂きにされ阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっていく

皮肉にもこの何かは俺の腕をぶった切ったことで、いつでも殺せると判断したのかとどめを刺すことなく他の冒険者を殺すことを優先したようだ

おかげで助かりはしたものの、決して自分の良い話ではない

（くっそ！相手の速度は自分以上、近接は不利、だったら距離を取りつつ中距離か遠距離攻撃！）

自分一人でこの化け物をどうにかしようとは思わない、アストレア・ファミリアがこつちに気付いて駆けつけるまで少しでも時間稼ぎをする。

『天譴』!!』

（こいつを無理してでも解除しなくて正解だったな・・・）

何かあったときのためにオーラの消費を無視し実体化させたままにしていた刀の名を解放し、今まさに殺されそうであった冒険者と化け物の間を分かちように顕現させる

「!?!」

「ジヨ、ジヨオカーカーカー!?!」

助けられた者達が助かった安堵と感謝から二つ名を叫ぶがそれに答える余裕は微塵もない

(まずは相手を牽制!他の冒険者から遠ざける!!)

突如現れた巨大な刀に相手が意表を突かれ動きが止まる

(好機!)

動きの止まった相手に全力で刀を振り抜いた

ガ
ギ
ン

だが、帰ってきたのは鉄がぶつかり合う鈍い硬質音

足裏を爆発させるようにして体勢も着地も何も考えず、とにかくふり構わず全力で前へと突っ込んだ

「ぐあっ!?!」

前に跳んだ瞬間、背中の薄皮一枚が裂けた

なりふりかまわない回避のせいで前に向かって前転するような体勢になってしまったが、その体勢のせいで自分の居た場所が視界に入る

(あ、あつぶねえ!?)

一瞬前までいた場所に鋭利な爪が振り下ろされていた

「——!!」

天地を逆にした俺とその目が会う、何となくだが殺戮を邪魔されたことに苛立っているような気がした。

(速い!?!・・・でも!)

その化け物は振り下ろした体勢のまま、すぐさまこちらを追撃してきたが、それはこちらにとって絶好のチャンスであった

「『天譴』!!」

こちらに飛び掛る化け物に対して股下から頭頂まで一刀両断するかのようになから上に向かって刀を振り上げる

俺の手にある刀と同調するようにして顕現した巨大刀が化け物の死角から斬りかかる

(今度こそもらった!)

回避不能の空中、しかも下からの奇襲に近い攻撃に必中を確信した

だが

■ ■
|
!

「なっ!?!」

あろうことか、そいつは下から迫る刀を尻尾で打ち付け、こちらの斬線を乱してできた刀の側面を足場に回避

その場から少し離れた場所に何でもないかのように着地し改めてこちらと対峙した。

「……はは、冗談でもキツいぞ、おい」

確信した攻撃をこうもあっさり回避されたことに対して、もはや驚きを通り越して笑いしか起きない

(正直、こいつ相手に次はないかも……)

速さは圧倒的に向こうが上、パワーの方も速さよりましとはいえそれでもかなり上だとわかる

今と同じような対処をこいつ相手にもう一度やれと言われると無理ではないだろうがかなり分の悪い賭けになるだろう

パキ

パキン

(!?)

そんな中で唯一の成果は相手の爪と尻尾の表面がほんの僅かに欠けたことだろう、どうやら耐久の方はそこまですでないらしい、何度も当てれば押し切れる、

しかし

たった十秒にも満たない攻防で見せ付けられた相手との単純なステイタスの差に対してこちらが見出した希望のなんと儂いことか

(・・・嫌な予感の正体は間違いなくこいつだ・・・何なんだこいつは?)

見た目はまるで餓死寸前の骨と皮だけの翼を失った翼竜

高さはざっと見で3メドル、全長は尻尾まで含めて10メドル、紛れもなく大型級と呼ばれるタイプ

だというのにこいつはあろうことか、こちらがギリギリ知覚できる様な速度で攻撃をしてくる

想像してみてもほしい、大型トラックが狭い室内で跳ね回るスーパーボールの様な動きで襲いかかってくるという悪夢の様な光景を

(まいったな・・・ちよつと勝てない)

ましたや今の俺の状態は片腕

万全の状態でも絶望的な戦力差だと言うのにこんなのと対峙できている今の状況が奇跡に思える

幸運なことに先程の攻防で多少はこちらを脅威と認めたのか睨み合いが続いてくれた

そこに声が響く

「カ、カイト!？」

「・・・!？」

俺に吹き飛ばされたフィルヴィスがこちらの状況、というか俺の状態を見て悲鳴を上げた、一緒にいるリオンも数秒で作り出されたこの凄惨な光景に絶句している

「
■
■
■
■
■
——
!!!」

そしてその悲鳴を合図の様にしてこちらに突っ込んでくる化け物
「らああ!!」

咄嗟に巨大化した刀で迎え撃つが
「はあっ!?!」

相手はその刀を足場のようにして数十メドルある天井まで跳躍
(あの巨体であの高さまで!?!あり得ねえだろうが!?!)

巨大トラックがビル6階くらいまで高速で飛び上がるような光景に顔が引きつる
(これ——つやば!?!)

天井を足場としてこちらに向かって、見るからに凶悪な『破爪』を振り上げつつ突っ
込んできた

目ではギリギリ追えている

だが、化け物自体の速度に重力の力も加わったそのスピードに身体反応が追いつかな
い

その速度は思考すら置き去りにしていた

(死——)

「させないわ!」

「らああああ!!」

自分の死の予感を覆したのは二人の女性

アリーゼと輝夜だった

二人が空中で横から突撃、化け物が壁際まで吹っ飛ばされた

「カイト、無事!?!」

「じゃないだろどー見ても、団長の目は節穴か?」

「団長!」「やべーなこれ・・・」「うひゃあなにこれ!?!」

アリーゼと輝夜以外のアストレア・ファミリアの団員も続々と集結してきてくれた

その中にはフィルヴィスとリオンも居た

「カイト、腕を出せ、気休めかもしれないが傷口を縛る・・・それとお前の腕は一応こちらで回収しておいた。」

ギリギリ間に合った救援への安堵と死を免れた現実一気に疲労感が襲ってきた

「つ・・・はあはあ・・・すまん頼む・・・それと二人とも助かった、マジで死ぬとこだったわ」

「助かるかどうかはまだわからないけどね・・・」

「そういうことだ．．．『ジョーカー切札』まだ聞えるか？というか、だ．．．あれはお前がおらねば私たちでも対処できんぞ」

「まかせろ、こちとらまだまだピンピンしてらあ．．．それにどのみち聞えなきや、ここに
いる全員——」

「
■ ■ ■ ■
—————
!!!!
」

化け物

後に『災厄』と呼ばれることになる『ジャガーノート』が大咆吼を上げる

「あれに殺されるだけだ。」

絶望との第二ラウンドが始まる。

L v. 4 11名

L v. 3 5名

対するは『災厄』ジャガーノートのみ

もしも自分が居なければアストレア・ファミリアでもこいつの相手は困難だっただろう

((いける！これならいける!!))

その時は確かな希望を持って誰もがそう思い闘っていた、

闘えていた

誰かがそのときのその思いを、判断を、間違いだったと言うだろう

だが当人達からすればそれは間違いだったと言われたくはない、その時はそれしか希望がなかったのだ

まさか希望に向かうカウントダウンが真逆の絶望へと向かっているなどと一体誰が想像できるのか

「これは……」

その意味を理解したのは、見た事もないモンスターによって後続組みがほぼ殺された後

(私たちは彼に助けられたということか……)

そうやって隣の彼女に目を目向けると、彼の隻腕の状態にかなり狼狽していた。

(腕を犠牲にしてまで……いや、私は彼女のついでか)

隻腕になった『切札』^{ジョーカー}が文字通り化け物のような強さのモンスターと対峙していると
きだった。

「カイト！」

フィルヴィスの声を開始の合図の様に両者が激突

(まずい!?)

そう思い参戦しようとした瞬間

「何を呆けているのだ馬鹿者！」

脇を通り抜ける二つの影

「輝夜！アリーゼ!!」

「できれば私たちがあれの相手をしている間にフィルヴィスちゃんはここにいるし、
2以下をまとめあげて逃げてくれるとありがたいわ！」

「了解したアリーゼ……先に18階層で待っているぞ」

そう言つてフィルヴィスが生き残つた者達の方へ向かつていく

(奴は……動かないか……)

私たちの集団から抜けていくフィルヴィスを化け物が狙うことも考え構えていたが、
どうやらこの化け物は完全に私たちに照準を合わせているらしい、先程からこちらを凝
視して動かない

「ちなみに一応聞いておくけど魔剣のストックとかまだあつたりする？」

フィルヴィスの介抱が終わつた『切札』^{ジョーカー}が化け物が沈黙している隙に輝夜とアリーゼ
に聞いてくる、目線だけは微塵も奴から逸らさずにはあるが

「あるわけないだろそんなもん、先の戦いでとつくに使い果たしてるにきまつてるだろ
うが！」

「はは……ですよねー……」

おそらく最初から予想はしていたのだろう力のない抜けた笑いをあげる

輝夜の言うとおり先程の戦いは今回の全戦力を投じても生き残れるかどうかの戦い

だったため、出し惜しみをしている余裕などなかった、魔剣どころか弓矢すらほとんど残っていない

「カイトってあれね！片腕なくなってるのに軽いわね!!おかげで緊張感なくなっちゃいそう!!」

(それは確かに……いや、そんなことよりも……)

「……『切札』^{ジョーカー}、魔剣はありませんが私の魔法があります、『九魔姫』^{ナイン・ヘル}程の範囲はありますんが一点突破の威力は引けを取らぬ自信があります。」

「おお！そいつは結構、なら作戦は——」

「私たちはリオンが魔法を放つまで時間を稼ぐ！単純ね!!」

「お、俺の台詞う……」

アリーゼが『切札』^{ジョーカー}の台詞を奪う……そのせいなのか『切札』^{ジョーカー}が少ししよげている

「魔力を込めるために今回は威力を一点突破に絞ります、援護をお願いしますね」

「ま、そういうことだな」「まあよくある作戦だ」「だねー」「じゃあ、いつも通りちやっちやと済ませましょう」「やるぜーあたしやかなりやるぜー!」

皆が私を援護するという内容に意気を吐く

(相も変わらず頼もしいですね)

そんな中で一人肩身の狭そうな者が一人

「・・・なんか女所帯に男一人で疎外感を感じるんだが」

なんか隣に並び立つ輝夜に愚痴を垂れていた

「くつくつく、まあ気にするな・・・それよりも『切札』^{ジョーカー}」

輝夜の身に纏う雰囲気が一変し周りの者達もそれを皮切り一気に意識を警戒からさらに深く意識を落としていく

「貴様のその攻撃が奴と渡り合うための突破口だ、こちらも先程の動きを見るにあれの相手に余裕はない、怪我を気遣ってもらえると思うなよ・・・行くぞ」

「へいへい、精々気張らせてもらおうとしましょうかねえ——『堅』!!」

「[!?!]」

『切札』^{ジョーカー}の身に纏う気配が一気に数十倍にまで膨れあがった

(つ!?!・・・この殺気、彼は本当にLv. 3なのででしょうか?)

私だけではなく他の団員も彼の発する気を見張っている、

その中で最も最も知覚で彼の殺気を感じ取っている輝夜とアリーゼだけは笑っていた

「ふん、中々の気合いだ、やれ!!」

「開幕はど派手にいくわよ!!」

「任せろ!」

「『天譴』!!」

そして戦闘が『切札』^{ジョーカー}の声で再開された

・ ・ ・ ・ ・

そこからは順調だった

「させるかあ!!」

「!」

「!!」

初めてダンジョンに潜ったときから自らに戒めている言葉だ

このイレギュラーに対して一切の油断はない

それ故にこの格上の魔物相手にどうにかこうにか殺り合えている

だというのにこの拭えない気持ち悪さは何なのか

警報ボタンは押されてランプはグルングルンと回っているのに音だけが鳴らないよ
うなもどかしさ

そんな言葉にできない感覚をこらえて魔物の相手をするこゝろ3分といった所だろう
か

（———来たか！）

今日、一番の魔力の圧を感じた

『切札』、アリーゼ！撃てます!!』

リオンの詠唱が終わり、いつでも打てる準備が整った

後は外れないようにこつちが相手を誘導する必要がある

「総員、伏せろおおお———!!」

今あるオーラのほとんどを注ぎ込んで最速最大の太刀を顕現させそれを横風に振り払う

「■ ■ —!?!」

「ちよ!?」「あつぶな!?!」

「ぬいおお!?!」「ひいひい!?!」

「いいいい!?!」

リオンを除いたアストレアファミリア全員がその言葉に咄嗟に伏せる

だが言葉のわからぬイレギュラーは回避が遅れ、ギリギリで空中に跳ぶことで難を逃れる、咄嗟の事だったためか身体は空中に留まることになる

(どんな強者であっても空中は必ず隙が生まれる瞬間——今だリオン!!)

「【ルミノス・ウインド】!!」

大小、30は超える数の光団が相手を逃さぬように四方八方から魔物に襲いかかる

その一つ一つにかなりの魔力が込められているのが感じられる

(これで、終わ——!?)

その瞬間に俺は見た

(嗤った?)

誰が

この魔物に決まっている

表情など作り様のない顔の構造で口角から無数の牙を覗かせて

まるで嘲り嗤うかのように

獲物が畏に嵌まったことをほくそ笑む獵師の様に

何がヤバいのかはわからなかった

何をすれば良いのかもわからなかった

だが俺の中にあるちっぽけな生存本能なのか

気づけば俺は

『黒縄天譴明王』!!』

明王を召喚していた

(何かわからないがやべえ!?)

その直感を証明するかのように魔物に当たったはずの光弾がこちらに向かって跳ね返ってきた

(魔法 反射だ?!)

先ほど言ったようにリオンの魔法の光弾はその込められた魔力から一発一発が必殺の威力を秘めている

その半数がこちらに向かって跳ね返ってきていた
「うおおおおおおあああああああああ!?!」

刀で弾けた光弾が壁を抉り周囲の景観を変えていく
だが、弾ききれなかった光弾はそのまま俺達を襲ってくる

「ぐうううううううそおおがああああああ!?!」

『切札』!?!』

『黒縄天譴明王』は俺とリンクしているためか俺と同様に左腕が肘から先がない

(せめて反撃のために右は残さねえとっ……!!)

明王は巨大だ、その体表面積で盾となるだけでここにいる全員を庇う事が可能だが、んなことをすればさすがに死ぬ、俺は自殺するつもりもない

故に、もはや肘から先のない左腕を切り捨てるつもりで文字通り肉盾として使用すること、光弾を防ぐ

(いつっ痛うううあだだだだだだ!?)

致命傷になりそうな光弾は残っている肘から上の部分を肉盾として防いでいくが、これがまためっちゃ痛い

とにかく無我夢中で光弾を捌いていく

激しい破壊音が止み、土煙が晴れる

すると向こうにはぼろ無傷のモンスター姿があった

「くっそ……やっぱ無傷……ん？」

最初に俺の攻撃で亀裂を入れた爪と尻尾の部分のみが挟れていた

どうやら魔法を反射するのは表面の装甲のおかげのようだ

(つまり、あの表面の装甲を引きはが……しさえすれば……あり?)

思考にもやががかり目がかすむ

足下を見ればおびただしい量の血が広がっていた

(あ……やば……これ全部俺の血か?)

「さすがに……血を流しすぎ……た……」

(やば……意識が……だめだ……今は——…)

俺は倒れた。

.....

「^{アルウエア}炎華!!」

身体に直接響き渡る爆発音で意識が戻った

「空を 渡り」

「……ん……俺……は？」

目が覚めて先ほどまでの状況が一気にフラッシュバックする

「!?!?」

（気絶してたのか!?この事態に!?いや、それよりもあいつらは——!?）

俺のスキルの力でようやく拮抗状態だったのだ、俺が抜けてしまえばどうなってしまうのか、最悪の予想が頭をよぎる

そしてそれはすぐに現実として突きつけられた

「荒野を 駆け」

「……あ……あああ……ああ……」

目の前が血肉の海だった

誰かの血肉が辺りに広がっていた

さらに最悪なのは今まさにこの瞬間

アリーゼが奴に身体を貫かれたことだろう

明らかに致命傷だ

そのアリーゼと目が合った

震える唇でこちらに向かつて口を動かす

読唇術なんて心得はないが、それでも何を言っているのか不思議と伝わった

リオン を お願い ね

流した血を涙で流すかのような綺麗で
それでいて晴れやかな表情で言ってきた

待て

待ってくれ

「何者 より も」

今、俺の意識が戻ったんだ

諦めないでくれ

ここから俺がどうにかするから

「疾く 走れ」

だから

頼むから

リオン

「星屑の光を 宿し」

その詠唱を 止めてくれ

「敵を 討て」

そんな願いもむなしく最後の詩が紡がれる

【ルミノス ウィンド】

爆発

閃光

そして

「ああ・・・ああああああ・・・
 あ—————!!!」
 ・ああああああああああああああ

慟哭

俺のではない

自らの手で仲間を

友を

ライバルを

家族を手に掛けてしまった

妖精の泣き声

そこに含まれるのは悲しみと絶望のみ
だというのに

それだけの代償を払ったにも関わらず

「なっ!?!」

奴は生きていた

片腕片足を失った半死半生の様な状態でそしてそのまま奴は

(・・・!?!おい!!おいおいおいおいおい・・・)

「つふつぎげんなああああ—————!!」

奴は、あろうことかこの広間の外へ向かって脱出するために逃走を始めた

怒りで頭がどうにかなりそうだった

これだけのことをしでかしておいて逃げる？

俺の左腕

参加した冒険者

そしてアストレア・ファミリアの命

そしてリオンの絶望

何もかもを全部引き起こしておいて

ニゲルダト？

煮えたぎるマグマが頭の中に現出したかのように怒髪に駆られる

目の前が紅い

耳も何も聞こえない

だが、聞こえないはずの声がかんこえた

昔、ベルと一緒にじいさんかに抱き上げられながら聞いた
今でも俺の中に芯としてある言葉だ

『英雄とは——』

『何かを成し遂げた者を指すのではない』

『己を賭した者こそが英雄なのだ』

懐かしい

とても懐かしい記憶だ

『仲間を守れ』

ごめん、じいちゃん、俺、守れなかったよ

目の前にいたのに守れなかった

『女を救え』

———
そうだ

まだ救えるかもしれない女が残ってる

———
アストレア・ファミリアはまだ死んじやいない

『己を賭けろ』

ああ、そうだ、まだ俺は全てを賭けていない

まだ切り札はあるんだ

なら——それを賭けよう

アストレア・ファミリアは命を賭けてくれた

自分の死の間際になってまで友を心配する極上に良い女

アスフィに出会わなければきっと惚れていたかもしれないくらいにいい女

きっと他の団員達もそれに負けないくらいにいい女だったのだろう

それを殺したこいつを逃す？

ア リ エ ナ イ

ケジメはつけなければならぬ

◇ 『黒繩天譴明王』

『天譴』の第二段階、通称「卍解」

巨大な鎧武者を顕現させる、その力は『天譴』の数倍
身体の大きさをおる程度までなら調整できる。

◇ 『黒繩天譴明王・断鎧繩衣』

通常卍解の亜種解放とも言える形態

明王が鎧を脱いだ姿、俊敏性だけでなく力も爆発的に上昇する

しかし、その代償としてその身に受ける攻撃全てが致命傷になってしまいうほど防御力が下がる

(下がるというかゼロになる)

というか、ぶっちゃけ攻撃を受けたら死ぬ

元の持ち主は不死身になることでこの弱点を克服したが

カイトはそんなの無理なので普通に一撃受けたらガチで死ぬ

普通に死ぬ

ハイリスクロウリターンな形態

□ 解除条件 □

短時間内に敵を1000体以上撃破

o r

『断鎧縄衣』の解放

35 : 失意×再起

イギリス
闇派閥への大粛正、並びに27階層への調査隊への襲撃事件

どちらもオラリオの正と負の歴史に刻まれることになった

片や『光への一步』

片や『27階層の悪夢』

全くの真逆性な出来事がほぼ同日のうちに起こったことで忘れることのできない事件としてこのように称されことになる

そんな大事件から三日

場所はギルドの地下

ここは祭殿と呼ばれ、オラリオ創設神の1柱である、とある神がその強力な神威を常に祈禱によってダンジョンに捧げることでモンスターの地上進出を防いでいる最重要防衛箇所である

そこにある石造りの椅子に鎮座する者が1柱、言わずもがな今述べた創設神の1柱

神ウラノスである

二メートルある巨体に彫りの深い荘嚴な表情は微動だにしない

そのせいで老人のように見える姿からは年相応の雰囲気は微塵も感じられない
そんな神が誰も居ないはずの広間へ向かって口を開く

「・・・フェルズか」

「ああ、とりあえず報告だ、今回の事件の後始末はできる範囲で済ましてきたよ、ウラノス」

「・・・そうか」

誰もいなかったはずの暗闇から突如、影が現れる

全身を覆うローブは黒一色

それ以外で唯一見えるのは両手のガントレットのみ

怪しき満点の人物ではあるがウラノスは気にせず会話を続けていることから二人が知己であることが窺い知れる

「ロイマンの提出した今回の報告書は細かい部分を除けば概ねその通りのようだったよ」

「そうか」

「ただ・・・やはりアストレア・ファミリアが壊滅したのは痛い損失だね」

「ああ、アストレアの眷属ことども達ならあるいはと思っていたが」

「正義を司る彼女たちならば彼らを受け入れてくれる可能性があつたかもしれないというのね・・・」

「既がない可能性の話をしてもし方あるまい・・・フェルズ、それで細かい部分とは何だ」

「ああ、今回のダンジョンで起こった異変の原因に、おおよその予測ができたかもしれない」

「!?」

「これは生き残った『切札』と『勇者』の会話を盗み聞きをして手に入れた情報になる、イヴイルスどうやら閻派閥が大量の火炎鉱石を使用して下層を超広範囲にわたって爆破したらしい、そしてその直後に――」

「ダンジョンで何かしら異常が起こった」

「ああその通りだよ、何でもまるで悲鳴のような音が下層全域にわたって鳴り響いたよ
うだ」

「・・・なるほど、このような事は初めてだが私の祈祷が届かなくなった理由がわかった、・・・ダンジョンは生きている、おそらく許容範囲内のダメージに修復よりも原因の

排除を優先したのだろう、そして――」

「異常種個体^{イレギュラー}・・・『災厄』の獣、ジャガーノートの誕生、いや出現となつてしまつたということなのだろうね」

「このことは機密扱いにせねならないだろう」

「それがいいと私も思うよ、下手に知れ渡つてしまえば誰が悪用するかわからないからね・・・それと話は変わるんだが――」

「何だ？」

「いや、今回の功労者である『切札』^{ジョーカー}が義手を作ることになつたそうなんだが・・・すこし面白いことになつていたよ」

「ほう」

「私も少し興味が湧く内容でね、先達として影ながら少しだけ手伝うことにしたよ、かわないかな？」

「かまわん、お前のプライベートにまで口出しする権利は私にはない」

「ありがとう、ウラノス」

「礼を言われるようなことではない、それに『切札』^{ジョーカー}には何か報いねばならないとも考えていた」

「そうだね・・・それにしても彼の新たな通り名が『悲劇の英雄』か・・・どうか今回の

《Side:フィン》

地上での闇派閥^{イヴァイルス}への電撃戦は大成功といっても過言ではない結果となった
 今回の襲撃で闇派閥^{イヴァイルス}勢力の半数、いやそれ以上を削り取ることができた
 臨時で建てた天幕で事後処理をしていると

「団長!!カイトがつっ!カイトがつっ!!」

血相を変えたラウルがテントに飛び込んできた

その表情から読み取れるのはとてもではないが良い報告とは思えない

(まさか・・・いや、もしそうならロキがすぐに気づくはずだ)

「ラウル、落ち着きいや、他のファミリアの子達もおるんや、ゆつくりとでええからきちんと報告しいや」

主神は己の『神の恩恵』^{フアルナ}を刻んだ眷属の生死を感覚で掴むことができる

そのロキが自分の隣にいるのに何も言っていないはずがない

だが、このラウルの焦りよう、嫌な予感をぬぐうことができない

「えっと、その・・・」

少し落ち着いてようやく周りに気づいたのかラウルがしどろもどろになった

なにせ今ここには各ファミリアの団長

さらにその主神までもが一同に介している

バベルから滅多に姿を現さない、あの女神フレイヤまでもが参加しているのだ

先程までの醜態を思い出すと固まってしまふのは無理もない

「・・・すまないシヤクテイ、少し席を外してもかまわないかな？」

「問題ない、当面の問題や対処は今さっき話し終えたからな、今回の事件の影の功労者に何かあったのなら早く行ってやれ、たとえ何かあっても我々だけでもどうにかするさ・・・まあ都市最強のLv. 7のいるここに殴り込みを掛ける命知らずはいないだろうがな」

そう言つてチラリとオツタルに目線を向けるが当の本人は女神フレイヤのそばに直立不動

女神フレイヤもどこ吹く風・・・というかあきらかに退屈そうにしている

だが、ここに何かあればそれはすなわち女神フレイヤへの危険でもある

なにも言わずとも彼は己が女神のために動いてくれるだろう

「ふふ、確かにそうだね・・・それじゃあラウル、事情を聞きながら移動しようか、ロキ

は——」

「うちも、もちろん行くでー？ 当たったり前やろー！」

「はは、だよね」

駄々をこねる子供のように言ってくるロキに苦笑しつつ共に天幕を出て行った

・ ・ ・ ・ ・

道中でラウルから事情を聞いてからは急いでダンジョンの入り口に向かう

そして長い螺旋階段を降りて目的地に到着した

そこで目に入るのは大勢の負傷者とそれを看護する救命士達

彼はその最奥に居た

全身を自身の血なのかそれともモンスターなのかわからないほどに真っ赤に染め

左腕を失ってしまったカイトの姿があった。

そばには既に僕たちを除いたロキ・ファミリアの主要メンバーがそろっていた
全員が心配そうにカイトを看着いる

「……カイト大丈夫かい？」

「ん……ああ……フィンか……」

声を掛けるが、カイトの顔色は良くない

怪我の原因ではあるだろうがそれだけではないのだろう、恐らく精神的なもの
腕を失ったシヨツクか

それとも

それ以外か

「……とりあえず、それなりに集まったみたいだし、アイズと分かれた後にダンジョン
で何が起こったか聞いてもいいかい？」

「ああ、まあ大変だったよ……色々と——」

.

「. ふー. これは. また」

「まあ、その後に意識を無くして気付けば18階層のリヴィラの街でな、フィルヴィスが18階層まで来ていたギルドの救援隊を連れてきてくれなきや今頃モンスターのお腹の中だ、まあその中に椿がいたおかげで地上まで戻ってくるのは楽だったな. まああいつにはちよつとだけ俺の秘密がばれたがな」

「まさか、スキルのことを話したのかい？」

「少しだけな. 安心しろ、椿に教えたのは全部じゃない、一つだけだ」

ちなみに今カイトの口から出た椿という名前はカイトと専属契約している上級鍛冶師の名前だ

世界にその名を轟かせる武器・防具メーカーの鍛冶ファミリア

そのヘファイストス・ファミリア次期団長筆頭候補

椿・コルブランド

隻眼のハーフトワーフの少女でガレスとカイトの二人と契約している

今回迅速に救助が出来たのも彼女の力に寄る所が大きいと聞いている

それにしても

言葉が出ないとはこのことだ

カイトから聞いた話はむちやくちやだ

(双頭竜とヴィレッタの単独撃破、そしてアストレア・ファミリアを壊滅させるほどの異常種個体を犠牲を出しつつも討伐・・・か・・・今回地上の方でヴィレッタの姿を見かけなかったのはダンジョンの方にいたからか・・・あいかかわらずともないなカイトは・・・)

常識と己の耳を疑う

周りの表情も僕の心中と似たり寄ったりだ

僕はなんとか団長としての矜持もあるので気合で冷静を装ってはいるが、それもいつ剥げてしまうかわからない

そんな中で例外があるとすればアイズと・・・ラウルくらいだ

二人とも驚くには驚いてはいるが、絶句して空気を求める魚類のように口をパクパク動かしている他の者達と違い

「へー・・・すげーなー・・・」程度にしか驚いていない

カイトと最も行動を共にしていたのはこの二人なのだが、この二年間で一体何があったというのか

むしろ何があったらその程度の驚きで済むようになるのだろうか

というかラウル、君は先ほどまでかなりうろたえまくっていたはずなのに、何でそんなに落ち着いているんだい？

今の話よりカイトが左腕を失った話のほうが君にとってはインパクトがあつたということなのか

もしかしたら聞きそびれているだけで三人でとんでもない冒険を経験していたりす

るのだろうか

(いや、今はそんなことより彼を労う方が先だな・・・)

彼に声を掛けようとした矢先

「・・・すまない、フィン」

急な謝罪に意表を突かれた

「んー・・・それは何に對する謝罪だい？」

パツと思いつくのは待機命令を無視してアイズと共に下層に向かったことだ、結果オーライとなったがそれでも命令無視はそれなりの罰があるだろう

だがカイトからはそれ以外の答えが返ってきた

「命令無視と救助の失敗だ」

「・・・」

パーン

僕はあえて怪我人であるカイトの頬をここにいる全ての者達に見えるように張った
それはこの場では決して口にはいけない答えだったからだ

「どうして僕に叩かれたか・・・わかるかな？」

「・・・命令無視と救助の」

「違う」

今、カイトの周りにはこのオラリオでも名の売れている者達が一同に終結している、そのため看護する者や救助された者達、そして救助された者達の主神や同じ眷属かぞくの者達の視線が自然と集まっていた

そんな中で今回の最大の功労者であるカイトの口から発せられた「救助の失敗」
これはダメだ

その言葉は今回助かった被救助者達の命を軽んじる言葉だ

「カイト、周りをもっとよく見ろ」

そう言つてカイトに改めて周りに目を向けさせる

「怪我人だらけだな・・・俺がもつと——」

「そうだ、怪我人だらけだ、でも——君が救つた命だ」

「っ!!」

「・・・その君、そう、腕を吊つた君だ」

僕はこちらのことを遠巻きに見ている、おそらく腕を折つたのであろう一人の冒険者に声をかける

「は、はい!!な、なんででしょうか!?!」

「今から言う質問に正直に答えてくれ、たとえその答えが酷い侮辱的なものでもかまわない、ただ正直に答えてくれるだけでいい」

「え?・・・う・・・は、はい・・・」

「・・・カイトが君たちの救援に向かったのは無駄だったかい?」

「ええ!?!そ、そんなわけ——」

「そんなわけがあるか!!」

声を上げたのは一人の女性エルフ

「カイトが居なければここにいる我々全員が27階層の時点で全滅している!彼のおかげで今生きていられる!感謝はすれど彼を非難する者も侮辱する者もここには誰一人としていない!!もし居るなら私がそいつを切り殺してやる!!」

「フィルヴィス・・・」

涙を我慢するかのような叫びにカイトがエルフの女性の名前をつぶやいていた
(もしかして、助けに言った仲間って彼女のことかな?)

そんな彼女の魂からの叫びに呼応するかのように他の者達も次々と声を上げる

「『ジョーカー切札』、お前さんがそんな顔をすんじゃねえ!」「お前さんがそれならほとんど何も出来なかつた俺はどうなるんだ!誇れよ!!」「お前のおかげで俺と仲間は生きてんだ!!」「そうだぜ!失敗なんかじゃねえ!!」「あなたのおかげでこの程度で済んだ・・・感謝し

かない」「あんたに助けられた恩は一生忘れない」「殺された奴らだつて覚悟の上で潜つてんだ、気にすんな!」「誰が何と言おうと俺はてめえに感謝すんぜ『ジョーカー切札!!』」

皆が口々に彼への感謝を述べる、その中には主神達による言葉も混ざっている

「お前ら……」

(そういえば、カイトの周りでもここまで明確に死者が出たのは初めてか……)

今までカイトは様々な案件に関わらせてきたが、それをすべてうまく解決してきた死者が出たとしてもそれはカイトではどうしようもない状況やもしくはその事後のことだった

そのため今回が初めての挫折となるのだろう

おそらくそれがカイトへの精神的なショックにも繋がっている

まあ、初めての挫折がこれだけのインパクトのある事件だとその衝撃もすさまじかったのだろう

なまじカイトが優秀すぎたことによる弊害だった

「カイト……確かに救えなかつた者達もいるだろう……だがな、こうして救えた命もあるんだ、それをまずは誇れ、お前はまだまだ若いんだ、何もかもを完璧にできなくて当然なんだ、だからこれを糧に前に進むんだ、次はもつと犠牲を少なく、そしてやがてゼロにするためにな」

めずらしくリヴェリアがカイトの頭を撫でながら優しい言葉を紡いでいた

「ああ．．．そうだな．．．そうだよな、救えた．．．救えた命だつてあるんだよな．．．」
下を向いたカイトから震えながらも搾り出すような声が返ってくる

「失つたものを嘆くよりも、今だけは救えた命を喜ぶほうが建設的じやろうが馬鹿者」

「ああ．．．その通りだ．．．おっさんの言うとおり馬鹿だなあ俺は．．．」

ガレスもぶつきらぼうながらも激を飛ばしてくる

「————つふー．．．下ばっか見てちゃ気も滅入るわなあ．．．うっし!!」

下を向いていたカイトが天を仰ぎ見るように顔を上げた

そう言つて笑うカイトの目からは止まることなく涙が溢れていた

けどそれは決して悲しみだけではなく、喜びも含まれた憂いの涙だ

前に進もうと決意するために流れる涙だ

きつと彼はこのことも糧としてもつと強くなれるだろう

どうやら狙い通り、皆の鼓舞のおかげでカイトの精神も持ち直したようだ

そんなカイトの横にアイズが近づくとカイトに向かって拳を突き出した．．．何をしているのか僕にもわからない

「んー」

「．．．お嬢？」

無意識にだろうかカイトも同じように拳を突き出し軽く合わせる

「カイト……おつかれさん」

「っ!!……ああ、お疲れさんだ、お嬢も無事でよかったよ」

「ん!!」

何かわからないが二人にしかわからない何かなのだろう、二人ともとても晴れやかな顔をしていた

「はは、女の子つてのは成長が早いなあ、ラウルもそう思わねえ?」

「カイトはおっさん臭いっすねー……」

「悪かったなじじ臭くて、あれだ、ガレスのおっさん臭が移ったんだよ」

「移るかそんなもん!少し元気になったとたんこれかお前は!」

「まあまあ、ガレス、今日は勘弁してあげようよ……カイト、色々気になることあるんだろうけど今はゆっくり休むんだ……いいね?」

実は今回の騒動でほぼ中心に居た人物が地上に帰還した後主神と共に行方不明になっている

カイトとしても気になるそうだが今は彼の身体を縄で縛ってでも休めることが何よりも優先される

「・・・ああ、悔しいがそうさせてもらう、それに——ぶたれた頬も痛むしなフィン？」

「ふふすまないね、でもまた僕の名前が変な語尾みたいになってるよ」

「ふ、すまんすまんふいん」

ちよつとイラツときた、僕は救助のことはまだしも、待機命令違反を許したわけではない

「よし、それなら今すぐ寝かしつけてあげよう、ついでに命令違反の罰もおまけだ」

「ええ!?ちよつ、ま、あぶえ!」

大丈夫大丈夫、加減はわかっている

・・・・・・ギリギリのね、ふふふ。

この後、カイトはディアンケヒト・ファミリアの療養所にとっても大人しく、それこそ死体のように大人しい状態で運び込まれた

ただし僕はアミットに普通に怒られた

嫁と舎弟と時々妹

36：帰郷×過剰



《side：ゼウス》

×9年○月△日

今日もいつも通りベルと共に畑を耕し終わり

(というかほとんどベルが高速でやった)

さて、ベルと茶でも飲むかと準備していると

コンコン

と家のドアをノックする音がした。

はて、近所の連中ならノックもなしにドアを開けてくるのだが誰だろうか
ヘルメスのアホが来るにしては早すぎるし・・・誰じゃ？

茶の準備をしているのでベルに開けさせると

「よっすー！じいちゃん！ベル！ちよつとの間だけど帰ってきたぜ!!」

なんか孫がサププライズで帰ってきた

「兄さアアアアアああああああああああああん!!」

ベルが驚きと喜びの余りにカイトに抱きついた

だが、そこで儂もベルも気付く

腕 が ない

孫の左腕がなくなっていた

×9年○月あの日

昨夜、とりあえず再会をお互い喜び夕餉を済ました後

カイトから腕を失ってしまうことになった経緯について聞いた

女を守るために腕を犠牲にしたのだ、と

全てを守ることは叶わなかったが、それでも救えた命があったと

とても真つ直ぐな瞳を宿して言ってきた

儂は褒めた

さすがは我が孫じゃ、と

女子おなごのために腕を犠牲にできる男子おのこがこの世界にどれだけの数いるだろうか

少なくとも儂の孫は仲間のために腕も命も張って闘える勇敢な男になっておった

なんと誇らしいことか

カイトが腕を失ってしまったのは悲しい、見た瞬間に目の前が真つ暗になるほど

じゃった

だがそれでも何度でも言おう

何度でも褒めよう

立派になったと

話している内にカイトは泣きながら笑っておった

気づけば儂も泣いておった

ああ、カイトは立派な一人の男になったのじゃなあ・・・

孫が完全に独り立ちできたことを実感した

一抹の寂しさを感じるが今日は秘蔵の酒を出して共にグラスを打ち鳴らそう

きつと話すことはもつとあるはずなのだから

×9年〇月あのととき日

マジか

・・・カイトはつい最近L.V. 4になつたらしい

マジか

昨夜、孫と初めて酒を飲んだ際に聞いたことが今でも信じられん
だが、それが嘘ではないことが儂にはわかつてしまう
一応、儂つてば神じゃし

いや、儂の孫すげえわ

カイトが旅立った当初はきつとオラリオでも活躍するじやろうなあ、

するといいなあ〜くらいの感覚で送り出したんじゃけど農の予想以上というか予想異常な感じで大活躍していた

っていうかカイトの煎れてくれる茶がめっちゃ美味い

何でも、将来、冒険者を引退してアスファイと一緒になれたら店を出したいそうじゃそのためにも結構前から料理や経営等に関して勉強中らしい

ただ・・・

・・・料理や経営に関して教えてくれる者の名が『ミア・グランド』と言うらしい

・・・え？

マジで？

もしかして、あの『小巨人』^{デミ・ユミル}？

フレイヤのところでスコップ振り回してたあの、おつかさん？

・・・マジなのか

すげえな農の孫。

×9年○月あの場所日

今日はカイトとベルが久方ぶりということを手合わせとって模擬戦の様な事をしていた

まあ、当たり前だがカイトの圧勝じゃった

片腕しかないとはいえ、それでもLv. 4

『^フア^ル神の恩恵』を刻んでいないベルでは手も足も・・・

いや・・・結構食らいついてなかったか？

いや、気のせいじゃろ・・・気のせいだよね？

・・・まあええか

模擬戦の後にはカイトがベルに色々と教えておった

「こう、オーラをな、一部以外を閉じてギユギューっとする感じで」

「ギューっ？」

「いやいや、ギュギュギューツって感じた」

「んー・・・ギュギュギューツ？・・・あ、できた」

「天才じゃあああー！？」

・・・あれは何を教えとるんじゃ？

何故かカイトの口調が儂みたいになっておった。

その後、カイトとベルが軽い運動をしてくると言つて大猪を複数狩つてきた

「殺りすぎちゃった☆」

「ちやった☆」

テハ☆・・・じゃないわい

どうすんじやこの肉の山は・・・

食べきれんので村を挙げてのぼたん鍋祭りを開催した

村全員がそれぞれ育てている作物を持ち寄つての鍋は料理人としても修行をしてい

るカイトの味付けもあつてか大変美味じゃった

「はい、兄さんあ〜ん」

「あ〜ん、・・・うむうむ・・・ベルのおかげで美味しい飯がさらに美味しい！」

「はは、兄さんの味付けのおかげだと思ふよ？」

片腕で食べにくそうにしているカイトにベルが適宜看護するかのように食べさせてやっていた

相も変わらず仲がええのう

ん？

そういえば仲が良いで思い出したのだがアスファイちゃんはどうしたんじや？

「あー・・・アスファイならオラリオで俺の義腕を作ってるよ、何でも作るのに時間が結構かかるらしくて『どうせならたまには帰郷でもしたらどうですか？』って言われてさ、そりやちようどいいやつて思つて帰つてきたんだよ」

ちようどいい？

「え？ あ、ほら片腕だとダンジョンに潜るのは危ないじゃん？」

・・・嘘じやな

全てが嘘ではないが何か隠しておるのう

×9年○月君に日

カイトから本当のことを聞き出した

何でも闇派閥イウイルスに手痛いダメージを与えたが、負傷したということで闇派閥イウイルスに狙われや

すくなつたため、義腕が出来るまでは姿を隠す方が都合がよかつたそうだ

ギルドにはロキからの説明でカイトは都市内のどこかに身を隠していることになつて
いるらしい

なるほどのう

確かにそれなら確かにこの村に帰ってくるのはちようどええじやろな

なにせこの村、ほとんどの地図にも載っていないし

それにしてもよく都市の警備網を抜けられたのう？

・ ・ ・ ・

・ ・ ・ なにい?!

アスファイから透明になれる魔道具マジックアイテムを借りたじゃとおおおお!?

なんじゃそれ儂も欲しい!!

それがあれば女湯も覗き放題じゃないか!?

ああ、当時それがあればあの殺意満点の警戒網を出し抜いて悠々と覗けたものを・ ・ ・

ぐぬぬぬう・ ・ ・

あ・ ・ ・

ちよ、やめて、カイト

そんな目で見んといて、儂が悪かったから

・ ・ ・ でも、ちよこーつとだけ貸してくれたりとか

「ダメ」

ダメじゃった

いや、そんな楽な方法で覗いても達成感など得られまい
苦勞して覗くからこそその 男の浪漫 なんじゃ!!

×9年○月出会えた日

連日爆弾発言をかましてくれる我が孫
今日もスパイシーな爆弾を炸裂させおった

何でも未来嫁がアスフィを含めて3人になったらしい

しかも2人目と3人目を連れてきたのがアスフィとのこと

ナンダソレ

え?

なんなのそれ

嫁の方から他の女性を連れてくんの？

なにそれ

羨ましすぎるんですけど

儂とかなあ!!

浮気しただけで頭を斧でかち割られそうになつたり!!

貼り付けにされて弓の的にされたり!!

水車にくくりつけられて水責めされたりとかあああああ!!

・・・どうやったら嫁公認で女ができんねん

・・・なに？ 嫁が増えたのは不本意？

もしかして新しい嫁がすごい不細工とか・・・え、めつちや美人でかわいい？

ちよつと孫に殺意が湧いてきたぞ☆

「・・・まあ、でもさ」

ん？

「俺にそんだけの甲斐性があるかわからんけど」

そう言う孫の顔はあきらめた様な顔だが

「娶ったからには精一杯愛しまくって」

その苦勞を樂しむかのように

「責任は取るさ」

どこかうれしそうに笑いながら言ってきた

・・・ふーむ、男としての器は完全に儂の負けじやなあこれ

帰ってきた孫はまじで成長しまくってた。

そして月日は瞬く間に流れた。

何でも、もうそろそろ義腕が完成するそうなので呼びに来たそうだ

「そんじゃまあ、オラリオに帰りますかね」

その言葉を聞いて少し寂しくなる

兄さんにとってこの村は故郷に違いない

だけど

今の兄さんにとってはオラリオも故郷となつている

『^{ファ}神の恩恵^{ルナ}』を刻むというのは家族になるということと同義だとヘルメス様から聞いている

兄さんと同じ『^{ファ}神の恩恵^{ルナ}』を刻んだ家族

その人達に少し嫉妬してしまう

そんな事を考えていると別れるのを嫌がっていると思つたのか（実際にまた会えなくなるのは寂しい）

兄さんが僕の頭に軽く手を乗せて頭の毛がクシャクシャになるような手つきで撫でながら言ってきた

「ベル、じいさんがその気になつたらお前もオラリオに来てみると良い、あー・・・ただ

し来るときは手紙をくれ、まだオラリオは物騒だからな、危なくないように迎えに行くからさ」

行くことがあるのだろうか

確かに行つてみたい気持ちはすごくある

でも、それと同時に恐怖感も生まれた

この一ヶ月間、結局僕は片腕というハンデの中、兄さんに一撃も入れることが出来なかつた

そんな兄さんが腕を失うようなことが起こるオラリオの魔境つぶりに腰が引けてしまった

思つたことをそのまま兄さんに伝えると

「ぶつ、あつはつははははは!!」

兄さんの横で聞いていたヘルメス様が大笑いしていた

「大丈夫!そこは心配しなくてもいいぜベル、カイトのトラブル体質は折り紙付きさ!

人が一生お目にかかれるか遭遇するかの事態に何故か頻繁に巻き込まれてるだけだからね!」

「うるせえぞーアホメス」

え？

兄さん大丈夫なのそれ

「なーに、多少の障害は俺にとつちやちようどいいんよ、それとヘルメスの言う通り、もしベルがオラリオに来てそんなことは早々起こらないさ」

そ、そうなんだ　よかつたろ．．．じゃあ、ちよつとだけ前向きに考えておこうかな
「おう、そうしろそうしろ！そうすりやじいちゃんも気が変わるかもしれないしな！」

．．．．

そこからは多少の雑談を交えてから兄さんはヘルメス様を荷物のように肩に担いでオラリオに発つていった

あまりの荷物扱いつぶりに見送りに来た僕とおじいちゃんもさすがにヘルメス様を

哀れんだ

次会えるのいつになるのだろうか？

兄さんが見えるか見えないかの距離までになったとき

「ベル・・・お主もオラリオに行きたいなら行ってもええんじやぞ？」

急にじいちゃんが僕に言ってきた

ううん、僕はおじいちゃんとのんびりするの嫌いじゃないし

おじいちゃんを一人残しては行かないよ

「・・・そうか」

ヤハリアノサクセンデイクシカナイカノ

最後の方は上手く聞き取れなかった

おじいちゃんは改めて何かを決意したかのような表情で家の中に入っていった。

さて

運動がてらに畑を耕すとしましょう！

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

某日未明

とある場所とある人物達が非つ常くくくくハイテンションになっていた
「にひひひひ、じゃあここをこうして！」

「いいですねえ！、ついでにこんな機能とか」

「うふふふふ、いつそのことこんな機能も・・・」

「それいいねえ!!」

「アハハハハハハハハハハ!!」

異様なテンションになっている者達がいじくつているのは銀の色をした義腕のパ
ツ

そして周りに散乱するのは中身が空っぽの酒瓶が数本

意味もなく笑う者たちの手にはまだ酒瓶があり、それをそのままグビグビと飲んでい
る

そんな者達を影から見守るのは全身を黒いローブで覆った人物

神ウラノスの腹心、フェルズである。

(・・・どうしてこうなった)

『^{ジョーカー}切札』の腕を最高に仕上げるためにこの者達は連日連夜、素材を仲間や部下に集めさ

せ、手に入らない素材は巨額の金貨で購入しさらにそれを分解・研究

もはや何日徹夜したのかわからない程、義腕作りに没頭していた。

そんな者達の情熱にあてられ、かつて「賢者」と呼ばれてもいたフェルズは影ながら
手伝うことにした

時にはこっそりと自分のアイデアを凶面に混ぜてみたり

時には手に入らない素材を破格のクエストの報酬として用意したり

そんな影からの援助の甲斐もあつて、できたのは現在出来る最高の出来の義腕・・・
だった

(何故こんなことに・・・あ、ちよ、せつかく錬金できた白銀の板金にい変な物が混ざあ
!・・・ああ・・・)

フェルズが犯した過ちはただ一つ

何日も徹夜を続ける彼女たちの身を労うために最高級酒「ソーマ」と呼ばれる酒を複
数差し入れという命題で贈ったことだろう

疲労困憊に加え、頭も曇りまくっていた彼女たちはこれを飲むやいなやこれまでのス
トレスと疲労からか

ひやつはあーーーーー!!な状態になってしまった

正常な意識は楽しい別世界へとフアラウエイ!!

その代わりに芽生えたのは愉快型のアツパラパーでアハハハな精神状態

そんな精神状態の彼女たちが偶々思いついただけのアイデアや素材をせっかく創ったパーツに組み合わせ混ぜ込んでいく

なまじ、一流の腕の者達であるためにそれが出来てしまうのが事態を悪化させていた常識という概念を脱ぎ捨てた一流達が究極の魔改造を行っていく

「おい！ここに火炎鋇石とか仕組んでみたらどうじゃあ!？」

「いいですねえ!! ついでに振動でできるようにしてみますか! アハハハハハ!!」

「キヤー！ナニに使うんですかそれ！ー！ー!!」

「・・・ナニですよ」

「・・・ナニですか」

「・・・キヤー！ー！ー！ー!!」

「キヤハハハハハハ!!」

もはや深夜の女子会のノリである

(ああせつかく私も手伝ったのに・・・ちよ、今度は生体部分に何を!? それはちよつと、いやかなり洒落になら、あああああああ!?)

本来なら素材一つ、仕組み一つ使うにしても、入念な実験と検証がいるにも関わらず

頭がお花畑のマッド共によつて次々とめちやくちやな魔改造が加速していった。

「アハハハハハハハハハハハハハハ!!」

(ああ・・・どうして・・・どうして私は酒など差し入れたのだ・・・あああやめてくれえええええ、そこは私がアイデアを出した部ぶ・・・ああああああああ!!?)

「あひやひやひやひや!なんか生えたああああ!!?」

「ぶっはっははっはあひやひやナニソレ!?おもしろおおお!!」

「もっさりモツサリ!!」

「あひやひやひやひやきやつきや!!」

真の酔っ払いにブレーキなど存在しない、というか使う気がない

「(こことこ)繋げてみましょおおお!!」

「いいねひやひやあはははははは」

(もう止めてくれええええええ!!?)

魔改造は止まらない

・ ・ ・ ・ ・

フェルズは後に語る

あのとき——もしも私に胃があつたなら極大の穴が空いていた、と

最高の作品が別の何かに変えられていく

そしてそれを見ていることしかできないという絶望は「賢者の石」を割られたときに
勝るとも劣らないものだったと

だが、

まさか、そんなものが

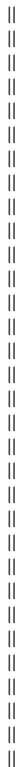
現代どころではない

過去・現在・未来において史上最高のものになるとは夢にも思わなかつたと

「はあ・・・メモしとけばよかった」

息の出来ぬはずの賢者がため息を付いていた。

37：復活×銀腕



27階層の悪夢と呼ばれることになった事件から一週間

未だに精神力が回復しきらないことに加え怪我も酷いためディアンケヒト・ファミリアの療養所に入院していた

ただ、以前と違い今回の俺は意識がしっかりしているため俺は結構暇を持て余していた

なにせこの世界、スマホもなければ漫画もない

本ならあるにはあるが専門書のような小難しいことしか書いていない本がほとんどだ

そして、そういった本は既に大抵読んでしまっている

(まあ、『絶』の練習でもしてりやいいかとも思ったが・・・)

《※ちなみに『絶』は気配を消すだけでなく治癒力を高める効果があるので怪我を早く治したい場合には最適な修行でもある》

あまりに暇すぎるので『絶』ばかりやっていたが、それにも飽きたので遊び心で『燃え尽きたよ・・・真つ白に』と迫真の演技で「明日のジョー」ごっこをしつつ『絶』をやっていたら

「きやあああああああ!?死んでるうううううううううううううううううううううううう!!??」

「え、ちょ・・・ちが・・・」

昼食をもってきた看護師に死んだと勘違いされて大騒ぎになった

「じじじじじ人口!人工呼吸うううううううううううううううううううう!!急いで早く!!カイトさん死なないでううう!!」

「いや、生きてる!!生きてるから!」

その際にアミッドが人工呼吸をしようとしてきたのだが、この時はかなり真面目モードで悪意もなく切羽詰ったような表情でやろうとしてきたためこっちの方が戸惑ったくらいだ

「二度としないで下さい!!」プンスカ!

すぐに事情を説明すると涙ながらに紛らわしいことをするなど怒られた

まあ、普通にこっちが悪いので謝った

ただ、その後

「では、念のための人工呼吸を——アダダダダダ!？」

「念のための人工呼吸なんてねーよ!!」 ミシミシ

・・・これは悪意しかなかったのでアイアンクローで黙らせた

ちなみにアミッドに関しての奇行はまだある

昨日も

(左腕がないせいで不便極まりないな、小便一つ済ますのも一苦労だ)

そんなことを男子トイレで思っていたら

「手伝いましょうか？」

とか、アミッドが言ってきた

繰り返すが、女人禁制の男子トイレでだ

もう一度言おう、ここは聖域である男子トイレだ!

「なにしとんじやあああああ!？」

「ほほう、この二年間でこっちのサイズのレベルもランクアツぷベシ!？」

「くたばれえええええその記憶も消えろおおおおお!!」

「アババババババ!？」

女だろうと容赦なく脳天を連打で殴りつけた

・・・男女平等って素晴らしい考えだよね！

話が逸れた・・・っていうかこの話は忘れない

まあ俺の左腕に関してなんだが

一応ファイルヴィスが俺の肘から先はきちんと地上まで持ち帰ってくれた
だが、

肝心の左腕の接合部分である本体の肘から上が闘いの最中にグツチャグチャになつたせいでこのままくっ付けたら左右で腕の長さが違う面白人間になってしまう

そんなわけで現在、接合のための施術は延長してある

ちなみに、切られた腕は腐らないように処置して冷凍保存してあるらしい
で、だ

今日は俺の腕が治るのか治らないのかの割と真面目なお話があるとのことだ
結構大事な話なので関係者が集まっているのだが

フィンやリヴェリア、ガレスのおっさんにロキ、それにアスフィ、ついでにヘルメスマあ、この面子がいるのはわかる

いやヘルメスは超いらん、帰れ

問題は何故か、鍛冶の女神へファイストスに俺とガレスのおっさんの専属契約鍛冶師の「椿」^{つばき}まで居ることだ

「・・・椿」

「ん、どうした？」

「いや・・・お前さん何でいんの？」

「なんだ、命の恩人である手前がいては悪いのか？」

「いや、悪くねえけどさ・・・普通に疑問なんだよ、命の恩人つつつてもわざわざ来るよ
うなことでもないだろう」

ギルドの救援隊の一人として意識を失った俺を担いで地上まで運んでくれたのがこの椿だ

現在はLv. 4でLv. 5へのランクアップは間近、さらにへファイストス・ファミリアの次期団長候補筆頭でもある

さらに言えば何を隠そう、俺がLv. 1の頃に使っていた武器型の籠手は元々はガレスのおっさん用に椿がお試しに打ったものだそうだ

だが、ガレスのおっさん的にはあまり合わなかったらしくそのまま武器倉庫にお蔵入

り
それを偶々、俺が見つげ出してそのまま使っていたというわけだ

知らずに使っていた武器の製作者と後に専属契約を結ぶことになるとは

いやはや人の縁とはわからないものだ

これも俺の妙なアビリティ『奇運』のせいなんかね？

そんなことを思っていると

「ま、疑問に思うのも当然よね、別に口止めもされていないから言うけど、私たちは呼ばれたから来ただけよ、『重要な話があるから』ってね？」

隻眼の女神、ヘファイストスがあっけらかんと言ってきた

「ヘファイストス様も呼ばれた？」

「ええ」

「ロキに？」

「いえ、私と椿を呼んだのは『戦場の聖女』ディア・セイントよ」

「え……アミッドが？」

治癒師であるアミッドが鍛冶師を呼ぶ？

意味が分からん

理由がわからず疑問に思っているとヘルメスが会話に割り込んできた

「ちなみに、元々来るつもりではあったんだけど、俺とアスファイも彼女から声を掛けられた、この日この時刻に必ず来るようになってね」

「はあ、嘘だろ!？」

アミッドがアスファイを呼ぶ？

ナニソレコワイ

どういうことかと、アスファイに目を向けるが何故かアスファイは黙したままだ

え、マジでどうということ？

知る人は知っている

先程の話からもわかるようにアミッドはアスファイから俺を奪うために猛烈なアプローチをあの手この手でかけてきている

そのせいで二人の仲はともではないが良好とはほど遠い

一人のヒロインを巡って争う二人（ガチファイト）

やめてえ！私のために争わないでえ！という状況だ
ただしヒロインは男である俺。

女の子つてもつとフワフワでポワポワなイメージがあっただけどなあ
・・・もつと女の子に夢をみていたかったよ

話を戻そう

そんなアミツドが俺についての話でわざわざアスファイに声を掛ける？

大事件ですよ奥さん！

俺史上最大の事件の香りに戦慄していると椿が見かねて口を出してきた

「まあ、大したことではないぞ？ 手前と『全能者』ベルセウスそれに『戦場の聖女』ディア・セイントの三人でお主

が地上に運び込まれた後に少し話し合う機会があつてな」

「話し合う？」

疑問を感じていると椿が俺の左腕を指差してきた

「お主の腕に関してだ」

場に不思議と沈黙が降り、アスファイが痛々しい表情になっていることに気づく

「……ああ、なるほど……そっか……そういうことか」

それで合点がいった

その時点で治癒士のアミッドが鍛治氏の椿に加えて魔道具製作者のアスファイと話し合わなければならない事態

つまり、その時点で俺の腕が治らないことは決定的だったってことだ

ここに椿が居るのは義腕の制作に関してこいつが関わるからだろう

確かに戦闘にも使える義腕を造るとするなら、椿も交えて話さなきゃいけないわな
そんな風に俺が一人で納得していると

「衰弱している患者の精神状態を気遣うのも治療する際には重要な処置ですので」

俺の入院している部屋のドアを開けてペコリと頭を下げてからアミッドが入ってきた

た

「そいつはどーも、でもよー、別にあのとき言ってくれても別にかまわなかったぞ？」
「あのときのカイトさんは精神的にも不安定に見えたので・・・あれ以上精神的ショックを与えるのは身体にも影響が出ると判断しました」

「そーでも・・・あつたな」

そういえば確かにフィン達に活を入れられるまでネガティブ思考になってた気がする・・・っていうかなってたわ

そのせいでフィンにビンタされたんだった

「・・・皆様との話し合い前に念のため熱と脈を計ります、腕を」

「あーよ」

テキパキと慣れた手つきで脈や熱を測っていく

俺もこのときばかりは素直にアミツドの言うことに従う

「ま、その気遣いには感謝しとくわ・・・っーかさ、できれば普段からそんな感じに肅々とした態度でいてほしいんだが」

ちなみに先ほどの話からもわかるように治癒士モードのアミツドは割と真面目モードが多い、こいつとは色々あるが治療という行為に関してだけは真摯に行うのでそこだけは信頼している

ただ、そうでない場合は

「それは今すぐに獣の様に押し倒され襲われたということでしょうか？ハアハア」

こんな感じ

「ちげえよ！俺の言葉のどこからそんな意味を読み取れるんだよ!?!ちよつ、息を荒げな！そのワキワキ動かす手つきをヤメロオ!?!」

真面目モードが終わるのはえーよ．．．もうちよい頑張れよ、ちよとでも見直した俺が馬鹿みたいじゃねーか

「こほん．．．アミツド、いい加減にしなさい、話を始めますよ」

「むう．．．わかってますよ」

アミツドを止めたのは俺の唯一神にして女神で恋人のアスフィだ

だが

(え．．．なにこれ．．．え、ウソでしょ？アミツドがアスフィの言うことを大人しく聞いた？．．．これ．．．現実か？夢なんじゃ．．．アテテテテ)

目の前の現実には俺は心の底からビビリ、夢かと思いい頬をつねるが普通に痛い．．．つ

まりは目の前の光景は現実だ

「え、なんやこれ？・・・うちらが知らん間に何かあったんか？いつの間に2人とも仲良うなつたんや？」

あのロキですら口を開けて驚き、椿以外の全員が似たような感じになっている
言うことを素直に聞いただけと侮るなかれ、

口を利けばお互いに罵詈雑言

目を合わせれば互いに唾を吐き

肩がぶつかれば無制限フアイト

そのくらい仲の悪かった二人なのだ

犬猿の仲などいう表現すら生ぬるい、そんな関係だったのだ

どちらかが相手の言葉に従うとか有り得ないんですけど・・・俺が知らない間に何が
あったんだ

全く把握しきれていない状況が色んな意味で怖くて仕方がない

そんな風に微妙な沈黙を破ったのはアミッドだった

「では、いつまでもだらけるのも時間の無駄ですので、僭越ではありますが私の方から説

明をさせていただきます・・・既にわかっているとありますが率直に申しましてカイトさん、あなたの腕を接合することは不可能です」

フリーズしかけた頭に告げられる話の衝撃で頭が切り替わる

まあ、わかつてはいても改めて言われるとちよつとショックだな

「一応、細かい理由とか聞いても良いかい？」

フィンが口を挟んできた

「はい、簡単に言いますと、カイトさんの切り落とされた腕の方は保存状態もよかつたので問題ありません、問題はカイトさんの身体の方の腕の接合部分です」

「こつちの方？」

「そうです、カイトさんの腕に刻まれた傷が酷すぎて万能薬や回復薬を使用してしまうと傷の接合よりも傷口を塞ぐことを優先してしまうというのが理由です、これでは接合などできません。」

（あちやー・・・肉盾として使ったのはやっぱまずかつたか）

だが、そうしなければ死んでいたので反省はしても後悔はない

仕方がないかとあきらめていると

「はあく・・・万能薬なのに万能じゃないとはこれいかに」

椅子の上で器用に胡座をかけた口キがぼやいていた

「ロキ、いくら万能といっても薬は薬だ、限界はあるに決まっている」
呆れたようにリヴェリアが言う

「せやなー……でも天界に行けばマジモンの万能薬みたいなリングとかはあるんやで？
確か……デメテルが管理しとったな」

（ああ、あのボインボインか……）

脳裏に一部の身体的特徴がロキと比べるとかわいそうになってしまいうくらいのワールドクラスな女神が思い浮かんだ瞬間

（殺気!?!）

なんかアスフィとアミッドに加えロキからも一瞬だけ殺気が

……気のせいだよな？

いや、じいちゃんも女の勘は侮れないと常日頃から言っていた

今はボインを頭から消し去って話しに集中しよう

間。

「地上にないものも言っても仕方ないじゃろ」

ロキの話にガレスのおっさんまで呆れていた

そんな空気の中、アミッドがとんでもないことを口に出した

「・・・実を言えば今回の話で皆さんを集めた理由は神ロキが口にしたその、天界について関係があります」

その台詞にこの場に居る二柱の女神の表情が変わる

「へえ・・・どういふことかしら『戦場の聖女』？」

鍛冶の女神は興味を引かれたのかアミッドの言葉に反応した

「私は職業柄、数多くの冒険者の怪我を相手にしてきました、ですが・・・欠損だけは治しようがありません、私は常日頃からそれをどうにかできないかと思案していました」

それを語るアミッドの表情は己の無力を悔やむ表情だ

「そんな時に、ディアンケヒト様から天界でのお話を聞きました、かつて天界で生身と変わらぬ、もしくはそれ以上の義腕を創ったことがある——と」

それを聞いた神ヘファイストスの残った片目が見開き驚愕の表情に変わる、ロキの細目もフルオープンになって瞳孔が開いている、つていうかロキの目え怖っ!?

「それってまさか、あれを地上で再現しようの!?!」

「・・・まじかいな」

「私は本気です・・・そして、それを再現するために神ロキ、神ヘファイストス、そしてカイトさん自身の許可を取らなければならぬ案件があるのです」

「許可? いや、何かわからんけどすげえ義腕造つてくれるっていうのなら俺は別に全然かまわないし、むしろ有り難いんだが」

「・・・使用する素材に問題があります」

「素材?」

「はい、今回の義腕の素材には生体素材、つまり・・・カイトさん、あなたのちぎれた腕そのものを使用します」

「!?!」

もちろん驚いているのは俺だけではない

他のメンバーも顔を嫌悪や驚愕の入り交じった表情をしている

ただ、俺の場合はすぐに冷静になって思い返す

(確かに、俺の腕を素材にするっていう考えはなんか、こう、禁忌感はあるけど、どうせくっつきもしない腕を捨てるくらいなら俺の義腕に再利用するのは全然アリアリだな)

リサイクル精神は大事だ

さすがに自分の腕をリサイクルは想像もせんかったが、いやまてよ・・・そういえば

転生した俺って魂のリサイクルっていう究極のエコ的な存在？

そう考えれば腕のリサイクルぐらいどうってことないように思えてきた

「・・・俺は別にいいぞ、ロキも・・・って何その顔？」

ロキを見ると、そりやもうすごい顔をしていた

具体的に言うとか口がへの字

顔中にシワが寄り梅干でも食べたのかと言いたくなる顔だ

さらに、めつちや嫌だということが察せられる程に黒いオーラがみよんみよんとにじみ出てきている

「・・・なんか臭そうだし、ばつちい

「え、ロキ反対なのか・・・何で？」

マジでわからん

「アホか！自分とこの子の腕を素材にしますー言われてええ顔する親がおるわけないやろ!!」

(あー・・・まあ言われてみればそうだな)

『親の心子知らず』とはまさにこのことか

自分のことしか考えていなかったがロキはちららんぽらんに見えて身内には激甘だ

そんな女神が子供の腕を利用して何かしますと言われて、はいそうですか、となるわけがなかった

「でもよー、どうせ治らないなら新しい腕のために使うつてのは全然ありなのはわかっているだろ」

そう言うのとロキの隣のフィンが、やれやれといった風に言ってくる

「カイト、ロキも馬鹿じゃない、それはわかっている、でもね・・・頭ではわかっているけど心は納得しないっていうのはこの場合仕方がないんじゃないかな、僕でも君の腕を素材にするつて聞いて良い心地はしない」

フィンがアミッドに視線を向けるが当の本人は涼しげな表情で飄々としている

「反感は重々承知の上ですので」

「・・・なるほどね、それで椿だけじゃなくて私も呼んだのね」

素材の話聞いてからは沈黙を保っていたヘアリスト様が嘆息しつつ呆れた声で言う

まあ、主神に黙って人を素材にして義腕を造りましたー、と言ってしまうのはかなり問題有だろう

「主様よ、手前は了承している、後は主様の許可がもらえれば今すぐにも打てる」

「……いいでしょう、どちらにせよ鍛冶神の私の子に何かを打つなどは言えないしね、ただし助言はしないわよ、一応私も他のファミリアの子とはいってもそれを素材にするのには良い感情を持つてはいないんだから、それでもいいならかまわないわ」

「おお！さすが主様じゃ！話がわかる！」
どうやらあつちの方は大丈夫のようだ

「ディアンケヒト様の方は何て言ってるんだ？」

「人の怪我を癒やし、営みを守ることに繋がるのであればかまわない、と」

「……へえ」

本気で感心した

（偏屈に見えて結構良いこと言うな、あの老神）

さて、残るは

「……ロキ」

「ううう……」

こっただけだ

まだロキはぐずっていた

「はあく……片腕での冒険は大変だろうなあ」

「ぐう!? や、やったら普通の義腕を・・・」

「中途半端な義腕だと死んじやうかもなあ」

「ぬいう!?!」

ロキのくちがさらに急カーブを描くへの字になっていく

「・・・神ロキ」

そんな風にロキを追い込んでいる最中に割って入ってきたのはアスファイだった

「どうか許可を！この命に代えても彼の腕を以前と同じように、いえ、それ以上の物を創ってみせます、ですからどうかっ!!」

跪き頭を垂れ懇願するようにロキに嘆願していた

「私からもどうかお願いいたします、神ロキ」

「手前も同じ気持ちだ、これほどの使い手を死なすのは惜しい、ロキよ頼む」

そしてそれに並ぶように、アミッドと椿が膝をつき頭を垂れる

「~~~~~つ・・・はあ~~~~~・・・わかつた・・・許可したる
わ」

ロキもようやく折れてくれた

「ただ、そやな、一個だけ教えてくれ、アスフィとアミッド2人とも仲悪いんちゃうん？
なんかあったんか？なんやそれが引つかかって不安なんやけど」

ロキの疑問はもつともだし、それは俺も若干不安に思っていることだった
ただ、それも彼女達の言葉を聞いて杞憂に終わる

「心配ありません、私たちは」

「カイトさんを危機から守るためであれば」

「一つになれる」

「・・・らしいぞロキ？まあ、手前はここまでではないが近い思いは持っている」

真摯な目でロキを見つめ返す2人プラスαにようやくロキも納得できたかのような
表情になってくれた

「・・・さよか、なら・・・ええわ、とびきりのもんをこの子にあげたってくれ」

「御意」

「椿もよろしゅう頼むで」

「おう、任された！おもしろい素材も手に入ったのでな、大船に乗ったつもりで居るが良
い！！」

（・・・とりあえず、これで一件落着かな）

話がまとまり、部屋に弛緩した空気になる

「では、ここに宣言させていただきます、私、ディアアンケヒト・ファミア所属
『戦場の聖女』ディア・セイントアミッド・テアサナーレ、ヘルメス・ファミア所属『全能者』バルセウスアスファイ・
アル・アンドロメダ、そしてヘファイストス・ファミア所属の『単眼の巨師』キユク椿・コ
ルブランド、以上の三名により義腕——『銀の腕』アガートラムの制作に着工いた
します」

~~~~~

とりあえず、腕の制作は最低でも三ヶ月は掛かるらしいとのことだ

腕の回路や仕組みについてはアスファイ

生体部品についてはアミッド

腕そのものの金属関係やギミックについては椿

オラリオでも名の知れた者達による共同制作になるためかなりのものが出来上がり  
そうだ

完成が楽しみだなー、などと気楽に考えていると

「あ、そういえば言い忘れてました、カイト」

「んあ？何だ？」

「アミッドと椿をあなたの第二、第三の妻にすることになったのでよろしくお願いしま  
すね」

アスファイがふと何かを思い出したかのように、超が付く爆弾発言を放ってきた

「……………は？」

「え？」

「んん？」

「はい？」



場が凍った  
文字通り



本当に普段はこんな感じの子ではないのだ

この子がここまで酒に溺れてしまっている原因は一つ

ファイルヴィスが懸想している人物に新たな未来嫁が増えたという情報が入ったからだ

情報源は偶々部屋の外でその話を聞いた名も知らぬ神らしい

そいつはその話を面白おかしく他の神々に吹聴したそうだ

そうなればもはやその噂は止まらない

なにせ、今オラリオでは『ジョーカー切札』は時の人だ

本来なら全滅必至であった部隊の半数以上を己の腕を犠牲にしても救出したロキ・ファミリアの新たな英雄として囃し立てられている、その中には悪意もあつてかどうかはわからないが彼のことを『悲劇の英雄』等といって茶化す者もいる

そんな彼のスキヤンダル

相手はいずれも美女ばかり、しかも求めてきたのは彼からではなく女性の方からとき

そんな面白そうなネタに神々が食いつかないわけがなかった

三日と経たずにその話はオラリオ中に広まってしまった

そして当然ながらすぐにその話はフィルヴィスの知るところとなり

「……ソングソング……プハア………ヒック、でね……ん……聞いておりや  
れましゆか〜デロロレスさま……」

「ああ、うん、はい……聞いてる聞いてる……」

こうなった

できればこのような事態になる前にどうかしたかったが、私は可憐な乙女達とい  
ちャ……戯れ……情報交換に忙しく、その噂を耳にしたのは少し遅くなってしまっ  
た

噂を聞いた私はすぐにフィルヴィスのことを心配して本拠ホームに帰ったのだが、扉を開け  
て中に入った瞬間に猛烈な酒気に襲われた

臭いの発生源を辿っていくと食堂には酔いつぶれた、というよりも酔い潰されたであ  
ろう我が団員の死屍累々……

そしてその中心で黙々とラツパ飲みでワインを煽る酒の化身と化したフィルヴィス

がいた、肩には同じエルフで同期のアウラの姿

肩を組み仲良く飲んでるようにも見えるが明らかにフィルヴィスが一方的にアウラを締め上げるように抱きついていた

アウラの方は傍目から見てもかなりグツタリとしているのがわかる、そんなアウラと目が合った

「デイ、ディオニユソス様・・・お、お逃げくだ——キユツ!?」

アウラが落とされた

酔ってはいいてもLv. 3 見事な絞め技だ・・・できればこのような状況で見たくはなかったが

「あ~~~~~ Dioニユソス様だ~~~~!! アハハハハ!! 一緒に飲みましょうよ~~~~?」

ゆつくりと歩み寄ってくるフィルヴィス

だが、その姿からは『逃げたらわかってんだろうなあ!?!』的な雰囲気しか感じられない

神としての直感が言っている「それでも逃げろ」と

だが、私もこのファミリアの主神としての矜持くらいは持っている

自分の子が恋路で悲しみ、そのせいで酒に溺れこのような姿になってしまっているの

だ、それを受け止めきれなくて何が親だ、何が主神だ

「・・・そ、そうだな、今日は一緒に飲むとしようか」

まあ・・・手の掛かる子ほどかわいい、という奴だ、偶にはいいだろう。

・・・いや、別にフィルヴィスが怖いとかそんなんじゃないから

「ん・・・酒、おきやわり」

「あ、はい、どうぞ」

ほんと違うからね!?

こうして話は冒頭に戻る



「ですからね～：『全能者』<sup>ベルセウス</sup>はわかるんれすよ～百歩譲つて『戦場の聖女』<sup>ディア・セイント</sup>も～：～：～：わかりたくれしゆるけどわかるりゆ!!～：～：でも～：～：～：で『単眼の巨師』<sup>キュクロボス</sup>なんてすかね～ヒック～：～：私の方がもつとず～：～：つと前から～：～：」

「そ、そうだな～：～：うん、わかるぞ～：～：」

先ほどからもはや何回目になるかわからない話だ

要するにフィルヴィスは『戦場の聖女』<sup>ディア・セイント</sup>と『単眼の巨師』<sup>キュクロボス</sup>、特に後者の方までも未来嫁として認められたことが納得いかないらしい

まあ、わからない話ではない

フィルヴィスが彼を想う事、数年

それまで恋人である『全能者』<sup>ベルセウス</sup>以外浮いた話一つなかった彼に突然のスキヤンダル

しかも同時に二人

『戦場の聖女』<sup>ディア・セイント</sup>については、彼の愚痴をフィルヴィス経由で聞いていた  
その強烈すぎるアタック～：～：いやもうあれは奇行・狂行の類だ

だが、まさかそれが成就するとは夢にも思わなかった

彼女が彼に行つた行動を知つた上で今回の話を聞いたら、全ての神が彼の懐の大きさには感服するのではなからうか

そして突然出てきた『単眼キョクロナスの巨師』

彼女に関しては優秀な鍛冶師として神会デウミナスでたびたび取り上げられていたが、それ以外、特に異性との関係については言及されたことはない

だというのに今回のスキャンダルだ

『戦場ディア・セイントの聖女』だけでなく、ひよつこり出てきた『単眼キョクロナスの巨師』に出し抜かれたフィルヴィスの心中は察するに余りある

だが、私が思うに彼に対してフィルヴィスに未来嫁になれるチャンスがあるかどうかと問われれば・・・

間違いなくある!!

なにせ今回、『切札ジョーカー』が救援に向かった切っ掛けは、共にダンジョンに潜ることが多く、親交も深かったフィルヴィスを助けるためだ

たとえ仲間として大事に思っている、それだけで下層までほぼ単独で救出に向かうだろうか

そこに特別な思いがなかったとしても、それが男女としての感情に変わるのとは難しくないはずだ



ではどうやってその切っ掛けを作れば良いのか

これが冒険者同士となると意外と中々難しい

普通の男女であれば色々思いつくのだが・・・

そんなフィルヴィスのこれからの恋路について考えを巡らせていると

「おじやましてまゝす・・・って、なんだこれ・・・今日は宴会か何かあったのか？」

扉の外に見知らぬ人物・・・というかローブで身体を隠し、顔もマスクで隠している怪しさ大爆発な者が立っていた

「誰だ!？」

「ああ、いや、すみません、人が居る気配はあるのに外から呼びかけても誰も応えてくれなかったもので」

そう言つてその人物が顔のマスクをとる

「君は——」

「はは、どうも、お久しぶりです」

晒した素顔は少し意外な人物だった。

「あゝカイトだー！あはははは」

「おうフィルヴィス久しぶっ・・・て酒臭っ!」

「カイトカイト」

フィルヴィスがよろよろと彼に近づきそのまま抱きつく顔と顔をグリグリと押し付ける

「ちよ、フィルヴィスなんかキャラが違いすぎませんかねえ!」

「いやあ、少し飲み過ぎたみたいだね」

「ディオニユス様、あんたどれだけ飲ませたんですか!」

「それは、私も知りたいくらいいさ、なにせ私が帰ってきたら既にこの有様だったからね」

「ええ・・・マジですか?」

彼が少し呆れていると

「うわーん、なんでええー私の方がーうわーん」

彼に抱きついていたフィルヴィスが今度は幼子のように泣き出した

「ええ、ちよっ!」

「ほら、フィルヴィス、彼にあまり迷惑をかけては——」

「しゅびっZZZZZ」

「寝てるう!？」

大量の酒を飲んでいる最中に泣くことで疲れてしまったのか、彼の腕の中でスヤスヤと寝てしまっていた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

互いに顔を見合わせてなんとも言えない微妙な空気になってしまった

「えーと・・・・・・・・とりあえず聞きたいんですけど、何でフィルヴィスがこんなことに？」

いや、原因は君だぞ君

まあここだけ見て全ての情報を把握しろというのは無理があるか

「まあ、乙女には色々あるらしいよ?」

「はあ、そうなんですか・・・」

「すまないが、この子を部屋まで運ぶのを手伝ってくれないか? 私の細腕だと一人

運ぶのは骨が折れる」

「それぐらいは別にいいですよ、ついでに他の方々も運ぶんで部屋の場所とか教えて下

さい、こっちもちよいと頼み事があつて来たんでその代金代わりってことで、あ、デイオニユソス様、俺片腕なんでお姫様抱つことか洒落てるのは無理なんでフィルヴィスを背中に乗せて下さい」

「それくらいなら、私でも手伝えそうだ」

この後フィルヴィスや他の団員を部屋まで運んでくれた彼と少し話をした  
そのおかげでフィルヴィスにとって有益な情報を手に入れることが出来た

多少の見苦しい姿を彼に見られてしまったがこの情報は彼女にとってお釣りが来るものだろう

明日、彼女にこの情報を教えてあげるのが楽しみだ。

---

翌日。

私は『切札』<sup>ジョーカー</sup>本人から聞いた情報をフィルヴィスに伝えるためルンルン気分で彼女の部屋に向かっていた

この情報を聞いたときのあの子の反応が楽しみだ

（『切札』<sup>ジョーカー</sup>から聞いた、『切札』と言える情報：フフフ、おつと自分で言つて自分で笑うのはいかんぞ私、これではおっさんだフフフフ）

あの子のために手に入れた情報を伝えられる嬉しさに、らしくもない親父ギャグまで呟いてしまう

テンションが上がっているのか、あの子の部屋を通り過ぎてしまう所だった

コンコン

「フィルヴィス私だ、部屋に入ってもいいだろうか？」

淑女の部屋に入る当然の礼儀として部屋のドアをノックする

だが

「・・・？」

物音はすれど返事がない

（・・・考えてみればあの子は昨夜はかなりの量の酒を飲んだのだ、二日酔いで苦しんで

いるのかもしれないな)

怪訝に思ったが昨夜の惨状を思い出し、失礼ながら勝手に部屋のドアを開ける

「すまないフィルヴィス、入るぞ——…!?」

そうして部屋に入った私の目に飛び込んできたのは自らの喉元に短刀を突きつけ様としてゐる姿だった

「どわああああああ!?何をしているフィルヴィス————!?」

咄嗟に飛びつき刃部分をあえて握る、もし無理にでも引き抜けば私をの手のひらはサツクリと切れてしまうだろう

だが、心優しいこの子は私を傷つけないようにそんなことはしないと計算もあつての行動だ

「お離し下さい、ディオニュソス様!!」

「お、落ち着くんだフィルヴィス!」

私がナイフをなんとか手放すように器用に暴れるフィルヴィス

「私はあるような失態を犯してまで生きては…」

その最中に動きがピタリと止まる



# 39：奮闘×号泣 中編



《side：フィルヴィス》

目が覚めると見慣れた自室の天井だった

(あれ？私は昨日何を——つぐうううう!?)

目覚めは最悪だった、身を起こした瞬間に激しい頭痛と嘔吐感に襲われる、完全に二日酔いの症状だ。

「確か昨日・・・ぐう!?!」

思いだそうとすると激しい頭痛に襲われる

痛みに耐えながら昨夜のことを臍気に思い出してきた

(確か、カイトの嫁の話聞いて、自棄になつて酒を——)

そう、私は昨夜、彼の話聞いて自棄酒をした



問題は途中からの記憶が穴あきチーズの様な状態になっている、この部屋のベッドに自ら身を沈めた記憶もない

自分で無意識に戻ってきたのか、それとも誰かが部屋まで運んでくれたのか

「……ん?」

枕元を見ると、見知らぬ手紙が置かれていた

宛名を確認すると

「……カイト?」

彼の名を呟いた瞬間、思い出される自らが行った狂行

「?!? ああああああああああー!?!」

昨夜の記憶が一気にフラッシュバックしてきた

自分が彼やディオニユス様だけでなく仲間達にも晒してしまった醜態に頭を抱える

(酒に酔っていたとはいえ、私は何ということをつ!?)

仲間にはかなり強引なアルハラ

尊敬する主神には偉そうに上から目線で絡み酒

さらにはカイトに自身を擦り付ける様に抱きつき、あまつさえ子供のように泣きじやくる姿まで見られた

エルフとしての誇りが普通もしくはそれ以上である私は当然の帰結としてある答えにたどり着く

「………死のう」

冗談抜きでそう思った。

———  
そう思ったのが十数分前

「フィルヴィス、落ち着いたか？」

「むー！?!むむー!!」

私は他の団員達に猿ぐつわを噛まされ、拘束されていた

あの後、口から出す物を出してからグツタリした私はディオニュソスが呼んだ他の団員に念のためにと拘束されていた

実際、拘束されていなければ間違はなく自害していただろう

「フィルヴィス、私は気にしていない、だから私の話をとりあえず聞いて見ないかい？」

「むむむー……!!」

返事をしようにもしやべることが出来ない

「えつと……外しますね」

見かねたアウラが私の猿ぐつわを外してくれた

「くっ……殺せ!!」

「まさか、自分の子の『くっ殺』を聞くことになるとは……」

何故かディオニュソスが感慨深そうな感じで驚嘆していた

「昨夜の失態に続き、ディオニュソス様にあのようなこと……もはや死んで償うしか……」

自分の主神に私の……ア、アレを吐き掛けるとか

……死にたい

思い出すだけで、羞恥と後悔、その他もろもろの感情だけでああああああああ——

——となる

そんな風に塞ぎ込んでいると

「ふむ、フィルヴィス……私は本当に気にしていないし他の者達も同様だ、どのような神であろうと人であろうとこういったことはある、だから君も気にするな、これは主命だ。君の命をこんなことで散らすことを私は決して許可しない——いいね？」

「——!!」

神威と一緒に私の身を案じる優しい言葉に拒否などできるわけがない

これほどの狼藉を働いた私にこれだけの言葉を掛けてもらえる、この方の眷属となれたことを誇りに思う

改めて己が主神の慈悲深さに感銘を覚えた

「——はい、この罪、償うためにもこれからより一層の献身を尽くすことを誓います。」

「ああ、期待している、私のかわいい子よ」

「はっ!」

私が改めてディオニュソスに忠誠を誓っていると

「——それよりも、だ」

「……?」

「実は昨日、『ジョーカー切札』が訪ねてきたんだが……覚えてるかい？」

雰囲気を変えてディオニュソス様が確認してくる、その表情からは話したくてしょう

がない噂好きの神々と同じ気配を感じる

ちなみに他の団員は先程のやりとりの後退出している。

「は、はい……ですが途中から記憶が」

かなり記憶が朧気だが彼がここを訪ねに来たのは覚えている

(……いや、待て)

なぜ今ここを訪ねたのだ？

少し冷静になれたことで今の時期に彼がここに現れたことに疑問が生じた

今や『ジョーカー切札』という存在はイヴィルス闇派閥達にとつて仇敵認定、抹殺候補の第一位

さらに情報や噂好きの神々にも注目され、オラリオで最も注目を集めている人物の一人となつてしまつている

そんな彼が何故？

「彼がここを訪ねた理由はフィルヴィスに頼みたいことがあつたからだそうだ」

「私に……ですか？」

「ああ、私は教えてもらえなかつたが、頼み事の詳細は手紙に書いてあるそうだ」

「手紙……あ、そういうえば枕元に！」

色々あつてすっかりその存在を忘れていた

「おそらくそれだ、中を確認してもらつてもいいかな？ おそらく他言無用系の内容のは

「ずだ、君だけが確認するの方がいいだろう」

その言葉に従い、蠟で固めてある封を開けて手紙の中に目を通す

『 拝啓 フィルヴィス・シヤリア様

かなり泥酔していたみたいなので手紙に頼み事を書いておく  
 少し身を隠すついでに里帰りすることにしたんだが、闇派閥イグイルスに俺がオラリオに居らず里  
 帰りしているとわかるのは故郷の家族の身の安全的にヤバい

それを誤魔化すためにラウルに普段の俺と同じ格好をしてもらって影武者みたいなの  
 とをやってもらうことになった

そこでだラウルが偽物とばれないようにフィルヴィスにサポートを頼みたい、同じファ  
 ミリアの連中ばかりだけだと偽物とバレル可能性があるからな 頻度は週に1回位だ  
 ぶつちやけ他のファミリアで頼れるのはお前だけだ

報酬は別途に請求してもらってかまわないからどうか頼む！

PS

フィルヴィスがあんなに酒好きとは知らなかったぞ

故郷から帰ったら、偶にはラウルも交えて三人で飲もうぜ。

あ、お嬢はジューズな、あいつ酒乱だから絶対飲ますなよ！

カイト  
』

「なるほど、確かにこれは私が適任だな・・・ふふ」

「・・・フィルヴィス？」

他のファミリア所属の私がカイトに扮したラウル・ノールドと接触する所を誰かに目撃させることで影武者が本物であると信憑性を持たせる、少し心配しすぎな気もしないでもないが念には念を入れてということなのだろう

だが、そんなことよりも私の心をくすぐるのはとある一文

『頼れるのはお前だけだ』

「くふふ」

「あの・・・フィルヴィスさん？」

い、いかん、けつこう重要な頼み事なのに顔の口角が勝手にせり上がっていく

『頼れるのはお前だけだ、フィルヴィス』

妄想で勝手に言葉が付け足されていく

『頼れるのはお前だけだ、俺の愛するフィルヴィス』

(ほあああああああ!!)

いかんいかんいかんいかんいかんいかんいかんいかんいかんいかん  
これ以上はいかあああああ—————ん!!

「ちよっフィルヴィス!? 顔がすごいことになってるぞ!? 正気に戻れ!」

「はっ!」

ディオニソス様の声で何とか現実に戻ってきた

あ、危なかった、もう少して妄想の彼方に旅立つところだった

「手紙の内容はそんなに驚く内容だったのかい?」

「・・・えっと、その〜」

まさか手紙の一文から妄想が大爆発したとは口が裂けても言えない

かといって嘘を言えば冗談抜きで神にはすぐにわかってしまう

「詳細は言えませんが・・・大まかに言うとな今回の事件で動きにくくなったので、身を隠す際には協力して欲しい、とのことですよ」



嘘はいつていないし、そもそも私のテンションがおかしくなったのは依頼内容とはほぼ無関係な部分だ

「なるほど・・・色々疑問もあるが何かしらの事情があるのだろう、だがあんなことがあつてもフィルヴィスは彼の頼みを聞くのかい？」

デイオニユソス様の疑問も最もだ

惚れた男が他の女を次々と嫁にしているのだ、普通なら幻滅してあきらめるだろう

だが、私はカイトという男がそのようなことを易々と行う人物ではないことを知っている

きつと何かしらの事情があつたのだろう

まあ、昨夜はそれでも幾ばくかのショックを受けてヤケ酒をしてしまったのだが時間が経ち冷静になってみれば自然とそのように思えてきた

「はい、彼に何があろうと私の中にある気持ちに変わりはありません、どうやら私は自分が思っている以上に恋愛事についてはあきらめが悪いようです」

「まったく『切札』も中々罪な男だな、こんなに可愛いフィルヴィスを知らずに振り回すとは」

「まったくです・・・ふふふふ」

私も自分の気持ちを再認識したことで何故か笑いがこみ上げてきた

「だが、それが聞きたかった、やはり昨夜手に入れた情報は君に伝えなくてはならないよ  
うだ」

「・・・情報？」

「なぐに、昨夜は彼と共同作業したおかげで色々話す機会に恵まれてね、その際に――  
――手に入れたんだよ」

「何をですか？」

「フィルヴィス！」

「は、はい！」

いきなり正面から肩を掴まれ真剣な顔でディオニユス様がこちらを見てくる  
「君が『ジョーカー切札』の第四の嫁になれるかもしれない情報をだ!!」

・・・え。

||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||

あれから二日

「……」が彼女達の研究工房か

場所はオラリオ北東の工業区、その中のある場所に私は訪れていた。

ディオニソス様がカイトから聞いた話によると今回の嫁騒動はカイトの身を守るため遂に恋人である『全能者』<sup>ベルセウス</sup>がぶち切れて、一線を越えたことから始まったらしい。

カイトと『全能者』<sup>ベルセウス</sup>には共通の夢がある

それについてはカイトから共に行く冒険の道すがら、将来は『全能者』<sup>ベルセウス</sup>と共に魔道具の売買もできる飲食店を開きたいと聞いていたので知ってはいた

他にも色々ありそうだったがそれ以上はいつも誤魔化されて聞けたことはない  
冒険者として富を求め、それを足がかりに夢を叶える

よくある夢を叶えたいだけの者が酒の席で語るような話だ、まあカイトほど実力があ  
り稼げる冒険者であれば夢物語ではなく相応に現実味を帯びた話になる

だがダンジョンというのは何が起こるかわからない

オラリオ最大派閥のロキ・ファミリアに入団できたとはいえ探索がメインのファミリア

『ベルセウス全能者』は決してカイトの前で表に出すことはなかったが日々カイトの身が心配で心配で堪らなかつたらしい

そんな時に今回の事件

左腕を失ったカイトを見て彼女は思ったそうだ

やはり、自分が養つてでも冒険者にはさせるべきではなかった

探索がメインではなくても自分と同じファミリアに入れて常に監禁・・・監視しておくべきだったとか

もつとサポートできる何かしらの魔道具を創つて渡しておくべきだったとか

そんなことがグルングルン頭の中で何度も反芻したとのことだ

普通の者ならそんなことをいつまでも考え続けるのだろうか『ベルセウス全能者』は優秀な人物だ

落ち込んだ後、即座に行動を開始した

目的はカイトの身を今よりもさらに支えること

ロキ・ファミリアと自分ではできないことをサポートできる人材を求めた

そして都合の良いことに彼には彼自身を慕う女性、しかも先程言ったファミリアと自

分だけではサポートできない部分を請け負うことのできる人材が偶々その場に揃っていた

魔法薬や回復・治療で彼を支えることの出来る人材

『戦場の聖女』アミッド・テアサナーレ

武器や防具で彼の装備を支えることの出来る人材

『単眼の巨師』椿・コルブランド

前者は言わずもがな、後者もカイトの専属鍛冶氏ということで彼に悪い気は持っていない、それどころか話してみたらどうやらカイトにかなり興味があるようだった

即座に彼女はこの二人を勧誘した

現状自分が思っていること、考えていることを吐露しながら

それに対して『戦場の聖女』が求めたのは彼自身

以外にも『単眼の巨師』までもが同じ様な条件を出してきたらしい

『全能者』はいくつかの条件を逆に飲ませることで彼女達の要望を飲み込んだ

そして『全能者』が彼女達に飲ませた条件

1 : 彼を全力で支えること

2 : 男女としての関係では正妻である自分を立てること

3 : 将来、カイトが経営するであろう店内でそれぞれ得意分野の商品を売ること

この三つだ

これを飲ませることで『戦場の聖女』と『単眼の巨師』をカイトの未来嫁として認めたそうだと

端的に言おう

これ 私でもイケる

条件1、余裕だ

条件2、カイトと一緒に居られるなら全然OKだ

条件3、カイトの店で給仕でも小間使いでも何でもやってやる

ディオニユス様が私に言った嫁になれる可能性とはこのことだ

カイトが同じ男ということで油断したのか、それとも愚痴らずにはいらなかったの

か、洩らした内容は私にとつてカイトと一緒に成れる一粒の光だった。

そんなわけで私は『全能者』ベルセウス 『単眼の巨師』キュックロプス 『戦場の聖女』ディア・セイント この三人が共同でカイトの義手を造っていると言う工房までやってきた

彼女達とまず会ってやったのは開幕土下座

「私もカイトの嫁にして下さいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

「いいですよ」

「やはりいきなり言っても……つてええええええ!!」

なんか速攻で許可された

## 40：奮闘×号泣 後編

---

《side：フィルヴィス》

『全能者』ベルセウスことアスフィに認められた

なぜこんな速攻で、と思ったが

「あなたのことは彼からよく聞いていましたから」

どうやら向こうは私のことをカイトから聞いて知っていたそうだ

そりゃそうだ

私の方もカイトからアスフィのことを惚気話の一つとしてよく聞いていたので初対面ながら相手のことをお互いによく知っているという奇妙な出会いだった。

それに認められたと言っても、もちろんタダではない、先ほどの条件に加えて私には



他の条件も加えられた。

その条件は今回のカイトの義手に使う素材集めを手伝うことだった  
そりやあもう、私は馬車馬の如く働いた、というか働かされた

西に貴重な素材があれば交渉し

東に必要な素材がクエストの報酬としてあればダンジョンに奔走し

北に南にと駆けずり回った。

さらに私にはカイトから頼まれたカイトに扮した影武者のラウルと定期的に会うという任務もあったので日々をかなりの激務に追われた

(だあああああ!?!い、忙しすぎるうー!?!?!?)

だが、アスフィは割りと容赦がなかった。

素材を手に入れたらすぐに次の素材のために奔走させられる

ホームに帰れば疲労困憊でベットにすぐに倒れこむ日々が数日続いた

ー!?!?!?!?!あああ．．．私の身体がせめてもう一つあれば．．．

なーんて思っていたら『分身魔法』とかいうとんでもない魔法が発現してた

魔法は自信の心の底からの願望や願いから影響を受け発現するのだが．．．私はどれ

だけこき使われているのだ

ちなみに、この魔法は実態を持った私をもう一人生み出すという希少魔法だ

分身も魔法が使えるのでどんどん人数を増やすことが出来る

デメリットは分裂すればするほど弱くなることだろう10体を超えたところでそこからへんに居るバツタとかセミが身体にぶつかっただけで消滅するくらいに弱くなる

バツタ相手に長年のライバルとの決闘みたいに善戦する自分を見るのは情けなかった

・・・あれは見てて悲しくなる、自分の姿なので尚悲しい

私は4人以上は増やさないと硬く誓った。

そんな情けないこともあったが、この魔法のお陰でかなりの貴重な素材を次々と手に入れることが出来た。魔法があったとはいえ自分でもよくこれだけ都合良く必要な素材を集められたものだと感心する。まるで見知らぬ親切な精霊が導いてくれている様だ。

そんな風に日々を過ごしている時にふと思った

アスファイは何故こんなにも簡単にカイトの女を増やすのだろうか  
いや、カイトを支えるための人材集めということは知っている

知ってはいるが私であれば感情のほうに納得しないであろう出来事だ

そんな事を他の二人——椿とアミッドに言つて見たところ

「ふむ……確かに、手前はあいつの身体目当てで嫁になったようなものだからなあ、  
あまりそういった男女の機微には疎い」

「ええええ、かかかか身体!？」

突然放たれた言葉に動揺しつつ椿の体に向け

(……で、でかい)

健康的な身体にサラシをしていても動くたびにプルンプルンと揺れる胸  
おそらくカイトの女性関係者では最も大きい……それに比べて自分は

戦力差はざつと見てもイチゴとメロン

いや、どつちもおいしい果物だ差別 yokunai

カイトならばどつちもおいしく頂いてくれる

エルフはスレンダーな体型が多いためどうしても胸の大ききさといったことでは他の  
種族に劣つてしまう

ぐぬう……やはりカイトも男だ、こんな貧相な胸ではなくこういつた出る所が出て

いる異性の方が好きなのだろうか

もしも初夜で

「ちっさ・・・あくやっぱ椿みたいな巨乳がいい」

『ガーーーーーン!』

等となった日には首を吊れる自信がある

勝手に一人で被害妄想の囚われているところにアミッドが待ったを掛けてきた

「あー・・・フィルヴィスさん、彼女のセリフで何を想像してるのか知りませんがたぶんご想像してるのとは大分違いますよ」

「そ、そうなのか?」

「あつはつはつは、すまんすまん!手前の言い方が悪かったな、手前の言う身体というのは語弊でな、目的はあいつのスキルだ」

落ち着いて聞いてみたら椿はカイトのスキルで顕現する武器に非常に興味があるとのことだ

「これを見てみる」

そういつて突き出してきたのは刀身がボロボロで一部は何故か炭のように真つ黒、柄と唾の部分を残して崩れて砂にでなりそうな状態だった

「随分と使い古された刀・・・なのか？」

「ふふふ、おもしろいものを見せてやろう」

「なにを・・・」

そう言っている間に椿がその刀身を地面に向かって振り下ろす

一体何をするつもりなのか、そんな状態の刀を地面に向かって振り下ろせばL.V. 4の椿の力でなくとも粉々になってしまうだろうに、そう思っていた

だが

ガキーン

という硬質音とともにボロボロの刀身が地面に埋まった

(・・・壊れないだと)

地面は石だ、こんな様相の武器が耐えられる硬度ではない

「ふふ、驚いたか？」

得意満面といった風な顔でドヤる椿

「こいつは先の事件でカイトが使用した刀だ、なんでもスキルでこの刀に力を憑依させただろうだ」

「あの、巨大な鎧武者を顕現させたやつか」

「そうだ、ちなみにこいつは『不壊属性』付だ」

「馬鹿な!!」

『不壊属性』、攻撃力は第一級武器には及ばぬ代わりに、その名の通り決して壊れることのない武器がもつ属性だ

その武器は切れ味や攻撃力が落ちはするものの、決して壊れることのない武器として数多くの冒険者に好まれて使用される

だというのに目の前の刀の様相はどうだ

これ程の状態で地面に叩き付けても壊れないことからこの武器が『不壊属性』であることは疑いようがない

「元からこの様な状態の武器であった訳ではないのだな?」

「当たり前だ、手前が打ってやったときは綺麗な波紋付きの立派な刀だった、かなりの自信作だったのだが・・・それがこの有様よ、笑うしかあるまい」

「その、なんだ・・・鍛冶氏というのは自分が打った武器を壊した者を好きになるのか?」「んなわけがあるか! まったく・・・儂が気に入ったのは彼奴のスキルで強化された刀を

見たのが切つ掛けだな．．．あれはすごい、今の手前では決して打てん刀だ、入団の際に魅せられた主様の武器よりも魅せられた、手前はもう一度あれが見たい、触りたい、この手で確かめたい、そして彼奴のスキルに耐えうる武器を打ち、さらにそれを超える武器を打つ!!．．．そのためにも他派閥のファミリアでも彼奴のそばに居ることの出来る状況や立場が欲しかった」

それを聞いてなんというか

．．．椿にとつてどうやら嫁という立場は利用するだけのものらしいと感じた

彼という人間を愛する者にとつてあまり面白く感じることでできない話だ

そう思っていたのだが

「まあ、手前は男女の蜜事には興味がないわけではないが．．．お主たちより大分薄い、とは言つてもまだ、一応親に孫の顔ぐらい見せてやりたいという孝行心くらいはあるのである、それに——」

「それに？」

「何とかだかな．．．『もしも旦那にするなら誰か?』と、らしくもないことを考えたときにカイト以外の顔が思い浮かばなくてなあ．．．こりや今を逃したら一生武器を打つだけで終わりがねんと僅かに残っていた乙女心が焦つてな．．．まあなんだ．．．嫁になつた」





トさんを身体的にも精神的にも支えられるって思ったんでしょね」

なるほど、死後のことまで考えてまで彼を支えようとするその姿はまさに良妻賢母の鏡と言つて良いのかもしれない

「ふむ……そのどこが傲慢なのだ？手前にはただの良い女にしか聞こえないが」

確かに

「何を言つてるんですか……まだアスファイがカイトの嫁を増やす気なのだとしたら今の私達だけでもカイトさんにとつてアスファイ一人に釣り合わないって言つてるようなものですよ？……これが傲慢じゃなくて何なんですか、まったく！」

言われて私も椿もようやくそのことに気付く

「くかかかか！確かにそれは傲慢だな！」

「ふふ……だが、おかげでこうしてカイトと共に居られることになったのだからその傲慢に感謝しなくてはな」

「まあ、そうなんですけどね……あ、フィルヴィスさん次の素材はこれをお願いします」

雑談が一区切りした所で急に話が変わりアミッドから追加素材の要求がきた

「了解し……ん？」

渡されたりストには素材の名前がいくつも書いてあるが……

「おいどういうことだ……ここにかいてある素材は三日前に持ってきてやっただろう!?!」  
「実験に失敗しちやいまして」テヘペロ

アミッドが手に持つのはどろりとした何かが入った小瓶、あきらかに実験で失敗してできた廃棄物だ

(頑張つて集めた素材がゴミに……)

「なら手前も鉄鉱石と火炎鉱石を追加で頼む」

椿からも追加発注が……いや待て

「そつちは昨日持ってきてやったばかりだろうが!!」

「打ち損じてしまつてな」テヘペロ

椿が手に持つのは黒焦げてひしゃげた鉄のクズ

……おつふ

拷問の一つに穴を掘らせてからそれを埋めさせるといふ行為を何度も繰り返させるといったものがある

初めて聞いた当初はそこまできつくはないだろうと思っていた



《side : カイト》

「こちらです」

アスファイ達に工房内を案内され、真ん中の台座に鎮座している義手を見せてもらった  
「これが――」

腕を失ったのは悲しいしショックではあった  
だが、目の前の腕を見てそんな思いは吹き飛んだ

本物の腕と見間違えるくらいに精巧な造形

それが本物ではないと証明するかのように重厚に光り輝く銀の光沢  
何よりも自分を惹き付けるナニか

「・・・すごいな」

何がすごいのかはまだわからないのに、そんな言葉が自然とまろびでる  
でも仕方が無いだろう、そんな言葉しか出てこない、気分はショウウインドウに張り

付いてトランペットを眺める少年だ

「さっそく付けてみましょう」

「お、おう」

アマミッドが義手を持って俺の切断面を覆うように義手に埋める

「うおお!!」

ハマった瞬間にビビった

「驚いたか？」

椿がこちらを見てイタズラが成功したとでも言いたげにニヤニヤと笑っていた

「そりゃ驚くだろ・・・これは」

腕を付けた瞬間に義手から触感が返ってきた、切断面と接触している部分からと言うわけではなくアマミッドが触れている義手の部分からである

「義手で触れている部分の触感が・・・まじかこれ」

しかも自分の意思で自在に指や関節まで動かすことができる、それこそ腕を失う前と寸分変わらない精度でだ

感覚としては突然失ったはずの腕が生えてきたみたいだ、戸惑ってしまったのも仕方がないだろう

前世の最先端科学技術でもここまでのものは出来ていなかったはずだ

まさにファンタジー万歳ってやつだ！

「なあ、魔道具の義手つてのは全部こんなにすごいのか？」

「そんなわけないでしょう」です」だろ」

「ありや、そうなの？」

3人曰く、何でも俺の腕そのものを素材として使用し、なおかつここに居るのが魔道具・生体・武器、それぞれのスペシャリストだからこできた芸当・・・かもしれないことだ

かもつてなんだ、なんで最後の部分だけ自信なさげなんだ

まあいいや

俺の嫁たちマジですげえってことでいいのだろう

・・・ふむ

新しく俺の腕となった義手を改めて見る

手を握ったり開いたりして軽く動き、誤差がないかを確認する

んふ

んふふふふふふ

一度言ってみたい台詞を言っちゃおう

パーーーーフェクトだああああ!!

アスフィアミッドつばきいいいいーーーーー!!

ひゃっほう!!!

機械っぽい腕!

色は輝くシルバー!

それでいて腕の部分はリアルすぎず、かといってゴツすぎず

男のロマンだなこれ!

コブラのサイコガンでも付けているような気分になれるぜ!! ヒュー♪

・・・まあ強いて問題を挙げるとすれば身体の自重バランスだな

この数ヶ月ですっかり片腕のない状態に慣れてしまった、しかも義手は元の腕と重さが同じわけではない

(こりやあ感覚取り戻すのに大分リハビリせんといかな)

こればかりは仕方がないと思っていると

「カイト、裏に少し開けた場所がある、手前に付いて来い・・・慣らすためにちと軽く仕合うぞ」

「助かる・・・手加減はいるか？」

「あつははつははは!!手前相手にできるものならやつてみるがいい!!」

「お、言うねえ」

すぐに椿と模擬戦形式で試運転がてら軽く義手を動かしてみることにした

## 結果

一時間くらいで慣れた

思っていた以上に慣れるの早かったわ

まあ、これほど早く慣れたのもこの義手の性能によるところが大きい

なにせこの義手、俺の思い通り自在に動くだけでなく激しく動いてもまったく外れる

様子はなかった



なんでも一定の動作をしつつ手順を踏まないとそれこそ腕が千切れない限りは外れないそうだ、戦闘面として見れば最高としか言いようがない

義手で一番の懸念は戦闘中に外れることだったからな、戦闘中の心配が無くなるだけでかなり精神的な負担が減る

強度の方は素材構成の7割がミスリルのためアダマント程の強度はないが、俺の場合は【念】で強化できるのでむしろ魔力等を通しやすいミスリルの方が都合が良いで問題ない

試しに椿の打ったアダマント製武器と【念】で強化した義手の拳とで打ち合ってみたが、傷一つ付かない所か逆に向こうの方にヒビが入った  
「手前の武器の方が負けるのか．．．ぬぐうううううう！！」

そのことでめっちゃ椿が不機嫌になった

いや、どっちもお前が造ったものには変わりないんだから拗ねるなや

強度や基本動作の確認の後はこの義手の戦闘以外での様々な機能の説明を受けつつ試運転を行った

こんな機能いるかあ？と思う様なものもあつたが概ね期待以上の義手であつたのは

間違いない

「つーかぶつちやけメンテナンスを欠かさなければ元の腕よりも良いかもしれない  
感心しながら、よくもまあこんなとんでもない義手を造れたものだと言ったら

「いや、まあ私たちにかかれればこれくらいは・・・ねえ？」

アスファイよ、何故顔を背けるんだ

「そ、そうですねー・・・で、でも・・・スペアが二本くらいしかないので気をつけて使っ  
てくださいねー・・・アハハハ・・・」

とんでもなく胡散臭い笑顔でアミッドが笑う

「そ、そうだな、手前でも、もう一度同じのを作るのは・・・なあ？」

下を向きつつポリポリと頬を搔く椿

「・・・やっぱこれだけの物だとまた造るのは難しいのか？」

「「・・・えつとくく・・・」」

何故か三人が目を逸らす

さつきから義手を褒めたりすると三人がととても複雑そうな顔をするんだが・・・  
何故だ？

## 問

オラリオの大通り、そこを片腕が義手の冒険者が一人軽快な足取りで歩く  
というか俺だ

冒険者の多いこの街では義手を付けているの者は珍しくないため、大手を振って歩いても特に目を引くことはあまりない

久々のオラリオを両手を下げて歩くことのなんと清々しいことか

あ、ちなみに故郷の村からオラリオに帰ってからはフィン達に帰還の挨拶を手早く済ませてからアスフィ達の工房には向かった

さすがに自分の所属するファミリアよりも義手の受け取りを優先するほど薄情ではない

うーむ、この腕をあいつらに見せたときの反応が楽しみつか、ぶっちゃけ自慢したい

気分は新しい家電を使って自慢したがる調子に乗った若者である

「それで、俺に紹介したい人物って誰なんだ？」

隣を歩くアスフィに声を掛ける

俺とアスフィは二人でギルドに向かって歩いていて、アスフィから今回の件で俺に紹介したい人がいると言われたからだ

聞けば、何でも今回の義手を造るために素材集めを主導してくれた人物らしい  
うむ、そういうことならきちんと感謝の言葉を俺から伝えねばなるまい

「簡単に言うとおあなたの嫁ですね・・・四人目の」

「ふくん、俺の嫁なのか・・・そっか・・・うん・・・んー！？」

今なんて言ったんだ、この嫁は？

四人目？

え？

は？

ナニソレ？ ナンデスカソレ？ ダレノ？ オレノ？

」。

困惑の余り俺の思考がフリーズする、というか文字通り俺は固まる

そんな俺を無視してツカツカと歩き去るアスフィ

「ちよ、待て、待って！いや待っててくださいい!？」

四人目ってなに!？」

っーか誰だよ!？」

・ ・ ・ ・ ・

そんなこんなでギルドに到着

「こちらが嫁です」

「どうも・・・嫁だ」

フィルヴィスでしたくく・・・なんで？



そうきつとフィルヴィスは思い悩んだはずだ

腕を失った俺に借りを返すためにどうすばいいのか、何をすればいいのか

ああ・・・今思えば故郷の村に帰る前にべろんべろんに酔ったフィルヴィスに会ったが、もしかしたら飲まずにはいられないほど自分を追い詰めていたのかもしれない

くつ、仲間のそんな状態にすら気付かなかつたとは・・・一生の不覚っ！

「フィルヴィス、今回の件で自分の身まで捧げようとするお前の責任感の強さはわかっているつもりだ」

「え、いや・・・たぶんお前、全然わかかって——」「いいんだ!!俺はこれほどの義手を造るためにお前が奔走してくれたそれだけで十分なんだ!!」

「いやいやいや!?!カイト貴様なにを勘違いして——」

「俺は仲間を助けたかった!それだけなんだ!!お前を嫁にしたいとかそういう下種な思いは一切ない!——!」

少し強めに言った言葉が響いたのか、広大だというのにいつも賑やかでうるさいギルドのロビーが静まり返る

……青臭すぎる台詞を言ったからだろうか

「う……うつつうつつ」

フィルヴィスが俺の言葉に感激したのか涙をポロポロと流す

何故かアスファイはドン引き……あれ……ドン引き？……え、なんで？

あ、そうか嫁の前で他の女に優しくしてるのがダメとかかな？

だが今回くらいは大目に見て欲しい

「うわああああああああああああああああああああああん!!あああああ  
あ—————!!」

フィルヴィス、俺の言葉に感激し絶賛大号泣

そんなに感動されるとさすがに照れるぜ

「フィルヴィス、だから無理して俺の嫁にならなくとも——「このボケエ!!!」

「アプエ!」

泣きながら怒りと羞恥に顔を染めたフィルヴィスの拳がクリーンヒット

「らららおらあ!!」

「おほおほおほおほ!!」

ボデイに連打が突き刺さる



「シャアア!!」

「はばえ!?!」

膝から崩れ落ちたところにムーンサルトキック級の綺麗な半月蹴り

「死ねえええええ!!」

「ぶべら!!」

仰向けに倒れ天井を向いた顔面にとどめとばかりに踏みつけスタンプの蹴りが見舞われた

意識を失う寸前

フー、フー、と興奮したように肩で息をするフィルヴィスと呆れ顔で目を覆うアス  
フィの姿だけが印象に残った

「な・・・何故・・・」ガク

後にフィルヴィスはこの一件が原因で『泣妖精』<sup>バンシィ</sup>と言う不名誉な二つ名だけでなく、  
パーティを組むと片思いの者は確実に振られるという噂までされることになる。

## 41：暗黒×卵焼

《side：シル・フローヴァ》

私の目の前で目を覆いたくなるような光景が繰り広げられていた  
ちなみに場所は「豊穡の女主人」の廊下、そのトイレの前だ

ドンドンドン

「早く出ろにやー！ー！！」

ドアに縋り付いて叫ぶアーニヤ

「こ、こうにやったら庭で・・・」

「バカ、んなことしたら、今度こそ『小巨人』<sup>デミ・ユミル</sup>に殺されるぞ」

悲壮な最終手段に出ようとするクロエとそれを止めるルノア

（乙女の会話じゃないなあ・・・）

目の前で三人の乙女がお腹を押しえながら内股で震えている

「んにゃー……!!早く出てくるにゃー……じゃないと、じゃないとみゃーが……はう!」  
 ピーゴロゴロ

同僚のアーニヤがお腹を押しえてピタリと微動だにしなくなる

……一応、念のため少し

いや大分アーニヤから距離を取る、他の二人も同様にアーニヤから距離を取っていた

「……一応行つとくけど次はにゃーが入るにゃー」

「あ?ふざけんな……こつちの方がやばいんだよ、譲れ」

「いやにゃ」

アーニヤから距離を取った二人がどちらも顔を青ざめながら目線だけで火花を散らす

ちなみに少し乱暴な言葉遣いの方がルノア・ファウスト、今度からここで働くことになった新たな同僚だ

そしてアーニヤと同じ言葉遣いの方がクロエ・ロロ　こちらも今回の件で同じくここで働くことになった子だ

そんな二人が険悪な雰囲気醸し出す

「んだと、やんのかこらあ!!」

「やってやるにや!!」

(・・・二人とも喧嘩してる余裕なんてあるのかしら?)

『『ピーゴロゴロ』』

「ハアアアウ!?!」

(・・・いわんこつちやない)

「はあ・・・三人ともトイレはここだけじゃないんだから、別のとこでしてくれればいいのに」

「「それだ!!」にや!!」にや!!」

私のつぶやいた言葉が聞こえたのか一目散に外に駆け出す3人



|||||

|||||

《side : リュー・リオン》

仲間を殺され

敬愛するアストレア様とも別れ

復讐を遂げ

堕ちた私は今

「おらあ!!キリキリ働け!!」

酒屋でカイトの監視の元、強制労働をさせられてる。

ちなみに私だけではない

「くっそく、こつちが体調最悪なのに遠慮がねえぞこいつ」

「うく・・・絶対ここから逃げ出してやるニヤァー!!」

「にゃーに至っては完全にとぼちりにゃー!!?」

私と同じようにミア母さんの下で働くことになったルノアとクロエ、そして元々ここで働いていたアーニヤが愚痴を零す

「あ　ア　？」

そんな三人の声が聞こえたのかサボらないよう見張る監視役のカイトがとてもいい笑顔で三人の元に近づいていくが、私は無関係を装って自分の仕事に集中する。

（私は関係ない私は関係ない私は関係ない私は関係ない私は関係ない私は関係ない）  
 ・ ・ ・ とびきりの彼の笑顔が今は非常に恐ろしい

「．．．おい」

「「う!」」

既に彼に苦手意識ができたのか三人がたじろぐ

「．．．どうした?．．．お腹でも空いたか?」

「「!?!」」

「．．．卵焼きは好きですか?」

「「すんませんでしたー!!!」ニヤ!!!」にや!!!」

今やここにいる四人がトラウマを抱えるほどの力を持つてしまった言葉

カイトの「卵焼き」

恐ろしい、死ぬことよりも恐ろしいことがあるとすればアレを口に付けることだ  
お、思い出すだけで

「オロロロロロロロロ r ■ ■ ■ ■ ■ ——」

「ぎにゃー!!!?リユーがまた吐いオロロロロロ r!?!」

「おいふざけんな!?!そつちがそうなるどこつちまでもらいゲオロロロオロ r」

「何でにゃーの前でわざわざ——オロロロロロロ r r r r r」

乙女達によるこの世でもっとも汚い四重奏

それを見たカイトからの無慈悲な一言

「さっさと片付けて働け」

「「「鬼か!?!」」」



カイトがここまで激怒しているのにはもちろん理由がある  
事件は昨夜起こった『黒拳』『黒猫』と呼ばれる凄腕の殺し屋に私が狙われたことが発  
端だ

ちなみに『黒拳』はルノア、『黒猫』はクロエだ

少し前の私なら恐らく何の抵抗もなく殺されていただろう

なにせここに来た当初の私は生きる意味などなく、それこそ放っておけば勝手に死ぬ  
様な状態であった

だが、そんな私の心を救ってくれた人達が居た

シルやカイトに店長、ついでにアーニヤ

シルには私がこれまでやってきた意味

カイトにはこれからも私が生きなければならぬ理由

店長には生きるための活力を無理矢理ではあったが発破を掛けられた

アーニヤには・・・なんでしょう、愉快的な心地？

これからも生きる目的ができた私はその恩に報いるためにも全力で『黒拳』『黒猫』に

抗った、途中からはアーニヤも参戦し善戦できていたが『黒猫』の毒で弱っていた私は『黒拳』に押され始めた

そしてその状況を覆すために私は『黒拳』の猛攻を避けつつ全力で魔法を行使した

結果

店長が第二倉庫を建てようとしていた店の裏庭はグチャグチャ

加えて食材や酒が保管してある第一倉庫も半壊

本店の方も壁が穴だらけ

結果の結果

店長：普段から怒りっぽい店長がマジ切れ

カイト：怒りを通り越した何かに変貌

店長にボコボコにされた後に全員が拘束され、そのままの状態マジ切れカイトの強制デザイナーに御招待

気づけば目の前には丸い食卓が一つ、天井には魔石灯のランプが一つ怪しく卓上を照

らしている狭い室内

そして椅子ごと鎖でガチガチに拘束された卓上を囲む四人

私、ルノア、クロエ、アーニヤ

今から拷問でも始めるつもりかと思っ・・・いや拷問でしたねアレ

四人が現在の状況を掴みかねていると

コツコツと足音を立てて暗闇からエプロン姿のカイトが姿を現した

そのまま部屋の隅に設置してある小さな台所に向かい何かの作業を始める、その作業をしたままカイトがポツリポツリと独り言のように話し始めた

何でも第一倉庫には店長自ら漬けてあったお手製の果実酒だけでなくカイトが婚約者達との結婚祝のためにと贅沢な食材や製法で漬けてあった果実酒もあつたらしく、それが文字通り消滅していたそうだ

特に『万能』ことアスファイとの結婚祝い用の酒は最近できた婚約者達の者と違い、3年前もから漬けてあつたものらしく

「「「っ!?!」」」

ゾツとした

・・・拘束された私たちの前でそれを語るカイト表情がヤバかった

無表情ではなく、怒りでもない

笑っているのだニコニコと

ただ笑顔からこぼれる瞳は第二級冒険者全員をゾツとさせるものだった

話が終わるとカイトは先程から作業していた何かを卓上の上に置いた

端的に言つて 黒い何か だ

臭いはしない・・・ただ何というか禍禍しいオーラだけは感じ取れる

それをカイトがフォークで突き刺す

サクつと小気味良い音がした

「ほれ、アーニヤ、腹減つてるだろ」

「んにや?なにやそれ食べ物なのかにや?」

「ああ」

「おおお、カイトの作るご飯は全部おいしからたべるにやー!!..:ちなみになんにや

それ?」

「暗黒物質」  
たましじやき

「んにや?卵焼き?え・・・やつぱ食べるのやmゲニヤ!」

拘束されたアーニヤの口にカイトが無理矢理黒い何かを突っ込んだ

「・・・よく噛んで食べるよ」

「んにゃ、変わった食感だにGGGGガゲエアアアアBOOOOOOOO  
OO!?!」

おおよそ乙女が・・・いや、人が発してはいけない声を白目を剥きつつ拘束されているため首だけを前後左右めちやくちやに振り回しながら叫ぶアーニヤ

10秒以上それが続くとピタリとアーニヤが動かなくなつた

あまりの光景に絶句していると

「んぎやあああああ!?!」

「「ヒイ!?!」」

動かなかつたアーニヤが断末魔の叫びのようなものを突如発してまた動かなくなつた

(死・・・いや生きてはいる?)

先程との差異をあげるとするならばかろうじて生きているのがわかる程度に痙攣していることだろうか

「ほれ」

次のターゲットは『黒猫』らしい

「ハハ、何にゃ? 毒でも食べさせる気かにゃ? 残念だけどニヤーには毒系は一切効かな

「ボニヤ!?!」

『黒猫』と呼ばれる暗殺者は毒を使うこともあると聞いたことがある、恐らくクロエは『耐異常』のアビリティが非常に高いのだろう

だが

「ペピエヨオオオオAオオオオオオあべべべべべべべべべべ!?!」

「安心しろ……こいつに毒性は一切ない……ただくそ不味いだけの暗黒物質だ……たぶん」

『黒猫』がアーニヤと同じように首を振り乱し錯乱したように叫びそして動かなくなり、絶叫し、また動かなくなつた

ちなみに先程から終始カイトは笑顔から表情が変わらない

それが恐怖感をさらに煽つた

「さあ、ここに<sup>たまじやき</sup>にある暗黒物質を全部食べきつてもらうからなあ?」

言われて卓上の黒い何かに目を向ける

コンモリ

小高い山ができるくらい積まれていた







端的に言つてちよつと寂しい、懐いていた気難しい子猫が独り立ちしてしまったような物悲しさを感じるがここはお嬢の人間としての成長や同年代でしかも同じ実力の友人ができたことを喜ぼう

・・・でもやっぱちよつと寂しいなあ

あ、そういうば他にもこの数年で変わったことがある

それが

「兄貴、訓練に付き合ってくれ」

「待ちなさい、カイトはこの後あたしに料理を教える予定があるわ」

「あ？ こつちが先だ」

「あ？ こつちが先に予定があるって言つてんだろが!!」

———これである。

目の前で長身の狼<sup>ウエアウルフ</sup>人とアマゾネスの少女が険悪な空気を発し始める

「テイオネ、言葉使いが戻ってんぞ」

俺の忠告にアマゾネスの少女がたじろぐ

「うう!?!」

「ハッ! ざまあねえな」

「うるせえ!!」

「テイオネ〜?」

「うぐぐぐぐぐぐ．．．うるさいわよ!!」

この数年で身の回りで変わったことが色々あるが、ファミリア内で案件を上げるとするならばこの状況だ

男の方は2年前に他のファミリアから改宗してきた狼<sup>ウエアウルフ</sup>人の『ベート・ローガ』ちなみ

にLv. 4

色々あつて今は俺の舎弟というこになっている

俺のことを兄貴と呼ぶのは．．．まあいいとして、面倒なことによく訓練をせがまれる

しかもただの訓練ではない、全力で俺を殺しに掛かってくる

そんなもんだから俺も上手く手加減できずいつも半殺し状態にしてしまう

だというのにこの二年間頻繁に訓練という名の死闘をせがまれる、最近はいつ実は極度のマゾヒストなんじゃね? と思ひ始めている。

いやだってこいつボコボコにしたあとに悔しそうな表情を浮かべた後に笑うんだぜ？

「とりあえずベートとの訓練は明日な、今日は先にティオネとの約束があつたからな」  
「ふふん」

「ぐぎ・・・ちつ・・・わーつたよ、ただし明日は必ず俺の相手してもらうからな」

「おう、三週間ぼつちでどれだけ強くなれたか見てやるよ」

「ハッ、兄貴こそ覚悟してやがれ」

そう言うところとベートは以外と素直に引き下がっていった

(まあ、言うことを聞くだけ大分ましになつた方だわな)

「さて、と・・・じゃあ調理場に行くか」

「おっしやあ!!やるわよ!!」

「ティオネ、『おっしやあ!』もあんまお淑やかな言葉じゃないぞ、『よし!』くらいにしとけ」

『よし!』やるわ!!・・・こんな感じ?」

「そんな感じそんな感じ」

ベートと対峙していたアマゾネスの少女、名前は『ティオネ・ヒリュテ』

先程、お嬢の話の時に話題に上げた『ティオナ・ヒリュテ』の双子の姉だ、双子の姉

と言つても二卵性双生児なのでまったく顔が一緒というわけではない、まあ似てるっ  
ちやあ似てるなあ、くらいだ。

つーか、親はどんな考えで双子にこんなややこしい名前をつけたんだ、当初は二人の  
名前を間違える奴が続出して慣れるまでが大変だったぞ

この姉妹、明らかな違いがあるとするとするなら中身・・・というか性格だな

どうしたらこれほど違うのかと思う程度にこの姉妹は氣質が異なる

妹のテイオナの方は一言で言えば天真爛漫、笑顔が絶えず元気ハツラツ！オロ○ミン  
C!!

姉のテイオネの方はぶつちやけ粗暴といった感じだ、言葉遣いはチンピラ、トラブル  
は口よりも手が先に出るタイプだった

「そんなやまずは——」

「団長の好きな料理！」

「——は料理の基本ができるようになってからな？」

「ぬう〜」

それが今やこれである

——恋は女を変える

アミツドという今や俺の嫁になった恋愛狩人<sup>モンスター</sup>を知ってはいたが、どうやらあいつが特別なわけではなかったようだ

目の前にいるティオネも恋をして激変した

あ、ちなみに惚れてる相手は笑顔の素敵な腹黒団長のフィンだ

何でもそのフィンに好みの女性を聞いた所、「お淑やかな女性」というティオネから大分かけ離れた答えを聞かされたらしい

当初はあまりに自分とかけ離れたフィンの好みに落ち込みはしたが恋する乙女は不  
死身のモンスター

すぐに復活し、言葉遣いから日常における所作までお淑やかな女の子とやらになるため鋭意努力中というわけだ

そして何故に俺がその面倒を見ることになったのか説明したい

何でもティオネがファミリア団員中に

「恋愛事の相談や花嫁修業をするなら誰か？」的な質問をしたら面白いすると

「「「「カイト」」」」

満場一致で全員が俺と答えたそうだ

・・・いや、なんでやねん！

ワタシオトーコ!!

一応他の奴らに文句を言ってみたら

「このファミリア内でカイト以上に料理が上手い奴がいるつすかね？」

「ふむ、私もカイト以上に紅茶を煎れるのが上手い者を知らんな」

「婚約者が居てしかも複数、これで恋愛事が苦手って言ったらあんた誰かに刺されるわよ」

上からラウル、リヴェリア、アキの意見だ

ぐうの音も出なかった

特に最後のアキの台詞に同意する者が非常に多く、中には血の涙を流す者も・・・  
「いや泣くくらいなら恋人作れよ」と軽く言ったら

ロキ・ファミリア団員の過半数に獣のごとき咆吼を上げながら全方位から襲われた・・・何故だ。

話を戻そう

そんなこともあつてとりあえず暇なときはティオネに料理を教えてやることにした  
 「うう・・・みじん切り面倒くさい」

「料理は手間と下準備をどれだけ掛けたかで味が変わる、文句をいわずやれ」

「一気に潰して混ぜれば一緒じゃないの？」

「・・・はあ」

ティオネの料理が上手くなるまでは先が長そうだ

|||||

《side:ティオネ・ヒリュテ》

テルスキュラ

女神カーリーが治めるアマゾネスのみで構成された国家

そこが私と妹のティオナの故郷

そこでは地獄のような闘争の毎日が繰り返されていた

同胞との殺し合い

唯一心を許していた者との殺し合い

絶対的強者による訓練という名の暴力

その悪夢がある日突如として終わりを迎えた

妹の「この国を出たい」その一言だけで

そんなことが許されるわけがないと思っていた

でも実際は違った

女神カーリーはあっさりと許可を出した

「出て行きたいなら出て行ってもいい、この門はいつでも開いているのだからな、出るも入るもおぬし達次第だ」

仮面を被った女神は何でもないとでも言うように私たちを解放した。

突然だった、突然すぎた。

国を出た当初の私の心内はグチャグチャだ、それまでの自分の境遇に憤りと虚しさ、そして己のどうしようもない暴力性を見せ付けられたようだった



でも――

「ディオネ見て見て！すごいよこっ！！」

それも能気な妹と旅をする内にどうでもよくなってきた

外界の全てが美しかった

妹に感化されたかのように私の澱んでいた心は徐々に浄化されていった。

テルスキュラを出た時点で私たちのレベルは2

外界ではこの強さは破格なのだそうだ

そのおかげで旅先でのファミリアからは全て歓迎された

中には私たちのことを快く思わない連中や世間知らずなのをいいことに騙して来る奴らもいたが全て力でねじ伏せた

そんなこともあるせいかな、どこに行っても腰を落ち着かせようと思う場所はなかった  
それでも悪い気分ではなかった、妹と共に世界を巡るのを私は楽しむことができるよ  
うになってきていた

そんな私と妹の旅はオラリオで終わりを向かえる





.....

団長は「お淑やかな女性」が好みらしいです☆

お淑やかか・・・よくガミガミ言ってくるあの副団長のエルフみたいなの？

私は少しお淑やかとは異なる

・・・うん、少しだけお淑やかとは違う、そう少しだけだ。

ちよつと野性味溢れているだけだ、個性だ。

むう・・・お淑やかとは・・・。

・ ・ ・ ・

自分一人の考えでは無理だと判断し周りの者に助言を求めた

少し前の私なら誰かに頼るなど絶対になかった

だが団長を射止めるためなら私は手段など選ばない、私の安いプライドなど犬に食わせてやる

その甲斐もあつて、お淑やか女性、とやらになるために必要なものが大体把握できた

一つ「言葉遣い」

二つ「所作」

三つ「料理などの家事スキル」

最低でもこの三つらしい

一つ目と二つ目はあのエルフを観察することで何とかかなりそうだ・・・だが・・・料理

理



とりあえず師が必要だ  
とびきりの料理の師が。

・ ・ ・

そんなわけで今度は「料理の上手い者は誰か」とファミリア内で聞いて回った  
すると全員が一人残らず同じ名前を挙げた

「カイト・・・そいつって男じゃないの？」

「男だとかはあんまし関係ないわよ？あいつ将来は料理店を出したいらしくて、暇な時  
間ができたときはよく飲食店で働いたり調理場で料理の練習してたりするわよ」

「ふ〜ん・・・まいつか」

男だろうが料理が上手いなら何でもいい

「疑わしいなら、ちようど今日がカイトの食事当番だから夕食はホームで食べてみたら

? いや〜カイトの食事久しぶりだから楽しみだわ」

アキという女の助言に従って夕食はホームで食べるためダンジョンに行くのを止めた

「あ、あとあいつ嫁が四人もいるから恋愛相談とかもできるんじゃないかしら?」

「え、嫁が四人もいるの!?!」

なんとも都合の良い者がいたものだ

・ ・ ・

「むぐむぐうまままま! ティオネ!! これすっごい美味しいね!!」

(・・・っ、確かに美味しい!!)

隣のティオナがガツガツと書き込むように食べる

出来れば自分もそんな風に食べたいがそれはお淑やかな女性がすべき行動ではない

ゆっくりと出来るだけ上品に――



「テイオネテイオネ!!これもすごく美味——」「うるせええええええ!!」  
隣の馬鹿がうるさくて怒鳴ってしまった、反省。

「私おかわりしてくるねー!!」

「はいはい勝手に行ってきなさいよ、ったく・・・それにしても——」

この一月ほどで何回もホームの食堂で食べたが今日が一番人が多い  
おそらく全員がカイトという男の作る料理が目的なのだろう

確かに非常に美味しかった

何よりその証拠として団長も美味しそうに食事をしていたのが見えた

あの笑顔を自分以外の者が作った食事で発していると思うだけで嫉妬してしまう

カイトが男で良かった・・・■サナクテスム

とりあえず目の前にある「ハツカツ」と「ミルフィーユカツ」という名の肉の揚げ物

と千切りの野菜、そして飲んだことのないミソスープなるものを食すことに集中する

歯ごたえのあるハツカツ

とろけるような食感のミルフィーユカツ

口がくどくなりかけたところで千切りの野菜を挟むことで口の中がリセットされる  
 気まぐれにミソスープを口に含めば少しのつもりがその独特の味と暖かさに飲む手  
 がとまらない

食事の前に教えてもらった米とおかずを同時に食べるという方法、最初は口の中で混  
 ぜるとか気色が悪かったが一度試してみたら止まらなくなった

(・・・っうまい!!)

結局妹のようにお替わりを二回もしてしまった・・・お淑やかな女性だっておいしけ  
 ればおかわりくらいするはずだ、ギリギリセーフ・・・のはず

(ぬう・・・でもこんなおいしいのが作れるようになれば淑女へ近づける！)

改めてカイトという人物は料理を教わる上でまちがいなく最上の師になるとわかっ  
 た

・  
 ・  
 ・

全員が食事を終え食堂の人口密度が減り始めた頃

私はカイトに料理を教えてくれるように直接頼みに行った

ちなみに場所は食堂の隅っこだ

何でも食後はとある条件をクリアした者達にだけデザートが振舞われるらしく、これはカイトが食事を作るときの通例らしい

それで頼んでみたら――

「断る」

「何で!?!」

速攻で断られた

副団長のエルフと数名に見たことのない色の紅茶とこれまた見たことのないデザート? を振る舞うのに忙しいのかこちらを見もせずに言つてきやがった

「俺にはそんな暇はあまりないんだよ、ただでさえ最近はずはベートの奴が強くなつてきて相手するのが大変だしダンジョンに料理のバイト、ファミリアの会計も任されてるし、フィン達の書類整理と嫁達とのデートとかで忙しい・・・つーか何で俺なんだよ」

「だって・・・」

カイトの最後の方によくわからない用事もあつた気がするが、とりあえず他の者達が料理を学ぶならカイトが一番であるということを教えてもらったことを告げる

「いや・・・その評価は嬉しいが他にも料理が上手い奴いるだろ?」

「そこを何とかお願い!!」

「現実的に無理」

「ぐぬうううううう」

どうやってカイトを説得すべきか悩んでいるところに助け船が来た

「このファミリア内でカイト以上に料理が上手い奴がいるっすかね？」

「ふむ、私もカイト以上に紅茶を煎れるのが上手い者を知らんな」

よくカイトと共に居る地味な男と副団長のエルフだ

「おい」

その言葉にカイトが余計なことを言うなどでも言うかのように二人を咎める

「別にいいのではないか？ この子はベートと同じで少し落ち着きがないようだから、お前が料理を教えながら色々教えてやればこちらとしては手間が省ける」

「えー．．．そんな時間がねえんだけど」

「なら新人の情操教育ということで書類仕事は．．．ラウルお前がやれ」

「うええ!!俺っすか!?!．．．うわくやぶ蛇っすよこれ、余計なこと言うんじゃないっす．．．」

「安心しろ、言い出しっぺの私もできる限り手伝う」

「おい待てや、何でドンドン話が進んでんだよ．．．はあ」

それを聞いたカイトが仕方がないとも言うよう長いため息をついた

「わーっただよ降参だ・・・ティオネ、暇なときだけだからな」

「よっしやあ!!」

エルフの口ぞえも会って何とかカイトに料理を教えてもらえることになった

「えつと・・・リヴェリア・・・でいい?」

「ん? いいぞ どうした?」

「・・・その・・・あり がとう」

「ふふ・・・なに、良く変わろうとしている者を無碍にするのは勿体無いのでな、頑張るといい カイトの教えは厳しいぞ?」

感謝の言葉を言う等いつ以来だろうか、恥ずかしくてどもってしまった

だというのにこのエルフは何でもないというように言ってきた

上から目線の言葉に普段なら腹の一つでも立てていたかもしれないが、今の私にはどうでもいい

(これで、団長の言う「お淑やかな女性」に近づける!!・・・あ、そうだったそれともう一つの方もついでお願ひできるかな?)

「カイト、ついで程度でいいんだけど恋愛相談もお願い」

「・・・はっ」

鳩が豆鉄砲でも受けたかのような顔をされた

「いや、それこそ何で俺だよ、そういうのは同姓に相談するもんじゃないのか？ 恋愛事とかあんまし得意じゃないんだが・・・」

「「ハア~~~~~」」

そう言うカイトの後ろで全員がクソでかいたため息をついていた

「な、なんだよ」

「あのねえカイト？・・・婚約者が居てしかも複数、これで恋愛事が苦手って言ったらあんな誰かに刺されるわよ・・・ほら」

「うう・・・カイトさんには美人な女の子が四人」「俺、恋人出来たこともないのに嫁とか・・・」「カイトって結構無自覚で女を墮とすんすよねえ」「ああ・・・わかるわかる」「なんで私には相手がないのか」「くう！これが神々の言う所の『リア充爆発しろ！』という奴か」「・・・私も彼氏とか欲しい」「そうねえ・・・できれば冒険者以外でつて条件だけどね」

そう言ってアキが目線に向けた先には涙を流しながら肩を組む男どもと少数の女の



「せっかくの緑茶と私の白玉ぜんざいに埃が付くだろうが!!」

・・・怒った理由がこのエルフにしてはしよぼかった

今更だが大丈夫かこのファミリア・・・団長の気苦労が忍ばれる。

・・・うん、団長の心労を取り払うためにも美味しい料理を覚えよう!

《side out : テイオネ・ヒリユテ》

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||



## 43：姉妹×舎弟 後編

||

《side:べート》

08年○月△日 天気：怒り

イライラする

イライラするイライラする

イライラするイライラするイライラする

イライラするイライラするイライラするイライラする

周りの雑魚共にイライラする

何故こいつらは弱い

何故ヘラヘラと笑っていられる

何故もつと力を渴望しない

そんなだからあいつも死んだんだ

「ベート・・・すまない、だが」

・・・うるさい黙れ

俺の行動に雑魚が口を出すな

雑魚もヴィーザルも引っ込んでろ

俺の視界にも入るな蹴り殺すぞ

08年○月◆日 天気：哀愁

ヴィーザル達がオラリオを出た

俺にはもう関係ねえ

居場所もないのが少し困るくらいか

いや、居場所はある

ダンジョンだ

今より強くなるにはそれしかねえんだ

08年○月◆日 天気：暇

最近はソロでダンジョンに挑むか街で喧嘩しかしていない  
それでもしなければ俺の怒りが収まらない

誰か

誰でもいい、自身でも言葉にできないこの感情をどうにかしてくれ

08年〇月◆日 天気：死線

死にかけて

ダンジョンではなく街中で

生まれて初めてだ

圧倒的強者に出会い、歓喜のあまり痺れたのは

妨害してくる第一級冒険者数名を掻い潜り、四肢を砕かれようと俺の首に牙を突き立てたあの姿

理性と本能を超えた鋼の意思を持って俺を殺そうとするあの姿は俺の名もなき感情を恐怖で塗り替えた

そうだ、強さとはこうあるべきだ





08年〇月◆日 天気：我慢解放

「さすがにカイトに身内殺しをさせるわけにはいかないからね」

「お前らは世話が焼けるのう」

「胃が・・・痛い」

フィン達が見かねて今回の兄貴を説き伏せることのできるという女を連れてきた  
ババアは何で腹おさえてんだ、あの日か？

つーか誰だこの眼鏡女？

「初めまして、カイトとあなたを取り持つために『勇者』<sup>フレイバー</sup>から頼まれて来ました」  
・・・はあ？

何言ってるんだこの女は？

兄貴の女だった

兄貴の女、いやアスファイの姉<sup>あね</sup>さんが間に入って兄貴と俺の間を取り持ってくれた

「・・・わかった、こいつを舎弟にするってことで認めてやる・・・色々こき使うからな  
覚悟しろ、まあついでの訓練くらいには付き合つてやる」

「うっす!!」

「ま、これでとりあえず一件落着ですね」

すげえ、あれだけ荒ぶつてた兄貴を説き伏せてくれた

かなり最後の方まで兄貴は粘っていたがアスフィの姉さんが最後によくわからん脅し文句を言うとアツサリと引き下がった

「五人目とかどうですか？」ってどう言う意味だ？

何故あれで兄貴が引き下がったのかわからんが・・・まあいいか

少し問題があるすればこの話し合いの前、アスフィの姉さんに条件を突きつけられた

ことだ

しかも兄貴に内密でだ

何でも兄貴には現状アスフイの姉さんを含めて4人の女がいるとのことだ

そのことに驚きはない、強い雄に複数の雌がいるのというのは当然だ

さすが兄貴

話を戻そう

兄貴には複数の女が居る

そのため、もしもその4人以外の女の影があるようなら兄貴に内緒で密告してこいとのことだ

おそらく姉御はこれ以上兄貴に女が増えないようにしたいのだろう、まさか逆に兄貴の女を増やすためとか……いやいやいやないない、さすがにそれはねーわ

はあ……結構めんどくさそうだな

だが兄貴に許してもらえただけではなく舎弟にもしてくれするように計らってくれたアスフイの姉さんには兄貴以上に逆らえねえ……



「……」ニコリ

……こええ

09年○月△日 天気：困惑

「切るときは刃じやなくて獲物の方を動かせ」

「……わーつてる」

舎弟になってからしばらくして兄貴からへりくだったような話し方はキモいから止めろと言われた

今ではそこそこ碎けた話し方になった、こっちはその方が話しやすいから助かる

ちなみに今やつてるのは戦闘

ではない

「料理は下準備が命だ、ただの野菜と侮るなよ」

「……………」

たまにやる兄貴の料理の手伝いだ

「料理は戦闘に通じる部分がある、気を抜くなよ」

「……ああ」

最初は馬鹿にしていた兄貴のこの台詞

割とマジだった

さっきの台詞もそのまま戦闘に転用できる、敵を自分の都合のいい場所や立ち位置に誘導してから斬った方が楽だった

下準備のことは言わずもがなだ

ダンジョンへ行く際には細かい初歩的なことの方が抜けがちになる

解毒薬を忘れた状態でパープルモスの毒を浴びたときは生きた心地がしなかった

それと意外な福次効果なのが芋や野菜類の皮を綺麗に向けるようになってから地味に剣技が上手くなった、何となくだがこういう風に斬れば綺麗に削げるといのが戦闘中に分かるのだ、兄貴曰く「斬線が見える状態」という奴らしい、この斬線に沿って切れるようになればあまり武器を痛めずに長時間の戦闘が可能だとか

「うっし、皮むき終了」

(相変わらずどんな早さしてやがるんだ兄貴は・・・)

俺の皮むきはまだまだ兄貴ほど上手くはないしスピードもまだまだ遅い

刃物の扱いがまだまだ未熟の証拠だ

兄貴が剥いた芋の皮には一切の実の部分を残すことなく終わっている

何をどうやったたらこんな芸当ができるのか

こういった繊細な刃物裁きも兄貴の強さの秘密なのか？

「さーてと、次はマヨネーズでも作るかね」

そう言って兄貴が義手の手首を外す・・・つかそれ外れんのかよ

「よいしょ、っと」

そう言って手首から先に泡だて器の様な・・・というか泡だて器だ

そいつをカチリと義手の手首にはめ込んだ

「ポチつとな」

高速で回転する高音が周囲に響く

泡だて器が目にも止まらぬ速さで回転していた

・・・なんだそれ

「ふんふんふん」

鼻歌と同時に兄貴が手首から先の泡だて器を使ってボウルの中にある卵と油をかき

混ぜ始めた・・・

そういうやこの前はダンジョンの中で飯を作る際は指先から火を出してたな  
何だあの義手、便利すぎねえか？

この作業の後に兄貴と同室のラウルから聞いた話だがあの義手はアスフィの姉さん  
を含めた兄貴の嫁総出で製作した超がつくマジックアイテムらしい

兄貴の女はほぼ全員が何かしらの専門家

その全員で製作したというあの義手

俺も恥を忍んで何かしらの装備を頼んでみるのもありかもしれないな

09年○月△日 天気：奮闘

兄貴との訓練がエグイ

試合と違って訓練になると兄貴は鬼になる

終わりはない

最低でも何か一つができるようになるまで続けられる

気を失おうが立てなくなろうがお構いなしに訓練は続行される

例えば本当に精魂尽き果てて倒れようにも兄貴の女の一人である治癒と回復の専門家による特別ポーションで強制回復させられる

これに付いて来れる人間は少ない、途中で必ず大勢の脱落者が出る  
その証拠に今現在立っているのは俺だけだ

周りには意識のない奴らの死屍累々が転がっている

「ベート、お前さんもギブアップか？」

ハッ、なめんなこの程度で誰が音をあげんだ

俺をそこら辺の雑魚と一緒にすんな

「いい根性だ・・・行くぞぞ？」

その瞬間に全身の肌が粟立つ

クソがつ、必ず最後まで喰らい付いてやる

09年〇月△日

天気：超奮闘

最近、兄貴の周りにチヨロチヨロとうぜえ女が二人増えた

一人は兄貴に料理を教えてもらっているティオネ、こいつのせいで訓練の時間が心なしか減った

今も兄貴が調理場から席を外した後も野菜の皮を必至に剥いている

「・・・ぬぐう」シヨリ・・・シヨ・・・リ

うっわ、皮むき遅え・・・そうだ ニヤリ

意趣返しに少しいことを思いついた

ティオネからよく見える位置にスタンバイ、余裕顔でスルスルと皮むきを試してみる

「っ!？」

そして俺の意外な料理の手際の良さに驚くティオネ

こっちはティオネの手元と芋の身が残りまくりな皮に目線を向けて

「ぷw」

とどめの笑い

「うがあああああ!!」



テイオネの方もババアのあまりの怒気に顔を引きつらせている

「二人とも・・・食事の前に少し運動でもしようか」

その後、デザート中止の報を受けたりヴェリアのババアにテイオネ共々ボロボロと  
いうか魔法でボロボロにされた

L v. 6 の動きで並行詠唱されるとまじでヤベエな

「お前らが！私の炎で！禿げるまで！魔法の詠唱を止めない！！」

「!?」

ババアの魔力が疲弊するまで死ぬ気で回避し続けた

・  
・  
・

一時間後、訓練場にはボロボロの俺とテイオネの姿があつた  
おい、テイオネ

「・・・なに」



調理場での喧嘩は無しにしようぜ

「そうね、二度としないと誓う」

体中に焼き焦げた後を残しながら俺たちは限定的な休戦協定を結んだ

09年○月△■日 天気：隠密

「カイトカイトー!!」

「のっわ!! おいこらティオナ! 急に乗ってくるな!」

歩いていた兄貴に後ろから飛び乗り肩車を無理矢理してもらっている女

ティオナ

俺的にはティオネよりもこいつの方がうぜえ

なにせアスフィの姉さんから

「ふむ、ティオナ・ヒリユテですか・・・これは姉の方よりもワンチャンスあり? でしよ  
うか」

ワンチャンス？何のことだ？

「……………」

しばらく黙考した後、いつもと同じように

「…………では監視を怠らないようお願いします、今回のように何かあれば報告を」と厳命されている

そのせいでこいつが兄貴と接触するたびに色々な意味で心臓に悪い

別にテイオナの方を心配しているわけじゃねえ

どちらかといえば兄貴が俺の報告後にどんな目に遭わされるかの方の心配だ

アスフィの姉さんはあまり直接的なことはしてこないがジワジワと精神を削るようなことをしてきそうだからな……兄貴の舎弟としてそれくらいの気配りは見せたいのだが

「カイト……!!またカイトのご飯食べたーい!!」

「また今度なー」

「え……!!次はいつなの……!!?」

「時間ができたらだなく、後は食材が朝の市にあるかどうかとかタイミングが難しくくな」

「ふーん・・・じゃ、いや！アイズと遊んでこよーっと」

「おう、お嬢とダンジョンに行くのはいいがあまり遅くなるなよ」

「わかつてるってー、じゃ行つてきまーす」

「おーういつてらー」

去り際に俺とテイオナの目が合う

「べ〜〜」

舌を出してガキ臭い挑発をしてから去っていった・・・うぜえ

アスフィの姉さんから報告しろとは言われてはいるが二人の会話を聞いてると報告とかいらねえ気がするんだよなあ

兄貴とテイオナの会話は近所の兄ちゃんとそこら辺の娘にしか聞こえねえ

つーかあいつは頭が空つぽの愉快的アホ女にしか見えねえし、そういった男女の心配とかいらなくねえか？

そんなことを考えていると兄貴がこちらを見ながら面白そうに

「お前ら仲いいなあ」

なんてわけのわからん言葉を投げてきた

いや何でだよ、今のやり取りのどこをどう見ればそんな感想が出て来るんだ

「いやいや、喧嘩するほど仲が良いって諺があつてな？」

マジかよ、物騒すぎるだろそれ

「確かに、言われてみれば仲が良ければ喧嘩なんかしないよな・・・改めて言われると変な諺だなこれ」

どーでもいい、それよりも――

「おう、約束通り試合の相手してやるよ」

ハッ！今日こそ一撃といわず百発蹴り込んでやんぜ！！

「ふっ、そいつは楽しみなこって」

結局この日

陽が暮れるまで兄貴に一撃入れるどころか立てなくなるまでボコボコにされた  
だが、それでこそ兄貴だ

これでいい

目指すべき強さ

挑むべき強さ

憧れる強さがそこにあるのは、そうだな・・・楽しいと言っている

追い抜いたとき兄貴がどんな顔をするのか楽しみだからな

必ず追いつく、そして追い抜くこの壁を。

10年○月△日 天気：我武者羅

・・・うつぜえ

最近まくた兄貴の周りに女が増えた

今度は女弟子らしい

料理の弟子であるティオネと違い今度は冒険者としてのマジの弟子

新規で新しい団員を補充した際にそいつの才能をババアとロキが見いだして兄貴とババアでの共同弟子つてことにしたらしい

・・・うつわ、だつりい

これ報告しなきゃダメだよなあ・・・これでまくたアスフィの姉御に報告する内容が増える

あゝ面倒くせえ

報告をサボりたいが姉御には俺が現在使ってる装備、特殊装備『銀靴』の件で世話になったせいでさらに逆らい難くなった

・・・とりあえずダンジョンに行くか

ムシヤクシヤして体を全力で動かしや、ちったあ頭もスツキりするだろ

報告はその後だな

ったく、世の中つてのは思い通りに動かねえ

せつかく俺もL v. 5になれたつてーのに兄貴に至つてはその後すぐにL v. 6になりやがった

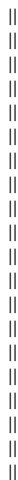
あー！クソつまんねえ!!

ようやく一撃入れられるようになった途端に元に逆戻りだクソが!!

だが



## 44：珍客×屋台



オラリオの東部・第二区画、ここはギルド管轄の建物が多く存在しその中には巨大闘技場も含まれる

オラリオの観光目玉の一つでもあるここは常に何かしらのイベントが開催しており都市内の住民や観光客等で賑わっている

そのため、そういった客を狙って数多くの屋台が道なりに並んで商売に励んでいる  
ただしそれは日中の話だ

陽が暮れると共に屋台は撤収を初め完全に陽が落ちるとともにその喧騒を第三区画の色町・風俗街と第六区画に存在する多数の酒場・宿屋に明け渡す

夜の帳と共に第二区画は闇に包まれる

街灯の明りも最低限しか設置されていないためほんの気休めでしかない



そんな暗闇にポツンと明りを発するおでんをメインとしつつ様々な料理を出す屋台があった

ここは知る人ぞ知る隠れ屋台『狩人狩人』

都会の中にあつて都会の喧噪から離れられる個人屋台である。

|||||

「邪魔するぞ」

「らっしやくい・・・って、久しぶりだなおい」

暖簾のれんから久々に見えた顔に屋台の店主が驚く

「それは偶にしか店をやつてないそつちが悪い」

「はは、確かに・・・いつものか？」

「ああ、頼む」

見目麗しい女性、姿や装備から冒険者だとわかる

そんな彼女の正体はLv. 5の第一級冒険者にして都市最多の構成員を誇るファミリアを束ねる女傑

ガネーシャ・ファミリア団長【象神の杖】アインクローシャ シャクティ・ヴァルマだ

彼女は偶にしか開いていないこの屋台を見つけた場合は必ず食事に来るプチ常連である

「ほい、おまちどう、酒は辛めの熱爛あつかんな」

そう言つて慣れた手つきでシャクティの好きなおでんの具を選別して酒と共に出してくる

「ああ、頂こうか」

味噌と言われるあまりオラリオでは使われない出汁の染み込んだ煮物をさっそく口にする

「ん……」——相も変わらず美味だ」

食べ慣れていないはずの味なのにどこか郷愁を思い起こさせるこの味にシャクティは嵌まっていた

(この前食べた醤油ベースもいいがやはり味噌ベースの味の方が好みだな、心に染みる) 久々のホツとする味を堪能する

「ほれ、お酒」

そう言いながらシヤクテイの持ったお猪口に店主が酒を注ぐ

「……ん、すまない」

注がれたピリリと辛目の熱燗をクイツと飲み干す

「ふう〜〜〜〜……」

夜の寒さも相まって暖かい食事と熱燗は旨さを倍に感じさせるだけでなく身体を芯から温めてくれる

(ああ……. . . . .やはりいいなここは、何も気にしなくていい)

上位派閥の団長として顔が売れすぎた彼女はその美貌も相まって外で食事をしようものなら必ずと言っていい程人目を引いてしまう

別にそのことを彼女は気にしない

それで犯罪や飲食店でバカをする者達への抑止力になるのであればそれは「民衆の平和を守る」という主の神意に沿ったものだと思っているからだ

だが、いくら気にしないからと言っても彼女は人間だ、積もる思いや鬱憤と言うものは堪っていく

ここは日々の雑務や大勢の団員を率いることに疲れた彼女が人目を気にせずに飲める数少ない店だった

(ふっ……. . . . .)を見つけることができたのは幸運だったな)

久方ぶりの旨い料理と癖になる酒を飲みながらこの屋台との出会いを何となく思い出す

・ ・ ・

彼女の所属するファミリアの主神ガネーシャは『群集の主』と名乗る通り民の平和を尊ぶ

そのためファミリアの主目的は都市の治安維持が主になる

ある日シャクティは仕事を終えた後も人通りの少ない第二区画の警邏を行っていた

(・・・ん?)

すると見慣れない屋台が目に入った

(こんな人通りの少なくなつた夜の第二区画で屋台?)

『グ~~~~』

(お腹が.....そういえば夕食がまだだったか)

少しだけ怪しさを感じつつも忙しさの余りに食事を抜いていたことを思い出す

様子を見るついでに問題がなければそのままここで食事にしてもいいかと思い、屋台の暖簾をくぐった

暖簾というたった一枚の布を超えただけで己の鼻孔に食欲をそそる香りが優しく飛び込んでくる

単純な油物を扱う店では決して出せない芳醇な料理の香りに自然と頬が緩んでしま  
う

(・・・これは味に期待できそうだ)

香りを嗅いだだけでこの店が正当な料理を出す店だと確信

もはや当初の念のため怪しい店の確認を行うという考えは吹き飛んでいた

「らっしや〜い」

目の前の四角の鍋を幾重もの仕切で囲った特殊な鍋を突いていた店主が顔を上げて  
出迎えるが

「・・・は？」

「あれ？」

そこで意外な人物に出くわした

「・・・何をしているのだお前は」

「・・・そつちこそこんな時間にここで何してんだ？」

変装のつもりなのかいつものトレードマークの帽子を黒いバンダナに変え、垂れ流しにしていた長い白髪も後ろで一本に束ね、今や本人の代名詞の一つでもある銀の義手も長袖と黒い手袋によって隠されていた

彼を知らぬ者であれば少しの変化といえど気づく者は少ないだろう

だが、面識のある者が見れば一目瞭然で分かる程度の変装だった

「先に質問したのは私だぞ 『<sup>ジョーカー</sup>切札』」

「見りゃわかるだろ・・・屋台だよ」

屋台の店主は最近ではロキ・ファミリアの中核メンバーの一人であると認識されている男

カイトだった。

・ ・ ・ ・ ・

(・・・あれからもう一年か)

「ほい、追加の大根」

「うむ・・・ふ・・・うむ・・・あつふいハフハフ」クイツ

当時のことを思い起こしつつクイツとお猪口の中身を飲み干しつつハフハフとおでんに舌鼓をうつ

少し前のことを思い出したからか、話のネタとして素朴な疑問が浮かび上がる

「そういえば聞いたことがなかったが、この屋台は普段どこに置いているんだ？」クイツ  
「普通に自宅に置いてるな」

「自宅？ロキ・ファミリアに置いてるのか？」クイツ・・・カラツポ

「いや、実は嫁と俺の五人共同で工房兼家みたいなのを借りててさ、そこに置かせてもらってる」ハイ・・・オカワリ

「クツクツクツク、何だ？愛の巣というやつか？まったくこれだから女垂らしは」ゴクリ  
ゴクリ

シヤクテイ・ヴァルマ

年齢⇨彼氏なしの僻みひがみからか酒を飲む手が加速する

「いやちげーよ、元々俺の義手を作るために借りてた工房が五人で集まるときに思いの外便利な感じだからさ、そのまま軽くりフォームして使い続けてんだよ」

「逢い引き用の家というわけか、つまりヤ○部屋だな？ ヒック」ゴックゴック  
 僻ひがみみが加速、お猪口ではなく熱燗からそのまま直接飲み始める

「ち、ちがうわい！ 一応言っておくけどこの屋台も五人でトントンカンテン仲睦まじくその工房で作ったものなんだぞ!？」

「なるほどな、トントンパンパンと子供もつくつてる、と」グビリグビリ

「ちが・・・くわないかもしれないけどもつと言い方気をつけるや!?!あとラツパ飲みは危ないから止めようね!？」

「どくせ避妊は『戦場の聖女』ディア・セイントの特製ポーシオンでバツチシなのだるおく? ヒック」

「大分お前さん酔ってるな!？」  
 普段のシャクティからは決して出ないような下ネタとボケの連発にカイトの突っ込みが止まらない

「酔ってらい酔ってらいぞ」

そう言う彼女の顔は紅く、目は据わり呂律が回っていない・・・説得力はゼロである  
 「酔ってる奴は大抵そう言うんだ・・・つーかさつきからガブ飲みしすぎ、こいつは  
 チョビチョコビ飲むようだからかなりアルコール度数高めなんだぞ?？」

「わらつれるゾ」ヒック グビリグビリ



「分かってねえしベロンベロンじゃねえか」

「なら酒の代わりに何か一品くれ」

「はいはい」

そう言っておでん以外のつまみを作り始める

ちなみにこの屋台、前世持ちのカイト監修による鍛冶氏・椿と魔道具製作・アスフイの合作ということもあって無駄に便利な機能が盛りだくさんだったりする

縮小版石窯

飲料水の貯蓄及びミニ台所排水機能完備

移動が楽になるよう車輪部分にはサスペンションを搭載

さらに簡単な変形機構等々

カイトも『嫁達とのんびり日曜大工☆』みたいなノリで色々組み込んだせいで義手の『銀腕』とはまた異なる意味でのオーパーツの塊となっていた

完成したときは全員で達成感を噛みしめ、嫁達との良い交流だった、と思いはしたが・・・後々考えると結構不味い知識を教えたしまったような気がすることに冷や汗を掻いた

「・・・正直途中から楽しさ優先でやりすぎた」とはカイトの弁である

間。

そんな多機能屋台で一品作る間

カイトの調理音とシャクティの食器音のみが聞こえるつかの間の静寂の時間が訪れる

それは気まずい沈黙ではなく、心地のよい沈黙  
静寂を楽しむ大人の余裕を感じさせる時間だ

(あ、そういやこの前——)

そんな静寂の中ふいにカイトは最近聞いたシャクティに関する噂話を思い出した

「そういや噂で聞いたがお前さん、妹分ができたんだって？」

「ん？・・・ああイルタのことか、妹分といつてあれはなあ・・・無理矢理義姉妹の契りとやらをさせられた上で姉者姉者と懐かれていますらけらぞ」

「いいじゃねえか、うちのベートと交換してくれ」

「絶対にイヤだ」

ベートの気性の荒さは今やオラリオ中の冒険者達の間ではかなり有名な話だ、  
どんなじやじや馬でも所詮は馬、あの凶狼には敵うまい  
ただ

カイトは意味もなくこの話を切り出したわけではない

「そうかい?・・・——————————————————————————————————  
なんとなく今日のアンタを見てそのイルタつてのに姉  
と呼ばれるのが嫌なのかと思っただがな」

「っ!」

頻繁に交流はないが数年という短くない付き合いからカイトはシャクティの奇妙な  
雰囲気を感じていた

「お前さんが飲み過ぎるのは大抵そういうことがあるときだけって気づいてるかい?」

言われたシャクティは間の抜けた顔を晒してしまいカイトの言葉で深く酔っていた  
意識も大分覚めた

「そう なのか、・・・ふふ・・・知らなかったな」

「まあ、ウソなんだが」

「ウソかい!!」

「H A H A H A! カマをかけたただけだ」

カイトは彼女が何かを悩んでいることを察してはいたがさすがにそれが何かは断定できなかつた

そのため思わせぶりな発言をすることで自然とシャクティから悩みの正体の言質をとつたのだ

「くっ・・・お前最近フィンに似てきたな」

「げふっ」

それを聞いてカイトが盛大に顔をしかめる

「マジで止めろ、あの腹黒シヨタに似てきたとかショックすぎる、俺はもつとピュアでいたい」

「そうか、なら残念ながら手遅れだ」

「うわあ、不治の病を宣告された患者の気持ちが今わかった気がするな・・・で？」  
「・・・何がだ」

「何か不満・・・というかモヤモヤしてんだろ、大方、姉と呼ばれるせいでアーデイのことも思い出すとかかだろ？」

アーデイ・ヴァルマ

シャクティとは血の繋がった実の妹であったが、数年前に闇派閥との抗争で相手側の

爆弾攻撃によつて爆殺された少女だ

彼女の遺体は文字通り跡形もなく爆散しており、まともに埋葬すらできない状態であつたという

当時のカイトは任務上アーデイともそこそこの交流もあつた

アーデイの訃報を聞いたときはかなりのショックを受けたものだが、実の姉であるシャクティの受けた衝撃とは比べもならないだろうということを理解していたためあまり彼女の前では話題に出さないようにしていた

あれから数年経ち心の傷も時間が薄れさせた今だからこそ話題に上げることができた

「……その察しの良すぎる思考は本当にフィンとそっくりだな、察しが良すぎて――

――逆に腹が立つ」

「理不尽すぎない?」

「理不尽なものか、大体なお前らは――」

そこからシャクティは酒の勢いもあつて日頃貯まっていた鬱憤や愚痴を吐き出し始める

日頃の激務、市民からの苦情、団員からの陳情

そして最後にシャクティを姉と呼ぶイルタのこと

「イルタは悪くない……これは私の一方的な思い込みのようなものだ」

そして、だからこそどうにかするのが難しい

酒を飲む手がすっかり止まってしまったシャクティを見てカイトがポツリと言葉をこぼす

「そのイルタつてのを通してアーデイを思い出すのはやつぱ辛いかな？」

「……そう……だな」

「アーデイを思い出したくないってわけじゃないんだろ？」

「当たり前だ、あいつのとの思い出は嫌なことばかりじゃない、むしろ――」

シャクティは思い出す

そして今更ながら気づく

最後の別れが突然すぎたこと、そしてその別れ方があまりに酷すぎたせいで妹との思い出が辛いことや悲しいことに感じてしまっていたが妹とはそんな負の記憶ばかりではない、それよりももっと多くの楽しかった記憶や共に笑い合った暖かい記憶の方が圧倒的に多かったことを

「むしろ楽しかったことの方が多い」

そう言うシャクティは心の靄が晴れたかのような表情になっていた

それを見て屋台の店主はニヒルに笑う

「ならいいだろ、俺の尊敬する医者曰く——人が真の意味で死ぬときってのは『人に忘れられた時』らしいからな、せめて姉であるお前の中だけでも妹を生かしておいてやれ……あーでも勘違いするなよ？妹の記憶に引きづられろって言ってるわけじゃないからな」

クサイ台詞を吐いたせいとか少し恥ずかしそうに言ってくる

それがシャクティには少し嬉しくて非常に面白かった

「ぶつくつくつくつく、なんだ？もしかして元気付けてくれているのか？私に浮気するなら嫁達に密告するぞ？」

「やめれ、しがない屋台の店主から常連客への接待みたいなもんだよ。」

だから本当マジのマジで密告とかヤバいんで止めて下さい」

ちなみにカイトが恐れているのは怒られることによる恐怖ではなく、嫁をさらに増やされる恐怖である

カイトの脳内で現嫁達が『こいつも嫁にしてやろうか？』と、どこぞの閣下の様や言ってくるヴィジョンが見えた

「ふふ……冗談だ、ここまで笑ったのは久しぶりだ、おかげで今後イルタを見るたびに妹を思い出しても大丈夫そうだよ」

「むしろアーデイのことを思いださせてくれるのなら、そのイルタって娘に感謝しとけ」  
「そうだな、そうなるよ……いいな」

「なれるさ……ほれ、酒のおかわり」

根拠もなく言い切るカイトの言葉を注がれた酒と共に飲み込む

「……美しい」

同じ酒であるはずなのに心なしか先ほど飲んだものよりもおいしく感じた

「ほいお待ちどう、俺特製の一品料理『オラリオ風 揚げ出汁豆腐』だー！」

注がれた酒を楽しんでいる間に先ほどから作っていた一品料理が出てきた

「ふむ……初めて見るなこの料理は、まあお前が出したんだから美味であろうことは疑わないが」

「おう、ようやく最近味を再現できてな」

「再現？どこか別の場所で食べたことがある料理なのか？」

「え、あく……まあ故郷の料理の一つ……みたいなものかな？ そいつをこつちにあげる具材で再現してみたんだよ、まあ微妙に味が違うが美味しいことは美味しい」



「ほお、さつそく頂こうか」

少しトロリとした蜂蜜のような餡に浸かった揚げ物

それを箸ではなくナイフとフォークで切つていくのは西洋文化であるオラリオの御  
愛敬

(.....おお)

切りにくい外側の衣と違い切ると柔らかい白い実が露わになる

それを餡に付けて口に運ぶ

「あつふい、はふはふ」

(うむ新食感だな、そしてやはり美味しい！)

餡は甘辛系統そして油の衣が付いていることで淡泊な豆腐の味を二重にフォローしている

(おお、これはっ.....!)

無意識に辛めの酒の入ったお猪口に手が伸びる

(酒！飲まずにはいられない!!)

甘い餡にカイトの用意した辛口の酒が非常に合う！

酒を飲んだことで辛くなった口にまたしても揚げ出汁豆腐を投入

甘い旨い、辛い美味しい、甘い旨い、辛い美味しい

無限ループが止まらなくなってしまっていた

そんな至福の無限ループの中で

「あつふあつふ……うん、さすが俺の作った新作料理、美味しい」

目の前の視界に同じ物を食べているカイトが映り込んできた

「……何で店主が客と同じ物をわざわざ目の前で食べてるんだ」

「いやわざとじゃねーぞ、具材の関係でこいつを作るときは四人分作ってるんだよ、暖かい飯つてのは美味しさに持続時間があるからな、美味しい内に食べないともつたいないんだよ、謂わばこれは食材を無駄にしないための仕方が無い作業の一つだな、うん仕方ない仕方ない」

店主なのだから黙って接待でもしておけという文句を飲み込む、その代わりに――

「残りは何人分あるんだ？」

「え……俺の夕食なんだけど」

「全部よこせ」

「え……」

この日

心の霨が晴れたシャクティは酔いつぶれるまで全力で食事と酒を楽しんだ

普段の仕事の気苦労を知る店主は陽が昇るまでそれに付き合ってた。

《後日談》

「オラリオ・新聞」

『切札』<sup>ジョーカー</sup>五人目の新たな嫁か!？」

相手はなんとあの超大手ファミリアの美人団長S

『切札』<sup>ジョーカー</sup>がS氏の本拠に二人で朝帰りしていく姿が目撃されたとのこと

状況から美人団長S氏の主神ともそういった話を通っている可能性も高いとのこと

関係者からのコメントに寄れば「私が○○○○だ!!・・・え?○○○○が嫁に?・・・えナニソレ」や「馬鹿な!?姉者が!?姉者がああーうわああん」等々、衝撃を受けており

こんなことがあったとかなかったとか

とある某所・某時間でも

そんな新聞を笑顔で突きつける美女と

「………カイト？」ニッコリ

突きつけられて顔を引き攣らせる男が

「いや、違う！違います!?!酔いつぶれたあいつを背負って運んだだけで——」

「五人目イツとききます？」

「イヤアアアアアアアアアアアア!?!」

いたとかいなかったとか

## 弟子とスパルタ教育 地獄編

## 45：手刀×暗殺

《side：動体視力に定評のある暗殺者》

「はっ……はっ……はっ……ひひひひ、くくうふふ」

俺は暗殺者だ

とある闇組織に所属している

組織の本部はとある国で最大の構成員数と勢力を誇る

その組織が遂に世界の中心とも揶揄されるオラリオに進出した

そんな俺たちの仕事は多岐に渡る

暗殺者だからといって暗殺だけしていればいいわけじゃあない

この街に元々いた同類の組織から縄張りを奪い

その縄張りの中で違法な薬や道具を法外な値段で売りさばき

店を出しているカタギの奴らを脅し用心棒代として多額の金をせしめること等々だ  
裏の組織も金のためなら暗殺者でも使いつぶす・・・世知辛い

まあ、組織の中でも武闘派の俺とその部下達なら問題など起こりようもない仕事だ  
だというのに――

「おい、あんた何故だ!？」

何故俺は――

「何故 俺はひたすら芋をマツシユさせられているんだ!？」

「うるせえ、口動かす前に手を動かさせアホチンピラ」

「すんませアベし!？」

既に顔がボコボコに腫れ上がり見るも無惨な俺に強烈なビンタが炸裂する

「隊長う!？」

「てめーらもボーッと突っ立ってないでもっと客引きの声出せやコラ!! お前らは全員ノ  
ルマは二十人だからな? 出来なかったら両手両足粉碎、客を無理矢理連れてくるような  
不作法者は即処刑だから・・・あーちなみにだが、客引きと称して逃げたらどう

なるか……分かつてるな？」

その瞬間、青年から殺気が吹き出す

「「「ヒイヒイヒイヒイ!?」「」」

「おらあ行け!!」

「「「じゃ、じゃが丸君いかがつすかああああ————!!??」「」」

客引きのために顔以外をポコポコにされた俺の部下達が涙ながらに必死に笑顔を作って一般市民に媚びを売る

そんなことをしている内に——

「兄貴、済んだぞ」

青年の後ろに銀髪の狼人が誰かを引きずってやってきた

「おう、すまねえな面倒事頼んじまって、で——……そいつは？」

「元締めだとは、連れてきた方が手っ取り早いだろ」

「へえ……気が利くなべート」

いや待て……ていうか引きずられてるのって

「ボス!？」

あろうことか引きずられてきたのは組織での俺の上司だった

「ボス、大丈夫で——」

「あ、あ、悪夢だ、悪魔だ、鬼だ」ガクガクブルブル

わずか数時間前まで組織の幹部、そしてオラリオ支部のトップとして俺たちに命令を出していたときの堂々としたの威厳は微塵もなくなっていた

(い、いったい何が……)

ボスは顔面を蒼白にしつつ震えながらブツブツと何かを呟くだけの廃人になっていた。

「こいつらのアジトは？」

「言われた通りに更地にしてきてやったけどよ……あの雑魚共程度じゃ準備運動にもならねえな」

(さ、更地ツ!?)

ありえないことだ、俺たちの組織にはランクアップを果たしている手練れが何人も居たはずだ

それが全滅したというのか!?



しかも俺を圧倒した人間の方ではなく、この男の部下であろう狼人に!?

有り得ない

認めたくない

馬鹿な

こんなの夢だ

俺の頭の中が目の前で為される会話を否定するために拒否の言葉が無数に反芻する  
眼球が俺の意識に反してグルグルとせわしなく動く

あまりにも非現実的な事実目眩と吐き気がする

何度も何度もこれは夢だと思い込みそうになるのだが・・・

「うえへへへへまかせてくらさいよ〜ビッグボス〜、オラリオ支部はこの私におまか  
へをようへへへへ」

夢ではなく現実であることを突きつけるかのように廃人同然のボスが先ほどから目  
の前で狂言を吐き続けている

（俺も現実から逃げたい・・・）

「・・・さてと」

「っ!？」

男の発する一言一句に俺の身体は身構える

（ああ、何故こんなことに・・・過去に戻れたら戻りたい）

わずか二時間前のことだ

用心棒代をせしめるための不運な最初のターゲットとして俺と部下はこの店を選んだ

屋台ではちょうど客であろうエルフの小娘が店で出している食べ物を男から渡され食べている呑気な雰囲気だった

「オラア！誰の許可があつて俺たちの縄張り<sup>マ</sup>で商売してんだア!!」

恐怖と衝撃を与え、従わし易いように店で用意してある飲食用の机や椅子を蹴飛ばし破壊する

どんなことも最初が肝心だ、そのためにも俺と俺の部下は店先でわざと派手に暴れた

いくら天下のオラリオであろうともその程度なら他の街と変わらない——  
——そう思っていたからだ

甘かった、激甘だった

店先で暴れる俺の部下はあつとういう間に地面に転がされた

軽々とあしらう実力からただの屋台の店員ではない、と本能で感じてはいたがL.V.  
3にランクアップしてから長らく相手が居なくなってしまった俺は無意識に強敵を求  
めていた

餓えていたと言ってもいい

俺の部下を一瞬で昏倒させた攻撃——恐ろしく早い手刀——俺じやな

きや見逃しているであろうその攻撃が俺には見えていた

故に久々に戦闘が楽しめそうだ

そんな馬鹿で愚かすぎることを思ってしまったのだ

それが極限まで手加減された攻撃だとは知らずに。

ただの屋台の店員ではない、と本能で感じた？

アホか俺は

おい、俺の本能 もっと働け

俺が対峙した男は化け物じゃねえか!?

半日足らずで一つの組織を潰すような狼人も化け物だが、俺を瞬殺しその化け物を従えているこの男の実力は一体どれほどなのか見当も付かない

そしてそんな化け物が真つ昼間の出店に、しかも店員として居るなどと誰が想像しようか

完全に相手を見誤った

それともオラリオでは屋台の店員ですらこれ程の実力を兼ね備えているのか!?

・・・だとしたらオラリオは化け物達だけの巣窟だ

俺はオラリオの厳しい洗礼を受けて完全に心が折られた

そして今現在、俺たちはこの男にこき使われている

「とりあえず、当分お前らタダ働きな― いやあチンピラの掃除と人材確保が同時にできてラツキーだ」

いや待つてくれ・・・修繕費と迷惑料とか言われて有り金を全て取られて文無しなんだが・・・

組織の支部に戻ればあるが、先ほど言った内容が事実なら俺の金など跡形もなくなっている

「あの、食事とかはどうすればよろしいでしょうか？」

「安心しろ毎日おいしい　じゃが丸くんを食べさせてやろう」

・・・こんな揚げ物ばかり毎日食ってたら死ぬのでは？

「あの、できればいいので野菜とかも・・・」

「大丈夫大丈夫、ポテトも野菜だし」

「・・・・・・・・」

暗殺者などをやっているのだ

いつか俺も誰かに殺されるのだろうかとは思っていたが

メタボになって死ぬというのは予想外の死に方だ・・・。

《side out : 動体視力に定評のある暗殺者》





と身構えていたが、今ではファミリアの全員がその音に慣れすぎてほぼ無反応だ

(ハア~~~~・・・あの子も災難ね)

そんなことを思っていると

「今日もボロボロで部屋に帰ってきそう、せめて何か元気の出る果物とか用意しとこうかしら」

一緒に隣で食事中のアリシアが困ったような笑顔で呟く

「アリシアってあの子の隣室なんだっけ？」モグモグ

「うん、たまに見かけるのよねえ・・・魂が抜けた様な顔でヨロヨロって部屋に帰る姿、さすがにほっとけなくて・・・」

「うわあ・・・」

今私たちが話している、あの子というのは最近入団してきた新人団員のことだ

その新人団員は後方支援特化型の魔導師で入団時点で既にLv. 2

あの都市最高の魔導師である副団長を知るロキ曰く

「呆れるほどの魔力バカ」

と言わしめる程の才能を秘めているとのことだ



だが

そんな羨ましがられる才能を持つ才女も今では逆に哀れみと同情の感情を向けられている

なにせあの子の冒険者としての師匠にスパルタ訓練が日常のカイトが就いてしまつたからだ、先ほどの爆発音も恐らくそのスパルタ師匠との訓練中に魔力爆発を起イグニス・ファトゥスこしたものだ

ちなみに、正確に言えばその新人団員は副団長とカイトの共同弟子になる

副団長は普段忙しいので通常の面倒はカイトが見るといふことらしいが・・・

魔法では副団長に扱じかれ

近接ではカイトに扱じかれる

・・・なにその地獄。

特にカイトとの付きつきり訓練とか悪夢よ悪夢

ラウルと一緒に訓練させられたときはマジでボコボコにしてくるし

「一応私女なんだけど!」 って言ったら

「男女平等!!オラア!!」

「へバア!?!」

と見事なアツパーを食らって昇天させられた・・・グーですよ!?

乙女の顔をグーで殴るか普通!?

・・・いやまあ、実際戦闘になつたらそんな男だとか女だとかは関係なくなるし、あいつとの訓練はマジで強くなるにはなるのよねえ

いやそれでも、できればカイトとの訓練は全力で避けたいというのはガチの本音

いやもうマジで二度としたくない、マジのマジ、ほんつつつとうにしたくない・・・

何度もアノ地獄に挑むベートの強さへの直向きだけは本気で尊敬するわ

ま、当分は弟子になったあの子に付きつきりで私たち構う暇はないから安心ね

(さて、と そろそろ私もダンジョンに――)

「お〜い、アキ〜」

ダンジョンに向かおうとしていた私を食堂の入り口からラウルが呼んでいた

「どうしたの、何か忘れ物?」

ちなみに今日のダンジョン探索メンバーは私、ラウル、ナルヴィ、アリシアの四人だ  
前衛の私とラウル、遊撃にナルヴィ、後方支援にアリシアと非常にバランスの取れた  
パーティ構成となっている

目的は下層付近での経験値稼ぎエクセルリア

そのため各自で必要な物は事前に準備してあるはずだけど・・・何か準備漏れでも  
あったのかしら？

「いや、そうじゃなくてカイトがあの子と一緒に付いて行っていいか？って言ってきて  
るんすけど」

「え 大丈夫なのそれ？ あの子に何かあったら・・・ってカイトが居ればそんな心配す  
るだけ無駄ね」

ぶっちゃけ下層程度のダンジョンでカイトと一緒に居て何かあるなどアホらしいく  
らい有り得ない話だ

先ほどカイトとの訓練は嫌だと言ったが、私は別に彼個人を嫌ってない  
むしろ同期組の中でも特にラウルとカイトを私は尊敬している

・・・そんなこと恥ずかしくて絶対口には出さないけど

と、とにかく！

その中で特にカイトの実力に関しては私を含めたロキ・ファミリアの全員が全幅の信

頼を寄せている

ダンジョン内でカイトは居るだけでモンスターの索敵だけでなく奇襲の完全察知まですることができ、おかげでダンジョンにおける死の危険は限りなくゼロと言ってもいいだろう

そんなわけでどうやら今回のダンジョン探索は楽ができそうだ

「アキ、カイトさんが付いてくるなら今回のダンジョンは百人力ですね!!」

アリシアが嬉しそうに言ってくる

「ええ、ラツキーね、カイトが付いてくるなら新人の面倒を見ながらもお釣りがくるわ……ってラウル、どうしたのよ青い顔しちやって?」

「い、いやそれがカイトが——」

『久しぶりにお前らの連携と動きも見るから俺の弟子の参考にならないようなら一緒に訓練な』——————  
「……って……」

ピシリ

と私たちの周りの空気だけがヒビが入った

「……ええ?」



## 47：妖精?試験

||

《side：レフィーヤ・ウイリデス》

は、はじめまして

私の名前はレフィーヤ・ウイリデス 年齢は見た目通りの12歳です

エルフは他の種族よりも歳を経ても見た目がほとんど変わりませんが私は本当に12歳です

500歳だったり659歳だったり腐葉土の匂いとか全然しません

魔力<sup>マナ</sup>だつて剥き立てのゆで卵のようにトウルントウルンです、断じて腐つてなどいませ  
ん

あ、出身はウーシエの森です。

二年前から『学区』と呼ばれる移動教育機関に在籍していました

そこでは算術や文字等の勉強はもちろんですが、一時的に学区に所属している神々が生徒に『神の恩恵』を刻むことよって魔法や最低限の戦闘も学ぶことができます。

そこで私は才能を見いだされ魔法を重点的に学びました

その甲斐もあつて二年で私はランクアップ！

先生方曰く

「え、嘘・・・まじでランクアップ？」「いやいやそれより何この魔力量!？」

「天才じゃったか・・・」

ダンジョンのない環境、そしてわずか二年という年月でのランクアップは非常に希少なことなのだそうです

ですが実際にそれは優秀な先生方による指導のおかげなところが大部分を占めます。

先生方に比べると私は魔力操作も詠唱速度もダメダメです

「いや扱う魔力量が違うし」

「そうでしょか？」

「詠唱速度も追い越されそうなんだけど」

ふふふ、またまたご冗談を、でも嘘でも誉めてくれて嬉しいです

先生方はやはり教育者、先に謙遜が口に出ます

「「いや、ちがうて」」

いやあさすが教育者、ほんとうに謙虚です。

その先生方から、私であればオラリオであろうとも様々なファミリアから引く手数多だとおっしゃって頂けました

・・・本当でしょうか？

正直今でも半信半疑です。

とりあえずそんな太鼓判を押されたこともあって、かねてから外の世界を体感してみたかった私は先生方にとあるファミリアへの推薦状を書いてもらいました。

私が推薦状を書いてもらってのはロキ・ファミリア

団長の『勇者』<sup>フレイバー</sup>それに並ぶ『重傑』<sup>エルガム</sup>そして全てのエルフが敬い憧れる王族、ハイエル

フにして尊きお方、先の二人に並ぶファミリアの副団長『九魔姫』<sup>ナインヘル</sup>リヴェリア・リヨス・

アールヴ様、三人をトップとする世界に名を轟かせるファミリア

そう、私の憧れのファミリア



ちなみに最近ではそれ以外にも『切札』<sup>ジョーカー</sup>を筆頭に『劍姫』<sup>ヴァナルガンド</sup>『凶狼』<sup>ヨルムガンド</sup>『怒蛇』<sup>アマゾン</sup>『大切断』<sup>アマゾン</sup>といった方々もメキメキと頭角を現しているとのことだ。

その中でも私が注目しているのは『劍姫』様！

森では外界の情報を得る方法は二つ、一つは商人から、そしてもう一つは吟遊詩人達による歌

森に来る吟遊詩人達が歌い上げる英雄譚の中でも私が最も好きなのはこの一説

『音に聞こえし ロキ・ファミリア』

頂を知る彼等の中に たった一人の劍士あり

並居る劍士を睥睨するは たった一人の少女なり

流麗なるはその劍技 悪鬼を貫くその金眼、戦尾に残るは金糸の閃光

巨大な魔物と対峙をすれば 一つの劍で敵を討つ —— 『』

私より少し年上の『劍姫』様が歴戦の冒険者を飛び越えて最前線で戦っているという

歌

オラリオに実在する女性剣士

これには憧れと情景を抱かずにはいられませんでした。

・ ・ ・

そんな私が今居るのはロキ・ファミリアの本拠『黄昏の館』ホーム……の通路です。

向かう先は訓練場

「はくい、皆さんこっちつすよー」

案内人の誘導に従い進んでいきます

いえ、ロキ・ファミリアに入団できたわけではありません

——入団するために私は今、この通路を進んでいるのです。

実は前からロキ・ファミリアは団をより大きくするために新たな団員を募集してい

たとのこと、そして『学区』の先生方もそれを知っていてこれ幸いと私の推薦状を書いてくれたらしいのです

ですが推薦状があったとしてもキチンと試験自体は受けなければいけないみたいです

確かにいくら学区の推薦状とはいえ大派閥のロキ・ファミリアに はいそうですかと入団できるわけありませんでした

我ながら考えが甘過ぎです

推薦状の効果は精々面接で普通よりも興味を持つてもらえるくらいのです、まあそれでも何も知られていない方々よりはかなり優位に立てるはず

そして今から行われる実技試験に対しては推薦状は効果がありません

こればかりは私が頑張るしかないということです！

ちなみに入団試験を受けるのは私だけではありません、腕に覚えのある者や私のように他のファミリアから改コンバージョン宗して待機状態の方などが大勢います

そんな方々と共にゾロゾロと広い訓練場に向かいます

「じゃあ一時間後に試験を始めるつす、試験の内容はこちらで用意した相手との模擬戦に近いものだと思って下さい、それまで各自装備を調えるたり準備運動をして用意をし

ておくように、何か質問があれば今のうちに受け付けるつすよー?」

質問・・・あ、気になることがあります

「あのー・・・後衛の魔導師とかも同じ実技なんでしょうか?」

これは聞いておかねばならない質問です

「基本的に共通試験の後に 前衛・遊撃・後衛 別々の試験を用意してるつす」

(よ、よかつた)

『学区』でも近接系の授業は苦手だったので後衛用の試験があるというだけで安心できました

「他に質問はないつすか?」

私の質問を皮切りに他の方々もそれぞれの質問をしていきます、全部の質問を聞いていましたが特筆すべきものはありませんでした、精々試験前にランクアップしているかどうかを口頭で確認するといった内容くらいでしょうか

「ふむ、これ以上質問はないようつすね、じゃあ健闘を祈ってるつすよー!」

最後にありきたりな言葉を言ってから案内してくれた方は去って行くと全員がそれぞれ試験のために動き始めました

よし!私も準備を始めましょう!!

今日の私は一味も二味も違いますよー!!  
何故ならばっ!

昨日、私は憧れの冒険者の一人である『剣姫』 アイズ・ヴァレンシュタインに直接会うだけでなく言葉まで交わしたのです!

もうやる気バリバリですよ!

・・・それにしても、憧れの『剣姫』に会えたのは良かったのですが、同時に変な騒動に巻き込まれそうになったのは危なかったです

そんな風に昨日のことを思い出していると

「・・・って、あれ? もしかしてあそこにいるのは昨日の屋台のお兄さん?」

つい最近、というか昨日会ったばかりの屋台のお兄さんが何故か訓練場の隅で目立たないように柔軟運動をしていました

というか何故、屋台のお兄さんがここに・・・?

先日のももあつたのでとりあえず挨拶しましょう

「こんにちは、屋台のお兄さん」

「・・・ん? ああ昨日のお嬢ちゃんか、昨日言ってた入りたいファミリアってやつばこことだったか」

「はい・・・えっと、お兄さんもここの入団試験を？」

「んん？ えっと、まあ・・・うん、そんな感じだ」

「やっぱりそうでしたか！ お兄さんすごく強かったですもんね、むうく強力なライブルこんなところに・・・」

「あー・・・うん、まあ・・・な」アハハハハ

あれ、どうして目を逸らすのでしょうか？

・ ・ ・

|| || || || || || || ||

この屋台のお兄さんと出会ったのは昨日のこと

実は私、オラリオに到着早々道に迷ってしまいました・・・

しかも迷った場所が後から聞いた話では『ダイダロス通り』と呼ばれる現地人でも遭難者が出るくらいの複雑な区画だったらしく

迷子の最中にフワリと風が運んできた大通りにある屋台の香りに導かれなければ下手をすれば今でも迷っていたかもしれません

そしてそこで屋台のじやが丸くんなる食べ物食べている『劍姫』と屋台の店員であるお兄さんと出会いました

ですが、そこで

「オラオラオラア!!」

「ヒヤツハアアアアア!!」

「ナメテンジャネエゾオラアアアア!!」

と、このように差雑な言葉と暴力で屋台に金を寄越せと脅す柄の悪い方々とのアクションに巻き込まれそうになりました

ヤバいと感じたのは、その内の一人が間違いなく私よりもレベルが上でかなりの実力者であったということでしょう

なにせ屋台にいちやもんを付けて暴れる男共をバツバツタと倒す屋台のお兄さんの攻撃方法を

「恐ろしく早い手刀、俺でなきや見逃しちゃうね」

と、余裕綽々で意図もたやすく見破るほどです、その隙のない立ち姿からは歴戦という言葉を彷彿とさせました

「1対1だ、——闘ろう」

「ヤだよ」

「クツクツクツク、そうつれないこと言うな——よっ!!」

実際、私にはその男の攻撃はおろか動きを目で追うことすら出来ませんでした  
ですが、それ以上に

「ゲボヤゲガブハっ!?!」

「はい、乙々」

屋台のお兄さんの強さは尋常ではありませんでした

いや、チンピラ達を圧倒している時点で間違いなく強いというのはわかっていましたが、ここまで強いというのにはわかりませんでした

すぐに屋台のお兄さんに何者なのか、と問いただしました



え、・・・は？

ただの屋台の店員でもこの実力がデフォ？

・・・いやいやいやいや！有り得ないですよ！？

は？

店長がL v. 6で店員が軒並みL v. 4の飲み屋とかが普通にある？

そんな店があるわけが・・・

「普通にあるよな？」

「ミアさんのお店のこと？」

・・・マジですか

オラリオは人外魔境の魔窟である、と言う人もいるそうですが

・・・人外しかないのでは？

そんな衝撃体験の後に屋台のお兄さんの勧めで『剣姫』様に道案内をしてもらっちゃ

いました

「目的地とかは、ある?」

「はい、えつと明日入団試験のあるロキ・ファミリアの本拠ホームなんですけど・・・」

「うち?」

「はい、私ロキ・ファミリアに入団したくて」

「そう・・・じゃ、案内するね」

「は、はい!よろしくお願ひします!!」

「・・・ん」

案内がてら『劍姫』様に聞いたところ、先ほどの屋台のお兄さんの話は少しオーバーで、実際にあれ程の強さを持ちつつ店を出しているのは一部だけとのことだ

・・・一部と言うことは本当に居るところには居るんですね、改めてオラリオの凄さを実感させられました

それにしても、何故それだけの実力のある冒険者が屋台やお店をやっているのでしょうか? う?

お金を稼ぐだけなら冒険者を続ける方が実入りが良いのでは?

「皆、それぞれ事情がある、引退や元々そういつたお店を出すための資金稼ぎのために冒

「険者になった人も居る」

「な、なるほど事情は人それぞれですからね」

「あなたは どうして冒険者になりたいの？」

「え、えつとその……憧れの人みたいになりたいくて」

本人を前にして、『あなたに憧れて』と言うのはさすがに恥ずかしいので微妙に言葉を濁しました

「そう……うん……私にも、わかるよ」

そう言う『剣姫』様の表情は とても穏やかで優しかったです、『剣姫』様にも憧れる誰かが居るといふことなのでしょうか

（あわわわわ、沈黙が気まずいです……？）

憧れの『剣姫』様と何を話せばいいのかわからないまま歩いていると奇妙な建物が見えてきました

「ん、あれが私の本拠ホーム『黄昏の館』」

「(ハハ)が」





その言葉に傲慢はなく驕りもない、上に立つ者としての当然のカリスマ

従者の様に二人のエルフを従えるその御方に全員の視線が集中します

全てのエルフが敬う高貴なるお方

通常のエルフよりも長い耳はハイエルフの証

「私は今回の試験の補助を行うリヴェリア・リヨス・アールヴと言う者だ、一応ロキ・ファ

ミリア副団長を務めさせてもらっている、今日はよろしく頼む」

訓練場に現れたのはエルフの王族『リヴェリア・リヨス・アールヴ』様でした

今の私の心は不動？

さすがにこの状況は無理ですよ

エルフの王族であるリヴェリア様は例外ってことにおきましよう、驚かないのは

逆に不敬です、うん

これ以上は不動ってことにおきましよう

そう、今度こそ今から私の心は不動!!!

「さて、それでお前はそこで何をしている？」

「……え？」

リヴェリア様がこちらを見て咎めるような口調で言葉を放ってきます  
それに釣られて訓練場にいる全員の視線が私に集中しました

え、ちよ、なんですかこれ？ どういう状況ですか!?

私は何もしてませんよ!?

「いやあ、ちよつとこれから試験を受ける奴らの品定めつてところかね」

よつこらしよ、という言葉と共に困惑する私への回答がすぐ隣から聞こえてきました

「……へ？」

あれ、屋台のお兄さん？

「……あれあれあれ? ……屋台のお兄さん!?

「……よつと」

困惑する私を余所にお兄さんが纏っていた外套を脱ぎ去ります

黒いズボンそして腰に下げるベルトには一本の刀

腰まで届く白髪に青色のハンチング帽を被り直し、服装は白色

そして何よりも特徴的なのは左腕の白銀の義手

「諸君！驚かせてすまないな、これから君たちの入団試験の実技の相手を主にさせてもらう」

え、ちよ、これ

この特徴つてまさか

思ひ出されるのは吟遊詩人が歌う中でも私が好きな『劍姫』様の一説

『音に聞こえし ロキ・ファミリア

頂を知る彼等の中に たった一人の劍士あり

並居る劍士を睥睨するは たった一人の少女なり

流麗なるはその劍技 悪鬼を貫くその金眼、戦尾に残るは金糸の閃光

巨大な魔物と対峙をすれば 一つの劍で敵を討つ———」

その続きはこう歌われている

『彼の者が背を預けるは 白磁の如き龍髪なり

白磁に劣らぬ白銀の 腕かひな持つは彼の者のみ

並居る戦士は地に伏せる 主神の名を継ぐ申し子なり





## 48：妖精?試験 その2

「あれが!？」

「・・・ロキ・ファミリア最強」

「マジでか・・・やべえよさつき俺、小汚い格好とか言っちゃまったよ」

「すげえ、本物だ！」

「サ、サイン、サインもらわなきゃ」

「バカ、こんな時にもらえるわけねえだろ！」

入団試験を受けに来た者達にドツキリ的な感じで名乗りを上げると全員が驚きの余り動揺しまくっていた

「あ、あわわわあわわわ!？」

特に俺の目の前でエルフの小娘が口をアングリと開けてビククリしているのはかなり痛快だねえ

いやあ〜ナイスリアクション（笑）！

そんな餌を求める金魚の様に口を開閉し続けるエルフ娘と目を合わせてみる

「・・・ふむ」

「ほえ!？」

はえ、それにしてもこの娘、改めて『凝』で潜在魔力を探ってみるとマジで化け物だな、本当にLv. 2か？

昨日、偶々出会ったときも驚かされたが再度確認しても信じられないほどの魔力保有量だ

「・・・ま、いいか」

「はえ!?!え!?!何ですか!?!」

とりあえず試験で実力を見せてもらいますかね、どれだけ才能があるかと扱う者が使い物にならないようなら文字通り宝の持ち腐れだし

ちなみに『凝』は眼にオーラを集中させることで本来なら見ることのないものが見えるようになったりする、四六時中使いたいのだが使い過ぎると目が痙攣とか仕始めてヤバいことになるので常時使用は難しい、連続使用は1時間ちよいが限界と言った所だ  
その1時間で他の入団志望者にも『凝』で探りを入れてみたがこの娘以上はさすがに  
いなかった、まあポチポチ行けるんじゃないかね? って奴らなら数人と言った所だろうか

さて、と

じゃあそろそろ始めますかね――

「では、これよりロキ・ファミリアの入団試験を始める!!」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

《side：レファイヤ・ウイリデイス》

ま、まさか昨日会った屋台のお兄さんがロキ・ファミリア

しかもただの団員ではなく幹部級だとは……いや確かに『劍姫』様と妙に親しげに話していたことに引っかけたてはいましたが、天下の第一級冒険者が屋台で揚げ物を販売してる等と誰が想像できましようか……無理でしょう

そんなこっちの心境も知らずにお兄さんこと『ジョーカー切札』がスタスタと広場の中心に向かつて行きくと

ガリガリガリガリとお兄さんが鞘に収まったままの武器を使って地面に50メートル

程の線を引いていきます

線を引き終わるとその少し手前に直径2メートル程の円を描くとその中にお兄さんが入りました

「では、確認を兼ねて今から改めて試験の説明を始める！」

その言葉で場の空気が変わります、なにせ周りに居る者達は私を含めて全員がライバル、嫌でも空気が引き締まります

「先に説明を受けたように今から行う共通試験の後にはそれぞれ前衛・中衛・後衛・遊撃・斥候、それぞれの得意分野での試験も行うので共通試験がダメだったからといって即不合格になることはない」

お兄さんが先ほど受けた説明を改めて確認してきてくれます、内容は先ほどと変らないので数名がそれを聞いてわかつていても言うように頷いていましたが、続く言葉に全員の緊張感が一気にふくれ上がりました

「だが！ 共通試験で余りにも酷い結果を残した者は後の試験を受ける資格はないと思え！後があるから大丈夫などと言う甘い気持ちを抱いている者をロキ・ファミリアは求めている！そのつもりで今から試験に臨んで欲しい」

「！！！！！！！！！！」

（ええええ最初の試験でも酷すぎると失格になるんですか!?!）



言葉が理解できても内容が理解できないという不思議な体験をしています

「おつと言い忘れていた、俺に攻撃を当てて円外に押し出すことができれば一発合格だ」  
お兄さんの言葉でさらに頭の混乱具合に拍車がつ!?

ん?

んんんん?

障害物であるお兄さんは直径2メートルの円内から出ない

線は50メートル以上

んんんんんんんん

??????

それ・・・離れた場所を走り抜ければ楽勝ですよね・・・これが共通試験?

先ほどとは違う雰囲気の動揺が周囲で起こります

「おいおいおいおい、もしかしてこれってサービスか何かか?」

「・・・そういや、最近ロキ・ファミリアで死者が出たって話を聞いたな」

「お、じゃあもしかして団員を手早く補充したいからここにいる奴らをできるだけ多く入団させたいとかか?」

「じゃあ何のために入団試験なんてやるんだよ」

「そりやお前、大派閥としてのポーズが必要なんだろ」

「なぐる、ヒヒヒヒ！俺たちラツキーだな！」

周りから嘘か本当かもわからない声が聞こえてきます

（大派閥の面子のためだけにこれだけの規模で試験をするでしょうか？）

周囲の声とは反対に私の心には猜疑心が生まれます

憧れのロキ・ファミリアがそんな中途半端なことをするのか？

否だ。

私の憧れた英雄達と歩むための試練がそんな簡単なのか？

そんなわけがない。

あの英雄達がそんな惰性で選ばれただけの者を入団させるのか？

有り得ない！

「んじゃ、始めるぞ〜」

（え、ちよつま、まだ心の準備が!?!）

「待て」





その場にいる入団希望者数十人全員の声が一致しました

え、こ、殺される？

その余りにも殺伐とした言葉に先程までの余裕そうな空気が霧散します、そりやそう  
でしよう試験なのに殺されるって

「君たちは今から腕を切り落とされるかも知れない、首を切り落とされるかも知れない、  
胴体を実つ二つにされる者もいるだろう、だがそれでも意識だけは手放すな、そうすれ  
ば・・・いや、そうしなければ次の試験を受けることもできないと思え・・・以  
上だ。」

殺されるのに意識だけは手放すなとは一体？

殺されるほど過酷な試験だけど気絶するなということでしょうか、いやそれほど過酷  
な試験には思えないのですが・・・いえだからこそリヴェリア様は忠告してくれたので  
しよう

あの円内からお兄さんが何かしらの攻撃を行う、とかでしょうか？

だとすると投石や飛び道具の可能性がありますがね・・・いえ、明らかにお兄さんはそ  
んな者を所持しているようには見えません、よしんば何かさういった物を所持してい  
たとしてもこの人数に対して数が圧倒的に足りません

残る可能性としては

「余計な茶々が入っちゃったが、今度こそ始めるぞ」

(は、始まる!?)

思考の最中にお兄さんのが開始の合図を言おうとします

「よっ(っ)らせ、と」

年寄り臭い言葉と共にお兄さんが円内の地面に直接腰を下ろして座り込みました…

え、何で座るんですか？

「ふい〜…じゃあ」

先程までの凜々しさはどこに行ったのか、今はやる気が感じられません

あまりのリラックスメイクにこちらまで気が抜けそうです、本当にこの人は『劍姫』様

やりヴェリア様と同じ

———この時、少しでもお兄さんのことを———  
師匠を侮った当時の自分を私は呪います。

「開始」

ズ  
ン

肺が凍る、筋肉が強ばる、呼吸も止まる、視界が歪む、嗅覚は消え、耳からは絶えず爆音となった自分の鼓動が聞こえる

「あ」

自分の身体が見えます、視点

が

おか  
しい

です

身体に 首あり ません

で た

「いいいいいいいい——つつつ?!?!」

気づけば私は自分の杖に縋り付くようにして辛うじて立っていました

「つく、首?! 私首?!」

震える身体にムチを打って首が繋がっているという感触を確認します

「あ、ある、つ、繋がってる……い、今は……い、いいい、いったい」  
なに と言続く言葉も呂律が回らず言い切れない

「ヒュー……ヒュー……ゲホゲホ!」

呼吸が狂しい、激しく動いたわけでもないのに息切れと動悸が止まらない  
脚は生まれたての子鹿の様に震え続けている

「っは……っは……っは……」

自分が生きているという実感を得られた安心感だけで崩れ落ちてしまいそうです

でも何故か私は倒れませんでした、奇跡です

きつとここで一度でも地に倒れればレフィーヤ・ウイリデイスというエルフはレフィーヤ・ウイリデイスとして二度と立ち上がることはできないという本能の警告が必死に私を繋ぎ止めてくれていたのかもしれないと

気合いを入れ直して伏せ気味だった顔を上げると

「——っ!?!」

目の前には死屍累々の光景、ほとんどの者が泡を吹いて地に伏していました

「っは……はっ……は……ふっ……ふ……」

「くそっ……何だっ……今の」

「腹があ!?!俺の腹がら血があひいいいい……い?」

「あ……ああああ……あ」

かろうじて立っている者も私と同じように全身に大粒の冷や汗を滲ませ怪我もないのに満身創痍の様な状態です。

全員が私と同じ様なあの光景に近い何かを見たと言うことでしょう、そうでなければこの異様な状況の説明ができません

(お、落ち着きなさいレフィーヤ、思考、思考に集中)  
恐怖を忘れるためにあえて思考の波に身を委ねます

——なぜこんな事が起こったか

原因は間違いなく『切札』

では『切札』は何をした？

魔法？

魔法には幻覚を見せるものもある

開始直前に確かに膨大な魔力を『切札』<sup>ジョーカー</sup>から感じた気がする

でも詠唱はなかった

魔法名も口にしていない

可能性は低い

では第三者が魔法を掛けた

それも可能性は低い

魔法を発動させれば自分はその魔力を感知するはずだ

魔法である可能性は低い

——ではスキル？

・・・これ程の幻覚を見せるのがスキルによるもの？

有り得ない

では今も自信を襲い続ける威圧感は何か？

わからない

こんな力を私は知らない

生まれてから見たことも聞いたこともない

回答が出ない。

「ふう・・・ふう・・・ふう・・・」

思考に没頭していたおかげで多少の落ち着きを取り戻すことができました

でもお兄さん、いえ『切札』<sup>ジョーカー</sup>から放たれているであろう不可視の何かは今も絶賛私た

ちを襲い続けている

(本当に何なんですかこれは!?)

先程まで普通だった、普通に人であったはずの『切札』<sup>ジョーカー</sup>が今は理解の外側にいる化物

にしか見えません

ただ座っているだけ、ただそれだけ

なのに存在しているというだけでこれ程までに自分たちを恐怖させる



ニゲロ

コワイ

サカラウナ

ウゴクナ

イキヲコロセ

メヲアワセルナ

一見普通に地面に腰を下ろしているだけの姿、ですがその姿を見ているだけで心臓の早鐘が速度を増し本能が痛みと共に生命の危機を激しく警鐘してきます

「おい」

「「ヒ・・・ツ!?!」」

『ジョーカー切札』が言葉を発するだけで意識のある者達の肩が跳ね上がりました

私に至っては息が止まる寸前です

「どうした、この線を越えるだけだぞ? 何を突っ立っているんだお前ら……………つて  
いうかまあ、やっぱこの程度でも来れないか」

その表情は落胆

それも期待ではなく、やはり、とでも言うかのような諦めの混じった落胆の表情だ

「お前らは先程の試験内容を聞いて大方楽勝とでも思ったんだろが」

『ジョーカー切札』の表情は変わりません

「あまり第一級冒険者を舐めるなよ〜?」

「ひい!?!」

威圧感だけが倍になりました

かろうじて意識のあつた者が次々に倒れていきます

もはや私の意識が残っているのは奇跡では?というレベルです。

「お前ら程度なら身動き一つせずに殺気を飛ばすだけで押さえ込むなんてのは楽勝なんだよなあ・・・俺も強くなったもんだ」

殺気?

正体不明の威圧感がただの殺気?

それを聞いただけでその余りにも掛け離れた実力差に愕然となりました

これが第一級冒険者だと言うのですか

遠い

高い

あまりにもっ・・・!!

(・・・つく!!)

その言葉を聞いて生まれるのは諦めと

ほんの少しの

(まだ ですよ!!)

反骨心

(気絶して全てがダメになるなら出来ることを全てやりきる、そうじゃなきゃ私は何のためにつ!)

思い出すのは送り出してくれた両親や学区の先生方

————— ————— なんのために……………ここまで来たんですか!!)

『頑張つてね』

そして最後に応援してくれた『劍姫』様の言葉も私の背中を押してくれます

「はあああああああつ—————!!」

なけなしの気力を振り絞って魔力を活性化させる

自分でも込めたことがないほどの魔力を注ぎ込み魔方阵を展開  
 そして詠唱

【解き放つ一条の光——】

使用するのは最も慣れた第一魔法

【聖木せいぼくの弓幹ゆがら 汝——】

先程、『切札ショーカー』は言っていた、自分を円外に出しても合格だ  
 だったからこそから魔法でブツ飛ばします!! もう後の事なんて知りません!!

「へえ〜」

座っていた『切札ショーカー』が立ち上がりました

(くううう——!?)

それだけなのに威圧感が増していきます、ほんと化け物ですね!?

——…っ弓の名手なり!!

詠唱中は平常心を持たなければなりません、そうでなければ魔力爆発で自爆するから  
 です

——狙撃せよ 妖精の射手!——

この意識も途絶えそうな状況で平常心を保ちつつ魔力を操作するのは至難でした  
だからでしょうか？

「――― 穿て 必中の矢」

(このままじゃ暴走、暴走しちゃ・・・ああ、もうっ！するならしろ!!暴走させて  
でも撃ってやる!!)

ちよっと思っておかしな方向に振り切れてました

【アルクス・レイ!!】

「へ!?!」

自分でも見たことのないくらいの威力が出ました

だというのに

「ほいさあ!!」

「うそおおおおお!!?!?!?」

『切札』<sup>ジョーカー</sup>が私のこれまで放った魔法で最高の威力だと思った一撃はアツパー気味に殴られて天に昇っていきました

「な、殴った・・・魔法を!?!」

避けられるならわかりますが殴るって何ですか!?

って言うか魔法って殴れるの!?

疑問が頭を駆け巡りますが

(・・・っ!・・・まだです!!)

まだ私の放った魔法とのパスが繋がっているのを感じました

「曲がれえええええええええ!!」

天に向かって消えるだけだったはずの極大の光線が空中で急旋回、『切札』<sup>ジョーカー</sup>の真上から襲いかかります

規模は丁度直径2メートル

それは『切札』<sup>ジョーカー</sup>が移動できる限界領域と同じ

重力すら味方に付け威力を増した魔法が襲いかかります

(これなら!)

円外に逃避するか真正面から受けるしかないはずですが、円外に逃避すれば私の勝ち、

よしんば真正面から受けられてもあの威力を受けて無傷では済まないはず、その隙になんとか線の向かう側に行ければ私の勝ち！

僅かな勝機を希望に私は走り出します!!

「あれ？」

・・・ですがそれは叶いませんでした

(な、なんで・・・)

地面が近いかったです

(あ、脚が動かな

)

走り出そうと一歩目を踏み出した瞬間に私は膝から崩れ落ちていました

心身の疲弊とマインドダウンのダブルパンチは想像以上に私の身体の自由を奪って  
いたようです

「ふん!!」

そんな風に倒れ込んでいる間に凄まじい轟音と『ジョーカー切札』の声が届いてきました

身動きできない身体を振って視線を向けた先には『ジョーカー切札』の周囲の地面だけがめくり

上がった大地が広がっていました

肝心の『切札』ジョーカーに至っては

(あれでも無傷ですか・・・はは・・・)

天に拳を突き出した状態でまったくの無傷、もはや乾いた笑いしか出てきません

(・・・本当に遠いなあ)

先程の勝機を見いだしたと思っていた思考は自分でも都合の良い甘い作戦だと思っ  
ていましたが、ここまで手も足も出ないとは・・・

(目の前が真つ暗になってきました)

ああ・・・酸欠に似た様なこの感じ、懐かしいです

初めて魔法が使えたとき調子に乗ってバカスカ撃ちまくって精神疲弊マインドダウンした時にそつ

くりです

これは半日以上は意識が戻らないでしょう

ということは次の試験は受けることも出来ずに寝て終わり

つまりは失格

ごめんなさい先生

ごめんなさいお父さんお母さん



ごめんなさい 『剣姫』様

わたしはロキ・ファミアリアに入団でき なかった みた いで

---

《Side out :レフイーヤ・ウイリデイス》

|||||

焦げ臭い匂いが周囲に立ちこめる  
地面が焼き焦げたせいだ

「・・・やるねえ、あの子」

そう言って自分の後ろに目を向ける  
自身の身には一切の負傷はない

だが

エルフの小娘が放った魔法が俺の引いた線を越えて地面を抉っていた  
「一本取られたなあ」

今回の試験は受験者の向こうからすれば線を越えればクリアという内容だが

俺も試験を受けている立場だとすれば俺が自らに課した試験内容は限定条件を付けた防衛戦の死守だ、つまり一人でも線の向こう側に通したら戦線崩壊という設定

つまり、何かしらの脅威を自分の後ろを通したら任務失敗ということだ

再度、自らの背に目を向ける

小娘の魔法がかなり大胆に地面を抉っていた

「ま、負けは負けだな．．．リヴェリアこの子は良いよな?」

「今回の私はお前の補佐だ、好きにしろ．．．と言いたいが」

「．．．?」

「やり過ぎだ馬鹿者」

目の前には一人残らず昏倒している入団希望者の死屍累々

「あゝ．．．うん、まあ．．．」

自分でもちよいとやり過ぎたのは自覚できてる

「もう少し団員を補充したいのでなカイト、お前が直接2人は選抜しろ」

「了解」

とりあえず半日以内に意識が戻った者から直接模擬戦でもして実力を測るとしよう、半日経つても目を覚まさなかつたものは問答無用で失格つてことでもいいだろう

「さてさて、何はともあれ——

合格おめでとう　そしてロキ・ファミリアへようこそ『レファイヤ・ウイリディス』」

## 49：妖精?試験 その3

|||

《side：ラウル・ノールド》

(ふいゝ後はカイトと副団長にお任せっすね、さてと案内も終わったしどこかで・・・)

ファミリアの規模拡大に伴い新規の団員を募集するための今回の入団試験

自分から見てもまだまだまだ冒険者としてひよっ子以前の者達を試験場まで案内し質問に対する説明をするのが今回の役割だったすけど、それも終わったので一息つこうとするとー

「ん?・・・あれは」

この会場を見渡せる空中回廊からこちらを見ている意外な組み合わせな人物が二名ほど目に入ったつすよ

(珍しい組み合わせっすね・・・うゝん・・・どうせなら、二人と一緒に高みの見物といくつす)

少し食堂に寄ってから見知った廊下を急ぎ足で進み、二人の下に向かう

(いやあく、カイトと長く居ると美味しいお茶の入れ方もわかってくるっすねえ．．．カイトの入れるお茶には全然敵わないっすけど)

なにせ紅茶にはうるさいと言われる副団長ですら舌を巻く美味しさっすからねえ

．．．

「団長、ベートさん、ご一緒してもいいっすか？」

ちなみに自分の手にはお盆とその上にお茶の入った急須にカップが三つ用意してあるっす

そんな自分の声に気付いて二人が振り向く

「もちろんかまわないとも、それと案内ご苦労様」

「．．．勝手にしろ」

ベートさんは相変わらずっすけど団長が雑用に対する労いの言葉を掛けてくれた、感激っす。

お茶を淹れながら、それにしても珍しい組み合わせっすね、と二人に来てみると

「ただの暇つぶしだ、兄貴が試験官やるって聞いてなけりや暇でも来ねえがな」

「僕の方は少し気になる子がいてね」

「え?!」

|||||

同時刻

くダンジョン23階層く

「団長に何かガア起こってるうううう!」

「ちよ、テイオネいきなりどうしたの!」

「・・・ん?」

戦闘中、急に猛り出したアマゾネスの姉に妹と仲間の女剣士が困惑していた

「ンガアアアアアア!! 団長オオオオオオ!!」

|||||

(ちよちよちよつべートさん!? やばくないっすか!?)

(おい、ティオネの奴が周りに居ねえだろうナ!?)

団長の爆弾発言に自分だけでなくべートさんもギョつとなつたつす、ティオネさんは団長が他の女性と男女として関わる話には敏感で見境無く凶戦士になるつすからね  
その恐怖は同じファミリアの者なら誰もが知ってる周知の事実つす

面倒事に巻き込まれては堪らないと自分とべートさんが周囲をしきりに警戒する  
いや、もう団長が関わったときのティオネさんはマジで恐いんすよ

「いや、君たち何か勘違いしているようだけど、気になるっていうのは男女の話じゃないからね?」

団長は顔の前で手を振って違う違うと軽く言ってくるっすけど

「いやあく、それでも・・・」

「・・・あの狂戦士おんなだったら今のてめえの言葉だけで暴走すんぞ」

「ははは大丈夫さ、テイオネ達は今日は下層付近まで潜るって言ってたから

」

ダンチヨオオオオオオオオオ

「あれ、なんすかね、今何か直接頭の中に・・・」

「・・・幻聴だろ」

「僕も幻聴だと思うよ・・・何故か寒気が止まらないけど」ゾクリ

団長、顔が真っ青なんすけど・・・

・  
・



「えーと、それで何の話だったかな……」

「今回の入団希望者の中に団長が気になる子がいるって話つすよ」

ダンチヨオオオオオオオオオ

「……う……頭が」

三人が同時に頭痛に襲われたように頭を押さえたつす

……これ本当に幻聴？

「あの、団長、これってもしかしなくても……」

「オッホン……今回の入団希望者に気になる人物が居る理由はこれさ」

あ、聞こえなかったことにするんすね

澄まし顔のまま顔色の悪い団長が自分達に一枚の蠟で封がされていたであろう封筒を渡してきたつす

「つーかなんで俺に渡すんだよ・・・ラウルに渡せよ、ほれ」

ベートさんから渡された封筒には一枚の紙が入ってたつす

というかベートさんもさっきの声を聞こえなかったことするんすね・・・つと見た目は普通の封筒つすね？

えつと自身は・・・

「・・・推薦状？ これどこの・・・って『学区』からつすか!？」

「『学区』？ なんだそりゃあ？」

「ベートさん知らないんすか!？」

『学区』

世界中の一定の区域を拠点として数年ごとに移動する教育機関

そこではほぼ無償で様々な教育を施してくれるだけでなく、その人の才能に合った職場への紹介もしてくれる

そしてその中にはもちろん魔法や冒険者を育成する部門も存在する

ただし、人材育成が主題のこの教育機関は評価の誇張を嫌う

あくまでも実直な評価をその人物にとつていつそ残酷なほどに下す

それはつまり、才能があると言われた者は間違ひなくその分野に於いて天才なのだ  
そしてそんな『学区』が推薦状を書いた上で紹介するのがこのロキ・ファミリア  
余程の人材が今回の入団試験に紛れ込んでいるということになる

そのことをベートさんに説明すると

「あそこにエリート思考の甘ちゃんがいるってだけじゃねえか・・使えねえだろそいつ」  
くだらない、とでも言うかのような表情で吐き捨てられたつす

「いやいやいや入団してくれたら即戦力つすよ!？」

「お勉強しかやってこなかったモヤシがダンジョンで通用するかよ」

そんな怖い目で睨まないでほしいつす

「いや、そう言われるとそうかももしれないんすけど・・・」

うう、ベートさんの言ってることは多少乱暴つすけど一理あるんすよねえ、冒険者として実力が伴わないくせに机上の空論ばかり上げる者を自分たちは今まで腐るほど見てきたつす

それでも『学区』の推薦というのは別格であるということ踏まえた上でベートさんにどう返答しようかしどろもどろしていると――

「だから、僕が直接見に来たのさ」

団長が間に入ってきてくれたっす、カッコイイ!!

「ただの見かけ倒しならぬ、推薦倒れかどうか判断するのなら直接見るのが一番だからね、それに今回の試験官は厳しいことで有名なカイトだ、その人物の器を測るには――

ズン

「!?!」

「ちようどいいだろうしね?」

とんでもない威圧感に自分とベートさんがその発生源に目を向ける

(!?!、これは・・・っ!?!)

殺気の発生源は自分達の視線の先にいるカイト

その威圧感に離れた自分にまで届く程でもう、うひゃくって感じつつ  
いや、でもこれ・・・

「うわく・・・ちよ、団長これ、試験にしてもカイトのやりすぎじゃないっすか・・・？」  
気の弱い者や実力が伴わない者がカイトから発せられる殺気に耐えられずにバツタ  
バツタと昏倒していく

「うくん、今回の試験はカイトに一任してるから僕はノータッチなんだよねえ・・・ま、  
大丈夫でしょ」

「ハッ、雑魚共が身の程を知るにはちょうどいいじゃねえか、意識もねえ腰抜けは入って  
くんじゃねえってことだろ、さすが兄貴だぜ、わかかってやがる」

団長もベートさんも楽しそうにカイトと入団希望者達を見てるっす・・・鬼かと

自分達が目を向ける先には試験を受けに来た者達にスキルを使用したカイトが殺気  
を含ませつつ威圧を放ってるっす、一応手加減はしてるみたいっすけど、下級、もしくは  
はそれ以下じゃ最悪一日中気絶コースで次の試験はおじやん、上級でもカイトとの実力  
差を心身ともに刻まれて戦意喪失状態になる者も現れるはずっす・・・あそこに入団当  
初の自分がいたら間違いなく泡吹いて気絶してるっすねえ

「まあ、カイトなりの手っ取り早い振るい落しだね、やり方は荒っぽいけど、これに生き

残れる子は期待が持てるね」

「ハッ、あれに耐えて嘔み付けるなら米粒程度には認めてやっていいぜ、・・・ま、できればの話だがー」「うそお!？」

ベートさんが馬鹿にしたかのような口調で言っているとき目を疑うような光景が入ってきたっす

「・・・へえ、もしかして学区から推薦されたのはあの子かな？」

団長もその光景を見て少し驚いてたっす

カイトがスキルで威圧しているにも関わらず一人のエルフの女の子が魔方陣を展開、しかも

ドン

「撃ちやがった!」

街中での魔法の使用は原則禁止っすけど今回の入団試験のためギルドには絶対の安全をうちらで約束した上で許可をもらってるっすけれどこれは

「やばいつすよ、けっこう威力がでかくないっすか!？」

「はははは、まあ大丈夫だよ、カイトなら何とかするはずさ」

ええええええ!!?

团长さすがにカイトに色々ぶん投げすぎでは!?

めちやくちや焦る自分とは対照的に团长は朗らかっす

いくらなんでもカイトでも、カイトでも・・・

・・・いや、確かにカイトなら大丈夫っすね

思い出すのはここ数年でのとんでもない事件やダンジョンでの出来事

アホみたいな偉業を連続で打ち立てているカイトの心配をする自分がアホらしくなってきたっす

あー・・・なんだろこれ、カイト基準で物事を考え始めると大抵のことが普通に・・・いやいやいや!だめっすよ自分!!

カイト達の異常性に慣れちゃダメっす! 自分が常識人枠として踏みとどまらねばっす!!

あ、今回の合格者は最後に魔法をぶつ放したエルフの女の子のみみたいっす  
どうやらあの騒動の後に再試験を行ったそうっすけど全員が怯えて試験どころじゃ  
ない状態になったそうっす

まあ、カイトのやり過ぎっすね

副団長が珍しくカイトに説教してたっす

ちなみに合格したエルフの女の子の名前はレフィーヤ・ウイリデイス

もちろん学区からの推薦はこの子のことだったっすよ

ランクアップ済みであるとうことに加え貴重な後衛の魔導師エルフということで皆  
で超歓迎したんすけど・・・

かわいそうなことに、歓迎会の中盤であることが決定したせいで新人団員であるレ  
フィーヤのこれからの生活が地獄の如きキツイことになることが決定したっす

本人は全く何のことか分かってなかったっすけどね

まあ、入団したばかりじゃ分からないのも無理ないっす

これからのレフィーヤの地獄を容易に想像できるからか

「レフィーヤ、このケーキ美味しいわよ」



「え!？」

「レフイーヤおかわりはいるか？」

「え、はい、いただきます」

「レフイーヤこれ効果の高いポジションだ、もらつとけ」

「は、はい！ありがとうございます！」

と、こんな感じで自分の分のデザートを上げたり、料理を追加してくれたりと、団員のほぼ全員が必要以上にレフイーヤに優しくなつてたつすねえ

レフイーヤは

「わあ、なんて優しい先輩方なんだろう！」

みたいな感じだったんすけど

・・・違うんすよレフイーヤ！

そうじゃないんすよレフイーヤっ!!

それは明日以降地獄を見るであろう君への哀れみなんすよっ！

うう、でも自分にはどうしようもできないっす

ならばせめて

---

「レフイーヤ、自分はカイトと長年パートナー組んでたことがあるんで何かあったら相談だけならいつでも受けるっす」

「はえ? えつと・・・ありがとうございます?」

これが自分にできる精一杯っす

生きるっすよレフイーヤ!!

諦めたらそこで人生終了っすからね!

自分がかつての被害しゅ・・・いや先輩として全力で応援するっすよ!!

《side out：ラウル・ノールド》

|||||

## 50：師匠？弟子 前編



《side：レファイヤ・ウイリデイス》

◇ 10年○月▽日 天気イヤツフー ◇

今の私は最高にハッピーです！

不合格だと思った入団試験に奇跡的に合格できました

マインドダウンから回復したその日の夕食で簡単な歓迎会を開いて頂き、その会の半ばで団長から私には直接の指導員が付くということが告げられました

私の指導に付いてくれたのはなんと副団長にして我らがエルフの王族

『リヴェリア・リヨス・アールヴ』様!!!

もう、感激で言葉が出ません

私なんかが直接あのお方と言葉を交わすだけでなく教えを請うことが出来るだなんてっ！

我がウイリデイス家に末代まで語っても一切恥じることのない非常に名誉なことですよ!!

ですが、リヴェリア様は副団長としての職務だけでなく私以外の後衛魔導師の指導も行っており非常に忙しいとのこと、魔法に関する事以外は違う方が指導に付くことになりました

リヴェリア様と一緒に私を指導してくれるのは、例のお兄さん

いえ『ジョーカー切札』ことカイトさんでした!!

入団試験で見たあの實力は紛う事なき本物

そんな實力者までもが私の指導に加わってくれるだなんて光栄すぎて逆に申し訳ないというか——

「「・・・うわあゝ・・・」」

・・・え、何ですかこの空気

ガヤガヤと騒がしかった送迎会から一瞬音が消えたんですけど……

「レフィーヤ、このケーキ美味しいわよ」

「え!？」

「レフィーヤおかわりはいるか？」

「え、はい、いただきます」

「レフィーヤこれ効果の高いポーシヨンだ、もらつとけ」

「は、はい！ありがとうございます！」

何故か急に次々と先輩方が優しく声を掛けてくれたりデザートを譲ってくれたり……  
とりあえず先輩方とたくさん交流することができました！

新人である自分にこんなに良くしてくれるなんて何て暖かいファミリアなのでしょう  
うか！

(優しい先輩達の期待に応えるためにも頑張ろう！)

これからの冒険者生活への気合いがより一層強まりました。

・ ・ ・

. . . . .

◇ 10年○+1月▽日 天気ゲボエ ◇

訓練がキツイです

いや、覚悟はしていましたよ?

でもその10倍キツイです

なぜあの入団時の歓迎会で先輩方が優しく接してくれたのか訓練開始の三日目辺りで悟りました。

師匠——カイトさんと呼ぶのに何か抵抗があったのでこう呼んでいます——

師匠はかなりスパルタです

そして非常に合理的です

『テルモビユライ・エノモタイア炎門の守護者』アアアアアアア!!」

師匠、違います、何かはわかりませんがそのスパルタは違うと思います。

「とりあえず、走り込みと走り込みと筋トレと筋トレな」

師匠はこちらが逆らう理由を理論的に潰してから拷m・・・訓練を課します  
効果だけは如実に表れるので逆らいにくいです。

◇ 10年○+2月▽日 天気 爆裂 ◇

今日も今日とて私は体中から煙をしゅくと炊きあげながらグロッキー

最近のリヴェリア様と魔法の本格的な修練も始まりました、とてもとても光栄なので  
すが師匠程ではなくとも厳しめです。

ちなみに今日はそこに師匠も指導に加わり難易度がナイトメアになっています 助  
けて。

先輩方はこの二人の訓練を初見殺し訓練と言っていましたでしたが初見じゃなくても余裕

で死にそうです。 いっそ殺せ。

ちなみに訓練内容は限界値まで魔力を振り絞って魔法を放つという単純ながらも厳しいものです

「目標は入団試験でカイトに放った魔法以上の威力を常時撃てるようになること」

と、リヴェリア様には言われました。

んな無茶な・・・あ、リヴェリア様、いえ何でもありません・・・はい、頑張ります。

今まで魔力爆発を恐れて込め切れていなかった魔力を魔方陣と魔法に込める

言葉にすると簡単ですが、例えるなら巨大な樽に限界まで火薬を詰めてそれを片手で持ちつつ火山地帯を綱渡りで歩く様な難易度です

『平行詠唱』ならこれを全力疾走で行う、といったところででしょうか

今の私では逆立ちしても無理

次元の違う話です。

入団試験のときに師匠に放った魔法は普段の私なら魔力爆発を恐れて絶対に込められないほどの魔力を込めて撃ちました、その結果として私でも驚くほどの威力となったわけ



ですね、いやああの時は我ながら自分で撃った魔法の威力に驚きました  
まあそれも師匠に簡単にブツ飛ばされましたけど……ヘコむ  
うう、とりあえず話を戻しましょう。

まあ、そんなわけで魔法の訓練で私は限界ギリギリまで魔力を込めて魔法を放つ練習  
をしているわけなのですが、そう簡単に上手くいくわけもなく……ボン！

しゅーしゅー、と焦げる臭いと音をあげて倒れているわけです

そして本当にキツイのはここからです

普通ここまでボロボロになったらその日の訓練で終了だと思っじやないですか？

「んじゃ、リヴェリア、いつも通り回復魔法よろしく」

「仕方ない、ハイポーションの代金も馬鹿にならんしな」

そう言つて強制回復で即座に訓練再開です

訓練？

いいえ拷問です。

◇ 10年○+3月▽日 天気 オロロロロ ◇

「お前さんは良くも悪くも後衛特化すぎなんだよなあ、まあそれも悪くないのだが・・・いざと言うときにそれだと困る」

それは、まあ、はい

訓練開始から早くも3ヶ月

自衛の近接訓練でズタボロ&仰向けに転がされている私に師匠がポツリと呟きました

私自身、近接に於ける最低限の自衛の力は必要だということはこの数週間の訓練で嫌と言うほど思い知らされている、主に師匠からの暴力とか暴力とか暴力とか暴力とか・・・正直ダンジョンのモンスターよりも師匠がコワイ

ですが、おかげでダンジョン上層では近接のみでも問題なく潜れる様になりましたつまり今の私の自衛技術の訓練はダンジョンのモンスターからではなく師匠から身を守るために鍛え上げていると言っても過言ではない・・・自分で言ってる内容がおかしいですね

何故、対モンスターではなく対師匠の訓練をしとるんですかね私は。





れ？」

ぬぐう・・・

言われて自覚する

ステイタスというのは理不尽なほどに経験を反映する

耐久を上げるということはそれだけ負傷しなければならぬということだ、後衛の自分が耐久のステイタスを上げるのは非常に難しいだろう

というか誰が馬鹿弟子ですかこの鬼畜師匠め

「ほくう・・・・・・ま、耐久も上げたいってのなら話は簡単だ」

へ？

「今日からもうちよい厳しめに逝くか」

え、これ以上厳しく？

あれ、もしかして鬼畜とか言ったの　お、怒ってます？

そんな、これはほら、あれですよ！

師匠と弟子の気軽なコミュニケーションじゃないですか・・・あの・・・顔がマジな  
んですけど・・・。

「休憩終わり〜　それじゃあ行くぞ〜」

ちよまつ無理!無理ですって!?

テルモヒユライ・エノモタイア

『炎門の守護者』アアアアアア!!』

いやああああああ!?

今日も師匠は超スパルタです。

◇ 10年○+4月▽日 天気 ズーンとシヤラ〜ン ◇

ダンジョンの中層で死にかけました

油断していたつもりはありませんでしたが探索中に床が急に崩落

そのせいでパーティメンバーとはぐれてしまったからです

唯一の救いは孤立ではなく1人の先輩冒険者と一緒だったことでしょう

「レフィーヤ、とにかくここから移動しよう、今の音を聞きつけてモンスターが集まってくるかも知れない」

「っ……はいー！」

時には息を潜め、時には全速力で駆け抜け

そうして、かなりの長い時間を彷徨さまよいました

もし訓練で師匠に扱かれていなければこの行軍に付いていけなかったでしょう、厳しすぎる師匠との訓練が私の命を間違ひなく繋いでくれました、調子が良いかもしれませんがこのとき心の底から師匠には感謝しました

「……くっ」

「ひっ!？」

それでも、とうとう中層で最悪のモンスターに数えられるヘルハウンドの群れに追い込まれてしまいました

先輩もさすがにこの状況には焦っていましたし私に至っては絶望です

背後は高さ15メートル以上の壁

先輩や私にそれだけの高さを跳躍できる力はありません

『G A A A A A A A A A A A!!』

唯一の逃げ道である前方を塞いだヘルハウンドの群れが一斉に極炎の炎を私たちに  
向けて放ちました

——— ああ、私死ぬんだな

と諦め掛けたときでした

『——— 盾となれ 破邪の聖杯』

頭上から綺麗な詠唱が聞こえてくると同時に誰かが私達の目の前に降り立ちました  
でも

間に合いません、だってもう炎が目の前に———

「【<sup>魔</sup>ディオ・<sup>法</sup>グレイル<sup>障壁</sup>】!!」

た、短文詠唱魔法!?

ヘルハウンドの炎は全てその人が展開した魔法障壁によって防がれ、私たちは九死に  
一生を得ました

あの詠唱の短さでこれ程の強力な障壁を展開するなんて・・・すごい。



「あ、あなたはカイトさんの——」

先輩が何か言っていますますが放心状態の私では「すごい」という陳腐な言葉しか出てきません

「——無事か？」

「は、はい……あ、もしかしてカイトさんからの救援ですか？」

「そういうことだ、あいつもすぐに駆け付ける」

どうやら師匠からの救援とのこと

背後の壁から降り立ったのは白の装束をメインとしたとても綺麗な同胞エルフでした

名前は『フィルヴィス・シヤリア』さん

二つ名は『白巫女』マイナデス

後から聞いて話ですが、崩落に巻き込まれなかった私のパーティメンバーがすぐに地上の師匠に救援を呼びに行き、そこで師匠と共に居たフィルヴィスさんはいついでとばかりに探索に協力してくれたのだそうです。

「私が来るまでよく生き延びてくれた、カイトが来るまでにはこいつらを一扫する

——後は任せろ」

「お願いします……ふう、レフィーヤどうやら何とか……あれ、レフィーヤ？」

か、かつこいい ……

はっ、い、いけません

私にはアイズさんという心に決めた憧れがっつ…!?

「おっ、レフィーヤ〜帰ってこーい…」

その後、フィルヴィスさんは複数いたヘルハウンドを宣言通りに一掃

先輩と私はこの後すぐに到着した師匠達に保護され地上に帰還しました

それと不謹慎かもしれませんが、私が生きていることに安心した師匠の顔は中々に見  
応えがありました、あんなに焦った顔もできるんですね〜ふふふ、心配を掛けてしま  
い申し訳なかったですけど、きちんと心配してくれたことが少し嬉しかったです…我  
ながら不肖の弟子だと思います。

・ ・ ・

私は今回の件でダンジョンの恐ろしさを初めて知りました  
ですが

帰還した後の私の心を占めたのは恐怖ではなく興奮、私を助けに来てくれたフィル  
ヴィスさんの戦闘時の光景が目には焼き付いて離れなかつたからです

魔導師であるにも関わらず前衛に負けないほどの短剣による鋭い剣戟

そして『平行詠唱』

しかもただの『平行詠唱』ではなく魔方陣を起動させつつの戦闘

魔導師として理想の戦闘スタイル

技  
リヴェリア様や一部の特別な者にしか使えないものだと、どこか遠くで思っていた絶

でもそれを当たり前のように使う者達がゴロゴロいるオラリオ！

私もいつかあんな風に！

私はいつかの未来に思いを馳せつつ昂ぶって眠れませんでした

あ、ちなみにフィルヴィスさんは師匠と将来を約束した恋人だそうです  
我が師匠ながらあんな美人を捕まえるとは羨ま・・・やりますね！

◇ 10年○+5月▽日 天気 カ〜〜ツ・・・ペツ! ◇

師匠がクズでした

将来を約束した恋人がフィルヴィスさん以外に3人もいるそうです・・・ゴミですね、女の敵です。

フィルヴィスさんというあんなに綺麗な人が居ながら他の女性にも現を抜かすとは……死ねばいいですよ。

訓練時に刃を間引いていない短剣で斬りかかりました

天誅ううううううううそして日頃の恨みいいいい!

「お、今日は妙にヤル気満々だな! 結構結構ハツハツハツハッハッハッ!」

へブあるぶ!?

・・・掠り傷一つ負わせることもできずにボロボロにされました

無念。

◇ 10年○+5月▽+5日 天気 ◇

「いや、カイトに嫁が増えたのには色々事情があるんすよ」

食事の際、たまたま居合わせたラウルさんに師匠の愚痴を零していたら師匠の事情に  
関して軽くですけど教えてくれました

何でも最初の恋人である『全能』ベルゼヴスこと『アスファイ・アル・アンドロメダ』

その人がはちやめちやな事件に巻き込まれやすい師匠を支えるために集めたのが  
フィルヴィスさんを含めた3人なのだから

師匠を愛するが故に師匠の命を最優先で動くロキ・ファミリア以外での師匠の嫁

・・・というか私兵のような感じらしい

「まあ、これがまた面子がスゴいんすよねえ」

### 《筆頭嫁》

『全能』ベルゼヴス『アスファイ・アル・アンドロメダ』Lv. 4

ヘルメス・ファミリア団長にしてオラリオでも5人と居ないアピリテイ『神秘』を持ち  
ち数々の魔道具を製作してきたアイテムメイカー

《嫁序列次位》

『戦場の聖女』 『アマミッド・テアサナール』 L v. 2

オラリオ最高の治療術士にしてこちらにも『全能』<sup>ベルセウス</sup> 同様に『神秘』を持ち 数多の薬を開発・製造し現在もオラリオの冒険者全てに多大な貢献をしている

《嫁序列下位》

『単眼の巨師』 『椿・コルブランド』 L v. 5

世界にその名を馳せる第一位の武器ブランド『ヘファイストス』、そしてそのヘファイストス・ファミリアの団長にしてオラリオ最高の上級鍛冶氏

《嫁序列下位》

『白巫女』<sup>マイナデス</sup> 『フィルヴィス・シヤリア』 L v. 5

ディオニコソス・ファミリア団長

.....はい？

筆頭嫁？嫁序列？.....なんですかそれ

「なはははは、いや、これは周りが面白がつて勝手に言ってることなんすけどね？」

何でフィルヴィスさんが《序列下位》なんですか!!!

「そつち!？」

というかフィルヴィスさんの紹介が雑くないですか!?

もつと、こう、すごいスキルとか魔法とか!

「確かに、フィルヴィスさんだけのすごい魔法があるといえはあるんすけど……」

それ……!それです!!そう言うのを教えてくださいよ!

「いや、あの魔法は極一部の者しか知らない魔法つすからねえ……本人の許可無く自分が教えるのはちよつと……」

なるほど確かに他人の魔法を無闇矢鱈に………ん?

いや、待つて下さい、何でラウルさんがその極一歩しか知らないことを……

しつてゐるんです?

あれから師匠を通じてフィルヴィスさんとお話を色々しているんですけどそんな秘密の魔法があるとか聞いてもいませんしそもそも私はまだ出会ったばかりで全てを教

えて貰えるとはおもいませんけど男と女には遙か彼方の距離があるんですよそれなのに男のラウルさんが知っていて同じ女である私が知らないのってちよつとおかしいというか納得いかないというかそもそもラウルさんがフィルヴィスさんの名前を呼ぶときにかかなりの気安さを感じましたもしかしていやもしかなくても私以上に親しい間柄なのでしょう。確かに冒険者としての経歴の長さから知り合いでもおかしくはないのでしょうけど親しき仲にも礼儀ありもうちよと畏敬の念を持って名前を呼んでみればいかがでしょう。かいかいや別にラウルさんを軽んじているわけではありませんよええ決して羨ましいとかそんな低俗な感情で聞いているのでなくただただ尊敬するフィルヴィスさんとの距離がどのくらいあ

「ちよつ、レフィーヤー!いや、レフィーヤさん!? 乙女がしちやいけない顔になってるっすよ!?!」

な  
ぜ

「い、いや、昔からよく自分にカイトとアイズさんフィルヴィスさんの四人でパーティを



組んでダンジョンに——」

フィルヴィスさんどうあけえじやなくてえアイズすわあんともオオオオオオオオオオオオオオ!  
オオ!?

「ひいひいひい!?!人がしていい表情じやなくなってるううううう!?!」コワイ!?

コオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
（　　?　　?　　?　　、

．　．　．　．　．

「うう、さ、さすがカイトの弟子つす．．．この親にしてこの子ありとはこのことつす  
よ．．．」

先輩のラウルさんに失礼しちゃいました、レフィーヤ反省☆





この後、目覚めたらマジで17階層でした。

『G A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A!!』

いやああああああああ!! ホントに死ぬうううううう!!

現在、階層主との命を掛けた鬼ごっこ中、もちろん鬼は階層主のゴライアス捕まる||死 という史上最悪の鬼ごっこです

「頑張れ〜我が弟子〜!」フレーフレー、レフイーヤー

遠くからわざわざ黄色のポンポンを持って声援を送るアホが一人、というか師匠

「ゴライアス君も頑張れ〜」ヒュ〜

このっ・・・くたばれ鬼畜師匠ーーー!!

『G A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A!!』

師匠に気に向けた瞬間、私のすぐ後ろにゴライアスの拳が振り下ろされました、衝撃だけで数メドル吹き飛ばされる威力です

ああ、もうっ!いつかあの鬼畜師匠、ぶっ殺

『G A A A A A A A A A A A G A A A A A A A A A A A A A A!!』

その前に私が死ぬう!?

でもこの時の私はまだ知りませんでした  
これすらもラウルさん達が恐れる訓練の半分にも届かないなどは・・・

《side out：レファイヤー・ウイリデイス》

|||||

## 51：師匠?弟子 中編



《side：レフィーヤ・ウイリデイス》

◇ 11年○月▽日 天気パーリー ◇

早いもので入団してから一年と少しになります

おかげでロキ・ファミリアにも大分慣れてきました

そんなアンニュイな時期にリヴェリア様から直接お達しがありました

なんでも

「カイトから、『そろそろ遠征に参加するだけの最低限の基礎は叩き込んだ』と報告を受けた、レフィーヤ、お前も次の遠征に参加となる、2週間後までにしっかりと準備をしておけ」

つ、つつつつつつつ．．．ついにっ！

初めて大規模の遠征への参加!!

長かったっ！本当に長かったですっ!!

ああ…思い出すのはこの一年と少しの地獄の日々

．  
．  
．

「おらあ！足元がお留守だぞ!!」

「アキヤアアアア!？」

地面に何度も転ばされ、泥が付かない日は一日としてなく

．  
．  
．

「杖術は回転が基本！というわけでバトンの練習を楽しくダンスをしながら」





◇ 11年○+1月▽+14日 天気 暑い ◇

あれから一月半

本日未明、遠征からようやく帰ってきました

今回の遠征では色々反省することばかりでした：はあ

『遠征メンバーに選ばれた』テツテレー♪

そのせいでしょうか、自分でもちよつと調子に乗ってたと思います

『憧れの方々と肩を並べてダンジョンに潜れる』

ただそれだけのことで舞い上がっていました

世界に名高いオラリオ

その中でも二大派閥の片割れの遠征がそんなウキウキ気分で済むわけなのに  
少し想像すれば分かることなのに：はあ、私のバカ

…何か色々疲れました  
続きは明日書くとしましょう。

◇ 11年○+1月▽+15日 天気 だるゝい ◇

『上層』・『中層』・『下層』を越え

初めての『深層』

『下層』ですら初めてなのにそれを越えての『深層』

完全にサポートに徹していたとはいえ、その道は想像を絶するものでした  
なにせ深層ではあの師匠が血を流す事態が起きるのです、それも頻繁に。

私の中で「憧れ」がアイズさんやリヴェリア様だとしたら

「理不尽」の代表は師匠です

：わかるでしょうか？  
理解できるでしょうか？

そんな方々が血まみれになって息も絶え絶えになるのが『深層』なんです  
理不尽代表の師匠がそれ以上の理不尽で膝を突く姿には自分の眼を疑うほどでした  
師匠が血を流す所なんて初めて見ました、ダンジョンつてすげえ…いいぞもつと…  
あ、いえ、ダンジョンの恐ろしさの一端を垣間見た気分です、はい。

でもそれ以上に――

「第二部隊は槍を構え！第一が下がると同時に突撃！前線を押し上げろ！」  
全員に的確に指示し鼓舞する団長

「全員、耐えるんじや！背中に一匹たりとも魔物を通すでないぞ!!」  
前衛の先輩方を率いて教え切れないモンスターを自らも最前線で食い止めるガレス  
さん

「第二部隊が下がると同時に撃つ、全員詠唱開始!!」

そのモンスターを魔法で一気に殲滅するために魔法部隊の指揮を執りつつ自らも魔法を行使するリヴェリア様

「テイオネ!後退する第一部隊の援護にラウル達と行ってくれ、こっちは残り全員で第二が取つ付きやすいように『視野混交』と同時に突入!中から掻き回す!!行くぞおおおお!!」

「「応おおおお!!」」

そしてアイズさんやベートさんといった突起戦力メンバー全員を率いて独立遊軍のように立ち回る師匠

かつこよかったなあ〜…

御伽噺を実際に眼にしたかのような、いえ、あれは間違いなく後世に語られる冒険譚の一幕

それを間近で見ることができるといふ自らの僥倖にわけもわからず感謝したくなり  
ました

はあく…かつこよかったなあ…いやほんとかつこよかったんですよ

団長達やアイズさんはもちろんですが、いつも鬼畜な師匠ですらカツコよく感じた程ですから相当なものですよ

つていうか師匠や他の方々から話だけで聞いていた師匠の例のスキルを始めて眼にしました

代償を伴う代わりにランダムで強力な能力をその身に宿すというギャンブルちつくなリスキースキル

何ですかアレ…強すぎでしょう

深層で超大規模なモンスターパーティに巻き込まれた際に一切の躊躇無く発動させた今回の能力は『神々の義眼』という支援系の能力らしく

透視、視覚の共有、視覚の篡奪といった視覚に関することは大体できるようです

そして、それを利用して団員全員に視覚共有を行い部隊行動を行うという離れ業

大規模な戦闘中に急に片目から私が見ている光景とは違う映像が見えるのは慣れないせいでも平衡感覚が少しおかしくなりそうでした

ですが、慣れている方々への効果は歴然

片目から筆談で即座に団長の指示が伝わり

リアルタイムでの現場状況の把握

ただでさえ集団として強いロキ・ファミリアの動きがまるで一つの生物のようでした

ただし、確かに師匠の今回の能力は強力なのですが・・・その代償がキツイ

代償は『一時的な失明』

一時の油断も許されないダンジョン

しかもその深層で視覚を奪われるという致命的過ぎる代償

・・・普通なら、ですけど

大規模のモンスターパーティーを乗り越えた後しばらくしてからのことです

通常の行軍中に突如、壁からモンスターの群れが現れるという奇襲を受けました

「カイトさん危ない!」

「師匠!」

突如現れたモンスターからの奇襲に後方に下がっていた失明状態の師匠がモンスターに囲まれるという事態があったのですが

焦るこちらとは裏腹に師匠はゆっくりと自身の武器である「刀」その柄に手が触れ  
「シツツ!!」

——た瞬間

ビシヤ

「!!・・・え!!」

聞こえてくるのは師匠の周囲で血肉が飛び散る凄惨な音

「おおい、すまんが一応、魔石の回収を頼む」

取り囲むようにして師匠に飛びかかった複数のモンスターが一瞬で細切れになっ  
て  
ました

「「えー・・・?」」

「ん?・・・どうしたお前ら?」

この程度なんでもないとでも言うかのような師匠の人外つぷりに一部の方々を除き  
どん引きです

師匠、あなた本当に眼は見えてないんですよね?

「ああ、マジで見えてないぞ、まあこの程度なら音の反響とかで把握できるさ、例えば：：そうだな：：ここから20メートル先を歩いているのはリヴェリアだろ？」

あ、当たってます、本当に音の反響だけで？

「まあ、音だけじゃないがな、特にリヴェリアは最近俺の作るデザートを食べ過ぎて体重がベエゲエ!？」

どこからともなく飛んできた杖が師匠の喉につ!?

「おっと、すまんなカイト、手が滑った」

ツカツカと歩いてきて杖を拾うのはリヴェリア様

「何すんだリヴェリア、増えたつつつてもたつたの「ふん!!」ボエ!？」

師匠にトドメが・・・

「・・・お前達、カイトから何か：：キイタカ?」

『『ブンブンブンブン!!』』

全員、首が千切れんばかりに横に振ります、藪を突いてリヴァイアサンを出してはいけません

「うむ、賢明なものはダンジョンでは長生きするぞ、ではな・・・行軍には遅れるな、そこで倒れてる荷物も一緒にな」

そう言つてリヴェリア様は離れて行かれました



・・・色々な意味で危機は去りました、ふう

それにしても、どうやら師匠の場合は他の感覚が優れすぎていて普通に過ごせるみたく、相変わらず化け物みたいな人ですね

私、あんなすごい人の弟子なんですわね・・・地上ではあまり実感しにくいことを改めて痛感させられます・・・私もいつか師匠達みたいになれるのでしょうか？

◇ 11年○+1月▽+18日 天気 わけわかめ ◇

ダンジョンから帰還して早数日

幹部クラス、先輩方のステイタス更新もほぼ終わったと聞いたので私自身のステイタスを更新するためにロキの部屋へ行きました

ステイタスを更新するためとはいえ裸になるのは今でもちよつと恥ずかしいです

まあ、未だに恥ずかしいのはロキのせいなんですけど・・・

「グへへへッへ、すべすべな肌やで〜」

うう…主神のセクハラが酷いっ

「変なことをしたら指を切り落としていいぞ」とリヴェリア様からは言われていますが、そんなことできるはずもないのでため息を尽きつつ耐え忍びます

「んお?…これは…んんんん?」

あれ?

なんででしょうか、いつもより少し更新が長いような…

「レフィーヤ、すまん、ちよつと急いでフィン達を呼んできてくれへん?」

え…団長達ですか?

「せや、最低でもリヴェリアとカイトだけでもちよつと連れてきて欲しいねん」

それはいいですけど…また急にどうして

「せやなく…とりあえずなんやけど、レフィーヤ、おめつとさん!!」

はい?

「最後の三つ目の魔法が発現しとつたで〜」

え、は、?魔法?

「それに関してリヴェリアやカイトと相談したいから呼んできて欲しいねん」

わ、わかりました!…あの、二人を呼ぶ前にどんな魔法が発現したかステイタス

の写しを見せてもらっても良いですか？

「ええでー いやあくそれにしてもカイトのスキルもチートやったけどレフィーヤも大概やなあ」

え、そんなすごい魔法なんですか？

「まじですーいいでこれ・・・ぶつちやけ、下手したらカイト以上のチートや！ほれ、これがステイタスの写しや」

ロキから渡されたステイタス紙には確かに今までなかった三つ目の魔法欄に新たな魔法名が刻まれていた

「なに・・・これ・・・『サモン・バースト召喚魔法』？」

◇ 11年○+1月▽+20日 天気 ブリザード ◇

私に発言した新たな魔法

『サモン・バースト召喚魔法』

魔法名《エルフ・リング》

同族であるエルフの魔法であれば文字通りいくつでも召喚し行使することが出来る。ただし、召喚するには使用する魔法の詠唱及び効果の完全把握ができていなければならず魔力の消費も倍になる。

ただそれを補って有り余るほどの有用性があるとロキも師匠も言っていた。なにせ手数を無限に増やすことが出来る上にそれを自分で選択までできるのだ。その程度の条件はむしろ軽い方だと思えと言われたし、私自身そう思う。

ロキ曰く

「この弟子にして師匠あり・・・いや逆やな、この師匠にしてこの弟子ありやな」

師弟揃って、一つのスキルや魔法で複数の能力を行使するという前代未聞の大珍事。「レフィーヤがこの魔法を発現したのは間違いなくリヴェリアとカイトの影響やろうからなあ」

本来なら三つしか使えないはずの魔法、その常識を越え九つの魔法を使いこなす『ナイン・ヘル九魔姫』リヴェリア様

スキルという魔法ではない力で未来・過去・次元すら超えて未知の力を複数使用する  
『切札』<sup>ジョーカー</sup> 師匠

この二人の共同弟子という偶然が今回のイレギュラーである私の魔法を発現させた  
とロキは言っていた。

魔法というのは本人の心の底の願いが現れやすいと云われているのであなたが間違  
いではないのかも知れない

とまあ、そんなこんなで本日は私に発現した新たな魔法の試し打ちということでダン  
ジョンに来ています

ちなみに同行者は師匠とリヴァリア様の二名  
あまりゾロゾロと大人数を引き連れて目立つのを避けるためにも必要最低限という  
ことでこの三人になりました

そして――

「ウイン・フィンブルヴェトル!!」

大気中にある水分が凍りつく音と共に広大なルームの一角が絶氷の津波に飲み込まれる

使用された魔法はリヴェリア様の所有する魔法の中でも最大の威力を誇る第一階位の魔法

氷による恐像がルームの半分を覆い尽くしている光景が目の前に広がる

そして、それを放ったのはリヴェリア様ではなく私

「ひ、ひいえ〜…」

自分で自分の放った魔法の威力にドン引きしてしまいました

「おくすげえすげえ、マジで撃てんのな」

「ふむ…戦略の幅がさらに広がるな、フィン達と新たな陣形について練りたい所だ」

「だなく、平行詠唱ができない内は当分、遠征中は後衛をメインでいくしかないしなあ」

「そっちの遊撃から何人か護衛を抜けば独立して砲撃手もできるが?」

「いいなそれ!…つてくると、ラウルかアキ…いや念には念を入れてティオナ

辺り…か?」

少し後ろでお二人が私の放った魔法を見て品評会の様なコメントをしていました

「レフイーヤ、この威力の魔法なら何発までなら撃てそうだ？」

「はい!! えつと・・・たぶん、ですけど・・・余裕を持って二発、マインドダウン覚悟でも三発目が撃てるかどうか、だと思えます」

分かつてはいましたが魔力の消費が洒落になりません、師匠には「余裕を持って二発」なんて言っちゃいましたけど、たぶん二発撃った時点でかなりヘロヘロで余裕がなくなると思います。

「カイト、これなら・・・」

「ああ、これで今まで以上にアレもできるし・・・それにこいつが居ればメレン港まで直接行くこともできそうだ、あそこはオラリオへの海の玄関、情報提供できるパイプがあれば後々色々な事で役に立つこともあるだろ」

「成る程・・・ニヨルズ・ファミリアに貸しを作る、か・・・」  
「まあ、そこら辺は交渉次第だな」

あの・・・何の話をしているのでしょうか・・・私の関知しない話に間違いなく私が組み込まれている会話が聞こえてくるんですけど・・・

「とりあえず、今日はいいつにリヴェリアの魔法を全部使えるようになってもらおうとするかね」

今日で全部!?

「今日一日で全ては難しいぞ」

さ、さすがリヴェリア様、魔導師としての負担をわかってらっしゃ——

「とりあえず攻撃のみは今日中に、回復と防御系は明日以降でいいだろう」

—— おっふ．．．連日で魔法の実地修練ですか．．．キツそうです

そんな私の悲壮な覚悟を知ってか知らずかお二人の改造計画（私）の話はドンドン進んでいきます

誰も止める人がいないのが私の不運．．．うう．．．

「全部で何日かかりそうだ？」

「覚えるだけなら三日もあればいけるだろうが．．．使いこなすとなると．．．」

「こいつ次第か」

「そうなるな、魔法の修練は魔力が回復する時間も考えなくてはならないからな」

「魔力の回復も考えると三日に一回が限界つてところか．．．となると．．．余裕を見て、



一月で全部の魔法を『とりあえず使うだけにはできる』ってレベルまで持つて行きたいな」  
「ふむ、善処してみるとしよう」

「となると、俺の方の訓練を——」

恐ろしい教育計画が後ろで着々と立てられています

拒否権とかないんだろ？うなあ・・・いや、ちゃんと頑張りますけどね？

詠唱の暗記とこれまで以上の魔力操作練習

師匠との訓練よりかはいくらかはマシでしょう・・・うん、そう思えば、いくらか気持しが楽になりました！

頑張ろう!!

・・・っていうかお二人はまだ訓練について話してます

「マインド・ポーションを多めに用意してぶつ倒れたらそれをガンガン突っ込めば訓練の効率が良くなるんじゃないかね？」

あ、師匠、これ私を殺す気ですね・・・ほんと死ねば良いのに

「馬鹿を言うな」

さすがリヴェリア様！リヴェリア様は最後の良心です！！

「一日5本までにしておけ」

．．．．．さ、最後の、良．．．心．．．。

《side out : レファイヤー・ウイリデイス》

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||



その威力に抑えられぬ驚きを感情と声に乗せて周りの者達が声を上げる  
そう、ここはダンジョン

「じゃあ嬢ちゃん、次も頼むぜえ!!」

「は〜い…」ゼエゼエ

———ではない

場所はオラリオから最も近い港、『メレン港』

目の前には私の魔法によつて瞬間冷凍された新鮮な魚介類の数々が広がっています  
周囲には全身が日に焼け健康的な小麦色のムキムキマツチヨな漁師の方々……マジ  
で帰りたい

「こつちだ、嬢ちゃん!!」

「い、今行きまくす…」フラフラ

なぜ私がこんな所でこんな雑用みたいなことをしているのか  
今から時を遡る事 二日前

・  
・  
・

私が三つ目の魔法を発現させてから二ヶ月

地獄の特訓を乗り越え、とりあえずギリギリ及第点でリヴェリア様の魔法が使えるだけにはなりました

(ふう……少しは使用にも慣れてきましたね……ん?)

訓練で私が魔法を使用するのを見て師匠とリヴェリア様がなにやら密談をしていました

「もうそろ……メレ……に……クククク」ヒソヒソ

「そうだな……だがい……魔ほ……しの取り分……フフフ」ヒソヒソ

こ、怖い……つていうか絶対良からぬことを考えてますよこれっ！

「あ、あの……お二人とも、何か……？」

意を決して二人に声を掛けました

「いや、なんでもないぞ」「ニッコリ

絶対に嘘だー！ー！ー！！

「嘘だ！絶対に嘘ですよ！！お二人とも何か新たに企んでましたー！！何ですか次はどんな訓練ですか！地獄のその先がまだあるって言うんですか!？」

「おいおい被害妄想がすぎるぞ?」

「既に被害にあってるから言ってるんですよ!」

シャーっと師匠に警戒する私

この一年間のことを考えれば当然の警戒心です

「落ち着けレフイーヤ」

「うう、ですが・・・」

師匠とギヤアギヤアと言いつ合っているのを見かねてリヴェリア様が仲裁に入ってきました、さすがにリヴェリア様には正面切つて文句が言いづらいです

「やれやれ、このバカ弟子は何を勘違いしているのかねえ、俺とリヴェリアは頑張ったお

前に何かご褒美でもやるかどうか話してただけだったの」

「え……う……うむ、最近のレフイーヤへの頑張りに何か報いるものでも用意しようと話  
しててな」

「とりあえず、今日は俺が特性のデザートでも作ろうと思つてな……何か希望とかあるか  
？」

「え!？」

な、なんでしょうリヴェリア様はともかく師匠が優しいですキモチワルツ

「………罨?」

「失礼な、心優しい師匠の気遣いを何だと思つてんだ」

この日の夜

夕食後、本場に師匠お手製のデザートが振舞われました

「え!?ちよつ、カイト何それ新作デザート!？」

「私も食べたーい!」「私も!!」「自分も食べたい!」

師匠の料理の腕はファミリア内なら周知の事実

師匠がデザートを出した瞬間に甘いものに目がない方々が次々に集まってきましたが

「わりのが今日は馬鹿弟子へのご褒美なんでな、一人分しか作ってないんだ」

「「ガーーーーーッーン!!」「」」

師匠の無慈悲な一言に全員が絶望の表情に…あんまりそういう反応されると食べにくいのですが…

「それに、まだ未成品品の試作段階でな、全員に振舞うときはもつと仕上げた完成品を出すから勘弁してくれ」

「ええ〜」「はあ、仕方ないかあ」「残念」

他の皆さんも新作の試食という名目と師匠の説明によりとりあえずは納得したのか残念そうに食堂を後にしていきます

「…何か申し訳ないですね」

「アホ、こんなことくらいで遠慮すんな、パクツといけパクツと、ちなみにこのお菓子の名は『水マル餅』だ」

「へえ〜、餅って確か少し前に師匠がお米で作ってた奴ですよね」



「ああ、だが食感が似てるから餅って付けてるだけで材料は全く違うぞ」  
「でしようね」

なにせ以前見たことがある餅とは似ても似つかない

見た目は文字通り水のように透き通った半球体、そのため何かしらの具が入っているのが透き通って見える、食べるのが少し勿体なく思えるくらいには美しい

「ちなみに中身は何ですか？」

「それくらいは食べてからののお楽しみでいいだろ…あ、きちんと細かい感想も頼むな」  
「わかってますよ」

師匠は何か作った際には必ず食べた者からおべっかなしの感想を求めます、そして次に同じものが出た際には必ずその感想を元にグレードアップした料理が再登場するので美味しいものを食べるためにも素直で率直な感想を伝えなければなりません。

ちなみに食レポで一番師匠の評価が良いのは団長とベートさんだったりしますが、付け加えるならベートさんはその見た目や言動の荒々しさからは想像できないくらい料理上手、このファミアリアに入団した女子はまず自分より遥かに料理の腕が上の師匠、そしてとどめとばかりにベートさんの料理で女子としてのプライドを粉々にされます。かく言う私もその一人でした

「では、さっそく」

「おう、頂け」

竹で出来た楊枝でパクリ

(……………んんんんん美味しい！！)

口に含んだ瞬間に肌に張り付くようなしつとりとした不思議な食感、噛みしめると中から出てくる甘味が透明な餅部分と見事なマッチング、中身の正体は餡子と呼ばれる甘味、よく師匠がお菓子作りで使用する具材です、ああ今回のお菓子にも非常に合っていて美味!!

師匠の料理の腕を知ってはいても美味しいと思わずにはいられません

何でしょうね、初めての食感と味に例えるべきものが見つからず原始的にただ『美味しい』という陳腐な言葉でしか言い表せません、くっ、自身のボキャブラリーの無さに無知を禁じ得ません

「で、どうだ? 個人的にはもうちよい大きく作るか透明な餅部分を厚くしてもいいかなと思ってるんだが」

「んー、そうですねーそこら辺は個人で趣向が違ってくると思いますけど、私的にはむしろ一口で食べやすいようにもう少し小さくてもいいかなって思います、あ、でも餅部分

の厚みは今ぐらいがちょうどいいです」

「なるほど、ふむふむ『エルフ 女性 十代の意見』つと」カキカキ

あ、出ました、師匠の『丸秘ノート』

師匠はこうした感想や意見をレシピを書いてるページに書いたり貼り付けたりして独自の料理本を作つてたりします、一度見せてもらおうとしたら「将来の商売道具だから絶対ダメだ」と見せてくれませんでした

ちなみに無理矢理見ようとした者は師匠のアイアンクローで物理的に殺されかけたそうです……まあ私なんですけどね

出されたお菓子は二つ、残りの一つもパクリと頂く

(あ、こつちの中身はチョコなんですわね、同じ色に見えて気づかなかつた)

「そつちはどうだ？」

「んー……どつちも美味しいですけど……個人的には……うーん………餡子……の方が好みかなー……いえでもチョコはチョコで美味しかったですし……」

「成る程、比較的によはり水餅には餡子が合うか……となるとチョコやカスタード、ジャムといった具材別の餅生地を作るべきかもしれん……見た目も煌びやかになるしな」

「そ、そこまでするんですか……」

「馬鹿野郎、料理人の料理に妥協などない！」

いや、あんた冒険者でしょ

「さて、と・・・ほれ、その茶菓子に合う緑茶だ」

「あ、ありがとうございます」

緑茶の味と温度も計算されたように心地よい

本当に今日は至れり尽くせりです

こんなプチ贅沢ができるならこれからも頑張ろうと思えました

そう、そして

「ん、確かにこのお茶、このお菓子に合います——ウツ!?」 バタリ

「クツクツクツ計画通り・・・さくって準備準備つと……にしても良く効くなあれ」

——そんな幼気な小娘の気持ちを踏みにじるのが私の師匠なの  
ですよ

・ ・ ・

ご褒美のデザートを食べた次の日

(……………ん？揺れ……………てる？)

少し激しい震動で目覚めました

「よお、おはようさんレフイーヤ」

「……………おはようございます」

目覚めた直後に師匠の顔面ドアップ

通常なら少しは気恥ずかしさで顔を紅くするところですが今現在の私の状況がそれをさせませんでした

移動による流れる景色、身動きできない身体 師匠によって担がれている身体

(ナニコレ……………)

今の私の心情を表すとするのなら 怒り2・呆れ3・達観3・諦め2

こんな感じ。

「…師匠、いくつか質問があるので」

「んー？ 別にまだ時間があるからいいぞー」

何でもないというような態度が逆に私の神経を逆撫でします

「これ、どこに向かつてるんですか?」

「メレン港だ」

「メレン港?…オラリオ近くのですか?」

「おう、正確にはそのニヨルズ・ファミリアに用があつてな」

「はあ、なるほど…」

とりあえず現状を一つ把握、私と師匠はメレン港に向かっている、目的はどこぞのファミリアに会うこと、と。

「次の質問なのですが」

「おう」

「何で私は師匠に担がれてるんですか?」

「あまりにも気持ちよく寝てたから起こすのも忍びないと思つてな」

「ほほう…私の記憶に寄れば師匠に渡された飲み物を飲んでからの記憶がないのです  
が」

「気のせいだろう H A H A H A !」

「くくっ!何が H A H A H A H A ですかっ!この鬼畜!!ついに盛りましたね!?!人としてやつちやいけないライン超えたなこのアホ師匠!?!っていうか一応上級冒険者である私の状

態異常耐性が効かない薬ってどんだけやばい薬を盛ったんですか!」

「いやあ、新薬を試してみたいな〜って」

「弟子で人体実験しないで下さい!」

「アミツドが」

「アミツドさああああああん!?!」

脳裏にフフフフと微笑ましく笑いながら手を振る知り合いの姿が思い浮かぶ

——そして現在

私はメレン港の市場付近の倉庫でただひたすらに魚介類に冷凍魔法を撃つだけの冷蔵魔道具になっています

ちなみに師匠はメレン港に到着するなりニョルズ・ファミリアの方々といくつか交渉をした後、私に過酷な命令だけして先日から大量の漁船団を率いて遠洋漁業に行ってます……何やってんですかねあのアホ師匠は

(そして私も何やってんですかね・・・)

そう思いつつヤケ酒の様にポーシオンを一気飲み

(うう・・・マインドポーシオンの飲みすぎでお腹がチャプチャプですう・・・)

ちなみに既に4本のマインドポーシオンを消費済み

小食の私には液体とはいえ結構キツイです

(・・・そういえばポーシオンを吐いたら回復した分の精神力マインドつてどうなるんでしょうか・・・)

吐いたのをまた飲んで無限に回復が・・・いやいやゲロを飲む勇氣はさすがにないです・・・

あ、でもアイズさんのならご馳走では!?!ウツヒョー!!)

.....。

ギンギラギンと容赦なく照り付ける太陽

そして師匠によって言いつけられた過酷な労働環境

この二つが私の頭を極限までアホにしています。

そんな極限状態のとき



「おいおい、お前らこの娘を少しは労れ！」

とある方が声を掛けて下さいました

「す、すみません、魔法がすごくて．．．つい」

「つい、じゃないっての、ったく．．．『千の妖精』サウザンドエルフ今日はもう上がりで良い、無理はしないであれ」

フラフラの私を見かねて声を掛けてくれくれる方

「ニヨ、ニヨルズ様」

「おう、今日はもう十分だ！あいつらに代わって礼を言わせてくれ！」

メレン港に根を張る漁業専門ファミリア

ニヨルズ・ファミリア主神、ニヨルズ様、本人でした。

．．．．．

「ほれ、取れたての魚だ」

そうやってニョルズ様が手自ら七輪で焼いてくれた焼き魚を串に指して渡してくれ  
ます

「あ、ありがとうございます」

疲れ果てていた私はすぐに目の前で香ばしい香りを撒き散らしている焼き魚に被り  
つきます

(ああ、美味しいですう)

半日ぶりの固形物、口当たりの甘いポーションばかりガブガブ飲んでいたこの身に魚  
の塩分が染み渡る

「しっかし、あいつらが無理させてすまん」

「い、いえ」

むしろ神にそこまで謝られるとこっちの方が恐縮してしまいます

「うちは基本ダンジョンに潜らない「生産系ファミリア」だからなあ、最高レベルでも第  
三級しかない…お前さんみたいな強力な魔法を見れる機会つてのは貴重でさ、良い歳  
した奴らまで一緒になつてはしゃいじまってる」

「そう…なんですか?」

「ああ、あの『九魔姫』と『切札』の直弟子の魔法とくればなおさらだ…憧れの冒険者の  
魔法がタダで見れるってなれば仕方がないのかもしれないけどな」

「……？……憧れ？」

「ん？お前さんのことだぞ、『千の妖精』」

「……はえ？」

ニヨルズ様に言われた言葉が頭の中をすり抜けて理解するのに数秒かかった

「団長達ならまだしも私が憧れだなんてそんなこと——」

「いやいや、十二分にあるぞ、これだけの魔法が使えるんだ誇ってもいい、それは神である俺が保障する」

「あ、ありがとうございます」

あまり誉められるということがないため手放しの称賛に照れてしまいます

「カイトもお前さんも謙虚が過ぎるぞ？ お前さん達のおかげで俺たちメレンの住人はすっげえ感謝してるんだからよ」

「そうなんですか？」

「ああ、お前さんの魔法で凍らせた魚介類の水は融けにくい、おかげで遠方の街まで運ぶ際に使う冷凍魔道具を使用しなくて済む、これだけでかなり経費が浮くし、カイトが護衛として漁へ一緒に付いて行ってくれるだけで普段は行けない危険な遠洋まで魚を捕りにいけて漁獲量が一次的にはあるが全盛期以上だ・・・本当にお前さんたちには感謝してもしきれないんだ」

師匠、「ガツハツハツハ！」と船に乗って何しに行っているのかと思っていました。が船の護衛だったんですね

「師匠ってほんと色んなことに手を出してるんですね…」

「おかげでこっちは助かってるんでな、カイトの多趣味多興味に感謝感謝だ、…つと噂をすれば何とやらだ、あいつらが帰ってきたみたいだな」

そう言つて視線を向けた先を追うと確かに大量の船が着港し始め、港のほうが少し騒がしくなつてきていました

そんな、どこかのどかな光景を眺めているとふいにニョルズ様が言ってきました

「…『千の妖精』  
サウザンド・エルフ

「はい?」

「今回カイトがお前さんを連れてきたのはおそらく引継ぎのためだ」

「引…継ぎ?…え、なんで」

「カイトの弟子なんだから聞いてるだろう、あいつはいずれロキ・ファミリアを離れる、その際にうちとのパイプ役がいなくならないようにお前さんを連れてきたんだと思う」

「そ、そんな…」

もし師匠がファミリアから抜けたら大幅な戦力ダウンとなるだけではない

ダンジョンで師匠VS三幹部を除いた全員というの地獄の大訓練の廃止

それだけでなく私の極限訓練もなくなり、今回のように薬の実験に使われたあげく拉致されることもなくなり、そしてさつきまでのように冷凍魔道具代わりに魔法を連発させられることもなくなる

……あれ、それって楽園パラダイスでは？

あえてマイナスがあるとしたら師匠の料理が食べられなく、いや待てよ？ 師匠がファミリアを出て行くのはお店を持つ準備が出来てから、ということは、だ

師匠の料理はそのお店で食べることが出来る……あれあれあれ？

師匠が出て行く際のデメリットがなくなーい？

「……………」

しばらくの沈黙

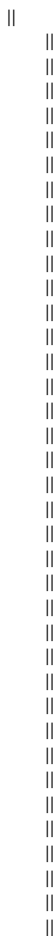
ニョルズ様は何を思っただけ少し悲しげな表情で潮風になびかれています、私は絶賛効用計算で脳内がフル回転していました

「……ニョルズ様」



# 武神偏

## 53：来訪？武神 その1



《side：ヤマト・命》

海を越え 野を超え 山を超え 谷を超え

故郷を後にした私たちはただひたすら目的地を目指して西進する

私の名はヤマト・命

武神タケミカツチ様の娘だ、もちろん娘といつても血の繋がりがあるわけではない  
 そもそも神は下界で子を成す事はできない、孤児であつた私をタケミカツチ様が拾い  
 娘としてくれたのだ

タケミカツチ様は下界に降りてきてから複数の神々と孤児たちを引き取る孤児院（極  
 東では社と言う）を運営している

そしてその運営費は各地の方々からの厚意による支援で成り立っている…だがそれも最近に限界が見えつつある

元々の経営も楽なほうではなかったが、ここ数年で孤児の数がさらに増えたのだ

その状況を鑑み、社で腕の立つ者達が出稼ぎに行くことにした

手を上げたのは桜花殿を初めとしたタケミカツ子様フェルトに恩恵を刻んでもらった6名だ

武神の眷属である自分達が誇れるのはその身一つの武芸のみ…身分不相応に稼ぐ手段は限られている

故に——目的地は世界で唯一のダンジョン

世界の中心とも呼ばれる大都市オラリオ

そこが二度と故郷に戻れぬ覚悟で決めた私達の新天地だ。

|| || || || || || ||

それから数ヶ月の旅の末、私たちはようやく明日にはオラリオに着くであろう地点まで来ていた



まだまだ金を稼ぐという目的を達成していないながらも、目的地に到着できるといふ達成感に心が逸る

それは自分だけではないようでも皆どこか浮き足立っている  
そんなとき

「ん？ あれは…」

鳥獣の羽ばたき音が中空から聞こえてきた

「お！来たか！」

音源であつた一匹の鷹がタケミカツチ様の肩に止まつた、脚には手紙が括り付けられている

「ハツハツハ、中々賢い奴だな」

『ピーー！！』

タケミカツチ様の反応から察するにこの伝書鳩、いや伝書鷹にはどうやら心当たりがあるようだ

慣れた手つきで鷹を撫でると気持ち良さそうに鷹が鳴いている、ナニソレかわいい私も撫でたいんですけど

「タケミカツチ様、その鷹は一体・・・いえ、それよりもその手紙は？」

「こいつはおそらく俺の知り合いが寄越した物だ、最後に手紙をやり取りしたときにヘルメスに何かしらの方法で連絡を取らせるとは聞いていたが、こうきたか・・・さすがに奴でも青い鳥は用意できなかったか？ カツカツカ！」

青い鳥？何のことでしょうか・・・

タケミカツチ様以外の全員が頭の上に疑問符を浮かべている間に鷹の足に括り付けてあつた手紙を開き目を通していく

「ふむ・・・ふむ・・・お助かる・・・」

読みながら何度も頷きつつその表情は明るくなつていく

もしかして何かの朗報・・・オラリオに居る知り合いの神に何かしらの連絡が取れたとかでしょうか？

神々の交友は広い、基本的に天界で不老不死なため全ての神々は顔見知りだ

顔見知りとは言つても仲の良い悪いは神であろうともあるわけですが、タケミカツチ様の表情から察するに仲の良い方の神と連絡が取れたということだろう、そうだとするならばオラリオに着いても早々右も左もわからないという困った状況は回避できそうですね

「タケミカツ子様、その手紙はいずこかの神からですか？」

全員の疑問を桜花殿が代表するかのよう聞いてくれた

「ん？ああ、この手紙を寄越したのは神だが手紙を書いたのは別の奴だ」

「手紙を書いたは別の神、ということですか？」

「いや、手紙を書いたのは神じゃなくておまえ達の兄弟子な」

「へー……」

「兄弟子かあ」

「なるほど」

「……うん？」

「……え」

「……あれ？」

なるほど、私たちの兄弟子……兄……弟子……？

タケミカツ子様を脳内で処理するのにその場の全員が10秒以上の時を要した

「「「「兄弟子!!??」」」」

兄弟子が私達にいたのですか!?!いつ!?

「あ、あれ・・・言ってなかったか?」

「全員初耳だと思えますけど・・・」

一応確認のために皆へと視線を送ると全員が首を横に振っていた

「なるほど・・・。実はなおまえ達には兄弟子がいるのだ!!」バーン!

いや、バーンじゃないですよ、バーンじゃ

遅すぎます、色々と。

オラリオ到着の前日

タケミカツチ様、まさかのカミングアウト。

|||||

翌日

タケミカツチ様曰く

まだ見ぬ兄弟子は相当に腕が立つだけでなくオラリオでもかなり幅広く顔が広い人物とのこと

いや、そんなことより名前とか教えてくださいよ

「名前はカイトだ、家名は事情があつて名乗つていないそうだ」

カイト殿ですか・・・ん？ どこかで聞いたことがあるような？

私が聞き覚えのある名前に首を傾げていると

「み、命ちゃん、カイトつてももしかしていつも支援金を送つてきてくれた人じゃ」

おお！言われてみれば確かにそのような名前の方でした！

何年前かに千草殿と一緒にお礼代わりの押し花を送った記憶があります。

・・・あれ、それ以外でもカイトという名前に聞き覚えがあるような？

「うむ、その人物で間違いないぞ、お前たちの兄弟子には何年も前から社に金銭的にも物

資的にも支援をしてもらっている」

なんと、やはりそうでしたか

「あの、そのカイトって兄弟子は俺たちと同じタケミカツ子様の眷属なのですか？俺は他に眷属がいるなんて聞いた事がないんですが」

「いや、他の神の眷属だ」

「他の…」

桜花殿の疑問に何でもないように答えるタケミカツ子様ですが、桜花殿はそれに納得がいていない様子

まあ気持ちはわかります、武神であるタケミカツ子様は武技を教えてもらっているのは眷属である自分たちだけのはずと思っていましたし、自分たちだけという独占感が侵されてしまいみつももない嫉妬心が私にも芽生えます。

「まあ、武を教えたというのも、何と言えがいいのか…ぶっちゃけ俺は一度も直接教えたことがなくてな」

は？

「えつと…どういうことですか、教えたことがないのに俺たちの兄弟子ってのは？」

「うむ、簡単に言うとな俺は書伝であいつに技や訓練方法を教えただけだな、これが出るようになったら次はこの訓練を、といった感じだな」

なるほど、でもそれは・・・弟子なのでしょうか？

「弟子うんぬんとかを最初に言い出したのは向こうの方でな、俺たちがオラリオに出稼ぎに行くことを伝えたら『師や兄弟弟子達に何もしないわけには行かないので当面はご安心下さい、色々準備をしておきます』とな、最初はそこまで迷惑を掛けるわけにはいかんとは思ったんだが・・・正直ここまで来るだけでも路銀や風習の違いで大変だっただろ？」

それは確かに・・・移動続きの旅は私達の心身を疲弊させるには十分でした

「ここはカイトの言葉に甘えようと思つてな、さっきの手紙もそういつたオラリオでカイトが準備している俺たちの飯の拠点や手続きのことに関してでな、とりあえず明日はオラリオの門まで迎えに来てそのままオラリオの案内までしてくれるそうだ」

なんとまあ、至れり尽くせりではないですか、不安だらけの新天地への不安が一気に減った気がします

「それでその兄弟子のカイトって人はどこのファミリアに所属しているんすか？」

あ、それを聞いてませんでしたね

あ、何故かタケミカヅチ様が悪戯でもするかのような表情になってます

「ふふ～聞いて驚くなよ？」なんとあの「ロキ・ファミリア」だー！」

「「「ろ、ロキ・ファミリア」?!?!?!」」

さすがに全員の顔が引きつりました

オラリオにそのファミリアありと言われ、構成団員のみで国家を相手に蹂躪できる戦力を保有するというあのファミリアですか!?

・・・ん? あれ? カイト? ロキ・ファミリアの・・・カイト?

先ほど私が兄弟子の名に感じた違和感がロキ・ファミリアの名と共に再度浮上してきました

それに気付いたのは自分だけではないようで、他の皆も「え?嘘でしょ?」みたいな顔になっています。

いや、でも、まさか、そんな・・・ねえ?

「あ、あ、あああ、あのタケミカツチ様?」

「ん?どうした千草?」

「あ、兄弟子のカイトさんって上級冒険者ですか?」

「おう、そうどうぞ」

上級、つまり最低でもランクアップ済みでL.V. 2以上は確定ということ





ええー・・・そんな方が

兄弟子？

私達の？

マジっすかー・・・

「何をそんなに驚いているんだお前ら？」

いや、驚きますよ

昨日、兄弟子が居るということだけでも驚いたのにその人がロキ・ファミリでしかも第一級の冒険者である『ジョーカー切札』ですよ？

皆、驚きの連発で感情と思考が放心状態ですよ

「いや何言ってるんだ、これから向かうオラリオでこれ以上心強い味方なんていないぞ？」

まあ、それは確かに・・・でも自分たちみたいなのが雲の上に居るような方に会うのは気が引けるというか何というか

「そんなに不安にならずに頼りになる兄弟子がオラリオで俺たちを迎えてくれるくらいの感覚で行けばいいさ」

「だ、大丈夫なんすか・・・？」

不安そうな桜花殿の言葉はここに居る全員の代弁だ  
なにせまだ見ぬ兄弟子はL v. 6、私達が何か粗相をして怒らせようものなら指一本  
で消し飛ばされます

「心配するな、あいつは第一級冒険者の中では貴重な人格者だと言われているらしい、  
そんな人物でもなければ俺も訓練方法の指示などせんよ」

「まあ、そこまで言うのなら・・・」

タケミカヅチ様にここまで言わせるとは・・・

まだ見ぬ兄弟子は良き方のように

「ちなみに、将来を約束した恋人が4人いるとのことだ、はっはっは、英雄色を好むとは  
カイトのための言葉だな」

あ、ダメですね

女の敵です

雲の上の存在の兄弟子が急にゴミ以下の存在になりました。

## 54：来訪?武神 その2

《side：桜花》

タケミカツチ様の兄弟子という存在の暴露から一夜明け

(こ)並んでいる全員がオラリオが目的か…)

オラリオの外壁が1キロ先に見える

それにも関わらず人が成す列はそこから自分たちのところまで伸びていることに驚きを通り越して呆れてしまう、というよりこれに並ばなければならないという事実に辟易してくる

「こりや下手したら街に入れるのは夕方だなく・・・」

遠くを見ながら呟くのはタケミカツチ様だ

さすがに気の長いこの方でも目的地を目の前にしての長蛇の列にはうんざりと言ったところだろう

「なんだい、あんたらオラリオは初めてかい？」

全員が並ぶだけの退屈な時間を予想しうんざりしていると、すぐ後ろに並んでいる商人らしき男が話しかけてきた

「ん？ ああ、出稼ぎのためにファミリア全員でオラリオに来たんだがこの街はいつもこうなのか？」

情報収集は大事だ、自分たちみたいなの今から一旗揚げようとしている田舎者は特に、だ。

「いやいやここまでじゃないさ、兄ちゃん達は時期が悪かったねえ、もうそろそろここいらの収穫祭だからね、色々な奴らの出入りが一年で最も多くなる時期なんだよ」

なるほど、収穫祭か

俺たちの国でも年で数回、平民や農民が少し贅沢な食事が許される数少ない祭りだ  
孤児である俺たちですら、その日は祭りのおこぼれに預かることが出来た

この長蛇の列が常ではないことはわかった

問題は『グウ』と鳴る腹の音

切り詰めに切り詰めての旅、食事は質素なものだ

街に無事に着いたら前途を祝し、少し贅沢に腹ごしらえをしようと考えていた自分た

ちの胃の中は期待していたエネルギー摂取の機会を先延ばしにされ随分とご立腹だ。

「何だい豪快な腹の虫だな、兄ちゃん達朝飯でも抜いてきたのかい？」

「まあ、そんなところだ」

商人には何でも無い様に答えては居るが実は昨夜から何も食べていない街が近くなるとどうしても野生の獣は少なくなるからだ

路銀の少ない自分たちの苦肉の策

金も無い飯も無い、だったら狩れば良いじゃ無い！ である。

実際、この策で道中はどうにかなっていた

船に乗れば魚を捕り、山を行けば山菜、運が良ければ獣の肉  
社に居た頃から慣れたものだ

だというのにオラリオに近づけば近づくほど治安が良くなり魔物はおろか獣の姿すら見えなくなり狩りがしにくくなった

出稼ぎのためにオラリオに向かっているのに目的地に近づくほど困窮するとはなるとる皮肉か

皮肉……皮肉って言葉美味しそうだよな…皮、鶏皮…肉、豚肉…。

空腹感がいいよヤバイ、あまりの空腹に自分で言った言葉で夢想するとかアホか俺は

「ははは、それならあんた達にはちょうどいいかもしれないね」

「・・・？」

どういうことだ？

商人の言葉の真意がわからずに頭を捻っている

『カラーンカラーン』とオラリオの方から正午を知らせる鐘の音が聞こえてきた

「オラリオの商人つてのは儲け話やその時期を決して見逃さないのさ…ほら噂をすれば何とやらだ」

「いったい何のこー…なんだあ!？」

オラリオの方から土煙を上げつつ何かとんでもない数がとんでもない勢いでこちらに向かつてきている

へいらつしやいらつし腹に貯める美味しいスープはいかがつすかーやいらつし飲み物はいかがつすかー?やいらつしやい美味しいじゃが丸君だよー出来立てだよー!はいまいど〜いくつご所望で?お、たくさんお買い上げありやくすサービスで一個多め

に入れとき並んで暇なそのあなた！オラリオ新聞はどうだいクッキークッキーあまくいクッキーはいりませんか？どなたかポーシヨンはいいりませんかご気分の優れない方々オラリオ名物の金細工はどうだい、お旦那これとかどうだい？はいはい串焼きはどうだい、5本買うと一本おまけだよ

な、なんだこれは!?

目の前には数々の屋台や売り子の数々、それが一瞬で街道沿いに展開、商売を始めてしまった

「はっはっはっは、びっくりしたかい？」

「あ、ああ…すごいなこいつは」

命たちも突然の事態にあたふたしている

「はっはっは、だろう？ 昼時になるとこうやって商人たちが飯時を狙ってやってくるのさ、どうだい兄ちゃん達にはちょうどいいだろ」

「ああ…まあうん」

どうする？ ここであまり無駄遣いはすべきではないがここで飯にありつけなければ下手をすれば夕方まで空腹に耐えなければならぬ

(うーん…下手に悩むよりタケミカツチ様に聞いた方が早い)



判断を仰ぐようにタケミカツチ様に顔を向けると

「さすがに皆も空腹が限界だろう、何か口に入れるとしよう」

と苦笑いしていた

「商人殿、いくつかお勧めを教えてくださいませんか？ あとできれば路銀が心許ないので手ごろな奴だと尚嬉しいのだが」

「まかせてくださいませどこぞの神様、私もここは長いんでね多少の顔が効きまさあ…お、ちようど良い所に顔見知りが出てくれた、おーい！ シュトー！！こつちだこつちー！！」

そう言うのと少し向こうに居て屋台で飲食物を売っていたペレー坊を被った小太りの親父がこちらに屋台ごとやってきた

「久しぶりだな、サイセイ、今回はオラリオで仕入か？ それとも売りかい？」

「収穫祭が迫ってんだ、売りに決まってるさ？」

「そりやそうか、 H A H A H A H A H A !!」

互いに気心の知れた会話の様子からどうやら本当に顔見知りらしい

「それで？ 後ろの連中は？ 護衛か何かか？」

「いや、検問待ちの間に少し世間話を楽しんだ出稼ぎファミリア一行様さ、安くて旨い屋台を教えてくださいって言われてね、お前さんの所を紹介しようと思ったわけさ」

「そいつぁ良い！ ぜひうちの煮物を食べてくれ、うちの屋台は安い早い旨い多いの四拍

子が揃った優良店よ！」

そういつて品名と値段の書いた木の板を持つてくる

(へえ、本当に安いな)

オラリオという大都市の物価からすればかなり良心的な値段だ

「じゃあ俺はこれとこれを一つずつ、お前らはどれにする？」

「私はこれを」

「わ、私はこつちをお願いします」

それぞれ好きな物を予算の範囲内で注文していく

特に待つこともなく、すぐに皿が出てきた

「へい、お待ち！オラリオ特性煮込み一丁!!」

「お、おう」

(テンションたか……っ、これは!?)

そして食べてみて全員が驚いた

醤油味!?

旅に出てから口にする事のなかった懐かしき故郷の味に一瞬固まってしまったが、その味を自覚した後は掻き込む様に残りの煮物を口に入れていく

(う、うめえ……うめえ!!)

惜しむらくは米がない事だが、さすがにそれは贅沢というものだ

「おっ!! あんたら良い食いつぶりだな! ほれサービスだ、この煮物はこの『おにぎり』という穀物を丸めたものと一緒に食うとさらに美味しいし腹が膨れるんだ」

なんて贅沢か!!

しかも、おにぎりには海苔が巻いているだけではない、米の質が故郷の米に近い品種で作られたおにぎりだった

「いや、良い食いつぶりだねえそれでおか」

「!!! お代わり!!!」

「まいど!!」

この後、タケミカツ子様を含む全員が予算オーバーということなど忘れてお代わりを  
してしまった

しかも二回…

・  
・  
・

「お粗末さま〜」

うつぶ、もう食えね

数ヶ月にわたる過酷な旅による反動がオラリオというゴールを前にしたせいかわ発  
してしまった

だが煮物は絶品だったので悔いはない

「ほれ、兄ちゃんたち安物だけど食後の茶だ」

しかも緑茶、至れり尽くせりだ

「かたじけねえ、ありがたく頂く」

オラリオに居を据えた後はこの店は最前にして通いたいと思わせてくれる…つてい  
うかするわ

(ふう・・・)

オラリオに入る前にこれほど旨い飯にありつけたのは僥倖だった

他の皆も和気藹々とした穏やかな雰囲気談笑をしている

そんな中で先ほどの商人と屋台の店主の話が聞こえてくる

「はあく、飯も美味いし天気も良い…平和だねえ」モグモグ

「だなあ、ほれ茶だ」

「おう、すまねえな、それより最近のオラリオはどうだ？何か変わったこととかあったか？」

「おう、あつたぞ」

「へー、どんなことだ？」

「昨夜に『ロキ・ファミリア』と『フレイヤ・ファミリア』が派手にぶつかったことだな」

「「「「ブーーーーー……………っ!!??」」」」

質問をした商人は食べていた物を噴出し、それを何となく聞いていた俺たちは茶を噴出した。

「どどどどどど、どういうことだそりゃあ!?!」

「落ち着けて、サイセー」

「いや落ち着けるかよ、天下の二台派閥がぶつかったなんて世紀の大ニュースじゃねえか!？」

「ぶつかったって言っても小競り合いみたいなもんさ」

「そ、そうなのか？」

聞き耳を立てている俺たちも小競り合いと聞き少し胸を撫で下ろす

店主の落ち着きようも本当に大した事が無いからだろう

「それで街の被害は？大したことないといつてもかなり出たんじゃないか」

「家屋が少し被害を受けたのを除けば——」

「どうやら本当に大した被害は」

「闘技場が半壊したな」

大した被害だった!!

俺たちは被害の大きさに驚いているが

「うくん…まあ、小さくは無いがまだましな被害だな」

「だろ？」

(ええ……)

おかしい、2人の会話がおかしい

「しかも、L v. 6が4人も暴れて闘技場が半壊程度で済んだんだぜ？」

半壊で程度なのか・・・

「そりや確かに奇跡に近いな、暴れたLv. 6つてのは誰と誰なんだ？」

「ロキフアミリアの『切札』とフレイヤフアミリアの『女神の戦車』、『白妖の魔杖』

『黒妖の魔剣』この4人だな」

その名を聞いた瞬間に時が止まったのを感じた

『切札』

兄弟子が？

聞く限りでは同格の冒険者相手に1対3という圧倒的不利な状況で戦ったと聞こえるが大丈夫なのか？

「4人の内3人は重症だとき、特にその中の1人は今もディアンケヒトフアミリアの治療院で生死の境をさま迷ってるんだと」

「「「「っ!?!」」」」

俺たち全員の顔色が変わった

同格相手に多勢に無勢

その生死の境をさま迷う程の重症を負ったのは兄弟子である可能性が高い

頼りにしていた兄弟子がまさかの瀕死

いきなり聞かされた凶報に動きを止めていると、誰かが俺たちの中から飛び出し話をしていた店主の肩を荒々しく掴んだ

「カイトは！カイトは無事なのか!? 怪我の程度は!? 生死の境とはどういうことだ!」

タケミカツチ様だ

「ちよ、どうしたんでさあ!?! 神の旦那!」

店主に問いたただす目の中には真に子供を心配する親の光が見て取れる

兄弟子が生死不明と聞き自分はオラリオでのこれからの生活に対して打算的な考えが一瞬よぎったが、この人の場合はそんな考えなど微塵もないのだろう

(俺たち孤児を無制限に引き取るようなお人好し、いやお神好しだからなあ)

「ちよちよ、ちよつと待って下せえ！あんた『代表』と知り合いますか!?!」

タケミカツチ様に肩を前後に揺らされなが店長が声を上げる

ってというか『代表』?

「す、すまん、カイトとは知り合いなのだが、というか代表? 誰のことだ」

「あー…『代表』ってのは『切札』の下町での愛称になりやすね、あの人は『下町屋台連合』の顔役もやってるんで」

なんだそれ

「そ、そうなのか、いやそんなことよりカイトは——」



「だから、待つてくたせえ！神の旦那!!あんた何か勘違いしてますぜ？」

「なぬ？勘違い？」

「死にかけてるのは『女神の戦車』<sup>ヴァナ・フレイヤ</sup>で重症なものも『白妖の魔杖』<sup>ヒルドスレイヴ</sup>『黒妖の魔剣』<sup>ダインスレイヴ</sup>で『代表』は今朝もピンピンしてやしたよ！」

「……え？」

全員が先程とは違った意味で固まる

「い、いや、だが相手は同じLv. 6が3人だったのだろうか？」

「そうですが…『代表』は色々規格外な方ですからねえ、なあ？」

「いや、俺に同意を求めんなよ、あの人とはあんま話したことないし」

店長が商人に同意を求めると袖にされる

「店主、何度も確認して申し訳ないが本当にカイトは無事なのだな？」

「本当ですって、今朝普通に会いましたし」

会ったんかい、道理で知り合いであろう店主が落ち着いているはずだ

「そ、そうか、無事か、無事なのか…ふう、まったくオラリオに着くなり心配させてくれる奴だ」

「でも神の旦那、『代表』と会うなら少し気をつけた方がいいかもしれません、Lv. 6

を3人病院送りにしてもピンピンしてはいやしたが相当機嫌が悪そうでしたから」

同格のLv. 6を3人病院送りにできる兄弟子が不機嫌…別の意味で不安感が増してきた

いや、昨日のタケミカツチ様の話では兄弟子は人格者とのこと、大丈夫………だといいなあ

「何があつた？俺の知るカイトはそう簡単に怒る奴ではないはずなのだが」

「ええ、確かに普段の『代表』はめつたにぶち切れたりする方じやあないんですがね…何でも先の3人に屋台を破壊された上に、屋台が破壊された際には命よりも大事な嫁の一人まで傷物にされたらしく…まあ、相当やべえ雰囲気でしたね、ぶつちやけ今の『代表』には近づきたくねえですね」

顔見知りであるはずの店主ですらこの言い様、合つたことも無い俺たちはどうなるのかというのか

…会うのが少し楽しみだったのがこの一連の話で一転、会うのが怖くなってきたな

「そうか、自分ではなく大事な人を傷付けられて怒るといふのはカイトらしいといえばらしいか」

「まあ、今回の件とは関係ない神の旦那方に八つ当たりするほど代表は小さい人間じゃないんで、あんたたちは大丈夫だと思えますけどね…たぶん」

最後の方に不穏な事を付け加えないで欲しい

だが俺たちの兄弟子は色んな意味ですごい人だということが実感できた  
どうか兄弟子が良い人でありますように

マジで。

《side out:桜花》